佐島勤
Tsutomu Sato
illustration／石田可奈
Kana Ishida
魔法科高校の劣等生
The irregular at magic high school
九校戦編〈上〉
3
電撃文庫

魔法科高校の劣等生3

The irregular at magic high school

九校戦編〈上〉

佐島勤
Tsutomu Sato

illustration／石田可奈
Kana Ishida

illustrator assistant／ジミー・ストーン、末永康子

design／BEE-PEE

Saegusa Mayumi
七草真由美
さえぐさ・まゆみ
魔法科高校の生徒会会長。十師族・七草家の長女。小柄な身体だが、体型はグラマー。遠隔精密魔法の分野で十年に一人の英才と呼ばれている。性格は小悪魔的。
「さあ、九校戦会場へ向かいましょう。みんな、楽しんで、そして勝ちましょう！」
「第一高校の正式スタッフはこれで全員揃いました」
Ichihara Suzune
市原鈴音
いちはら・すずね
魔法科高校の生徒会会計。美少女というより美人と表現する方が相応しい容姿を持つ。風貌通りの冷静沈着な性格。愛称は「リンちゃん」だが、真由美しか呼んでいない。

司波深雪

しば・みゆき

Shiba Miyuki

司波兄妹の妹。一年A組所属。魔法科高校に主席で入学したエリート。『花冠（ブルーム）』と呼ばれる一科生徒で、得意分野は『冷却魔法』。唯一の愛すべき欠点は『重度のブラコン』。

光井ほのか
Mitsui Honoka
みつい・ほのか
1年A組。深雪のクラスメイト。光を操る光波振動系魔法を得意とする。思い込みがやや激しいタイプ。
「雫、助けて！」
「むいてもいい？」
明智英美
あけち・えいみ
Akechi Eimi
1年B組。この世代の魔法師では珍しいクォーター。フルネームはアメリア＝英美＝明智＝ゴールディ。大質量の物体を短時間、高速で移動させる「砲撃魔法」と呼ばれる魔法を得意としている。
「いいじゃない。ほのか、胸が大きいんだから」
北山 雫
きたやま・しずく
Kitayama Shizuku
1年A組。深雪のクラスメイト。大出力の振動・加速系魔法を得意とする。一見表面上はクールな面持ちで、ほのかとは性格が対照的。

『九校戦』。
正式名称、全国魔法科高校親善魔法競技大会。
毎年、全国から
選りすぐりの魔法科高校生たちが集い、
その若きプライドを賭けて
栄光と挫折の物語を繰り広げる。
魔法関係者のみならず、
多くの観客の集める
魔法科高校生たちの晴れ舞台。
今年も、もうすぐ、
その幕が上がる。

十師族

日本で最強の魔法師集団。

表の権力を放棄する代わりに、政治の裏側で不可侵に等しい権勢を維持する、というのが十師族の基本スタンスである。一条（いちじょう）、一之倉（いちのくら）、一色（いっしき）、二木（ふたつぎ）、二階堂（にかいどう）、二瓶（にへい）、三矢（みつや）、三日月（みかづき）、四葉（よつば）、五輪（いつわ）、五頭（ごとう）、五味（いつみ）、六塚（むつづか）、六角（ろっかく）、六郷（ろくごう）、六本木（ろっぽんぎ）、七草（さえぐさ）、七宝（しっぽう）、七夕（たなばた）、七瀬（ななせ）、八代（やつしろ）、八朔（はっさく）、八幡（はちまん）、九島（くどう）、九鬼（くき）、九頭見（くずみ）、十文字（じゅうもんじ）、十山（とおやま）の二十八の家系から四年に一度の「十師族選定会議」で選ばれた十の家系が『十師族』を名乗る。選定会議で選ばれなかった十八の家は師補十八家（しほじゅうはっけ）と呼ばれ、十師族各家を補佐する立場に回る。現在十師族を構成する家は、「一条」「二木」「三矢」「四葉」「五輪」「六塚」「七草」「八代」「九島」「十文字」。たまたま一から十までの数字が揃っているが、これは十師族という序列が生まれてから初めてのことで、今までは二つ三つの重複・欠番があるのが当たり前だった。

数字付き

十師族の苗字に一から十までの数字が入っているように、百家の中でも本流とされている家系の苗字には"『千』代田"、"『五十』里"、"『千』葉"家の様に、十一以上の数字が入っている。数値の大小が力の強弱を表すものではないが、苗字に数字が入っているかどうかは、血筋が大きく物を言う、魔法師の力量を推測する一つの目安となる。この様に苗字に数字が含まれる魔法師の家系は、十師族、百家本流を一括して「数字付き」の隠語で呼ばれている。

数字落ち

エクストラ・ナンバーズ、略して「エクストラ」とも呼ばれる、「数字」を剥奪された魔法師の一族。かつて、魔法師が兵器であり実験体サンプルであった頃、「成功例」としてナンバーを与えられた魔法師が、「成功例」に相応しい成果を上げられなかった為に捺された烙印。今では「数字落ち」という名称自体、公式に使用することは禁止されている。「数字落ち」であることを理由に差別的取扱いをすることは、魔法師のコミュニティにおいて重大な非違行為とされている。

Character
キャラクター紹介

吉田幹比古 *Yoshida Mikihiko*
よしだ・みきひこ
1年E組。達也のクラスメイト。
古式魔法の名家。エリカとは
幼少時からの顔見知り。

司波達也 *Shiba Tatsuya*
しば・たつや
1年E組。『雑草』と
揶揄される二科生(劣等生)。
全てに達観している。

光井ほのか *Mitsui Honoka*
みつい・ほのか
1年A組。深雪のクラスメイト。
光波振動系魔法が得意。
思い込むとやや直情的。

司波深雪 *Shiba Miyuki*
しば・みゆき
1年A組。達也の妹。
主席入学した優等生。
冷却魔法が得意。兄を溺愛する。

西城レオンハルト *Saijou Leonhart*
さいじょう・れおんはると
1年E組。達也のクラスメイト。
硬化魔法が得意。明るい性格。

北山 雫 *Kitayama Shizuku*
きたやま・しずく
1年A組。深雪のクラスメイト。
振動・加速系魔法が得意。
感情の起伏をあまり表に出さない。

千葉エリカ *Chiba Erika*
ちば・えりか
1年E組。達也のクラスメイト。
剣術が得意。チャーミングな
トラブルメーカー。

柴田美月 *Shibata Mizuki*
しばた・みづき
1年E組。達也のクラスメイト。
霊子放射光過敏症。
少し天然が入った真面目な少女。

里美スバル
さとみ・すばる
1年D組。美少年と見まごう少女。
明るくノリの良い性格。

森崎 駿
もりさき・しゅん
1年A組。深雪のクラスメイト。
CAD早撃ちが得意。
一科生としてのプライドが高い。

明智英美
あけち・えいみ
1年B組。クォーターで、フルネームは
アメリア＝英美＝明智＝ゴールディ。

Saegusa Mayumi
七草真由美
さえぐさ・まゆみ
三年生。生徒会会長。
魔法科生徒の中でも
その能力は歴代最高クラス。

Nakajou Azusa
中条あずさ
なかじょう・あずさ
二年生。生徒会書記。
オドオドした性格で
引っ込み思案。

Ichihara Suzune
市原鈴音
いちはら・すずね
三年生。生徒会会計。
冷静沈着な頭脳派。
真由美の右腕。

Hattori Gyoubushoujo Hanzo
服部刑部少丞範蔵
はっとり・ぎょうぶしょうじょう・はんぞう
二年生。生徒会副会長。
生真面目で優秀。

Watanabe Mari
渡辺摩利
わたなべ・まり
三年生。風紀委員会委員長。
真由美の親友で、
物事全般にやや好戦的。

辰巳鋼太郎
たつみ・こうたろう
三年生。風紀委員。
豪快な性格の持ち主。

沢木 碧
さわき・みどり
二年生。風紀委員。
女性的な名前がコンプレックス。

Juumonji Katsuto
十文字克人
じゅうもんじ・かつと
三年生。全クラブ活動の
統括組織である
部活連の会頭。

五十里 啓
いそり・けい
二年生。魔法理論の成績は
学年トップ。千代田花音とは
許嫁同士。

千代田花音
ちよだ・かのん
二年生。活発な印象の少女。
五十里啓とは許嫁同士。

風間玄信
かざま・はるのぶ
陸軍101旅団・独立魔装大隊・隊長。
階級は少佐。

真田繁留
さなだ・しげる
陸軍101旅団・独立魔装大隊・幹部。
階級は大尉。

柳 連
やなぎ・むらじ
陸軍101旅団・独立魔装大隊・幹部。
階級は大尉。

山中幸典
やまなか・こうすけ
陸軍101旅団・独立魔装大隊・幹部。
軍医少佐。一級の治癒魔法師。

藤林響子
ふじばやし・きょうこ
風間の副官を務める女性士官。
階級は少尉。

桐原武明
きりはら・たけあき
二年生。剣術部所属。
関東剣術大会中等部のチャンピオン。

壬生紗耶香
みぶ・さやか
二年生。剣道部所属。
中等部剣道大会女子部の全国二位。

九重八雲
ここのえ・やくも
古式魔法「忍術」の使い手。
達也の体術の師匠。

小野 遥
おの・はるか
1年E組の総合カウンセラー。

一条将輝
いちじょう・まさき
第三高校の一年生。九校戦に出場。
十師族・一条家の次期当主。

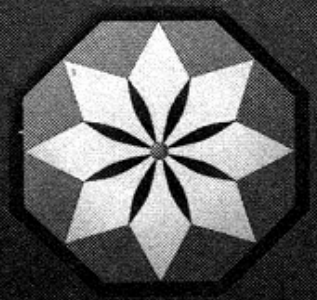
吉祥寺真紅郎
きちじょうじ・しんくろう
第三高校の一年生。九校戦に出場。
「カーディナル・ジョージ」の異名で知られている。

九島 烈
くどう・れつ
世界最強の魔法師の一人と目されていた人物。
敬意を以て「老師」と呼ばれる。

Glossary
用語解説

魔法科高校
国立魔法大学付属高校の通称。全国に九校設置されている。
この内、第一から第三までが一学年定員二百名で一科・二科制度を採っている。

ブルーム、ウィード
第一高校における一科生、二科生の格差を表す隠語。
一科生の制服の左胸には八枚花弁のエンブレムが刺繍されているが、
二科生の制服にはこれが無い。


一科生のエンブレム

CAD〔シー・エー・ディー〕
魔法発動を簡略化させるデバイス。内部には魔法のプログラムが
記録されている。特化型、汎用型などタイプ・形状は様々。

司波深雪のCAD

フォア・リーブス・テクノロジー〔FLT〕
国内CADメーカーの一つ。元々完成品よりも魔法工学部品で有名だったが、
シルバー・モデルの開発により一躍CADメーカーとしての知名度が増した。

トーラス・シルバー
僅か一年の間に特化型CADのソフトウェアを十年は進歩させたと称えられる天才技術者。

エイドス〔個別情報体〕
元々はギリシア哲学用語。現代魔法学においてエイドスとは、事象に付随する情報体のことで、
「世界」にその「事象」が存在することの記録で、「事象」が「世界」に記す足跡とも言える。
現代魔法学における「魔法」の定義は、エイドスを改変することによって、
その本体である「事象」を改変する技術とされている。

イデア〔情報体次元〕
元々はギリシア哲学用語。現代魔法学においてイデアとは、エイドスが記録される
プラットフォームのこと。魔法の一次的形態は、このイデアというプラットフォームに
魔法式を出力して、そこに記録されているエイドスを書き換える技術である。

起動式
魔法の設計図であり、魔法を構築するためのプログラム。
CADには起動式のデータが圧縮保存されており、
魔法師から流し込まれたサイオン波を展開したデータに従って信号化し、魔法師に返す。

サイオン（想子）
心霊現象の次元に属する非物質粒子で、認識や思考結果を記録する情報素子のこと。
現代魔法の理論的基盤であるエイドス、現代魔法の根幹を支える技術である起動式や魔法式は
サイオンで構築された情報体である。

プシオン（霊子）
心霊現象の次元に属する非物質粒子で、その存在は確認されているがその正体、
その機能については未だ解明されていない。
一般的な魔法師は、活性化したプシオンを「感じる」ことができるにとどまる。

九校戦

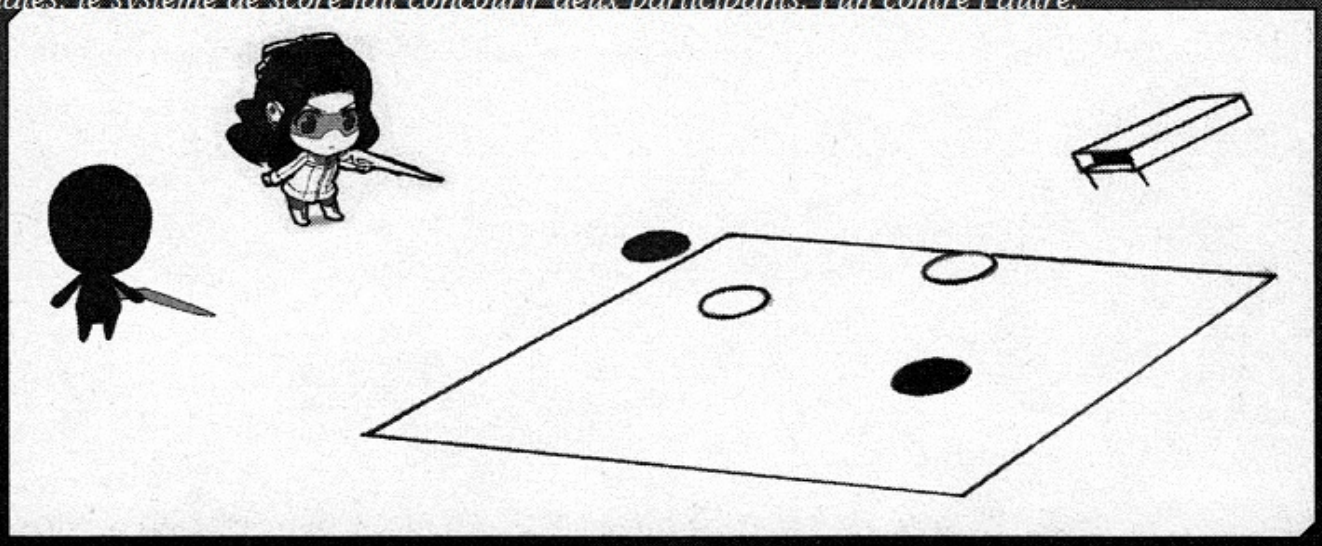
Compétition des Neuf Lycées :
Nom Officiel: [Compétition Nationale des Jeux de Magie de Lycées]. Comme le nom le suggère, les élèves du Premier au Neuvième lycée se réunissent de tout le pays. C'est une compétition en équipe avec des jeux magiques .
Les événements uniques sont tels que [Tirs Rapides], [Nuée de Balles], [Bataille de Surf], [Destruction des Piliers de Glace], [Batte Illusoire], [Code du Monolithe], soit six au total. ※ [Code du Monolithe] est réservé aux garçons, et [Batte Illusoire] aux filles.
Le nombre de participants dans chaque d'entre eux est de trois personnes par école, et un participant ne peut participer qu'à deux événements. La compétition a lieu sur une période de dix jours. Il y a aussi une division réservée aux première année, [Division des Nouveaux Arrivants] (La Division Officielle n'a aucune restriction). La [Division des Nouveaux Arrivants] aura lieu du quatrième au huitième jour. La victoire ou la défaite est déterminée par le nombre total de points. 1Ère place reçoit 50 points, 2nde Place reçoit 30 points et la 3ème place reçois 20 points. Tirs Rapides, Bataille de Surf et Batte Illusoire donnent 10 points aux 4ème. Nuée de Balles et Destruction des Piliers de Glace donne 5 points à chaque équipe qui atteint le 3ème manche. L'événement principal de la Compétition des Neuf Lycées, Code du Monolithe, donne 100 points à la 1ère place, 60 points à la 2nde place et 40 points pour le troisième due au jeu en équipe, lui donnant le poids le plus important. (la Division des Nouveaux Arrivants ont la moitié des points de la Division Officielle et ils sont rajoutés au total.).

Jour/Date	Division	Epreuves
Mercredi 03 Aout	Officielle	[Tirs Rapides] Garçons/Filles Éliminatoires ~ Tournoi Final [Bataille de Surf] Garçons/Filles Éliminatoires
Jeudi 04 Aout	Officielle	[Nuée de Balles] Garçons/Filles Éliminatoires ~ Finales [Destruction des Piliers de Glace] Garçons/Filles Éliminatoires
Vendredi 05 Aout	Officielle	[Bataille de Surf] Garçons/Filles Semi-finales ~ Finales [Destruction des Piliers de Glace] Garçons/Filles Elim ~ Finales
Samedi 06 Aout	Nouveaux Arrivants	[Tirs Rapides] Garçons/Filles Éliminatoires ~ Tournoi Final [Bataille de Surf] Garçons/Filles Éliminatoires
Dimanche 07 Aout	Nouveaux Arrivants	[Nuée de Balles] Garçons/Filles Éliminatoires ~ Finales [Destruction des Piliers de Glace] Garçons/Filles Éliminatoires
Lundi 08 Aout	Nouveaux Arrivants	[Bataille de Surf] Garçons/Filles semi-finales ~ Finales [Destruction des Piliers de Glace] Garçons/Filles Élim ~ Finales
Mardi 09 Aout	Nouveaux Arrivants	[Batte Illusoire] Éliminatoires & finales des dames [Code du Monolithe] Éliminatoires Masculins
Mercredi 10 Aout	Nouveaux Arrivants	[Code du Monolithe] Finales du tournoi Masculin
Jeudi 11 Aout	Officielle	[Batte Illusoire] Éliminatoires puis finales des dames [Code du Monolithe] Éliminatoires Masculins
Vendredi 12 Aout	Officielle	[Code du Monolithe] Finales du tournoi Masculin

Event
競技種目

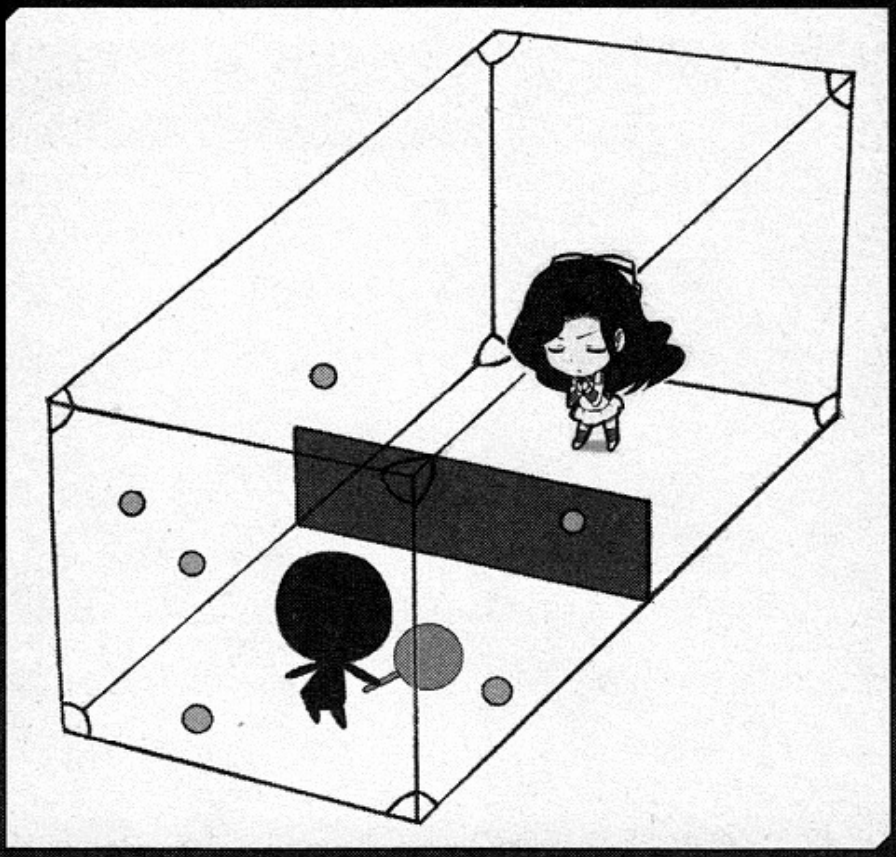
Tirs Rapides

Parmi les joueurs, on l'a appelé [Épreuve de Tirs]. Une cible faite d'argile est envoyée dans la zone dédiée et détruite par magie. Cent cibles rouges et blanches sont relâchées et les joueurs combattent en détruisant les cibles qui leurs sont dédiés, par le biais de la couleur. Aux éliminatoires, les Joueurs doivent détruire autant de cibles que possible en cinq minutes. A partir des Quarts de Finales, le système de score fait concourir deux participants, l'un contre l'autre.



Nuée de Balles

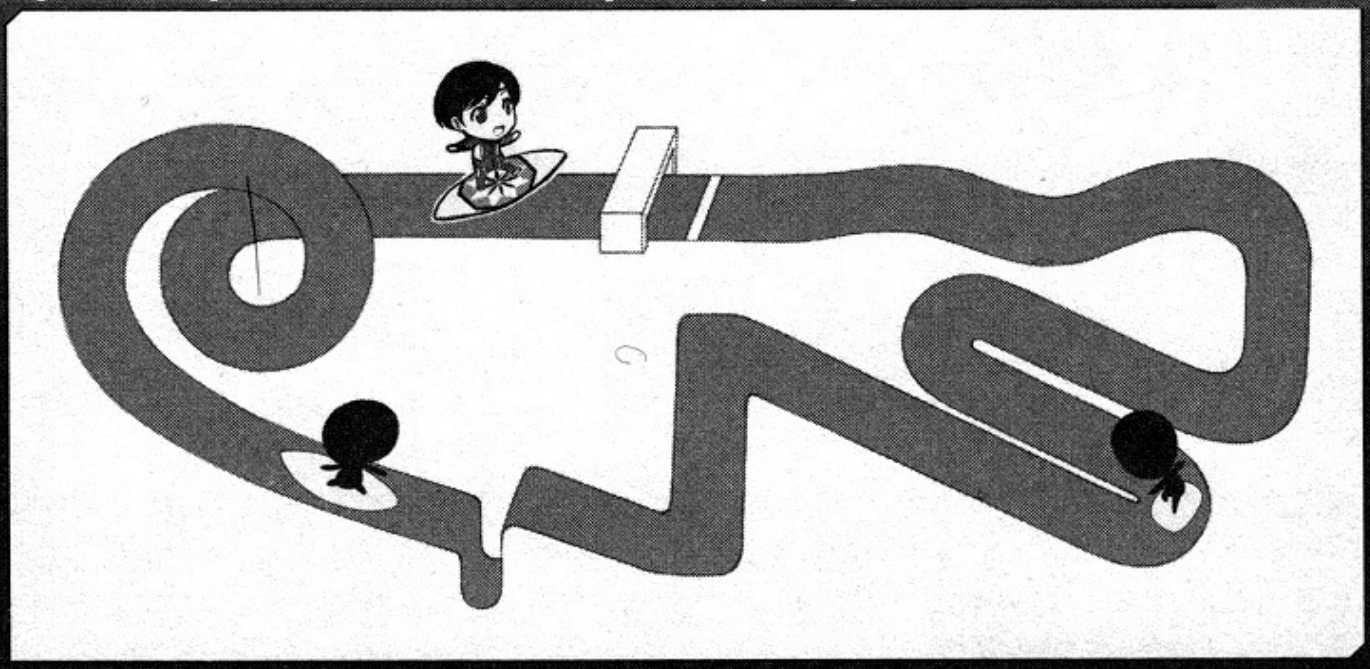
Parmi les joueurs, on l'a appelé [Nuée]. Une balle de mousse de 6 centimètres de diamètre est envoyé, par air comprimé, dans la zone de compétition. Les Joueurs combattent en utilisant une raquette ou la magie pour forcer la balle à toucher le terrain adverse. Une manche dure trois minutes, et une balle est envoyée toutes les vingt secondes, avec un total de 9 balles sur le court . Les filles ont trois manches par matchs et les garçons, cinq manches.



Event
競技種目

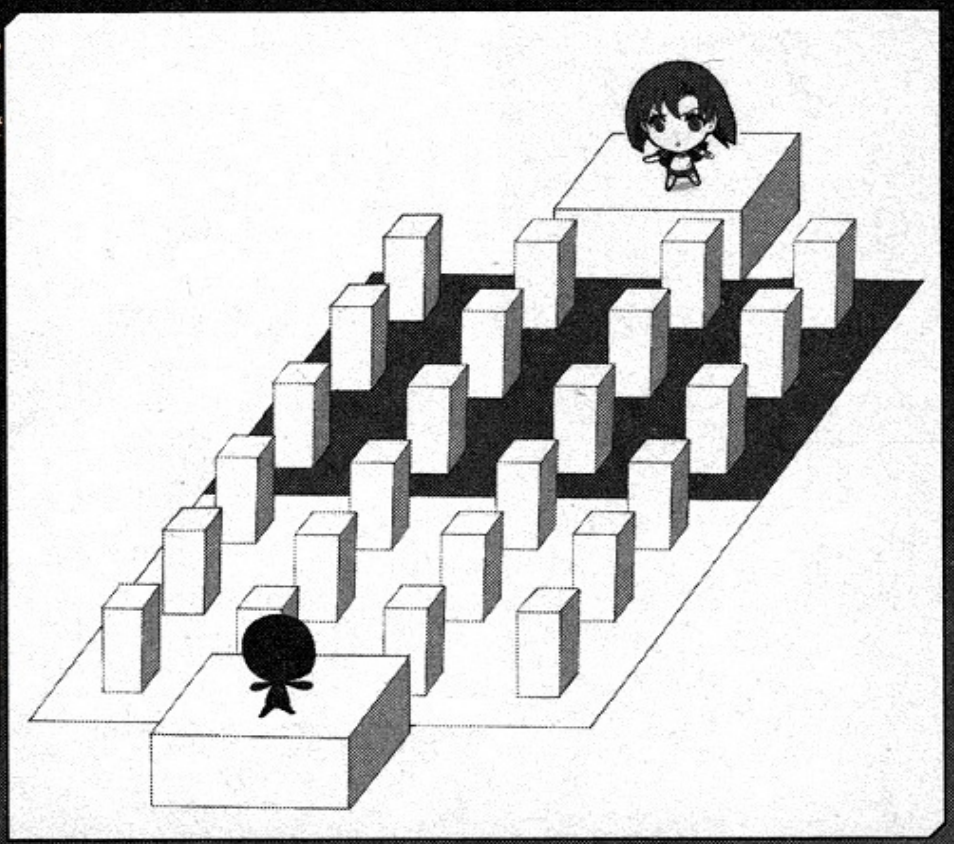
Bataille de Surf

*Parmi les joueurs, on l'appelle **[Surf]**. Ce jeu était à l'origine une méthode d'entraînement des forces navales. Les joueurs reçoivent des planches similaires à celles du Surf et doivent faire trois tours sur un canal artificiel long de trois kilomètres en utilisant la magie. Les Joueurs jouent la victoire. D'après les règles, l'utilisation de magie pour interférer avec les autres joueurs est interdites. Les éliminatoires consistent en six courses avec quatre participants, chacune. Deux demi-finales ont lieu avec trois participants, une série aura lieu pour déterminer la troisième place, alors que les deux meilleurs de chaque demi se feront face, un contre un.*



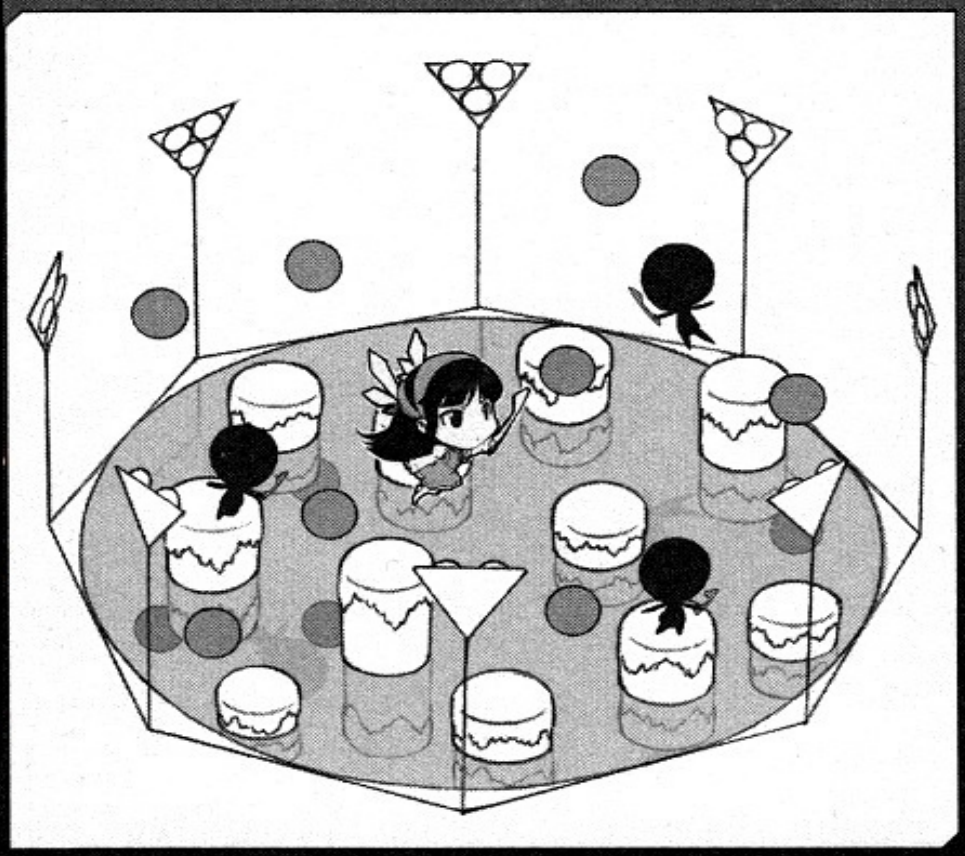
Destruction des Piliers de Glace

Parmi les joueurs, on l'appelle [Destruction des Piliers] Chaque joueur se tient en haut d'une tour de quatre mètres, défendant douze piliers dans un carré de douze mètres de coté, tout en attaquant la zone de son adversaire. Les joueurs doivent détruire les piliers de son adversaire avant que les siens ne tombent. Nul besoin de capacité physique, vu que les joueurs utilisent uniquement la magie, ainsi on peut porter la tenue de son choix avec comme unique restriction que [ça ne porte pas atteinte à l'ordre public ou à la morale]. Il est dit que la compétition des filles est devenue au fil des ans un concours de mode.



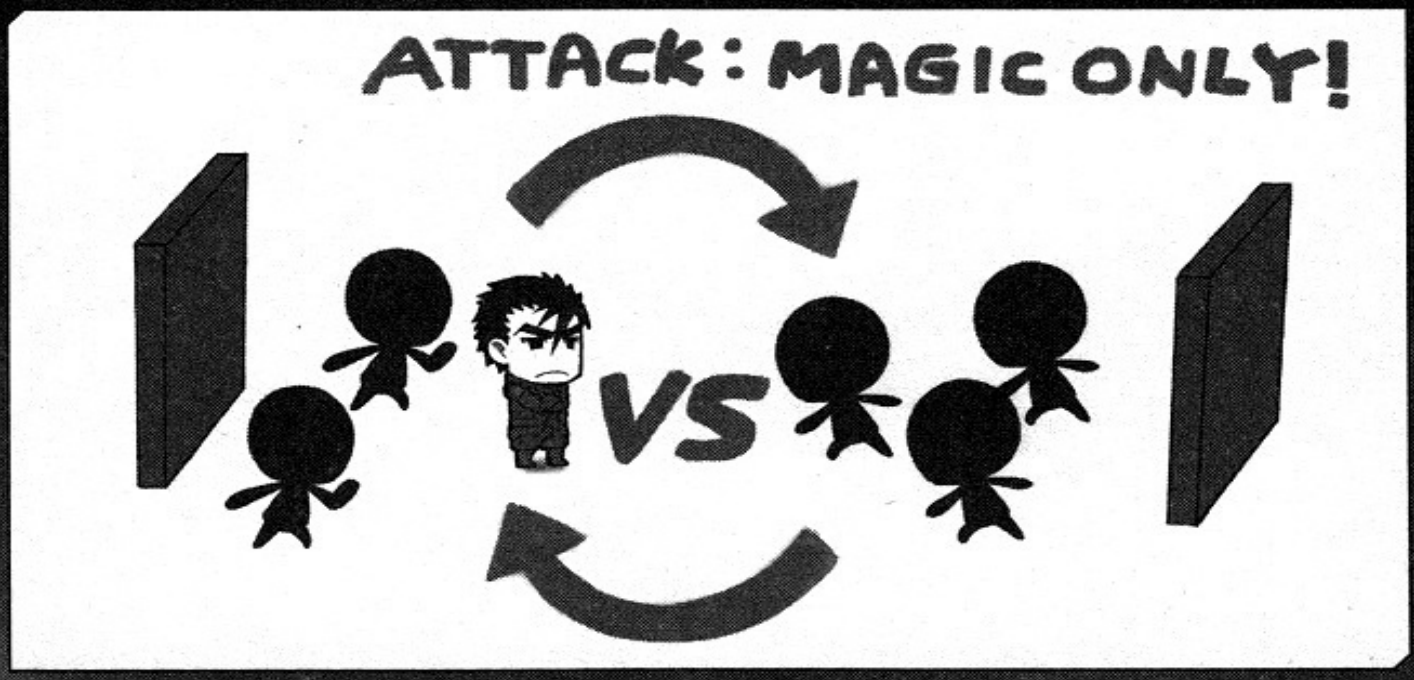
Batte Illusoire

Une sphère holographique est projeté dans les airs, et les joueuses doivent concourir en usant de la magie pour s'élever dans les airs et frapper les orbes avec leurs bâtons. Bien que cela ait le nombre le plus faible de jeux, la durée de jeu est la plus longue de toute la Compétition des Neuf Lycées. Durant le jeu, les joueuses doivent continuellement invoquer la magie pour sauter dans les airs. On dit que le fardeau est équivalent à courir un marathon. Batte Illusoire est un événement que pour les filles. Avec leurs costumes élaborés et leurs façons de voler, on les assimile souvent à des fées.



Code du Monolithe

Parmi les joueurs, on l'appelle [Monolithe]. C'est une épreuve uniquement masculine. Sur le site de la compétition, appelé [Stade], la magie est utilisée pour combattre au delà du [Monolithe], avec une équipe de trois joueurs. Le résultat est déterminé en séparant le monolithe ennemi et à prendre le code dissimulé. Toute attaque autre que la magie est interdite. Ouvrir le monolithe nécessite d'être frappé par une magie Hors Système spéciale. Due à sa nature, ce eju est l'événement le plus populaire de la Compétition des Neuf Lycées.



Chapitre 0

A travers le pays, il y a actuellement neuf lycées rattachés à l'Université de Magie.

Le 1er Lycée est dans le Kanto (Tokyo). Le second se trouve à Kinki (Hyougo). Le 3ème est situé à Hokuriku (Ishikawa). Le 4ème Lycée est basé à Tokai (Shizuoka). Le 5ème lycée se trouve à Tohoku (Miyagi). Le 6ème lycée est basé à San'in (Shimane). Le 7ème lycée est à Shikoku (Kochi). Le 8ème lycée se trouve à Hokkaido. Le 9ème et dernier lycée est basé à Kyushu (Kumamoto).

Ce sont les seuls lycées de magie au sein du pays. Cela ne fait pas référence au fait qu'il y ait seulement neuf lycées rattachés aux neuf universités nationales de magie, mais plutôt au fait que ce soient les seuls lycées à avoir la magie comme programme principal.

Pour dire la vérité, le gouvernement est plus que désireux d'augmenter le nombre de lycées de magie. Ils en sont incapables car ils ne peuvent pas obtenir assez de mages pour devenir enseignants.

Les 1er, 2nd et 3ème lycées acceptent chacun 200 nouveaux élèves chaque année. Les six autres en prennent chacun 100.

Au total, il y a 1200 entrants. C'est la limite du nombre de mages que l'on peut fournir chaque année. C'est approximativement égal au nombre de jeunes, au sein de la population, qui ont un niveau de magie pour y entrer. Mais, au même moment, on pense que si des possibilités éducatives plus vastes pouvaient être fournies, il était bien plus probable de découvrir des jeunes donc le talent magique se développe tardivement.

Toutefois, la réalité est telle que le fonctionnement de ces neufs lycées de magie requiert pleinement les capacités en ressources humaines de cette nation. Ainsi, le seul moyen de remédier à ce déficit est de prendre ces 1200 nouveaux chaque année, les entraîner du mieux possible, et monter leur niveau au maximum. En faisant cela, le nombre de mages devrait augmenter au fur et à mesure, et dans le futur, il est attendu que cette spirale positive règle le problème de manque de professeurs.

Une mesure prise pour alimenter les aspirations des élèves comprend les compétitions organisées entre les neuf Lycées de Magie. La plus importante d'entre elles est la Compétition des Neufs Lycées qui se déroule en été.

Il s'agit d'un tournoi de magie national entre les Lycées de Magie.

Chaque année, une sélection d'élèves des Lycées de Magie de tout le pays se rencontrent, y engagent leur fierté, produisant une histoire de frustration et de gloire.

Avec un public énorme, constitué non seulement des officiels du gouvernement et ceux ayant un intérêt pour la magie, mais aussi du monde des affaires, des sociétés étrangères, chercheurs et éclaireurs, c'est la plus grande scène où ces lycéens peuvent briller.

Cette année également, bientôt, les rideaux de cet événement mémorable se lèveront bientôt.

Chapitre 1

L'année 2095 AD, mi juillet.

La semaine après que les examens furent terminés au 1er Lycée affilié à l'Université de Magie, les étudiants consacrèrent toute leur énergie à préparer la Compétition des Neuf Lycées ayant lieu en été. Toutefois, il — Tatsuya Shiba en fait, était à l'opposé de cet esprit qui touchait l'établissement. C'était partiellement dû au fait que sa nature logique avait le pas sur ses émotions. Cela dit, la raison principale de sa présence au lycée, ce jour là, était qu'il avait été convoqué par la faculté pour une rencontre regardant les résultats de ses examens.

"Tatsuya."

"Léo..... Pourquoi tout le monde se trouve-t-il ici?"

Ayant finalement pu s'échapper de la salle de la Faculté, Tatsuya trouva ses camarades de classe Saijou Leonhart, Chiba Erika, et Shibata Mizuki l'attendant à l'extérieur.

La petite sœur de Tatsuya, Miyuki, faisant partie du Conseil des Étudiants, était actuellement en pleine préparation pour la Compétition des Neuf Lycées, dans la salle du Conseil des Étudiants, aussi était-elle absente.

Comme pour la remplacer, les camarades de classe de Miyuki, Mitsui Honoka et Kitayama Shizuku se tenaient là, et semblaient s'inquiéter.

La salle de la Faculté se trouvait à l'étage des professeurs, qui était séparé de là où les étudiants suivaient leur cours.

Toutefois, cela ne signifiait pas qu'aucun élève ne passait par là.

Qu'ils le veuillent ou non, un groupe qui dépassait la frontière entre Cours 1 & 2 et qui se fréquentait naturellement, attirait davantage l'attention.

Même si, en raison de l'absence de la représentante des 1ères années, membre du Conseil des Étudiants et beauté reconnue, Miyuki, il y avait moins de curieux que d'habitude.

Toutefois, les gens qui les regardaient ainsi, se tenaient étonnamment près.

Par exemple, cet homme juste là.

"Cela devrait être à nous de te demander ce qu'il t'arrive, non ? Pourquoi as-tu été convoqué dans la salle de la Faculté ?"

En entendant la question de Léo, Tatsuya comprit immédiatement.

Apparemment, ses amis étaient inquiets pour lui. Pendant un instant, Tatsuya envisagea d'inventer une raison pour faire diversion, mais il changea d'avis, en pensant qu'ils méritaient qu'il soit honnête.

"Les professeurs m'ont interrogé à propos de la portion technique des examens."

Entendant cela, Léo plissa les yeux de mécontentement.

".....Interroger semble un peu suspicieux. Alors, qu'ont-ils demandé ?"

"Faisons court, ils voulaient savoir si j'avais raté le test exprès."

Erika fut la première à exprimer son outrage à la réponse de Tatsuya.

"Punaise ? Cela ne bénéficierait en rien de faire ça, Tatsuya-kun. Seul un abruti poserait ce genre de question."

La remarque d'Erika était exacte, aussi Tatsuya, en retour, ne put-il que sourire ironiquement. Ce serait une autre histoire si quelqu'un avait triché pour avoir un meilleur score, mais il n'y avait aucun intérêt à faire exprès d'en avoir un mauvais. Cette suspicion était aussi ridicule que le supposait Erika.

"Toutefois, je peux comprendre pourquoi les professeurs pensent ainsi."

"Pourquoi ?"

Les douces paroles de Shizuku désorientèrent Mizuki.

"Les résultats de Tatsuya-kun sont tout simplement stupéfiants."

Tatsuya ne fit pas le beau à la réponse d'Honoka, mais être trop humble pouvait aussi susciter une réaction négative. Incapable de se décider entre les deux, Tatsuya ne put qu'afficher de nouveau un sourire ironique.

Pour le 1er Lycée — les examens finaux pour les lycées de magie incluaient des tests sur la théorie magique en rapport avec les cours écrits, et les examens des capacités techniques.

D'un autre coté, les langues, mathématiques, sciences, sociologie et autre sujets banals étaient notés sur le travail quotidien chez soi. C'était une institution qui se concentrait sur l'entraînement de haut niveau des Magiciens, aussi, du point de vue de l'école, que les étudiants se concentrent trop sur des sujets ne concernant pas la magie était redondant (Tatsuya & Cie faisaient la distinction entre les Magiciens et les Artificiers Magiques uniquement parce que leurs entraînement allaient dans deux directions différentes. Normalement, la société mettrait les ingénieurs magiques dans la même catégorie que les Magiciens, mais n'utiliserait pas le terme "Artificiers Magiques" pour se référer aux Chercheurs en Magie qui ne peuvent user de magie).

Concernant la théorie magique, les cours obligatoires sont basés sur les fondations de l'apprentissage magique et la théorie magique au test ; deux sujets additionnels sont rajoutés parmi les différentes possibilités: géométrie magique, langage magique, botanique magique et l'architecture magique ; ainsi que la sélection soit de l'histoire de la magie, soit de la théorie des systèmes magiques, faisant un total de cinq sujets.

Les capacités techniques magiques étaient mesurées via une application de l'habileté (la vitesse d'invocation), tolérance magique (l'échelle de la Séquence Magique), capacité d'interférence (force pour réécrire l'Eidos) et le Pouvoir Magique qui est la combinaison des trois, donnant ainsi quatre scores.

Les étudiants avec des scores exceptionnels avaient leurs noms et leurs rangs publiés sur le site du campus.

Les résultats des élèves de 1ère année avaient déjà été annoncés.

Ceux qui avaient obtenu les plus hauts scores combinés entre la théorie magique et les capacités techniques concordaient avec les prévisions.

1ère Place: Shiba Miyuki.

2nde Place: Mitsui Honoka.

3ème Place: Kitayama Shizuku seulement quelques points derrière.

Les trois premiers étaient tous de la classe A, et ce n'était qu'à la quatrième place qu'un étudiant masculin nommé "Tomitsuka" de la

Classe B apparaissait. Au-delà, des noms familiers apparaissaient comme Morisaki à la neuvième place. Les vingt premiers étaient tous des élèves du Cours 1.

Un regard sur la portion des capacités techniques donnerait le même résultat. Bien que les places soient un peu différentes, Les vingt premières places étaient toutes occupées par des élèves du Cours 1.

Strictement parlant, en Première Place se trouvait Miyuki, la Seconde Place était celle de Shizuku, la Troisième Place était celle de Morisaki, la Quatrième celle de Honoka. Malgré les scores combinés, la Classe A dominait la portion technique dans une telle mesure que cela donnait mal à la tête aux enseignants (la distribution des classes était supposée être bien répartie de A à D, aussi ce genre de résultats révélait que la Classe A avait bien mieux compris les matières pour le premier semestre que les trois autres classes).

Toutefois, si on se basait seulement sur la portion théorique des examens, une image complètement différente et étonnante était révélée.

1ère Place: Classe E Shiba Tatsuya.

2nde Place: Classe A Shiba Miyuki.

3ème Place: Classe E Yoshida Mikihiko.

Honoka était quatrième, Shizuku dixième, Mizuki en dix-septième position, Erika en vingtième, alors que Léo et Morisaki n'étaient pas dans le classement.

Quand on sépare les élèves du Cours 1 et ceux du Cours 2, la différence dans les capacités techniques joue un rôle important. Toutefois, le consensus général était que les élèves mauvais en capacités techniques auraient aussi du mal à comprendre la théorie. A cause de tous les concepts complexes, il était très difficile de comprendre la théorie sans la percevoir auparavant.

Malgré ça, deux des élèves du top trois étaient des élèves du Cours 2.

Cela était déjà une situation sans précédent, et encore, les résultats de Tatsuya étaient encore plus impressionnants. Sa moyenne sur une partie de la théorie — pas le total — avait facilement douze points de plus que le score du second, obtenant ainsi en seule possession de la

Première Place.

"Même si la théorie et les capacités techniques sont deux choses différentes, il devrait y avoir une limite."

"Mais je ne crois pas que Tatsuya-kun fasse exprès d'être mauvais."

Après que Shizuku eut objectivement exprimé son opinion, Mizuki répliqua sur un ton mécontent.

"Bien sur, Shizuku sait cela."

"Mais les professeurs ne sont pas comme nous, vu que nous savons quel genre de personne est Tatsuya-kun."

Honoka et Erika commencèrent toutes deux à apaiser l'atmosphère.

"Ouais, ils ne nous connaissent qu'à travers la liaison entre les terminaux....."

Tout comme Léo venait de le dire, c'était une lacune importante dans l'éducation moderne. Même si les professeurs modernes venaient personnellement faire cours comme ceux du passé, cela ne garantirait pas qu'ils puissent bien comprendre leurs élèves.

Pour résoudre ce problème, l'établissement avait créé des boîtes d'opinion pour remplacer le système des horaires de bureau du siècle précédent.

".....Et si on demandait à Haruka-chan ?"

Les Conseillers s'occupaient des situations où les étudiants étaient insatisfaits de l'école ou des incidents en dehors du campus. Ignorant le fait que ce surnom "Haruka-chan" puisse être inapproprié ou pas, la suggestion en elle-même avait du mérite, mais Tatsuya agita fortement la tête.

"J'ai parlé hier avec Ono-sensei. En vérité, elle m'a informé à propos des principales questions que l'on me poserait aujourd'hui."

"Un professeur si peu fiable."

"Ne dis pas ça. Les nouveaux conseillers n'ont de toute façon pas beaucoup d'autorité."

Ce fut au tour de Tatsuya de sourire gentiment et de calmer l'irritation d'Erika.

"......Tatsuya-kun a dû être encore plus dur que moi, non ?"

Tout comme Erika l'avait deviné, les paroles de Tatsuya avaient été considérablement plus agressive.

"Ouah ?"

La réplique précise d'Erika poussa Léo à émettre un étrange son.

"......Qu'y a-t-il ?"

Tout en posant la question, Erika plissa les yeux.

"Cette fille est en fait capable de parler sérieusement."

Léo ouvrit de grands yeux tout en se murmurant ces paroles.

"Silence !"

Erika le frappa à l'aide de son bloc-notes enroulé.

En fait, même à l'époque où les données informatiques étaient si communes, les bloc-notes papiers restaient répandus. Surtout pour les écoles basées sur la magie, durant les cours sur le langage magique, le mouvement même de "l'écriture" était un acte important. Vu que les professeurs usaient images et diagrammes en géométrie magique, utiliser un bloc-notes pour garder une trace de ces derniers était plus facile que d'utiliser un terminal, aussi les élèves des lycées de magie étaient plus susceptibles d'avoir des blocs-notes que des élèves d'écoles normales. Cela dit, la raison exacte pour laquelle Erika se promenait avec un bloc-note en dehors des cours restait un mystère.

"Ow....."

Leo ne put esquiver le coup et s'accroupit, se tenant la tête de douleur. Ce n'était pas comme s'il restait sans bouger, mais à ce moment-là, la vitesse de frappe d'Erika était plus élevée que la vitesse d'esquive de Léo, aussi, dans cette situation, s'il décidait de buter dedans, il serait unilatéralement frappé.

"......Toi, l'accroc à la violence, ma tête n'est pas un tambour !"

Léo protesta sérieusement, ce qu'Erika ignora superbement.

Sûrement dû au fait que cette scène n'avait cessé de se répéter pendant les trois derniers mois, à la place de paniquer comme elle l'avait fait au début, Mizuki ne put qu'afficher un sourire impuissant et les laissa faire. En outre, elle utilisa cela pour rediriger la conversation sur le

sujet principal, évitant par là même une possible escalade du conflit.

"Tatsuya-kun, as-tu réglé le malentendu avec les professeurs ?"

"Eh bien, oui, à un certain niveau."

"Un certain niveau ?"

Confronté à la question concise de Mizuki, Tatsuya fournit quelques détails supplémentaires tout en affichant une expression réticente.

"Ils ont compris que je n'avais pas obtenu intentionnellement de mauvais résultats, mais ils m'ont quand même conseillé un transfert."

"Un transfert ?"

"Pourquoi ? Pourquoi devrais-tu faire ça ?"

Mizuki et Honoka, très pales, se mirent toutes deux à crier, alors que les trois autres revêtaient des expressions similaires.

"Au sein des Neufs Lycées, le Quatrième Lycée est renommé pour leur spécialité en Recherche Magique, aussi les professeurs m'ont-ils suggéré d'y être transféré. J'ai décliné, bien sûr."

Deux personnes laissèrent échapper des soupirs de soulagement, alors que les deux autres paraissaient furieuses.

Les deux premièress étaient Mizuki et Honoka, les secondes Léo et Erika.

La dernière personne de cette conversation arborait un visage illisible et impassible.

".....Alors, si quelqu'un n'excelle pas en capacités techniques, il devrait rejoindre une école qui met moins l'accent sur cela, cela n'est-il pas totalement contradictoire pour une école ? Je pourrais comprendre si les notes de cette personne étaient mauvaises et qu'elle ne puisse suivre en classe, mais cela n'est pas du tout le cas de Tatsuya."

"Sûrement parce qu'il est une nuisance. Peut-être même Tatsuya-kun en sait-il plus à propos de la magie que les professeurs eux-mêmes."

"Calmez-vous, tous les deux."

Si on les laissait faire, Léo et Erika ne feraient que renforcer la fureur de l'autre, aussi Tatsuya décida-t-il d'intervenir pour interrompre cela.

"C'est comme Léo l'a dit, réussir de justesse, c'est toujours réussir,

aussi n'y a-t-il rien qui nécessite un transfert. Il est possible que les professeurs n'aient fait que prendre mes intérêts à cœur. Quoiqu'il en soit, même si c'était le cas, ces intérêts ne proviennent pas de l'empathie, et sont mis uniquement en place pour se protéger eux-mêmes."

Le ton doux de Tatsuya ne fit rien pour couvrir son évaluation tranchante, causant le duo en furie de se calmer. C'était précisément l'effet d'apaisement que visait Tatsuya, et, même si la méthode pouvait être considérée comme efficace, le résultat n'était pas le plus idéal.

"Au final, je pense que les professeurs ne devraient pas faire une erreur en premier lieu."

Juste au moment où tout le monde hésitait à rajouter quelque chose, Shizuku prit la parole d'une manière singulière qui n'était ni favorable ni réprobatrice. Vu la façon dont son commentaire fit baisser la tension causée par les paroles moqueuses de Tatsuya, l'effet global pourrait sûrement être présenté comme favorable.

"Le Quatrième Lycée ne se moque pas des capacités techniques, mais comparé aux magies centrées sur le combat qui s'expriment au sein de la Compétition des Neufs Lycées, ils sont plus intéressés dans les techniques complexes, plus complexes sont les procédures, mieux c'est."

"Vraiment ? Shizuku-chan, tu en sais des choses."

"Mon cousin étudie au Quatrième Lycée."

En entendant la réponse que Shizuku offrit à Mizuki, Honoka et les quatre autres dirent "Ah, c'est pour ça" tout en hochant la tête. Vu que cela venait d'un élève suivant des études au Quatrième Lycée, cela devait être une source fiable d'informations.

Alors que tout le monde montrait son accord à propos de ces paroles, ils éprouvèrent une énorme méfiance envers le professeur ayant convoqué Tatsuya.

Toutefois, ce groupe de personnes ne concentrerait pas son attention sur un étranger (le professeur) qui ne se trouvait pas à ce moment avec eux.

"En parlant de ça, on arrive bientôt à la Compétition des Neufs

Lycées, non ?"

Léo se souvenait sûrement de ce à quoi Shizuku avait fait allusion plus tôt. Tatsuya répondit positivement à sa question.

"Miyuki se plaint déjà. Il y a beaucoup de choses à prendre en compte, incluant les véhicules, le matériel, et les uniformes."

"Miyuki-chan, ne fait-elle pas partie des participants ? Cela s'annonce difficile."

Mizuki ne se montrait pas trop polie, c'est juste qu'elle était honnêtement inquiète au sujet de Miyuki.

"Toutefois, Miyuki devrait être en mesure de briller dans la division des nouveaux arrivants, aussi le travail de préparation est-il aussi plus intensif."

Erika répliqua d'une manière mi-acceptant mi-réfutant l'opinion exprimée auparavant.

"Ne sois pas trop confiante. Le rejeton de la famille Ichijou est entré au Troisième Lycée, cette année."

L'objection de Shizuku fut un peu loin du compte. La division officielle et celle des nouveaux arrivants étaient séparées par sexe, aussi était-il impossible que Miyuki se retrouve face au jeune maître de la famille Ichijou.

Cela dit, personne ne rétorqua à cela.

"Vraiment....."

"Tu dis Ichijou, comme les Ichijou des Dix Principaux Clans ?"

De par les expressions sincères de surprise, il semblait que c'était la première fois qu'Erika et Léo découvraient qu'un descendant des Dix Principaux Clans avait leur age. Mizuki ne sembla pas si étonnée, peut être savait-elle quelque chose sur "le rejeton de la Famille Ichijou".

"Cela sera un adversaire difficile. Cela dit, Shizuku, tu sais beaucoup de choses."

"Shizuku est une fan acharnée du 'Monolith Code', aussi va-t-elle voir la Compétition des Neufs Lycées chaque année, n'est ce pas ?"

Honoka, qui connaissait Shizuku aussi bien qu'elle se connaissait elle-même, répondit à la question d'Erika.

"......Hum, ouais."

En entendant Honoka répondre pour elle, Shizuku, habituellement inexpressive, acquiesça, un peu embarrassée. Honoka devait une faveur à Tatsuya, aussi n'était-il pas surprenant pour elle d'être intéressée par Tatsuya. Toutefois, Shizuku était différente ; elle ne connaissait Tatsuya que parce que sa meilleure amie Honoka s'intéressait à lui, et aussi à cause du fait qu'il était le frère aîné de Miyuki. Initialement, Shizuku ne faisait que des commentaires un peu à l'écart, mais au fur et à mesure, elle avait baissé sa garde et commençait à s'exprimer ouvertement.

"Maintenant que tu y fais allusion, en dehors du concours National et de celui de l'Université Internationale, le [Code du Monolithe] ne peut être vu qu'au sein de la Compétition des Neufs Lycées."

Se trouvant en diagonale par rapport à Shizuku qui était embarrassée, Tatsuya hocha la tête à la réponse d'Honoka, revêtant une expression signifiant qu'il comprenait ce sentiment.

La Compétition des Neuf Lycées était une compétition inter-école entre les lycées affiliés aux Universités de Magie. En d'autres mots, il s'agit d'une compétition interne ouverte au public.

C'était ainsi car la Compétition des Neuf Lycées était l'une des rares occasions où la magie était utilisée comme divertissement.

Chaque année, un total de 1200 élèves entrent en première année au sein des Neuf Lycées de Magie.

En comparaison, il y avait entre 1200 et 1500 jeunes garçons et filles de quinze ans qui avaient assez de talent pour être acceptés.

En d'autres termes, pour les jeunes manifestant un talent pour la magie, s'ils se destinaient à devenir Magiciens ou Ingénieurs Magiques, presque la totalité entreraient au sein de ces neuf écoles.

Ainsi, les compétitions usant de la magie au niveau du lycée, hormis le kenjutsu, les arts martiaux, et quelques autres, étaient complètement monopolisés par les neuf lycées de magie.

Afin de permettre au public de mieux comprendre et de se sentir investi dans les compétitions de magie, ainsi que pour davantage de reconnaissance envers la magie, la Compétition des Neuf Lycées est

l'un des événements majeurs pour propager ces idées.

"Notre adversaire le plus coriace, cette année, sera probablement le Troisième Lycée, n'est ce pas ?"

"Sûrement."

Sachant que cela faisait partie de l'expertise de Shizuku, Erika lui demanda précisément son opinion. En réponse, Shizuku hocha la tête joyeusement.

"Et cette année, tu ne fais pas partie de l'audience, mais tu es une participante ?"

Shizuku était classée en Seconde Place en capacités techniques de leur année ; aussi, même si la liste officielle des participants n'avait pas encore été divulguée, Shizuku était comme Miyuki du fait qu'elle était garantie d'être sélectionnée.

"Ouais....."

En entendant la question de Mizuki, Shizuku fit simplement oui de la tête, le visage illuminé par sa motivation.

◊ ◊ ◊

Après que les examens soient terminés, Tatsuya passa presque tous ses après-midi au QG du Comité de Morale Publique.

Immédiatement après les vacances d'été se tiendrait l'élection du nouveau Président du Conseil des Étudiants.

Après que ce nouveau Président soit élu, un nouveau Comité de Morale Publique sera sélectionné, avec le Chef correspondant aux élections.

Traditionnellement ..... Ou plutôt à cause d'une mauvaise habitude, il n'y avait jamais eu de transfert en douceur entre les Chefs du Comité. Plus souvent qu'autre chose, les activités inorganisées et les membres actuels étaient laissées à la charge du nouveau Chef.

Cela dit, quand Mari avait pris cette place durant sa première année, il n'y avait pas eu de problème de transfert l'année suivante. Toutefois, les étudiants de 2nde année du Comité de Morale Publique

manquaient d’expérience, aussi Mari souhaitait-elle minimiser la confusion durant le transfert des pouvoirs entre les Chefs.

--- Trouver tous les documents concernant le transfert était une responsabilité que Mari avait rejeté sur Tatsuya.

"Je commence à penser que je suis un petit garçon sage....."

"Un petit garçon sage qui est absolument mauvais ? Je pense que ta double nature est plutôt intéressante."

"....."

Ce commentaire était plus que pertinent, rendant Tatsuya incapable de répliquer.

"Néanmoins, cette fois, je te suis reconnaissante pour ce bon coté, vu que sans ton aide, on ne ferait que répéter les désastres du passé."

Mari le réconforta de cette manière car elle se sentait un peu coupable en voyant Tatsuya trimer silencieusement sur ce qui aurait dû être son travail.

Pourtant, Tatsuya n'était pas affecté par un dédoublement de personnalité, pas plus qu'il n'aidait simplement à s'occuper des papiers. Il était le seul à s'en charger.

Ces paroles n'eurent pas l'effet réconfortant escompté.

"Malgré tout, vous avez commencé assez tôt à préparer le transfert."

Tatsuya posa une question cinglante sans cesser de travailler.

Les documents qu'ils préparaient seraient terminés en une semaine.

Si aucun ajout de détails n'était nécessaire, cela créerait une période tampon de deux mois.

En outre, il n'y avait aucune garantie qu'aucun événement ou incident majeurs n'aurait lieu durant cette période.

Ce n'était pas le genre de choses dont on devait s'occuper dès que possible.

"Une fois que nous aurons commencé à préparer la Compétition des Neuf Lycées, nous n'aurons plus le temps de compiler cela. Il y a une montagne de choses à faire, comme vérifier la liste des compétiteurs, ajuster l'équipement, réunir et analyser les données, et s'occuper de la

stratégie."

Toutes ces chose n'avaient rien à voir avec Tatsuya.

"......Quand la Compétition des Neufs Lycées se tiendra-t-elle ?"

Cela dit, arrêter la conversation sur ce point serait maladroit, aussi Tatsuya concentra-t-il de nouveau son attention sur les données qu'on lui avait demandé.

"Durant 10 jours, du 3 au 12 août."

"C'est une longue période."

"Hum ? Tu n'y es jamais allé ?!"

"Non, vu que j'ai toujours été occupé par des choses à faire durant les vacances d'été."

La réponse de Tatsuya déconcerta complètement Mari.

"Mais d'après Mayumi, ta petite sœur y va chaque année, au point même qu'elle peut dire qui a participé à quelles épreuves....."

Tatsuya éclata presque de rire.

"Non, ce n'est pas comme si nous étions attachés par la taille 365 jours par an..... A l'occasion, nous bougeons aussi séparément."

"Hein ? .....Non, tu as raison. C'est juste que chaque fois qu'on vous voit tous les deux, c'est comme si vous étiez toujours ensemble."

"En parlant de ça, au lycée, nous sommes chacun de notre coté."

Après que Tatsuya eût rappelé objectivement cela, même si l'expression de Mari révéla son incompréhension, elle l'accepta tout de même.

"Si c'est le cas, pas étonnant que tu es été perdu quand j'ai commencé à parler des préparatifs pour la Compétition des Neuf Lycées."

"Oui, pour être honnête, je ne connais même pas quelles sont les épreuves. Je ne connais que 'Code du Monolithe' et 'Batte Illusoire'."

S'il est vrai qu'ils s'occupaient de plusieurs taches à la fois en participant à la conversation et en créant le fichier de données, cela ne servait qu'à remettre à niveau Tatsuya. Et pour Mari, qui était au repos — ou plutôt celle qui ne voulait rien faire — c'était un bon moyen de passer le temps, aussi Tatsuya fut-il plus bavard que d'ordinaire.

"C'est parce que ces deux-là sont les plus connus....."

Mari pencha la tête, comme si elle ne savait par où commencer. Elle tint son poing devant la bouche, comme pour tousser (mais il n'y eut aucune toux).

"Les épreuves de la Compétition des Neuf Lycées se concentrent sur des concours d'athlètes de magie et requièrent le plus de Pouvoir Magique."

"Je suis au courant de cela."

Tatsuya répondit tout en continuant à taper sur le clavier.

"Dans le passé, ils changeaient les épreuves chaque année, mais ces dernières années, on a vu les mêmes épreuves chaque année. Il y a six épreuves: 'Code du Monolithe', 'Batte Illusoire', 'Destruction des Piliers de Glace', 'Tirs Rapides', 'Nuée de Balles', et 'Bataille de Surf'. Kenjutsu, Arts Martiaux magiques chinois et autres concours attenant aux combats, ainsi que les compétitions athlétiques comme la gymnastique et basket-ball se tiennent à un autre moment."

"Mais 'Nuée de Balles' et 'Bataille de Surf', ne nécessitent-ils pas de bonnes capacités physiques ?"

"Oui. Les Magiciens ne sont qu'humains, aussi n'y a-t-il aucune raison de sous-évaluer les capacités physiques. Même en duel en 1 contre 1, entre Magiciens, il y a des cas où celui doté de capacités physiques supérieures, est victorieux. Je suis sure que je n'ai nul besoin d'aller plus dans le détail."

"C'est exact."

Tatsuya le savait très bien, aussi son accord avec les paroles de Mari était vraiment du fond du cœur.

"Sur les six épreuves, seul le 'Code du Monolithe' est par équipe, les cinq autres se font en solo."

"Mais 'Nuée de Balles' n'est-il pas fait en duo ?"

"C'est là que la Compétition des Neuf Lycées devient mauvaise. Afin de souligner l'importance du Pouvoir Magique, cette épreuve a une règle de performance en solo. J'ai un livret résumant les règles, veux-tu y jeter un coup d’œil ?"

"Bien sûr, je m'y mettrai plus tard."

Tatsuya arrêta de taper et prit le petit livret de lui tendait Mari.

"Hum, une copie papier. Plutôt étrange."

"Ce n'est pas surprenant quand on parle de la Compétition des Neuf Lycées. Les terminaux virtuels nuiraient au fondement conceptuel du Pouvoir Magique. D'un autre coté, il y a très peu de gens qui utilisent la véritable puissance des terminaux, et le nombre de Magiciens usant de terminaux virtuels est aussi en augmentation."

"Je vois, c'est pourquoi la Compétition des Neufs Lycées utilise des copies papiers plutôt que des terminaux."

"Eh ? Ainsi Tatsuya-kun préférerait l'usage de terminaux virtuels ?"

Elle avait probablement entendu la critique dans le ton de Tatsuya.

Avec son habituelle impétuosité et sa tendance amusante à être "mauvaise pour organiser", il était facile d'oublier qu'elle était en fait très perspicace.

Tatsuya prit cela en considération et prit soin de choisir ses mots — tout en continuant de taper — avec prudence.

"Il est envisagé le fait que les terminaux virtuels ont un impact négatif sur les Magiciens n'ayant pas encore atteint la maturité. Surtout sur ceux qui ont moins de vingt ans et qui développent encore leur pouvoir, je pense qu'ils doivent éviter d'utiliser les modèles virtuels. Mais pour les Magiciens adultes dont le Pouvoir Magique est bien développé, il n'y a aucune raison de les empêcher d'utiliser des modèles virtuels."

"......C'est une autre façon de voir les choses. Forcer les adultes à abandonner l’efficacité des modèles virtuels sous prétexte que cela a un mauvais impact sur les plus jeunes semble exagéré."

Il y eut un léger blanc dans la conversation. Tatsuya était occupé à vérifier sur l'écran les informations qu'il avait entrés, aussi lui était-il impossible de discerner à ce moment précis l'expression du visage de Mari, mais il pensa qu'elle devait réfléchir à son commentaire précédent.

Peu importe le ridicule de son comportement habituel, il lui était impossible de dissimuler son sens inné de la justice.

Pour certaines raisons, ce fait fit sourire un peu Tatsuya.

".....Nous avons dérivé du sujet."

Mari sembla arriver à sa propre conclusion avant de retourner directement au sujet originel de la discussion sur la Compétition des Neuf Lycées.

"La compétition est séparée entre la Division Officielle et celle des Nouveaux Arrivants, chacune requérant 10 garçons et 10 filles, pour un total de quarante personnes. Seuls les premières années peuvent participer à la Division de Nouveaux Arrivants alors que la Division Officielle n'a aucune restriction. Cela dit, chaque participant ne peut participer qu'à deux épreuves, aussi aucun première année n'a jamais participé à la Division Officielle. Même si ce n'est pas inscrit dans les règles, il est impossible pour un élève de première année de se dresser face à la puissance de feu des étudiants de 2nde et 3ème année. Jusqu'à l'année dernière, la Division des Nouveaux Arrivants n'était pas séparée par sexe, mais à partir de cette année, aussi bien la Division Officielle que celle des Nouveaux Arrivants le sera. De même que jusqu'à l'année dernière, aucune élève de première année n'avait été amenée à concourir dans plusieurs épreuves, mais cela sera sûrement inévitable cette année."

Les paroles de Mari évoquaient ses soucis pour Miyuki, ce qui était évident même si elle ne la nomma pas.

Participer de manière continue à des compétitions magiques était épuisant pour le corps des filles. Même si Miyuki avait été entraînée bien au-delà d'une personne normale, son physique était plus faible. Ce serait sûrement mieux s'il lui apportait autant d'aide que possible, pensa Tatsuya.

"Des six épreuves, quatre sont communes aux filles et aux garçons, 'Code du Monolithe' est réservé aux hommes et 'Batte Illusoire' aux femmes..... Vu que le 'Code du Monolithe' est le seul événement où de véritables combats sont garantis, ce n'est pas surprenant que ce soit réservé aux hommes."

Mari avait bien dit cela, même si l'expression de son visage clamait le contraire.

D'après les informations que Tatsuya avait réunies sur le Comité de

Morale Publique, Mari était spécialisée en magie de combat antipersonnel, alors elle devait être mécontente d'être exclue de cette épreuve.

"Le nombre maximum de participants par épreuves est de trois pour chaque école, avec les filles et les garçons comptés séparément. En incluant la Division Officielle et celle des Nouveaux Arrivants, cinq garçons et cinq filles seraient donc sélectionnés pour deux épreuves alors que les cinq autres ne participeraient qu'à une seule.

Quant à décider de qui va participer à quelle épreuve, c'est basé sur les capacités des participants à se concentrer uniquement, à émerger victorieux d'une épreuve ou de maximiser les profits en étant présent sur deux ; et on doit prendre en compte où les as de nos adversaires vont aller et contre qui ils vont se trouver..... Vu qu'il s'agit d'une compétition par équipe, tous ces détails sont très importants."

"Bien sûr."

"En dehors des participants, la Compétition des Neuf Lycées permet à chaque école d'avoir quatre conseillers tactiques, mais chaque école ne prend pas avantage de cette possibilité. Notre école amène toujours le maximum de personnel chaque année, mais d'autres comme le Troisième Lycée ont renoncé au support tactique durant la compétition, s'appuyant uniquement sur leurs candidats pour décider des tactiques."

"Et, ironiquement, ce sont nos plus coriaces adversaires."

"Nous n'avons perdu face à eux que deux fois, une fois il y a trois ans, et une autre fois, il y a sept ans. La Compétition des Neuf Lycées est passée à un format estival il y a dix ans. Depuis, il y en a eu neuf. Notre école a été championne cinq fois, le Troisième Lycée deux fois, et le Second Lycée ainsi que le Neuvième ont gagné chacun une fois."

"J'imagine de l'objectif de cette année est une troisième fois consécutive ?"

"C'est vrai. Pour nous, les 3èmes années, sécuriser le championnat est la vraie victoire."

Actuellement, les élèves de 3ème année du Premier Lycée étaient collectivement connu comme "La génération la plus forte".

Saegusa Mayumi, Juumonji Katsuto, Watanabe Mari.

Deux d'entre eux étaient directement connectés aux Clans des Dix Maîtres, alors que la troisième possédait un talent similaire.

Le simple fait que tous les trois se soient retrouvés à la même école, dans la même année était une coïncidence impressionnante. De plus, au sein du campus, plusieurs élèves étaient déjà qualifiés pour être de Rang A tout en étant au lycée (ils étaient incapables d'obtenir leurs licences dû à leur manque d'expérience pour le classement d'après les normes internationales).

Avant même que la liste officielle ne soit annoncée, le Premier Lycée était déjà favori pour être de nouveau champion.

Même si les paris clandestins utilisaient la Compétition des Neuf Lycées comme cadre, personne ne pariait contre le Premier Lycée — cela montrait à quel point la puissance de leur groupe était écrasante.

"J'ai entendu dire que si tout se passe selon le plan, la victoire de notre école est courue d'avance ?"

"Probablement. Il n'y a aucun problème quant aux participants. Même en prenant la division des Nouveaux Arrivants en considération, aussi longtemps qu'il n'y aura pas d'incidents majeurs, nous devrions gagner largement avec les points de la Division Officielle. S'il y avait une inquiétude, ce serait concernant les ingénieurs."

"Ingénieurs ? Vous voulez dire, ceux en charge de la maintenance des CADs ?"

"Exactement, excepté que le terme officiel pour la Compétition des Neuf Lycées est Technicien. Les CADs utilisés durant la compétition doivent être universellement adaptables, ainsi, seuls les modèles correspondant aux critères sont autorisés. D'un autre coté, les restrictions ne concernent que le hardware, ainsi aucune restriction ne s'applique au software. Le niveau de synchronisation entre les compétiteurs et les CADs et le fait que la maintenance permettent aux participants de donner leur maximum est absolument décisif pour déterminer la victoire."

La vitesse à laquelle s'initialise une Séquence d'Activation, dépend entièrement de la partie hardware du CAD, mais l'efficacité de la Séquence Magique est fortement influencée par le design du software

du CAD. Étant donné qu'une seule seconde peut faire la différence entre victoire et défaite dans les compétitions athlétiques, un programme software est d'une importance vitale.

En aucun cas cela n'implique-t-il que plus la conception du matériel est complexe ou plus le nombre de processus est important, meilleur est le software. Un Software qui dépasserait la puissance du processeur ferait plus de mal que de bien et obstruant le hardware lui-même.

Étant donné qu'il y a un niveau pour le hardware, la sélection et l'allocation du software devient encore plus importante.

Tatsuya croyait, que sous ces conditions, les résultats de la compétition pouvaient changer dramatiquement en fonction du niveau des ingénieurs.

"A l'heure actuelle, on a une pénurie d'ingénieurs talentueux en 3ème année comparé à la valeur des participants. Mayumi et Juumonji sont capables de s'occuper de la maintenance de leurs propres CADs, ils n'auront donc pas de problèmes durant la compétition, mais....."

"....."

En d'autres termes, Mari n'excellait pas dans ce domaine.

Tatsuya fut capable de comprendre précisément le sous-entendu dans les paroles vagues de Mari mais, précisément parce qu'il comprit, il choisit de ne rien ajouter.

Il permit à son attention de se concentrer sur les données du fichier plutôt sur la conversation de Mari.

◊ ◊ ◊

Les améliorations dans le centre de contrôle du trafic public ont abouti à la refonte complète du système de circulation, avec les Cabines devenant la première source de transport public dans la ville. Les voitures sur les rails étaient complètement contrôlées par la salle d'opération centrale afin d'assurer la sécurité, la facilité d'accès et la capacité de faire face à la demande exigée.

D'un autre coté, l'avancée du système de transports publics ne s'était pas déroulée comme prévu. Le programme pour la connexion de toutes les routes avait déjà été intégré dans le système, mais la plupart des rues et voies expresses au sein des villes étaient encore contrôlées par la ville et n'avaient pas atteint le niveau national.

En comparaison, l'IA pour l'assistance du conducteur s'était incroyablement améliorée.

Tant qu'elles n'aient pas été illégalement modifiées, les voitures modernes étaient incapables de causer des accidents même si on essayait (la voiture de Katsuto fut capable d'entrer en collision directement avec le QG de Blanche car c'était un modèle militaire).

Les véhicules exportés vers les autres nations possédaient la même IA, permettant à de plus petits pays de bénéficier de ce système alors même qu'ils n'avaient pas les capacités de les développer eux-mêmes, ce qui prévint à un niveau encore plus important les accidents. D'un point de vue international, les systèmes de contrôle individuel dépassaient ceux de systèmes de contrôle centraux.

Malgré cela, il y avait encore un prix à payer. Les jeunes conducteurs — ou pour parler plus franchement, les mauvais conducteurs — ne prenaient pas le risque de causer des accidents, mais il était plus facile pour eux de causer des embouteillages. Même si les accidents consécutifs pouvaient ainsi être évités, on ne pouvait éviter les situations où tout le monde devait appuyer sur les freins, le résultat n'étant que naturel.

Pour prévenir cela — du moins en apparence — même s'il n'y en avait pas vraiment besoin pour la sécurité, les permis de conduire étaient encore obligatoires.

Tatsuya attendait Miyuki, en se tenant à coté de sa moto électrique.

Tatsuya avait acheté cette moto après avoir obtenu son permis plus tôt en avril. Bien que l'achat soit strictement d'un ordre pratique plutôt que pour faire des balades la moto avait déjà parcouru un kilométrage considérable. Malgré cela, Tatsuya en prenait soin tous les jours, ainsi, même après deux mois, la moto restait en parfait état.

"Onii-sama, désolée pour l'attente."

En entendant cette voix, Tatsuya tourna son regard vers le corps mince de sa sœur qui était éclairé par les phares.

Les cheveux longs de Miyuki étaient relevés en chignon et elle portait une tenue de motard, du même style que celle de Tatsuya. La tenue personnalisée épousait ses courbes, montrant la plénitude de ses charmes féminins.

Alors que Tatsuya mettait le casque sur la tête de Miyuki, elle releva le menton en douceur. Ce mouvement naturel de sa petite sœur poussa Tatsuya à sourire ironiquement, mais il boucla quand même pour elle la boutonnière.

Miyuki contracta son cou comme chatouillé, auquel Tatsuya répondit par un sourire alors qu'il mettait son propre casque avant de monter sur la moto.

Il sortit ses lunettes, et demanda à Miyuki de bien se cramponner.

Tatsuya vérifia que Miyuki le tenait bien par la taille et qu'elle était bien appuyé contre son dos avant d'ajuster ses lunettes et d'augmenter la puissance du dispositif de mouvement continu (équivalent à la pédales des gaz).

La moto électrique qui portait le frère et la sœur fila au loin dans la nuit.

◊ ◊ ◊

Leur destination était le temple de Yakumo.

Toutefois, la personne qui était là pour s’entraîner ce soir était Miyuki et non Tatsuya.

Miyuki avait déjà été sélectionnée comme participante à la Compétition des Neuf Lycées, aussi une préparation supplémentaire était-elle nécessaire.

Les épreuves de la Compétition des Neuf Lycées soulignaient le besoin de talent en magie, mais en même temps n'ignoraient pas complètement les capacités physiques. Dans "la bataille de Surf", les participants avec les meilleurs réflexes et un meilleur sens de

l'équilibre avaient là un avantage, alors que "Nuée de Balles" requérait un bon équilibre entre tactique et endurance.

Pour Miyuki, qui excellait en magie d'attributs vitesse et froid, "Destruction des Piliers de glace" était une épreuve qui aurait pu être spécialement conçue pour montrer son talent. Sans tenir compte de la Division des Nouveaux Arrivants, elle pourrait sûrement obtenir la victoire même au sein de la Division Officielle.

Toutefois, avec la séparation par genres des compétitions individuelles, le nombre d'épreuves avait augmenté, Miyuki aurait aussi à participer à "Batte Illusoire", où elle aurait à "user d'une batte pour fendre les boules de lumière flottant dans les airs".

Miyuki recevait, avec Tatsuya, un entraînement aux arts martiaux par Yakumo, aussi son apparence frêle contrastait-elle avec de superbes capacités physiques. Même si, étant donné qu'elle n'avait pas eu beaucoup d'opportunités de s’entraîner dernièrement, cet entraînement servait de précaution pour l'épreuve principale.

Tatsuya arrêta le moteur près de l'entrée avant de pousser le véhicule au sein du temple. Après avoir laissé le véhicule dans le garage du temple, tous deux allèrent à la rencontre de Yakumo.

A cette heure, Yakumo devait être en train de faire l'entraînement de nuit de ses disciples.

Comme ils s'y attendaient, alors qu'ils approchaient du dojo, ils purent détecter de multiples présences invisibles, ainsi que d’occasionnels bruits de pas qui n'étaient pas complètement étouffés et le son de corps heurtant le sol.

Tatsuya ouvrit lentement les anciennes portes pour éviter de distraire les disciples de leur entraînement.

Alors même que les portes s'étaient ouvertes sans bruit, un kunai vola vers eux. Tatsuya usa de la lame et de sa veste à l'épreuve des balles pour dévier le kunai avant de sortir une balle de plomb de son costume de motard pour riposter.

Cependant, la "bille" de Tatsuya (un type d'armes dissimulées qui n'était lancé qu'à la force des doigts, du même genre que le "point ball") ne sembla pas toucher sa cible.

"Tatsuya, on dirait que tes compétences martiales ne se sont pas vraiment améliorés. Ne pense pas que la magie suffise, tu dois aussi t'entraîner à l'envoi de projectiles. Toutefois, tu as pris la bonne décision en déviant le kunai plutôt qu'en l'attrapant."

Il n'y avait aucune présence détectable, seulement une voix.

Tatsuya ne visa pas directement en face de lui d'où venait la voix, mais, à la place, envoya une seconde bille vers le mur à droite.

"Oh ho ?"

Accompagnant ce cri de surprise, une force ondula vers l'extérieur de là où Tatsuya avait visé.

Tatsuya mit rapidement son bras autour de Miyuki et sauta en arrière.

Une fraction de seconde plus tard, un coup d'un sabre noir frappa verticalement en venant du plafond, manquant Tatsuya d'un cheveu alors qu'il couvrait sa petite sœur.

Tatsuya avança rapidement un pied.

Un bokken peint tout en noir, fut rendu complètement immobile par Tatsuya qui le piétina fermement.

Yakumo abandonna l'idée de frapper une seconde fois alors qu'il laissait échapper son arme immobile.

".....Sensei, vous avez une façon étrange d'aller à la rencontre des gens."

".....Ce serait à moi de dire ça. Ta bille n'était-elle pas pleine d'intentions meurtrières ?"

Maître et disciple se firent face dans le noir, avant d'éclater simultanément d'un rire sombre.

Nichée à l'intérieur de la poitrine de Tatsuya, Miyuki se prit à rougir furieusement. Heureusement, il était difficile de le discerner dans l'obscurité environnante - au moins c'est ce que Miyuki pensa, mais Tatsuya avait déjà remarqué, dû au contact avec son corps raide, tandis que Yakumo l'avait détecté à travers sa respiration erratique.

◊ ◊ ◊

Quelque part au sein du temple illuminé par des torches dans les quatre coins, dans un endroit normalement réservé aux cérémonies homa (ce temple devait être sous la juridiction de Hisanyama, mais Tatsuya et Miyuki n'avaient jamais vu Yakumo chanter des sutras ou prier Bouddha), l'endroit était légèrement éclairé par de la lumière bleue, avec des orbes lumineuses dansant d'un faible rouge dans le ciel.

Comme il s'agissait d'un temple, tout passant ignorant pourrait confondre cette scène pour la présence d'esprits, mais heureusement, personne ne se trouvait aux alentours.

Une mince, et longue ombre passa à travers la lumière bleutée, et une orbe de lumière disparut dans le néant.

Deux orbes, trois orbes, la différence des couleurs commença à augmenter.

Cette figure envoûtante qui chassait les orbes flottantes avec une énergie et un rythme inattendue, puis les sectionnant avec un court bâton dans la main.

Après avoir sectionné trente orbes, Tatsuya fit signe à Miyuki de faire une pause.

A l'intérieur, il n'y avait qu'une barrière carré dessinée à la chaux vive qui mesurait à peu près 11 mètres de côté - la puissance brute nécessaire pour dessiner quatre lignes blanches pour former une barrière n'était rien de moins qu'impressionnant - Tatsuya apporta une grande tasse de thé à l'endroit où se tenait Yakumo, alors qu'il laissait tomber les sceaux.

Habituellement, c'était Miyuki qui se chargeait d'amener le thé au haletant Yakumo, mais Tatsuya avait repris cette tache ce jour là.

C'était parce que ce soir, Miyuki, était dans un état similaire tout en se tenant de l'autre coté de la ligne blanche.

"Sensei, merci. Pas seulement pour l'emplacement, mais aussi pour entraîner ma petite sœur."

Après avoir donné le thé à Yakumo, Tatsuya s'inclina profondément de reconnaissance, auquel Yakumo acquiesça généreusement.

"Il y a une différence colossale entre attaquer des illusions et frapper de véritables cibles. Miyuki est aussi l'une de mes mignons élèves, aussi était il impossible que je refuse."

Il y avait sûrement plus d'importance sur le mot "mignons", mais Tatsuya décida d'en rester là jusqu'à la Compétition des Neuf Lycées.

La magie d'illusion était un domaine où le "ninjutsu" excellait, au point que la vitesse, la précision et les mouvements des illusions surpassaient celles créées par la magie moderne. La Magie Moderne avait l'avantage en terme de vitesse d'invocation et de variété de sorts à disposition, mais dans des paramètres spécialisés, il y avait de multiples domaines où ils ne faisaient pas le poids face aux Anciennes Magies.

Tatsuya n'avait accès qu'à quelques magies, aussi était il incapable d'utiliser la technique d'illusion de Yakumo, "Will O'wisp", pour remplacer les projecteurs.

"Miyuki, devrions nous en rester là ?"

Tatsuya lui posa la question tout en lui tenant une boisson alors qu'elle continuait d' haleter, mais Miyuki secoua la tête et but une gorgée pour se rafraîchir la gorge.

"Si ça convient à sensei, je veux continuer."

"Cela me va, mais, Tatsuya, n'as tu pas envie d'essayer d'utiliser 'Will O'wisp' ?"

"Non, Je..... laisse ça pour une autre fois."

Tatsuya pouvait approximativement deviner la raison du sourire de Yakumo.

Tatsuya eut l'idée un court instant de gâcher le plaisir de Yakumo, mais s'en abstint après avoir pris en compte que l'entraînement de Miyuki avait la priorité.

"Vraiment, eh bien, tant pis."

Yakumo exprima un regret sincère, mais ce fut insuffisant pour cacher son sourire espiègle.

Voyant cela, Tatsuya fut alors certain que décliner l'offre avait été le bon choix.

Yakumo transforma son sourire rusé en un doux sourire d'approche en se retournant vers Miyuki.

"Alors, commençons."

"Oui, sensei."

Miyuki s'inclina au signal, montrant qu'elle était prête à continuer.

Tatsuya avait déjà récupéré leurs tasses depuis un bon moment.

Juste au moment où Miyuki se tenait au milieu du carré entouré par des feux, et Yakumo sur le point de lancer des illusions.....

"Qui est là ?"

La présence d'une autre personne se fit sentir.

La personne qui avait crié, fut Tatsuya.

Non, l'ordre des fait est opposé.

Pour compléter l’entraînement, Tatsuya avait relié ses capacités sensorielles à la dimension informationnelle, lui permettant rapidement de sentir rapidement tout élément étranger dans le secteur. Au moment Tatsuya fit face au silence de la nuit, la présence d'une autre personne s'était matérialisée.

"Ah, Haruka."

Yakumo salua la présence avec insouciance.

Tatsuya et Miyuki avaient tous deux connaissance de ce nom.

Le visage qui vint à eux dans la lumière vacillante avait une aura bien plus mature que Miyuki.

Elle était la conseillère d'éducation du Premier Lycée affilié à l'Université de Magie — Ono Haruka.

Sûrement dû au fait qu'elle portait la même combinaison sombre que Miyuki, il semblait que les courbes de sa poitrine et de sa taille étaient plus accentuées que d'habitude.

Alors que le regard de Miyuki suivit la direction de celui de Tatsuya, une trace d'inquiétude passa comme un flash sur son visage. Néanmoins, avant qu'elle n'ai pu pousser son frère du coude, elle remarqua le regard glacé d'acier de son frère et retrouva rapidement son calme.

La raison pour laquelle Tatsuya regardait soigneusement le corps d'Haruka, était qu'il voulait vérifier ses capacités physiques.

"Tatsuya, pas besoin d'être si méfiant, Haruka est aussi une de mes élèves."

"Mais vous êtes beaucoup moins sympathique durant mon entraînement qu'avec Shiba-kun."

La voix d'Haruka était légèrement moqueuse, ce qui ébranla sa dangereuse apparence qui pouvait facilement se fondre dans l'obscurité.

"Cela dit, je sais que sensei est autre chose, mais penser que j'ai été découverte par Shiba-kun, ma technique aurait elle tant régressé ?"

"Haruka, mentir à toi même est une mauvaise habitude. Si tu mens trop souvent, tu finiras aussi par perdre de vue tes propres pensées."

"Shiba-kun m'a dit la même chose."

"Oh, on dirait que j'ai dit quelque chose d'inutile. De toute manière, mettons ça de coté pour le moment. Le camouflage d'Haruka était presque parfait, aussi n'y a t'il nul besoin de stresser à ce niveau. Cela vaut si tu penses vraiment que tes capacités ont régressées."

Haruka révéla un modèle de sourire superficiel et accepta le sous entendu de Yakumo.

Elle ne devait pas être en mesure de s'en sortir aussi facilement, pas plus qu'elle avait dû ,en premier lieu le prévoir.

Voyant le sourire narquois de Yakumo, c'était sûrement leur façon d'interagir habituelle.

"Tatsuya ne t'a pas détecté normalement. Il a une paire d' 'yeux' spéciaux qui sont différents des nôtres, aussi, si tu comptes le tromper, tu auras besoin de déguiser ta présence plutôt que d'essayer de la cacher."

"Je vois..... Je prendrais cela en considération."

"C'est à votre tour de répondre à mes questions."

Tous deux agissaient comme un maître et un disciple, utilisant Tatsuya comme sujet de discussion. Incapable de cacher son irritation, Tatsuya brisa intentionnellement leur discussion d'un ton déplaisant.

"Hum..... Il est injuste de ne donner des informations qu'à Haruka. Cela ne vous dérange pas, n'est ce pas, Haruka ?"

Yakumo laissa intentionnellement échapper un "Hum....." pour créer une ouverture, mais étant donné son attitude, il était évident qu'il avait calculé quand Tatsuya les interromprait. En réponse au fait que Yakumo tournait la discussion sur elle, Haruka haussa immédiatement les épaules et répondit:

"Même si je disais non, vous autres pourriez en discuter dès que je ne serais plus là, non ?"

Haruka avait en fait déjà renoncé à se cacher.

"Vu que la personne en question a donné son accord, alors je vais continuer..... Haruka est une enquêtrice de la Sécurité Publique."

L'explication de Yakumo fut très simple, comme si cela suffirait. Malgré tout, Tatsuya espérait que Yakumo irait un peu plus loin.

"Hum ? Vous ne semblez pas très surpris."

Toutefois, Yakumo posa sa propre question.

Il apparut qu'il s'attendait à ce qu'ils soient ébahis.

Pas seulement Tatsuya, mais Miyuki également accepta la véritable identité d'Haruka sans sourciller, ce qui surprit considérablement Yakumo, ou plutôt il serait plus approprié de dire que cela avait déçu considérablement Yakumo.

"J'ai mon propre réseau d'information,aussi je savais qu'Ono sensei ne fait pas partie de l'armée. Par élimination, les autres possibilités était la Sécurité Publique (Police Département de la Sécurité Publique), les Affaires Internes (Agence attenant à la Supervision des Données), ou espionne étrangère."

La réponse de Tatsuya poussa Yakumo à froncer les sourcils.

"Plutôt que dire réseau d'information, c'est plutôt 'lui' qui t'a donné cette information. N'est ce pas vrai ?..... Étant donné sa position, il pourrait être renvoyé pour avoir donné une info confidentielle à un lycéen."

Cela dit, l'expression parfaitement calme de Yakumo montrait clairement qu'il n'était pas particulièrement inquiet.

"En terme de position, sensei est sur la même longueur d'onde..... Ainsi, Ono sensei est un agent sous couverture de la Sécurité Publique comme conseillère pour enquêter sur les activités antigouvernementales de Blanche au sein du campus du Premier Lycée, est ce bien cela ?"

"Non."

Tatsuya demanda pour vérifier son hypothèse concernant Haruka.

Mais Haruka répondit clairement négativement.

"Il est vrai que je suis un agent sous couverture de la Sécurité Publique, mais je ne me déguise pas comme conseillère. Chronologiquement, mon supérieur actuel m'a approchée alors que je comptais devenir conseillère, et je suis devenue une enquêtrice spéciale après mon arrivée au Premier Lycée, il y a deux ans. J'ai passé un an avec Yakumo sensei, aussi Tatsuya-kun est il ici mon senpai."

"Même si vous n'avez étudié qu'un an, votre capacité de camouflage est plutôt efficace."

"Cette magie est ma spécialité, même si je ne peux pas vraiment user de d'autres magies. C'est aussi la raison pour laquelle mes supérieurs m'ont bien notée."

".....Je vois, vous êtes une Magicienne Née Spécialisée (NS) ?"

"Je désapprouve ce terme."

Haruka fit la moue et tourna la tête comme une écolière en colère, poussant Tatsuya à sourire.

Magiciens NS, aussi connus comme utilisateurs de capacités NS, pourraient aussi être appelés utilisateurs innés de techniques ou spécialiste inné en magie. C'était parce qu'ils excellait dans une spéciale habilité, mais à cause de cette extrême spécialisation, ils étaient incapables d'utiliser des techniques magiques du même niveau que les Magiciens de même niveau.

Comme le suggère le label "les 101 tours des utilisateurs NS", les Magiciens NS occupaient un rang social inférieur à celui des Magiciens normaux, mais leur capacité unique était pratiquement impossible à imiter. Même si quelqu'un pouvait accomplir cela, ils

étaient incapables d'avoir le même niveau de qualité dont font preuve les utilisateurs NS . Si opposés dans leur spécialité, ils surpassaient souvent les Magiciens dits "omnipotents".

"Plutôt que d'être un touche à tout, je préfère être maître dans un domaine. Toutefois, c'est une question de point de vue, Haruka sensei."

Aussitôt que Tatsuya répondit cela, il réalisa que les positions conseillers-élèves avaient été inversées. Néanmoins, étant donné qu'on était hors du campus et qu'il n'y avait sûrement pas de classe en cours à cette heure, cela ne devait pas poser de problèmes.

S'en apercevant également, Haruka se calma, mais elle était encore mécontente de la situation.

"Shiba-kun, c'était une circonstance spéciale, mais mon identité comme enquêtrice secrète reste classée secret, alors je t'en prie, ne le dis à personne d'autre."

La réaction immédiate de Tatsuya fut qu'il y avait peu d'intérêt à faire ça.

Si elle n'était qu'un agent sous couverture de la Sécurité Publique, alors les Clans des Dix Maîtres seraient malgré tout au courant.

Erika, dont la famille était fortement liée à la police, devait déjà être au courant.

De même, Tatsuya avait compris depuis longtemps le fait qu'elle soit un agent, il ne savait juste pas à quelle organisme elle était affiliée.

Il était tout à fait possible qu'Haruka soit la seule à croire que son identité restait secrète mais Tatsuya ne le verbalisa pas.

Il répondit à la requête de cette façon:

"Je comprends, je garderais ça pour moi. Bien que cela soit présomptueux de demander ça en retour, mais si quelque chose de similaire de ce qui s'est passé en avril se trouvait à l'horizon, pourriez vous me donner les détails en avance ?"

"....C'est bon. Va pour une relation d'intérêt mutuel."

Tous deux se serrèrent la main, chacun prenant soin de son propre agenda.

◊ ◊ ◊

Cela va sans dire que hormis la magie, les lycées de magie proposent tout de même un curriculum complet.

Cela incluait l'éducation physique, qui consistait à utiliser la compétition pour attiser la fougue de la jeunesse à des niveaux supérieurs, une chose qui n'avait pas encore changé.

L'activité de la classe d'aujourd'hui était le soccer.

Selon une encyclopédie, voici ce qu'on y trouverait: C'est un sport dérivé du football, avec des règles similaires, qui est joué sur un terrain entouré par des murs percés de petits trous. Les seules différences notables sont que les joueurs portent un casque de protection, et toucher la balle de la tête et des mains est interdit. (Également, pour les compétitions, les joueurs "jouent dans une boite transparente", cela fait partie des caractéristique du sport après 2080".)

Occasionnellement, ce jeu peut aussi inclure l'utilisation de la magie, mais généralement, la magie est interdite, et aujourd'hui c'était aussi le cas.

Le soccer était joué avec un ballon léger et très résistant qui rebondissait contre les murs et le plafond. La balle rebondissait rapidement à droite, à gauche, un peu comme une balle de ping pong, alors que les joueurs la prenaient pour tirer sur le but adverse. C'était le sport qui demandait aussi bien une incroyable agilité et force. De plus, cet exercice très stimulant était populaire comme divertissement.

Les filles des classes 1-E et 1-F prenaient une pause, et ignorant complètement leur programme, étaient occupées à encourager leurs camarades de classe masculins.

"Bouge, bouge, hors de mon chemin !"

Léo chargeait vers la balle que personne ne couvrait.

Le ballon utilisé au soccer était très dynamique, aussi était il très difficile de dribbler avec, raison pour laquelle cette action était rarement vue. Généralement, les cinq joueurs utilisaient les murs ou le plafond pour faire des passes, ainsi l'énergie dépensée pour récupérer

la balle décidait souvent de la victoire ou de la défaite.

"Tatsuya !"

Traversant entièrement le terrain, Léo passa la balle à Tatsuya au milieu du terrain avec un puissant tir.

S'il avait essayé d'attraper le ballon avec la poitrine ou l'abdomen, il aurait été mis KO, aussi Tatsuya poussa la balle directement devant, laissant la balle perdre de sa force grâce au rebond sur le plafond avant de la reprendre au pied.

Après réception de cette passe doté de l'efficacité d'une machine, Tatsuya envoya le ballon sur le mur, usant du rebond pour faire une passe.

Le long de l'axe du rebond, se tenait un autre mince jeune homme. Plutôt de le décrire comme mince, il serait plutôt exact de dire qu'il était bien bâti. En fait, il avait reçu la passe rapide de Tatsuya en un seul mouvement.

Et tira directement dans le but adverse.

Le sifflet électrique signala le but, accompagné par les acclamations des filles.

"Ce garçon se débrouille plutôt bien."

Alors qu'il se tenait à coté de Tatsuya, Léo fit carrément l'éloge du jeune homme.

"Oui, prévision précise de la trajectoire du ballon, et son apparence dissimule son agilité."

Tatsuya était assez surpris par les capacités du garçon, qui avaient surpassées ses attentes. Ils étaient dans la même classe depuis trois mois, aussi aujourd'hui n'était pas leur première fois ensemble en EPS. Tatsuya avait crû précédemment qu'il avait ,à un certain niveau, une connaissance précise des capacités du garçon, et la passe avait été ajustée correctement, mais les actions de cette personne — Mikihiko Yoshida montraient qu'il était plus que ce qu'il paraissait.

Il n'y avait que 25 élèves par classe, aussi était il naturel que tout le monde connaisse les noms des autres.

De même, Tatsuya savait autre chose que son nom.

Mikihiko Yoshida venait d'une prestigieuse famille renommée pour son Ancienne Magie — il était un descendant direct de la Famille Yoshida.

La Famille Yoshida possédait une Ancienne Magie hors système appelée "Magie des Esprits", et la rumeur voulait qu'ils s’entraînaient avec des méthodes traditionnelles, cela était sûrement centré sur un entraînement intense. Ainsi, les membres de cette famille posséderaient naturellement de bonnes capacités physiques.

La cause de la surprise de Tatsuya était que l'apparence de Mikihiko ne le laissait nullement présager.

Des spécialistes qui excellent dans l'art de dissimuler leur pouvoir, apparaissaient toujours dans les endroits les plus inattendus.....

Gardant cela en tête, Tatsuya envoya la balle en spirale vers le but adverse.

Avec Tatsuya et compagnie dominant le terrain, leur équipe eut facilement une victoire écrasante.

Tatsuya retourna hors du terrain et s’assied à coté de Léo et près de Mikihiko Yoshida.

"Bien joué."

Avant que Tatsuya ne parle, sa respiration était de nouveau calme.

"Vous deux aussi."

Tout comme Tatsuya, la respiration de Mikihiko Yoshida était régulière.

Tatsuya n'avait pas formé de liens sociaux avec tous ses camarades de classe, probablement car sa personnalité le poussait à ignorer les autres. Cela causait à une partie de ses camarades de le sentir comme étant quelqu'un de froid. Ainsi seule la moitié de la classe était disposée à lui parler. Toutefois, Mikihiko était encore plus extrême dans sa réserve et, s'incluant lui même, Tatsuya ne l'avait jamais vu parler avec une autre personne de la classe. Le premier jour, il avait été le premier à quitter la salle par lui même. Même Léo, qui avait un cercle social bien plus étendu que Tatsuya, ne saluait jusqu'à maintenant Mikihiko qu'en inclinant la tête.

"Yoshida, tu es plutôt bon. Ne le prends pas mal, mais je suis assez

surpris."

La performance de Mikihiko semblait avoir rappelé quelque chose à Léo, aussi avait il demandé à Tatsuya — Tatsuya avait salué le premier, mais c'était Léo qui avait suggéré — qu'ils s'assoient près de Mikihiko.

Le ton chaleureux de Léo poussait les gens à penser qu'il était trop familier.

"Mikihiko."

Cela dit, il semblait que Mikihiko apprécia l'attitude directe de Léo.

"Je n'aime pas qu'on m'appelle par mon nom de famille, alors utilises mon prénom."

Dans le passé, il n'avait jamais répondu d'une manière aussi amicale.

"D'accord, alors appelles moi Léo."

Même si le nombre de ce genre d'activités de classe entière avait diminué, il était tout de même étrange d'avoir ce genre de conversation après trois mois après le début d'année scolaire.

La vie scolaire de Mikihiko était juste ainsi, causé par l'imposant mur qu'il avait érigé entre lui même et le reste de la classe.

Peut être était ce dû à l'euphorie après un exercice fatigant, le poussant à avoir une meilleure humeur, mais c'était là, une excellente opportunité.

"Puis je moi aussi t'appeler Mikihiko ? Bien sur, tu peux m'appeler Tatsuya."

"Bien, Tatsuya."

Mikihiko répondit avec aise, mais son expression semblait légèrement embarrassante.

"En fait, je voulais te parler depuis longtemps."

Les impressions sont des choses curieuses. Parfois, les premières impressions sont définitives peu importe ce que tu fais, mais d'autres fois, une simple phrase est suffisante pour radicalement changer l'impression que vous aviez jusqu'à ce moment-là.

Dans l'esprit de Tatsuya, l'impression de Mikihiko passa d' "antisocial"

à "timide".

"Quelle coïncidence, comme ça, on est deux."

Ils étaient entrés en tant qu'élèves du Cours 2 — remplaçants, mais furent capable de prendre la 1ère et 3ème place aux examens parmi les élèves de première année. Même si l'établissement insistait sur les compétences techniques, il était impossible pour eux deux de ne pas s'intéresser à l'autre.

".....D'une certaine manière, j'ai l'impression d'être exclu."

Le fait est que, primo, ignorant le fait que Mikihiko ne les connaissait pas bien, Léo ne pensait pas que Tatsuya était intéressé par ce camarade de classe sur la base seule de ses résultats écrits. Secundo, Léo avait remarqué qu'il y avait une atmosphère étrange entre eux deux, menant par là même à ce sentiment d'exclusion.

Toutefois, les paroles suivantes de Mikihiko dissipèrent rapidement cela.

"Léo, tu t'inquiètes trop, je voulais aussi te parler."

La raison n'était pas une conversation réelle, mais parce que Mikihiko était une personne bienveillante, comme le montrait ses paroles réconfortantes.

"Peu importe comment tu le vois, une personne suffisamment patiente pour faire face à Erika est sans doute une perle rare."

Ce fut au tour de Mikihiko de s'exprimer émotionnellement.

".....C'est plutôt difficile à avaler."

Le visage de Léo s'allongea au fur et à mesure qu'il entendit Mikihiko parler de lui et Erika comme d'un couple, ce qui poussa aussi bien Tatsuya que Mikihiko à éclater de rire. Toutefois, Tatsuya avait quelques réserves à propos du commentaires de Mikihiko alors qu'il se remémorait la raison pour laquelle Mikihiko avait, en premier lieu, attiré son attention.

"Ainsi Mikihiko, tu connais Erika depuis longtemps ?"

Cette question fut posée sans arrière pensée. Ainsi, quand Tatsuya vit Mikihiko s'exclamer "Uh oh !", il changea rapidement de sujet.

"J'imagine, on doit être amis d'enfance ?"

"Erika, pourquoi sembles tu le demander ?"

Étant donné que la personne en question était présente, les inquiétudes de Tatsuya s'évanouirent rapidement.

"On s'est rencontré quand on avait dix ans, donc, techniquement nous ne sommes pas amis d'enfance. De plus, non seulement il m'a bien évitée en classe, mais nous ne nous sommes pas vus hors campus depuis six mois."

La réponse d'Erika à la question de Mizuki la plongea brusquement dans la conversation de Tatsuya & Compagnie.

"Hé, Tatsuya-kun, qu'en penses tu ?"

Après quoi, Erika demanda soudainement l'opinion de Tatsuya à sa manière comme je le souhaites habituelle.

"Cela devrait compter comme amis d'enfance, n'est ce pas ?"

A un certain niveau, étant donné la manière dont Tatsuya répondit sans aucune hésitation, on pouvait lui reprocher la même chose.

Pourtant, la raison pour laquelle Léo et Mikihiko furent incapables de parler, ne fut qu'ils étaient sans voix suite à l'irruption sans gêne d'Erika. Leurs yeux écarquillés le montraient clairement.

In 2095, la mode et la bienséance exigeaient que toute trace de peau exposée en public soit couverte. Vu que l'école était considéré comme un lieu public, même si on était en été, les filles devaient porter veste et sous leurs jupes, une paire de collants sans couleurs, et impénétrables ou des caleçons longs.

Cela dit, ces règles ne s’appliquaient pas aux tenues de sport, ainsi les clubs de sport ne recevaient ni sanction ni critiques pour révéler leurs mains ou leurs jambes avec cette tenue, et cela s’appliquait aussi aux cours d'EPS. Par exemple, Tatsuya et les autres garçons portaient des shorts qui n'allaient pas jusqu'aux genoux alors que Mizuki portait un assez long pantalon de gym, ce qui était la tenue standard pour l'éducation physique.

D'un autre coté, Erika était vêtu.....

Ses deux jambes étaient complètement découvertes.

A partir des cuisse, tout était révélé sous la chaleur accablante de l'été.

Son bas n'avait en fait aucune longueur. Et pour finir, le T-shirt qu'elle portait par dessus, donnait l'impression qu'elle ne portait que ses sous vêtements.

Ses jambes fines ne montraient aucune graisse, son teint un peu rouge, causé par le soleil, ne servait qu'à l'embellir et accentuer son teint blanc original.

"Erika, pourquoi es tu habillée comme ça !"

Finalement, Mikihiko reprit ses esprits alors que sa voix explosait, bien que l'inévitable rougissement de son visage n'avait rien à voir avec les rayons UV. Il y avait beaucoup d'opportunités de voir une pair de jambe hors du lycée, ainsi, ce n'est pas comme si Mikihiko était complètement coincé, mais l'air "coquet" des jambes d'Erika avait suffisamment d'impact pour causer à tous les garçons de la classe de perdre leur calme.

"Quoi, c'est une tenue traditionnelle de sport pour les filles."

Il était évident au premier regard dans quel état était l'état d'esprit de Mikihiko, excepté Erika qui n'y avait jamais fait allusion alors qu'elle penchait la tête et répondait l'air surpris. Elle ne portait certainement pas cette tenue pour embêter son ami d'enfance.

"Ça, c'est traditionnel ?"

Cela dit, l'homme du moment pensait que tout était fait pour l'ennuyer, alors que le visage de Mikihiko semblait de plus en plus rouge de colère.

"Vraiment ? Je pensais que c'était un design unique pour un pantalon de gym."

Tatsuya intervint pour changer la direction de la discussions et empêcher Erika de rajouter sans le vouloir plus d'huile sur le feu.

"Ce n'est pas un pantalon de gym."

Dire cela fut équivalent à changer de cible de Mikihiko à Tatsuya, mais un regard au visage stoïque de Tatsuya, était suffisant pour dire qu'il surpassait de loin Mikihiko en patience et calme. Non, il serait plus approprié de dire que Tatsuya n'était pas assez sensible pour tomber face aux provocations d'Erika.

"Mais, ce n'est pas non plus un bermuda de tennis, non ?"

"Même si je ne suis pas intéressé par porter juste un short et pas la jupe. Ce sont des bloomers."

"Bloomers ? Je dirais plutôt une culotte, n'était ce pas utiliser pour faire le nettoyage ?"

"Ne sois pas stupide ! N'ai je pas dit que c'était une tenue de sport pour les filles !"

Il était difficile à dire si Tatsuya jouait intentionnellement l'ignorant, mais cela mettait Erika dans une position inconfortable.

"En parlant de shorts, est cela ?"

Finalement, Léo y prit part.

"Durant l'époque de l'Immoralité, quand les lycéennes recevaient de l'argent d'hommes d'age mur pour....."

.....Néanmoins, que ce soit pour Léo ou Erika, c'était sans nul doute pour lui le mauvais moment pour intervenir.

"La ferme, Idiot !"

Rouge écarlate, Erika explosa d'indignation. Au même moment, elle leva une jambe et frappa furieusement Léo au tibia.

Léo se pencha et agrippa sa jambe de douleur, alors qu'Erika se déplaçait sur un pied.

Cet échange verbale et physique semblait s'être fini sur une double défaite.

Comparé à plus tôt — Tatsuya et compagnie — ce jeu allait et venait.

Les deux cotés affirmaient prendre l'avantage l'un après l'autre.

Les deux équipes étaient de niveau égales, mais étaient restreintes par le niveau des lycéens.

Il y avait peu de filles comme spectateurs, vu qu'elle avaient leurs propres leçons et ne pouvaient les abandonner pour un long moment. De plus, les cours d'EPS différaient des cours de capacités techniques car dans les premiers, la plupart avaient des professeurs de sports disponibles (la différence des nombres de professeurs entre les cours

de magie et les autres s'illustrait parfaitement par ça).

"Je n'y crois pas. Ta cervelle ne serait elle remplie que de bêtise du genre ?"

Maintenant, seules Erika et Mizuki étaient présentes pour regarder le match des garçons.

"La ferme, c'est ce que disent les livres."

Au regard méprisant d'Erika, Léo réalisa qu'il avait été trop loin, aussi répondit il de manière désinvolte sans oser la regarder dans les yeux.

Ne pas frapper quelqu'un déjà à terre était l'un des principes d'Erika.

"Je n'ai aucune idée du genre de bouquin que tu lis..... En parlant de ça, Miki me regardait de la même manière. Est ce si troublant ?"

Peut être était elle simplement distraite.

"Erika..... Je pense, moi aussi, que tu ferais mieux de porter des pantalons de gym."

Compte tenu du ton réticent de Mizuki, elle appartenait aux gens qui "pensent mais n'osent pas le dire".

"C'est vrai..... Ce n'est pas aussi souple que ce que j'imaginais, et aussi un petit peu trop serré."

A cela, deux garçons se retournèrent rapidement, mais heureusement, Erika ne s'aperçut de rien.

"Hum. Quand j'ai sorti ça de l'armoire, je pensais que personne ne l'avait jamais porté et que ça m' allait parfaitement, mais je pense que je vais suivre le conseil de Mizuki et reprendre mes pantalons de gym."

"Oui, je pense que c'est pour le mieux."

Ce n'était pas exactement ce que Mizuki voulait, mais elle acquiesça avec intensité.

"Hum ?"

Mizuki avait pris un demi temps de retard, mais d'un certain point de vue, cela convenait bien à sa personnalité.

"Par ailleurs, Erika, qui est 'Miki' ?"

Lui tenant toujours le dos, les épaules de Mikihiko se tendirent, mais

Erika ne vit rien tout en le pointant du doigt (Même si elle avait remarqué, aurait elle opté pour autre chose ? Cela reste un mystère).

"Parce qu'il s'appelle Mikihiko, donc, ça donne Miki."

Mikihiko se retourna presque au même moment où Erika répondit.

"Que veux tu dire par 'donc' ?"

Il semblait que Mikihiko fut incapable d'ignorer son "surnom".

"Pourquoi le demandes tu ? Miki est le diminutif de Mikihiko."

"Je l'ai souvent répété ! Ne m'appelles pas avec un nom aussi efféminé !"

Malheureusement, Erika semblait habituée à cette réprimande compte tenu la façon dont celle ci n'eut aucun effet.

"Eh ? Ainsi tu préfères Hiko-kun ?"

Le visage d'Erika semblait dire "Pourquoi ne l'as tu pas dit plus tôt ?" alors qu'elle se retournait vers lui.

"Pourquoi cela arrive t'il ? Ne décides pas de raccourcir le nom des gens sans leur avis !"

"Ainsi, tu veux que je t'appelle Mikihiko ? Eh~..... Mikihiko Mikihiko Mikihiko Mikihiko..... C'est trop long, je ne veux pas t'appeler comme ça."

Mikihiko ne fut pas le seul à penser que c'était ridicule.

"N'es tu pas embarrassé par cela ?"

"Que veux tu dire par embarrassé ?"

Erika fut soudainement plié en deux.

"Mikihiko....."

Erika ramena son visage tout près de Mikihiko et murmura doucement son nom d'une voix mélodieuse.

Sa fureur fut refroidie par d'autre émotions, Mikihiko en resta sans voix.

".....Qui c'est ça ?"

Pas seulement la personne en question, même Léo chancela. Plutôt impressionnante puissance de destruction.

"Eh bien ? N'est ce pas embarrassant ?"

Les cheveux d'Erika semblait croître à un rythme accéléré ; elle était entrée au lycée avec des cheveux coupés courts, mais après trois mois, ils avaient déjà dépassés l'épaule. Elle repoussa ses cheveux derrière l'oreille et révéla un sourire enchanté.

Peu importe l'obstination de Mikihiko, même lui ne fut pas en mesure de calmer son cœur vacillant.

"Dans..... Dans ce cas....."

"Ah, il bégaie....."

Mizuki chuchota doucement. Sa personnalité était sûrement la plus impitoyable.

Heureusement, Mikihiko n'était pas en capacité d'entendre les paroles de Mizuki.

"Appelles moi donc par mon nom de famille !"

"Eh ? Je pensais que Miki détestait être appelé comme ça ?"

Ce commentaire fut trop précipité.

Le visage de Mikihiko se raidit.

Son visage rouge et son attitude était la même que plus tôt.

De plus, sa colère cachait aussi beaucoup d'embarras.

Toutefois, Tatsuya sentit que Mikihiko cachait ses émotions qui se rapprochaient de la haine.

"Erika, n'est il pas temps pour toi d'y aller ?"

Au risque d'être pris pour un fouineur, Tatsuya s'interposa au sein de la conversation et dirigea l'attention d'Erika vers lui même. Tatsuya montra discrètement le professeur (d'EPS) qui les regardait de travers.

"Mince ! Tatsuya-kun, à plus tard !"

"Eh ? Erika, attends moi !"

Erika partit en hâte suivie de près par Mizuki.

Tatsuya agita la main tout en ayant un sourire ironique accroché au visage.

Après un silence pesant.....

"Désolé de vous avoir impliqués."

Mikihiko parla doucement tout en inclinant la tête. Il semblait avoir de profonds problèmes avec sa famille, et bien qu'il soit conscient de leurs existences, mais malgré tout, il perdait parfois le contrôle de lui même.

"Peut être mon intervention était inutile."

Les paroles de Tatsuya n'étaient pas seulement destinées à rassurer, mais c'était là ses pensées profondes. De ce qui en avait transpiré, c'était évident que ce n'était pas une première, et les actions d'Erika avait intentionnellement provoquées Mikihiko. Permettant à la frustration et aux autres émotions de s'évacuer pour prévenir d'éventuelles cicatrices émotionnelles.

"Non, ce serait difficilement le cas, surtout que nous sommes encore en cours."

Toutefois, la raison dont parlait Mikihiko, était la même raison pour laquelle Tatsuya était intervenu. Toute action avait un moment et un endroit pour se régler, surtout que Tatsuya ne voulait pas s'enliser comme Mikihiko..... Ou peut être dans le problème constant entre Erika et Mikihiko.

"Cela dit, Tatsuya est d'un calme."

Mikihiko changea brusquement de sujet, sûrement parce qu'il détecta que Tatsuya semblait "intéressé à ne pas s'impliquer".

"Que veux tu dire ?"

Compte tenu, jusqu'à ce moment, de la conversation, Tatsuya comprit que Mikihiko avait une certaine attitude en classe, mais qu'il était en fait très sensibles aux humeurs et émotions des autres. C'était juste que ce changement était trop brusque, au point que cela ne semblait suivre aucune logique.

"Que veux tu dire que....."

Mikihiko n'avait pas bien exprimé ses pensées avant de parler, aussi fut il incapable de s'expliquer convenablement.

"Eh bien..... je veux dire, tu as vu la tenue que portait Erika, et pourtant tu n'as pas sourcillé."

Même ainsi, son exemple était encore trop vague, ou plutôt incomplet.

".....J'ai été quelque peu surpris par sa tenue, mais ce était insuffisant pour déclencher une telle réaction ? Je pensais que c'était plus traditionnel qu'un maillot de bain ou qu'une tenue de gymnaste."

Les vraies pensées de Tatsuya étaient plutôt "de quoi parle t'il donc", mais considérant qu'aujourd'hui était la première fois qu'ils s'étaient présentés à Mikihiko, et due à la nature conflictuelle de ses pensées, Tatsuya opta pour une réponse plus neutre. Toute autre personne entendant cela, aurait remarqué que Tatsuya prenait la tangente.

"Tu t'en fais pas parce que c'est moins provoquant qu'un maillot de bain ou qu'une tenue de gymnaste ? D'une certaine manière, cela fait mal du mauvais coté."

D'un point de vue jeune, la critique de Léo était exacte. Même si ce fut Mikihiko qui lança la question, même Léo offrit son opinion caustique.

".....Tatsuya, tu t'es déjà trop flétri. Tu ne possèdes déjà plus la marque de la jeunesse.."

Sûrement dû au fait qu'ils aient tous deux souffert des moqueries d'Erika, tous deux avaient sélectionné Tatsuya comme nouvelle cible.

"Tatsuya n'est pas flétri, c'est juste qu'il a placé la barre trop haut. Avec une petite sœur aussi magnifique, la majorité des filles normales sont incapables d'attirer son attention."

"Hum..... Tu as probablement raison, compte tenu qu'on parle de Miyuki-san. Quand je l'ai vu pour la première fois lors de la cérémonie de rentrée, je ne l'ai pas juste regardé bêtement, j’étais honnêtement choqué. Je ne croyais pas qu'une personne aussi magnifique existait dans le monde."

"Ho ? Tatsuya, il a flashé sur ta mignonne petite sœur. Comme frère, qu'as tu à dire ?"

Léo eut un sourire malicieux alors qu'il interrogeait Tatsuya, mais celui qui répondit ne fut pas Tatsuya qui était cerné, mais Mikihiko, qui venait d'être trahi par son camarade.

"Ne sois pas comme ça, tu anticipes trop de choses là dedans. Je parlais juste de ça et je ne comptes pas aller plus loin, juste y penser

suffit à me faire trembler. Si je cherchais une petite amie, j’espérerais trouver quelqu'un de plus relaxant et facile à vivre."

Léo acquiesça en accord aux paroles de Mikihiko — acquiesça tellement profondément que ses actions semblaient intentionnellement exagérées.

"Tu as raison. Et pas seulement pour ça, avoir une fille bro-con est déjà difficile, mais pour passer l'invincible frère qui est sis-con..... La barre est juste trop haute."

"Léo..... On dirait que nous avons besoin d'une sérieuse conversation."

"Euh, non. Cela serait trop terrifiant. Je ne veux pas mettre ma vie en jeu pour quelque chose comme ça."

Le regard lourd de Tatsuya poussa Léo à trembler de manière exagérée.

N'importe qui aurait pu dire que Léo jouait la comédie, mais une partie des tremblements semblait réelle, une chose qui attisa l'intérêt de Mikihiko alors qu'il regardait les deux garçons.

Léo était faiblement plus grand que Tatsuya.

Il était aussi plus large et plus fort.

Au vu de ses performances dans leur équipe, leur agilité semblait égale.

La rumeur voulait que Tatsuya ait étudié avec un professeur reconnu en Ninjutsu, mais était il aussi capable en combat ?

Assez pour surmonter son déficit en Pouvoir Magique ?

Mikihiko ignorait pourquoi il avait suscité l'intérêt de Tatsuya, mais il savait depuis le début pourquoi, lui, s'intéressait à Tatsuya.

Mikihiko était intéressé dans les capacités derrière les prouesses de Tatsuya. Il était un nouvel élève et du cours 2 et qui faisait face aux élèves du cours 1 et triompher. Mikihiko voulait savoir comment Tatsuya avait obtenu ce pouvoir.

Pour Mikihiko, il voulait sincèrement trouver un moyen de combler l'écart en Pouvoir Magique.

Un remplacement pour la "pouvoir" qu'il avait perdu, un an plus tôt.

Jusqu'à ce moment là, Mikihiko était considéré comme un prodige, l'étoile de demain de la famille Yoshida, sur lequel elle fondait ses espoirs et ses rêves.

Au sein des différentes magies de la famille Yoshida qui se passaient de génération en génération, l'une des techniques de base dans la "Magie d'Invocation", une capacité que Mikihiko possédait à un tel point qu'il avait éclipsé son frère aîné qui avait hérité des responsabilités de chef.

Du début de son adolescence jusqu'à cet accident, Mikihiko s'était toujours vu comme quelqu'un de fort, et fut de fait incapable d'accepter sa disgrâce.

Il savais qu'il était trop anxieux, il avait aussi réalisé qu'il s'était refermé sur lui même. Ce sentiment d'impuissance sapait tout, le faisant tomber sans cesse plus bas.

L'année passée, il avait étudié profondément l'ésotérique.

Il s'était aussi mis aux arts martiaux qu'il n'avait jusqu'alors que peu apprécié.

Malgré ça, il était encore incapable de combler ce sentiment de vide.

Lorsqu'il apprit que Tatsuya qui était aussi un élève avec des capacités techniques inférieures et une capacité magique imparfaite, mais fut capable de battre des senpai qui avait plus de pouvoir magique que lui, il était impossible que Mikihiko ne soit pas intéressé par Tatsuya.

Une technique de combat à mains nues capable de surmonter une déficience en Pouvoir Magique ?

Mikihiko voulait que Tatsuya et Léo s'affrontent pour qu'il puisse s'en rendre compte de ses propres yeux.

Inconsciemment, il voulait aussi défier Tatsuya sur un point.

"Mikihiko ?"

"Ah ?"

C'était sûrement la raison.

Se faisant héler soudainement, Mikihiko prit une posture de combat.

Voyant sa réaction, aussi bien Tatsuya que Léo se mirent à sourire.

"S'il te plaît, y a t'il besoin pour une réaction aussi agressive ?"

"qu'y a t'il ? J'étais sur le point de dire que tu étais soudainement devenu silencieux, puis tu prends cette posture ?"

"Ah, non..... Désolé, ce n'est rien."

Honteux, Mikihiko ne put que s'excuser. A l'origine, il n'était pas adepte aux interactions sociales.

L'atmosphère amicale rare devint tendue et, même si Tatsuya et Léo tentèrent tous deux de détendre l'atmosphère, la bonne humeur ne revint pas même après la fin du cours.

◊ ◊ ◊

Pour les lycées rattachés aux Universités de Magie, la Compétition des Neuf Lycées a lieu en été alors que le Concours des Thèses a lieu en automne et étaient les deux événements majeurs de ces lycées. L'extravagance de la Compétition des Neuf Lycées éclipsait largement le Concours des Thèses, devenant ainsi le plus grand événement du calendrier.

La Compétition des Neuf Lycées était une compétition internes basée sur les compétitions athlétiques magiques (Outre les compétitions magiques, il y avait des événements de jeux d'énigmes,de table, les défis de labyrinthe chronométrés, et même des chasses au trésor). Le Première Lycée avait également des clubs pour chaque occasion, mais puisque la concurrence la plus acharnée se trouvait au sein de la Compétition des Neuf Lycées, les participants était non seulement sélectionnés par les clubs, mais tout personne jugée capable de gagner était choisi comme participant.

Grâce à quoi, les préparations de la Compétition des Neuf Lycées passait du Groupe de Gestion des Clubs au Conseil des Étudiants.

"Malgré tout, ce n'est pas comme si nous pouvions ignorer les participants des clubs. Juste décider qui fera partie de la liste définitive des participants sera un véritable casse-tête....."

Même Mayumi, qui, habituellement, hypnotisait les gens avec son sourire radieux, semblait, aujourd'hui,languir.

Les doigts tenant les baguettes pour manger son bento, semblaient aussi sans énergie.

Récemment, Miyuki était elle aussi très occupé, mais la Présidente ne devait non seulement s'occuper des taches du conseil, mais aussi d'autres taches fastidieuses qui n'étaient pas terminé, compte tenu de l’absence de son humeur joyeuse habituelle.

"heureusement, grâce à l'assistance efficace de Juumonji dans ce dossier, nous avons finalement déterminé la liste des participants."

Le déjeuner d'aujourd'hui n'était animé que par Mayumi qui se plaignait sans cesse de ceci ou de cela, mais on aurait dit que le rideau allait bientôt tomber.

L'estomac de Tatsuya était suffisamment résistant pour ne pas être touché par ces futilités, mais déjeuner avec ça comme fond aurait un effet désastreux sur les nerfs, aussi Tatsuya poussa t'il un petit soupir de soulagement quand Mayumi arrêta de ronchonner.

"Toutefois, le problème concernant les ingénieurs dépasse largement celui des participants..."

.....Ou pas.

"Nous n'avons toujours pas le bon compte ?"

Mayumi acquiesça, impuissante, à la question de Mari.

"La majorité de nos étudiants comptent devenir Magiciens, ainsi leurs talents gravitent ils autour des capacités techniques... Nos 3ème années sont particulièrement inquiétants, avec le nombre de personnes au département des Artificiers Magiques qui a atteint un des plus bas niveau. Au sein des 2ème année, nous avons des personnes compétentes comme A-chan et Isori-kun, mais le nombre est toujours insuffisant....."

"Isori, eh..... Ce gars est spécialisé en géométrie, aussi est il meilleur en théorie qu'en maintenance, n'est ce pas ?"

"Nous avons dépassé le point de se soucier de ce genre de choses."

Il était extrêmement rare de voir Mayumi et Mari soupirer de concert, ce qui en disait long à quel point les choses étaient sérieuses — bien qu'user de cela pour évaluer la situation était plutôt mauvais.

"Même si Juumonji et moi donnons un coup de main, il y a une limite à ce que l'on peut faire...."

"Ne faites vous pas aussi partie de nos meilleurs participants ? Si vous êtes trop occupés à vous inquiéter pour les CADs des autres, cela affectera vos épreuves, ce n'est pas quelque chose avec lequel plaisanter."

"...Si Mari pouvait s'occuper de son propre CAD, cela allégerait beaucoup les choses."

"......Oui, nous sommes en difficulté."

Peut être en raison de l'épuisement ou d'une autre raison, Mari évita le regard sérieux de Mayumi et regarda ailleurs.

L'atmosphère dans la salle du Conseil des Étudiants était dangereuse pour l'état psychologique des membres présents.

Pour retourner en classe — ou plutôt évacuer les lieux, Tatsuya lança un regard prononcé à Miyuki, puis décida de trouver un bon prétexte pour sortir.

"Rin-chan, pourrais tu faire partie des ingénieurs ?"

Même avec le chaos envahissant les préparations pour la Compétition des Neuf Lycées, Suzune était encore présente dans la salle du Conseil des Étudiants durant le déjeuner et Mayumi ne manquait jamais de l'inviter.

"C'est impossible. Mes capacités ne feraient que nuire Nakajou et les autres."

Mais fut repoussé froidement comme à chaque fois.

Avec les excuses présentes de la dépressive Mayumi, ce fut la meilleure opportunité pour battre en retraite.

Tatsuya lança un regard prononcé à Miyuki, puis se leva—

"Eh bien..... Pourquoi ne pas demander à Shiba-kun ?"

—Juste au moment où Tatsuya se levait, son échappatoire fut cassée, sans pitié, par l'intervention inattendue d'Azusa.

"Ho ?"

Mayumi, qui, au début, avait posé la tête sur la table, la releva

subitement et laissa échapper un son inintelligible.

Azusa, qui, jusqu'à ce moment, avait passé son irritation sur le large écran en face d'elle — sûrement plongée en plein dans son travail scolaire — soupira doucement alors qu'elle appuyait sur le bouton pour éteindre et leva la tête.

"Je sais que Shiba-kun s'occupe de la maintenance du CAD de Miyuki-chan. Je l'ai déjà vu et ses spécifications rivalisent avec ceux de techniciens de première classe d'entreprise."

Mayumi bondit hors de sa chaise.

Son visage était plein de vitalité, comme si la scène précédente n'avait jamais eu lieu.

"Un angle mort.....!"

Le regard que Mayumi dirigea vers Tatsuya, était celui d'un aigle ayant trouvé une nouvelle proie.

Cela fut suffisant pour que Tatsuya pour abandonner à moitié.

"Tu as raison..... J'ai du mal à croire de ne pas y avoir pensé, j'ai été négligente."

Maintenant que Mari avait rejoint la mêlée, il se trouvait sans ressource.

"A propos, il s'occupe aussi des CADs de réserve du Comité..... Mais vu qu'il est le seul à les utiliser, cela m'était sorti de la tête."

Toute résistance était futile. Tatsuya était près à 90% à abandonner, mais se rendre sans combattre, allait à l'encontre de ses principes, aussi Tatsuya tenta t'il une petite — et sûrement vaine — résistance.

"J'ai entendu plutôt le chef parler de l'importance des Techniciens, mais c'est sans précédent d'avoir un 1ère année, technicien, n'est ce pas ?"

"Tout doit commencer à un moment ou à un autre."

"Les Traditions sont faites pour être dépassées."

Mayumi et Mari ripostèrent, furieusement, sur le champ.

"Vous êtes toutes deux des 'progressistes', mais les autres participants ne verront ils pas cela d'un mauvais œil ? Je suis un 1ère année, du

cours 2, cela laissera une mauvaise impression sur pas mal de gens."

C'était là, un peu, d'auto-dépréciation, mais cela ne signifiait pas que c'était faux.

"Pour la maintenance des CAD, la confiance mutuelle entre le Magicien et l'Artificier est extrêmement important. La performance maximale d'un CAD est dictée par l'état mental de l'utilisateur. Utiliser quelqu'un comme moi pour maintenir les CADs conduira à un retour de flammes sur les participants, je ne pense pas être le bon candidat...."

La logique de Tatsuya avait aussi ses mérites, poussant Mayumi et Mari à échanger un regard.

Toutefois, quoiqu'en dise Tatsuya, elles avaient déjà vu à travers sa façade.

Afin de donner le coup final qui ne voulait pas prendre la perche tendue et les rejoindre, elles confirmèrent visuellement l'ordre d'attaque (persuasion verbale).

A ce moment, elles reçurent un renfort inattendu.

"J’espérais qu'Onii-sama pourrait s'occuper de mon CAD lors de la Compétition... Est ce que ça ira ?"

Tatsuya se figea à la trahison inattendue de Miyuki.

Dans une pièce de Shakespeare, l'humeur de Tatsuya serait sans nul doute celle de César alors qu'il se faisait assassiner: "Et toi, Miyuki (Brutus).....!"

"Exactement ! Avoir près de soi, un technicien compétent et digne de confiance est absolument capital pour les participants. Bien dit, Miyuki-chan !"

Mayumi suivit immédiatement sur le front.

"Oui, si Onii-sama rejoint l’Équipe de Techniciens, pas seulement moi, mais aussi Mitsui-san et Kitayama-san pourrons avoir l'esprit tranquille."

C'était la première fois que Tatsuya entendait dire que ces deux là entraient comme participantes à la Division des Nouveaux Arrivants, mais il les considérait comme les candidates attendues.

—Ce fut aussi au fait qu'il essayait d'échapper à la réalité.

De toute évidence, l'issue de la bataille avait été décidée.

La réunion de préparation qui se tiendrait à après les cours au Centre de Gestion des Clubs déciderait si Tatsuya rejoindrait officiellement ou pas l'équipe.

Il pouvait y avoir un rayon de lumière, mais Tatsuya avait abandonné depuis longtemps.

L'intervention de Miyuki avait conduit Tatsuya dans une impasse. Dans l'hypothèse où la confirmation était en danger, il aurait en fait à travailler dur pour s'assurer d'être nominé et accepté — cela allait dans le sens de ses suppositions.

Peu importe, la situation était tout à fait déprimante.

Dans des moments comme ça, les gens avaient tendance à se retrancher dans des domaines dans lesquels ils excellaient.

Même s'il avait une petite chance d'être nominé, il prit quand même le temps de réfléchir sur ce qu'il pourrait faire, quels domaines où il excellait, et réexamina son propre sens de valeur, pour restaurer sa balance interne comme moyen de compensation.

Sûrement du à l'accumulation considérable du stress, il était rare pour Tatsuya de tomber dans ce genre de piège de mouvement auto-compensatoire.

Les deux tiers de la pause déjeuner était passé. Miyuki était plongée dans une pile de documents et de travail scolaire, alors que Tatsuya, qui était, à ce moment là, inactif, sortit le CAD argenté de l'étui accroché à l'épaule et commença à examiner les modules dans la cartouche, les boutons pour changer de Séquences d'Activation, et autres parties mobiles.

"Ah, tu as aussi amené le Silver Horn aujourd'hui."

Jusqu'à maintenant, Azusa était pleinement concentré sur son travail scolaire, mais ses perçants aperçurent les mouvements de Tatsuya alors qu'elle se penchait en avant.

Tatsuya déplaça lentement son regard, non pas vers Mayumi ou Mari, mais vers Suzune.

Suzune interpréta avec précision la requête silencieuse de Tatsuya alors qu'elle fronça un peu les sourcils ainsi que son haussement d'épaules pour exprimer son sentiment d'impuissance. En d'autres mots, Azusa avait perdu tout intérêt pour son travail scolaire.

"Oui, j'ai acheté un nouvel étui, et je voulais me familiariser avec le plus rapidement possible."

Est ce cela qui signifiait "être furieux après avoir reçu trois le matin, et heureux en en recevant quatre le soir" ? Tatsuya était en train mentalement, de considérer cela, mais aussi une pensée très impolie alors qu'il retourna son regard vers Azusa et répondit gentiment (Pour compléter, Tatsuya pensait que cela qualifiait comme jeu rapide et lâche).

Les yeux d'Azusa brillaient alors qu'elle s'approchait de lui. Il semblait qu'elle ne soit pas seulement intéresser par le CAD lui même, mais aussi par l'équipement supplémentaire.

"Eh, est ce que je peux y jeter un coup d’œil ?"

Honnêtement parlant, généralement, Azusa évitait — ou plutôt était terrifiée par Tatsuya. Précisément, à cause de cette impression, Tatsuya voulait sourire ironiquement. Néanmoins, compte tenu la façon dont sautait partout comme un petit animal, incapable de se calmer, il ne devrait pas la traiter trop durement.

Cela était peut être une forme de popularité — pensa Tatsuya alors qu'il enlevait la veste qu'il portait même sous la chaleur de l'été — avec, bien sur, des systèmes de refroidissement — et prit de l'épaule l'étui avant de le tendre à Azusa.

"Ouahow~ C'est un modèle original des Silver séries.

Un tel équilibre attirerait d'incroyables lignes quand on dégaine et quand on tire.

Quelque chose qui ne répond pas seulement aux capacités techniques élevées, mais aussi un design qui prend en compte les capacités de l'utilisateur.

Ah, Je respecte votre génie, Silver-sama....."

Après avoir pris l'étui, Azusa était assez heureuse pour presque en arriver à frotter son visage contre l'étui.

Tatsuya eut des difficultés à maintenir son impassibilité.

Après qu'Azusa ait méticuleusement examiné chaque centimètre de l'étui — ou peut être qu'elle était finalement satisfaite— elle le rendit à Tatsuya avec un grand sourire sur le visage.

"Shiba-kun, es tu aussi un fan des Silver séries ? Si on se base seulement sur le prix et les spécifications, le Maximilian Speed Shooter, Russ Type-F, ou même les séries Sagittarius développées par FLT (Four Leaves Technology) sont meilleures, mais la customisation individuelle des Silver séries est si excellente que personne ne se préoccupe du prix !"

Tatsuya se souvint que Mari avait, une fois, décrit Azusa comme une "otaku des CAD".

A ce moment là, il avait considéré que c'était une exagération, mais après avoir vu son comportement aujourd'hui, il se prit à penser que ce surnom n'était qu'inévitable.

Du point de vue de Tatsuya, si le contraste entre le prix et les performances — efficacité, en d'autres mots, était trop bas, alors la satisfaction diminuerait. Même si c'était le cas, les vraies performances pouvaient différer par rapport à la documentation officielle. Autrement dit, les performances qualitatives qui ne pouvaient être traduites en format chiffré, était aussi très importantes. Si l'on pouvait être *satisfait* sans ce genre d'analyse, Tatsuya considérait que ce ne serait rien d'autre que de la fidélité à une marque.

Cela dit, c'était son propre système de valeur, ainsi, si elle se disait satisfaite, il n'avait aucune raison de refroidir ses ardeurs.

"Non, j'ai en fait quelques liens, ainsi, je peux acheter des Silver Séries à moindre coût grâce à mon travail en tant que bêta testeur."

Au moment où Tatsuya répondit cela, les épaules de Miyuki tremblèrent visiblement un peu alors qu'elle faisait face, de l'autre coté, à un terminal, aussi, personne ne s'en aperçut il

"Eh~! Vraiment ?"

Le mot "envie" était apposé sur tout le visage d'Azusa.

Cette fois, même Tatsuya exprima un spasme.

".....La prochaine fois que je teste un nouveau modèle, voudriez vous que je vous en obtienne un ?"

"Eh ?

Vraiment ?

Comme, vrai de vrai ?

Merci !"

Il était impossible pour lui de répondre.

Après que Tatsuya fut finalement capable d'acquiescer, Azusa prit sa main gauche vide avec ses deux mains, et la secoua de bas en haut.

".....A-chan, calmes toi un peu."

Mayumi ne pouvait plus se résoudre à seulement regarder, arrêtant temporairement son travail sur la pile de documents, pour parler à Azusa.

Azusa s'arrêta soudainement.

Trépidante, elle regarda ses mains.

Ses mains tenaient fermement celle de Tatsuya. Azusa le sentit non seulement au toucher, mais le confirma aussi visuellement.

Elle leva lentement la tête vers Tatsuya, et puis esquiva rapidement le regard impassible de Tatsuya avant de regarder de nouveau ses mains.

Azusa lâcha et sauta en arrière comme si ses mains avait saisi du feu.

"Désolé, désolé, vraiment.....!"

"Le visage rouge" serait insuffisant pour décrire l'état actuel d'Azusa, vu que son visage était rouge jusqu'à la pointe des oreilles. Elle s'inclina plusieurs fois vers Tatsuya pour s'excuser.

Tatsuya commençait à s'inquiéter qu'Azusa puisse continuer à s'incliner jusqu'à ce qu'elle soit prise de vertige, et demanda silencieusement de l'aide à Mayumi.

"....A-chan, tu peux t'arrêter maintenant. Tatsuya-kun sembles dépassé."

Mayumi pensait probablement à la même chose que Tatsuya, aussi n'en rajouta t'elle pas (sans raison) et se concentra à rassurer Azusa.

Azusa inspira profondément comme on lui avait demandé et finit enfin par se calmer.

Mayumi laissa échapper un soupir d'impuissance avant de retourner à son travail.

Azusa eut un sourire embarrassé vers Tatsuya et se tourna solennellement.

"Alors, Shiba-kun, se pourrait il que tu ait rencontré Taurus Silver en personne ?"

Elle posa la question de cette manière.

—Cela va sans dire qu'elle faisait ça pour cacher son embarras.

Malheureusement, cette question était l'une des pires posées à Tatsuya.

"......Non, je ne suis pas entièrement sur."

Une sonnerie électrique sonna près du mur.

Le poste de travail qu'utilisait Miyuki activa, par accident, l'alarme.

Tout le monde fait une faute de frappe de temps à autre, mais il était extrêmement rare pour Miyuki d'activer, par erreur, l'alarme.

Mayumi et Suzune eurent une expression surprise "Eh ?" alors qu'elles regardaient Miyuki qui faisait face au mur, mais Miyuki continua comme si rien ne s'était passé, aussi toutes deux n'en rajoutèrent pas et retournèrent à leurs piles de documents.

"......Miyuki-chan a fait une erreur, plutôt étrange."

"ça arrive de temps en temps."

En comparaison, la réponse de Tatsuya fut exagérée, mais Azusa ne le remarqua pas alors qu'elle retournait à leur sujet de conversation le plus récent.

"Peu import à quel point il se cache, les gens qui travaillent dans le même laboratoire doivent le connaître, non ? A moins qu'il ait tout inventé tout seul ?"

"......Non, je suis certain que ce serait impossible."

"Je le pense aussi. Ah oui, Shiba-kun, pourrais tu utiliser tes 'liens' au sein du labo pour avoir plus d'informations ?"

"......Non, les liens dont je parlais, ne sont pas de cet ordre..... Et aussi,

FLT garde la plupart des secrets de l'entreprise pour eux, aussi, je pense qu'il serait difficile d'obtenir quoique ce soit des techniciens du laboratoire."

"Ah~oui. C'est vrai....."

".....Je suis sur que senpai le sait déjà, mais user d'une Magie de type Hors Système de Manipulation pour découvrir des secrets est un crime."

"Ah ? Nah..... Impossible que je pense à ça..... à ce genre de choses....."

Tatsuya regarda Azusa avec les yeux mi-clos, causant au corps déjà petit d'Azusa de se replier davantage sur lui même.

".....C'est bon, aussi longtemps que senpai comprend cela, je voulais juste vous le rappeler."

"Ne..... t'inquiètes pas pour ça, bien sur que je suis au courant de cela, Ah, ha ha ha....."

Voyant qu'Azusa n'usa pas d'une métaphore et qu'elle ait des sueurs froides, Tatsuya en resta là.

"En passant, pourquoi Nakajou-senpai est elle si intéressée par la réelle identité de Taurus Silver ?"

Le CAD qu'utilisait Azusa n'était pas de la marque FLT. Même si elle n'était visiblement pas une utilisatrice des Silver Séries, pourquoi tenait elle tant à connaître l'identité du développeur ?

Pour Tatsuya, cette question était parfaitement naturelle.

"Ah ?"

D'après l'expression d'Azusa, elle était abasourdie que Tatsuya pose cette question.

"Bien sur que ça m'intéresse, Tatsuya-kun, je veux dire, toi, ça ne suscite pas ton intérêt ?

Il s'agit de Taurus Silver.

La première personne au monde à avoir développer le système du 'Loop Cast', il a augmenter la vitesse des Séquences d'Activation des CADs spécialisés de vingt pour cent, il a aussi réduit la variabilité des modèles sans fil de 3 pour cent à moins d'un pour cent. Taurus Silver

est juste impressionnant.

Et aussi, plutôt que de garder ses secrets pour son profit personnel, il a publié ouvertement ses découvertes pour l'amélioration de la communauté magique dans son ensemble, ce qui rend Taurus Silver encore plus incroyable.

Il est appelé l'ingénieur de génie qui avance la technologie du software des CAD de dix ans en une seule année, alors je pense que quiconque qui compte devenir Artificier Magique ne peut que s'intéresser à lui."

Cette pression autoritaire, était presque équivalente à une réprimande, à Tatsuya qui fut forcé de reculer. Il fut pris complètement au dépourvu par à quel point le monde avait mis "Taurus Silver" sur in pied d'estale.

"Excusez mon ignorance. En tant qu'utilisateur, je suis satisfait des Silver séries, j'ignorais que cela avait autant de critiques élogieuses....."

"Ah..... Cela prend tout son sens, Shiba-kun est un testeur, alors pour toi, les Silver séries ne sont pas si rares....Raison pour laquelle nous avons différents points de vue."

Azusa ne comprit pas complètement, mais se permit d'être convaincue.

"Hé, hé, Shiba-kun, laisses moi te demander, Taurus Silver, à quoi penses tu qu'il ressemble ?"

Un appel purement curieux.

Attendant de changer de sujet, Tatsuya répondit en essayant de gagner du temps.

"Eh bien..... J'imagine à quel point ce serait choquant qu'il soit en fait un adolescent comme nous."

De nouveau, une sonnerie électrique leur parvint du mur.

Miyuki continua de s'asseoir dans une posture, le dos bien droit, tout en continuant de travailler.

—Mais elle ne permit à personne de voir l'expression de son visage.

"En parlant de ça, A-chan."

"Oui, Présidente, qu'y a t'il?"

Finalement, Mayumi tendit une main secourable vers Tatsuya, qui était presque incapable de tenir face à Azusa. Cela peut paraître biaisé, mais c'était la première fois que Tatsuya sentit que Mayumi était une personne de confiance. En tout cas, la position de Mayumi indiquait qu'elle voulait qu'Azusa retourne rapidement à son travail du Conseil des Étudiants.

"N'étais tu pas supposée finir ton travail scolaire avant la fin du déjeuner ?"

Néanmoins, même si elle avait tendu une main secourable vers Tatsuya, c'était sans nul doute le son du glas pour Azusa.... Cette description pouvait être une hyperbole, mais c'est ainsi que le ressentit Azusa. Le fait qu'elle soit absorbée à parler de Taurus Silver, était probablement un moyen d'échapper à la réalité.

"Présidente~"

Vu la façon avec laquelle Azusa implora, en larmes, l'aide de Mayumi, elle était condamnée.

"Ne sois pas si embarrassée."

Mayumi sourit ironiquement et tourna son regard du compte de l'inventaire complet à Azusa.

"je peux t'aider un peu, alors quel est ton assignement ?"

Mari dirigea, vers Mayumi, un regard signifiant "Tu la dorlotes trop", qui l'ignora promptement — ou plutôt prétendit ne pas l'avoir vu alors qu'elle souriait à Azusa.

"Désolée.... C'est un rapport sur les 'Trois Grands Puzzles des Magies Systématiques d'Aggravation'....."

A cela, Suzune, Mari, et Tatsuya tournèrent leurs regards vers la sombre Azusa.

"......Que-Quoi ?"

Comme un cerf devant les phares d'une voiture, Azusa se contracta de terreur. Ses yeux larmoyants et ses mouvements terrifiés donnaient l'impression que tout le monde s'en prenait à elle, auquel Tatsuya

détourna le regard, et Suzune suivant son exemple.

Seule Mari continua de regarder Azusa.

"Ho ho....."

Mari regarda Azusa avec un profond intérêt, bien qu'elle soit plus concentrée sur l'écran du terminal que tenait les mains d'Azusa.

"Je me demandais ce qui déroutait l'un du top 5 des meilleurs élèves de son année, Nakajou et cela s'avère être cela."

"N'est ce pas le sujet qu'il pose chaque année ?"

Après que Mari ait pris la parole, Mayumi continua avec une expression d'incompréhension.

"A-chan, quel est le sujet de cette année ?"

Vu que les sujets étaient réguliers, il y en avait déjà suffisamment pour que l'établissement soit incapable de trouver de nouvelles idées. Ce n'était pas juste des devoirs, c'était aussi l'un des sujets de dissertation régulier pour les examens d'entrée à l'Université. Une rapide recherche révélerait une longue liste de réponses habituelles à ce sujet.

"Le sujet du devoir implique de résoudre le bouchon des 'Trois Grands Puzzles'. Je comprends les deux premiers, mais je suis incapable d'expliquer la raison pour laquelle la généralisation de la Magie de Vol n'a pas été développé avec succès...."

Entendant cela, Suzune acquiesça, avec une expression signifiant "Je comprends".

"En d'autres mots, Azusa-kun est incapable d'accepter les concepts proposés actuellement."

"Exactement !"

Avec Suzune exprimant ses pensées pour elle, Azusa opina vigoureusement du chef.

"La fondation d'une magie qui défierait la gravité et permettrait au corps de flotter dans les airs a déjà été pourvue par les Quatre Grands Systèmes et les Huit Majeures Types de Magie Moderne et est déjà entré en phase pratique."

"Oui, bien que les blessures causées par une chute libre reste l'un des dangers majeurs pour les Magiciens."

Azusa passa son regard vers Mayumi, qui appuyait son argumentation.

"Les Magiciens adeptes en Magie de Vitesse et d'Aggravation sont déjà capables de sauter de plusieurs dizaines de mètres et le record mondial est tenu par un Magicien qui a bondi à plus de cents mètres en un seul essai. Le record pour l'atterrissage est encore plus grand, avec des Magiciens qui peuvent sauter de 2000 mètres avec succès sans aucun équipement."

"Si c'est le cas, pourquoi la Magie de Vol.... mouvements libres dans les airs, est il toujours insaisissable..... non ?"

"Pour être précis, la généralisation de la Magie de Vol que tout le monde pourrait utiliser reste hors d'atteinte. Il y a une poignée d'utilisateurs d'Anciennes Magies qui peuvent voler librement dans les airs."

Suzune rajouta quelques détails aux explications de Mayumi.

Entendant cela, Azusa secoua la tête, bien que ce soit une action involontaire.

"Ce type de magie s'approche des capacités uniques des Magiciens NS. Vu que l'on ne peut pas le partager, ce ne peut pas être appelé une technique.

Théoriquement, tu peux utiliser les Magies de Vitesse et d'Aggravation pour contrer les effets de la gravité et t'élever dans le ciel. En réalité, les magies de hauts sauts et de flottement dans les airs, ont déjà été développés, alors, pourquoi ne peut on pas voler ....."

"Des volumes de références de plus haut niveau ne pourraient ils pas contenir la réponse ?"

Mayumi interrogea visuellement Azusa pour savoir pourquoi elle ne pouvait accepter la réponse du livre.

"Les Séquences Magiques doivent inclure un point de fin, ainsi les effets de réécriture existent jusqu'à ce que les conditions de fin soient remplies. Quand une cible est sous l'effet de la magie, si tu veux causer un différent type de magie se manifester sur la cible, tu dois user d'une magie qui a une capacité d'interférence des phénomènes supérieure.

Quand on utilise la magie de Vol, chaque fois que tu dois ajuster la

vitesse ou le poids, tu ne fais pas que réécrire la magie originelle, tu as aussi besoin d'une capacité d'interférence supérieure. Un seul Magicien est seulement capable de séparer la capacité de réécriture des phénomène en dix segments, ainsi il ou elle peut seulement ajuster les statuts en volant que dix fois avant d'atteindre leur limite.

.....C'est l'obstacle reconnu publiquement quand à l'absence de solution pratique à la Magie de Vol, non ?"

Mayumi ne rumina pas longtemps avant d'acquiescer en accord aux longues explications d' Azusa.

"Alors, quoi, A-chan, tu as fait tes recherches. Tu as organisé tous tes arguments. Alors, quel est le problème ?"

"D'après cette façon de penser, le problème réside dans le fait qu'on a besoin qu'une nouvelle magie réécrive l'actuelle magie, exacte ? Si c'est le cas, je pense que ce serait plus simple d'annuler l'actuelle magie plutôt que d'activer une autre magie."

A ce moment là, Azusa avait complètement perdue son expression en larmes, et avançait maintenant à un rythme furieux. Suzune, calmement, posa à Azusa la question suivante:

"La théorie se tient, mais d'un point de vue pratique, comment annulerais tu la magie active ?"

"Pourquoi ne pas insérer une condition de fin durant la design de la Séquence Magique ? Autrement dit, en entrant de manière préventive, une petite Séquence Magique dans la Séquence Magique active, ce qui pourrait changer la condition de fin de la magie."

Azusa était plongée dans sa théorie, alors qu'au contraire, Suzune déclara calmement un argument contraire.

"Malheureusement, les Séquences Magiques sont incapables d'affecter une autre Séquence Magique. Les Séquences Magiques peuvent seulement être utiliser pour affecter le Corps d'Information, même si deux types de magie tentent d'influencer le même Corps d'Information, seule celle avec la plus grande force d'interférence se manifestera, car les Séquences Magiques ne possèdent pas une relation fort contre faible.

La Contre Magie qui peut dissoudre les Séquences Magiques existent

effectivement, mais c'est une magie de haut niveau qui influence directement le Corps d'Information. Cela conviendrait à un stade expérimental, mais actuellement, il n'y a aucun Magicien qui pourrait pratiquer ce niveau de Contre Magie."

"Vraiment....."

Au moment où les étudiants atteignent le second semestre de leur seconde année, les cours de Fondations de Magie évoluent en un cours d'Applications de Magie. Cette classe commençait avec les concepts entourant la "Contre Magie" — magie qui annule les autres magies — ce qu'expliquait à ce moment là, Suzune. Normalement, c'était quelque chose enseignée durant le premier semestre de 3ème année, ce qui était la raison pour laquelle Azusa n'était pas familière avec le sujet. Cela dit, entendre le terme "Contre Magie" et ne pas être perdue sans espoir, montrait que le niveau de connaissance d'Azusa était élevé.

"Néanmoins, cette théorie présente de l'intérêt."

Les émotions d'Azusa se trouvait entre le zèle et mélancolique. Suzune lui sourit d'une manière gentille et réconfortante.

"Pour annuler la magie au moment où elle se manifeste, je pense que c'est la bonne approche."

"C'est vrai. Car le besoin de réécrire la magie activée, la force nécessaire d'interférence tourne au cercle vicieux."

Suivant Suzune, Mayumi supporta aussi la théorie d'Azusa.

"Personne n'avait encore proposé cela à ce niveau, mais si une nouvelle magie peut être activée au moment où la magie active arrête d'affecter le phénomène, alors il n'y a nul besoin pour une plus grande force d'interférence.... Compte tenu que la cible vole dans les airs, le délai entre les magies doit être réduit à zéro, ainsi, si un CAD spécialisé était utilisé, alors en théorie, la magie suivante serait activée avant que la cible ne commence à tomber....."

Mayumi semblait se murmurer à elle même, puis un "Eh ?" se fit soudainement entendre alors qu'elle tournait la tête.

"Mais si c'est juste enlever les effets de la magie, quelqu'un ne l'aurait il pas déjà tenté depuis longtemps ? Enfin, c'est comme travailler avec 'Zone Interférence' après le fait."

A la question de Mayumi, Suzune tira vers le haut la fonction de recherche sur le poste de travail présent au sein de la salle du Conseil des Étudiants.

"Donnez moi une seconde..... L'année dernière, l'Angleterre a tenté une expérience importante basé sur le même concept auquel a fait allusion la Présidente. Ils voulaient utiliser 'Post Événement Zone Interférence' pour créer une solution pratique pour la Magie de Vol."

Suzune localisa rapidement les nouveaux articles de magie qui contenaient l'information qu'elle voulait.

"Et, le résultat fut ?"

La voix interrogative était un peu haut perchée — sûrement causé par l'excitation bouillonnant en elle, ce qui prouvait que Mayumi était encore lycéenne jusqu'au bout des doigts.

"Échec complet. D'après l'article, en comparaison à une situation normale où la magie est utilisée de manière répétée, cette méthode ne sert qu'à augmenter la demande de force d'interférence de manière géométrique"

".....Vraiment....."

Au rapport de Suzune qui trahit ses espoirs, Mayumi baissa la tête de déception.

"Ont ils cité une raison ?"

"Non, ce n'était pas aussi détaillé. Présidente, que pensez vous qu'il soit arrivé ?"

Quand, interrogée par Suzune, Mayumi pointa son index sur son menton et laissa échapper un "Humm !" alors qu'elle considérait la chose.

"La magie précédente devait avoir arrêter de fonctionner .... Tatsuya-kun, qu'en penses tu ?"

La raison pour laquelle Mayumi posait la question à Tatsuya, était de gagner du temps pour organiser ses pensées.

En fait, elle ne s'attendait pas à ce qu'il réponde.

"L’expérimentation anglaise fournie par Ichihara-senpai, a une erreur conceptuelle basique."

Ainsi, la réponse décisive de Tatsuya prit Mayumi complètement au dépourvu.

".....Où est l'erreur ?"

Stupéfaite, Mayumi fut à peine capable de poser la question. Ni vantard, ni fier, Tatsuya commença calmement ses explications.

"Les Séquences Magiques qui n'ont pas remplies leurs conditions de fin, vont naturellement s'estomper avec le temps, mais resteront présentes sur le Corps d'Information. Quand une nouvelle magie annule les effets de la précédente, la magie précédente semble annulée mais est en réalité que réécrite."

Mayumi, Suzune, Azusa, et même Mari ne regardaient plus que Tatsuya, alors que ce dernier semblait insensibles à la pression de leur regard. Il resta impassible et son ton resta absolument le même.

"Assumons que la magie précédente soit appelée Séquence Magique A, alors que la Séquence Magique B est utilisée pour annuler l'autre.

Avec l'activation de la Séquence Magique B, la Séquence Magique A perd sa capacité d'effet sur le phénomène. Néanmoins, même si la Séquence Magique A perd son effet, elle reste présente au sein du Corps de l'Information.

Aussi bien les Séquences Magiques A et B continuent d'agir sur la cible du Corps d'Information, c'est juste que seul les effets de B sont visibles. Comme Ichihara-senpai l'a dit, les Séquences Magiques ne peuvent affecter que le Corps d'Information et sont incapables de s'affecter l'une l'autre. Cela est vrai même sous Zone Interférence. A moins que la Séquence Magique soit elle même annulée, user de la Contre Magie donnerait le même résultat."

".....Ainsi l'expérience anglaise a utilisé des magies inutiles qui ne font pas partie de la Magie de Vol ?"

Tatsuya acquiesça à la question de Mayumi, puis continua ses explications.

"Autrement dit, chaque fois que vous ajustez votre vol, vous devez encore réécrire la Séquence Magique. Afin de maintenir le vol, les extras vont continuer de s'empiler, et bien sur, on atteindra rapidement la limite maximale pour la capacité d'interférence sur les phénomènes.

Les savants anglais ont dû se méprendre sur la nature de la Contre Magie."

Le terminal terminal que Tatsuya avait dans la poche de sa chemise, choisit ce moment pour vibrer, signalant que la première sonnerie de la fin de la pause déjeuner avait sonné.

"Miyuki, il est temps de retourner en classe."

"Oui, Onii-sama."

Miyuki, qui leur avait tourné le dos tout du long, se leva immédiatement après avoir été appelé.

Sa voix, son expression et ses mouvements étaient aussi doux et pleins de grâce que d'habitude.

Voilà pourquoi Mayumi, Suzune, Mari, et Azusa n'avaient pas remarqué.

Ne pouvaient pas avoir remarqué.

Quand Miyuki était assise devant le poste de travail, le dos droit comme un piquet, et ses doigts dansaient sur le clavier de plaisir.

◊ ◊ ◊

La réunion de préparation pour la Compétition des Neuf Lycées qui se tint au QG du Groupe de Gestion des Clubs, fut imprégnée, dès le début, d'une aura de nervosité.

Les élèves avec d'excellentes performances dans leurs épreuves, recevront des crédits spéciaux pour leurs classes. Être juste l'un des participants officiels, permet de ne pas avoir de travail scolaire, d'avoir des jours de repos et la meilleure note dans tous les tests.

Cela s'appliquait non seulement aux participants, mais aussi aux élèves sélectionnés comme ingénieurs.

Grâce au fait que le lycée se concentre sur la Compétition des Neuf Lycées, les étudiants sélectionnés comme représentants à la compétition reçoivent d'incroyables récompenses. Ainsi, était il habituel que la bataille pour les dernières places pour la sélection soient très disputées durant cette réunion.

—Si Tatsuya n'avait été qu'un spectateur, il aurait regardé les sentiments mitigés des étudiants sous une lumière de compassion. Toutefois, il était là comme candidat qui avait une cible énorme dans le dos, aussi ne put il que se retenir de soupirer désespérément pour que ce cirque cesse rapidement.

Ce n'était pas qu'il soit inintéressé par la Compétition des Neuf Lycées.

Le désir de se mesurer aux capacités d'autres Magiciens du même age était nettement différent de la soif qu'il avait expérimenté dans le laboratoire de son père, et le désir ultérieur d'améliorer concrètement le niveau des CADs, mais Tatsuya avait encore cela en lui.

Tatsuya fut "construit" pour avoir moins d'émotions qu'une personne normale, mais il était encore à l'age de l'entêtement, ainsi peu importe la valeur qui ses pairs lui attribuent, il ne pouvait pas faire comme si cela ne le touchait pas.

Néanmoins, au même moment, il dut composer avec l'orgueil, la jalousie, la vanité, le dégoût et autres émotions liées à cette réunion. Ce fut là ce qui la poussa dans la mélancolie.

Hors de ses pensées — bien sur — les sièges de la salle de conférence se remplirent au fur et à mesure. Quand le dernier siège fut occupé, Mayumi se tint sur l'estrade.

"Bien, commençons la réunion de sélection pour la compétition des Neuf Lycées."

La réunion des élèves de classes supérieurs, leaders des différents clubs participants, Membres du Conseil des Étudiants (Miyuki resta à son poste à la Salle du Conseil des Étudiants) et les membres du Groupe de Gestion des Clubs qui reçurent une notification interne qu'ils étaient de possibles candidats pour les places restantes des participants ou des ingénieurs.

Tatsuya s'assit avec d'autres candidats dans la section visiteurs, sur le coté.

Toute organisation qui avait dépassé une certaine taille, contiendrait naturellement des fanatiques qui identifieraient Tatsuya comme un outsider.

Comme attendu, peu après que la réunion ait commencé, quelqu'un demanda pourquoi un élève de 1ère année et du Cours 2 faisait là.

Cela ne signifiait pas que personne ne regardait Tatsuya avec sympathie.

Il y avait en fait un nombre surprenant d'opinions favorables.

Les élèves des classes supérieures différaient des élèves de 1ère année du fait qu'ils connaissaient qu'il était un élève particulier au sein des Cours 2, de plus qu'il était un formidable membre du Comité de Morale Publique.

Malgré cela, il y avait plus d'opposants que de supporters, souvent sous la forme d'émotions négatives plutôt que de logique objective, qui poussa la réunion dans une impasse et fit perdre un temps précieux.

"En résumé....."

Soudainement, une voix solennelle domina la salle de conférence.

La voix n'était pas particulièrement forte, mais toutes les querelles cessèrent alors que tout le monde dirigeait son attention sur la personne ayant parlé.

Katsuto Juumonji, qui était resté jusque là silencieux, jeta un regard sur toute la salle avant de commencer à parler:

"Selon moi, le problème réside dans le fait que tout le monde ne connaît pas le niveau des capacités que Shiba possèdes. Ainsi, la solution la plus efficace reviendrait à faire un test en direct."

Un silence de mort pesa sur la spacieuse salle.

Cela amènerait à un résultat simple et efficace que personne ne contesterait, mais, à cause du risque présent, personne n'osa participer à ce plan d'action.

"....C'est une bonne suggestion, mais, comment allons nous la faire ?"

"Simplement en lui faisant faire, tout de suite, une maintenance de CAD. Cela suffira"

Mari brisa le silence avec sa question, à laquelle Katsuto fournit une réponse simple.

"Permettez moi d'être le cobaye."

Les CADs, actuellement sur le marché, devait être étroitement synchronisé avec leur utilisateur respectif après la maintenance.

Même si dix Magiciens utilisaient le même modèle, il y aurait dix différentes spécifications pour ajuster leurs CADs.

Les Séquences d'Activation, fournies par le CAD, seraient directement absorbées par le domaine subconscient du Magicien.

En d'autres mots, l'état mental du Magicien était complètement sans défense contre leur propre CAD.

Les modèles récents de CAD étaient équipés avec une fonction qui améliorait le traitement de la Séquence d'Activation, mais, en même temps, rendait las choses plus faciles pour affecter l'état mental de l'utilisateur.

S'il y avait un problème durant la maintenance, non seulement l'efficacité magique diminuerait, mais d'autres effets secondaires, incluant des malaises, maux de têtes, étourdissements, des vomissements, ou même un préjudice majeur comme des hallucinations ou des cicatrices mentales. Ainsi, meilleure est la capacité du CAD, plus la maintenance doit être par quelqu'un doté d'excellentes capacités.

Pour les Magiciens, laisser volontairement leur CAD pour être entretenu par un Artificier dont les capacités était inconnues, posait un risque substantiel.

Même si c'était la suggestion de Katsuto, sa volonté d'être lui même le sujet du test montrait un courage considérable.

"Non, je suis celle qui l'a recommandé, alors c'est à moi que cela revient."

Mayumi demanda immédiatement de prendre la responsabilité, dû à son sens du devoir, mais d'un autre point de vue, cela impliquait quelque part, qu'elle ne faisait pas complètement confiance à Tatsuya, ce qui était une chose que Tatsuya lit facilement entre les lignes.

"Attendez, je vous prie de me laisser l'être."

Cela dit, le fait que Kirihara était prêt à participer, causa un choc considérable à Tatsuya — le courage affiché par lui était réconfortant.

L'installation de maintenance de l'établissement ouverte à la faculté et

aux élèves, se trouvait dans le Bâtiment des Capacités Techniques.

Néanmoins, cette fois là, ils n'usèrent pas des appareils prédéfinies du Bâtiment des Capacités Techniques, mais apportèrent l'appareil ambulant utilisé lors de la Compétition des Neuf Lycées à la salle de conférence pour réaliser le test.

Le CAD en question était aussi qualifié pour les règles de la Compétition.

Voyant comment les préparations avant la compétition se passaient si bien, aussi bien au niveau du matériel que des procédures, l'allongement du retard dans le processus de sélection constituait un problème flagrant.

Tatsuya s'assit devant l'appareil de maintenance avec de l'autre coté, Kirihara — mais tous deux ne pouvaient se voir. Les membres du Conseil des Étudiants et d'autres président de clubs se réunirent autour de Kirihara.

La première étape consistait à activer l'appareil, un processus que de multiples regards malicieux étaient concentrés sur les mouvements des mains de Tatsuya ; mais Tatsuya était depuis longtemps habitué à travailler avec du matériel bien plus complexe que celui du lycée, aussi était ce une procédure qu'il aurait pu faire sans difficulté dans son sommeil. Il compléta facilement les préparations et adopta une allure impassible pour faire face aux regards d'horreurs des autres.

"Ma tâche consiste à copier les schématiques du CAD de Kirihara-senpai dans le CAD de compétition, réaliser tous les ajustements nécessaires sans toucher aux Séquence d'Activation, est ce exact ?"

Tatsuya vérifia de nouveau le contenu du test.

"Oui, désolé de t'embêter."

Tatsuya vit Mayumi hocher légèrement la tête, non pas hocher mais trembler.

"......Qu'y a t'il ?"

"Je ne conseillerais pas de copier directement les schématiques sur un modèle de CAD différent..... mais je n'y peux rien, mettons la priorité sur la sécurité."

"?"

Mayumi ne fut pas la seule abasourdie. "Copier les schématiques du CAD" était une tâche simple, qui se produisait lorsque les utilisateurs changeaient de machines, aussi beaucoup de monde se demanda ce qui posait problème à Tatsuya.

Néanmoins, l'Équipe des Techniciens, centrée autour d'Azusa, savait exactement pourquoi Tatsuya posait cette question. Les membres de l'équipe acquiescèrent légèrement en accord ou sourirent alors qu'ils se préparaient à profiter de la performance de Tatsuya.

Tatsuya ne rajouta rien d'autre et se concentra sur la maintenance.

Tout d'abord, il connecta le CAD de Kirihara à l'appareil de maintenance.

Le processus de réplication des schématiques était semi-automatique, aussi ne pouvait on voir là, une différence de capacité.

Néanmoins, Tatsuya ne passa pas la réplication dans l'appareil de calcul du CAD de compétition, mais la stocka dans la zone de traitement de l'appareil de maintenance, une action qui causa à plusieurs personnes de froncer les sourcils.

Ensuite, il mesura la nature d'oscillation des Psions personnels de Kirihara.

Suivant les instructions de Tatsuya, Kirihara mit le casque sur la tête, puis plaça ses deux mains sur la table d'examen.

C'était aussi une procédure normale ; si c'était un appareil automatique de maintenance, cette étape demanderait de connecter le CAD puis lire les vagues de Psions et le processus de finirait de lui même.

Généralement, les étudiants qui utilisent les appareils du lycée pour la maintenance personnelle adopterais cette procédure précise.

D'un autre coté, ne pas se fier à de la maintenance automatique mais faire de petits ajustements sur l'OS des CAD montrait la véritable force des ingénieurs.

"Merci senpai, vous pouvez l'enlever maintenant."

Tatsuya indiqua que les mesures étaient terminées et Kirihara retira le casque.

Normalement, l'étape suivant consisterait à connecter le CAD

nécessitant d'être modifié, puis faire les ajustements allant au delà des recommandations automatiques. Cela nécessitait un CAD préréglé pour être préparé à l'avance, puis copier les données à destination du CAD.

Juste au moment où tout le monde, dans l'audience, pensait que Tatsuya avait foiré la procédure.

Comme pour le prouver, Tatsuya regardait l'écran sans bouger un muscle.

Toutefois, il n'avait pas l'air de quelqu'un qui était perdu, sans espoir, à cause d'un raté.

Son regard était terriblement concentré sans montrer aucun sentiment d'instabilité.

Incapable de contenir sa curiosité, Azusa passa la tête près de Tatsuya pour regarder le moniteur.

"Uh ?"

Sa voix laissa échapper un son étrange qui était absolument incompatible avec sa jeune image.

Tatsuya fut insensible à cette interruption.

Mayumi et Mari n'osèrent pas demander ce qui se passait, mais elles s'approchèrent d'Azusa pour regarder l'écran — et furent difficilement capable de contenir leurs suffocations.

L'écran ne montrait pas les mesures et graphes attendus, mais était rempli par des caractères défilant à grande vitesse.

Toutes deux ne furent capable que de voir quelques chiffres ici et là, mais leurs yeux furent incapable de suivre le rythme de défilement.

Les chiffres s'arrêtèrent de manière abrupte.

Quelques dizaines de secondes s'écoulèrent, ce qui faisait moins de cinq minutes depuis qu'il avait commencé à fixer l'écran.

Après que les chaînes de caractères cessassent de clignoter, Tatsuya brancha immédiatement le CAD de compétition et commença doucement à frapper sur le clavier.

Plusieurs fenêtres commencèrent à s'ouvrir et à se fermer.

Seule Azusa remarqua que l'une des fenêtres ouvertes était le document original avec les résultats des mesures, et qu'une autre était le document original qui contenait la réplication des schématiques du CAD dans l'appareil de maintenance.

Très peu de gens reconnurent à quel point la procédure, se déroulant sous leurs yeux, était avancée, vu que la majorité de l'audience fut tenue en haleine par la vitesse inattendue à laquelle Tatsuya tapait sur le clavier. Malgré ça, Azusa pensa que ce qui était vraiment étonnant était la technique qu'avait Tatsuya quand il se mit à lire directement la nature des oscillations de Psions à partir du document original.

Avec cette méthode, l'ingénieur pouvait parfaitement allouer les ressources sur les paramètres au dispositif de calcul pour adapter au mieux les résultats des mesures reflétées par l'appareil de maintenance. C'était un processus parfaitement manuelle, complètement indépendant du processus automatique du système.

Devant les yeux d'Azusa, les paramètres stockés temporairement dans l'aire de travail furent réécrit de manière régulière en un éclair.

Le document original resta sur le principal écran, mais Azusa fut à peine capable de voir quelques modifications.

Cela allait vraiment dans le sens de la sécurité. Il adhérait vraiment à la condition "la sécurité est la première priorité".

Ainsi, cela diminuerait les risques de l'utilisateur contre une maintenance automatique, et fournirait des Séquences d'Activation qui dépasseraient en efficacité la maintenance automatique.

Il n'y avait absolument pas besoin de test pratique.

Les capacités de cet élève de 1ère année dépassait de loin qui que ce soit d'autre au sein de l’Équipe des Techniciens.

Azusa décidé qu'elle ferait entrer Tatsuya dans l'équipe quelles que soient les objections.

Sous la condition "sans modifier la Séquence d'Activation", la maintenance arriva rapidement à sa fin.

Il fut si rapide que l'audience n'avait pas été assez divertie.

La partie suivante était le test en direct.

Sans être remarqué par les autres, l'expression de Kirihara était légèrement nerveuse et tendue, mais resta dans les limites attendues.

En réalité, il n'y avait ni incident, ni y avait il rien qui pourrait être appelé un accident.

Le CAD modifié par Tatsuya était "exactement le même" que le CAD chéri de Kirihara.

"Kirihara, comment te sens tu ?"

"Aucun problème, c'est comme si j'utilisais mon propre CAD, il n'y a aucun sentiment d'incompatibilité."

Kirihara répondit sur le champ à la question de Katsuto.

Tout le monde fut clair que ce n'était pas une évaluation basée sur l'amitié. Compte tenu du passé entre Kirihara et Tatsuya — Kirihara fut maîtrisé de force par Tatsuya durant la performance du club de kenjutsu lors de la semaine de recrutement en avril — les gens qui connaissaient les précisions, savaient qu'il était impossible que Kirihara protège Tatsuya. Néanmoins, même excluant ce "malentendu", tout le monde qui avait vu l'invocation de magie, savait que le CAD fonctionnait parfaitement bien.

Cela dit, "en mesure d'invoquer en douceur la magie" était un critère assez faible et il était difficile de voir plus de résultats.

".....On dirait qu'il a les bases fondamentales, mais c'est insuffisant pour le qualifier en tant que représentant du lycée."

"Le temps passé est plutôt moyen, rien de spécial."

"Il n'a pas suivi toutes les procédures, mais il doit y avoir une raison derrière cela....."

Sans surprise, les participants de 2nde année furent les premiers à réagir négativement à ce résultat apparemment normal.

Cela ne fut pas seulement dû à la nomination sans précédent de Tatsuya, mais aussi car il avait été choisi spécifiquement pas la Présidente, tout le monde, inconsciemment, attendait de lui de les divertir avec des techniques impressionnantes, ainsi, plus hautes sont les attentes, plus forte est la déception.

"Je soutiens fermement l'entrée de Shiba-kun dans l'équipe !"

Abandonnant son expression craintive habituelle, Azusa contra furieusement.

"Ce qu'il vient juste de nous montrer, est une technique qui dépasse de loin, en tant que lycéens, nos rêves les plus fous. Le simple fait qu'il n'ait pas besoin d'utiliser la maintenance automatique, et est capable de la faire entièrement manuellement, est déjà un exploit que je suis incapable de réaliser."

".....Même si sa technique est impressionnante, mais à quoi ça sert si le résultat est aussi banal.....?"

"Il paraît banal, mais le contenu est entièrement différent ! Être en mesure de se conformer parfaitement au paramètres de sécurité, sans perdre en efficacité est un accomplissement incroyable !"

"Nakajou, calmes toi un peu..... Plutôt que de rester conformes aux paramètres de sécurité, ne serait ce pas mieux de prendre quelques chances pour augmenter la taux d'efficacité ?"

"C'est..... parce qu'ils veulent soudainement tester....."

Débattre n'était pas un de ses points forts, aussi sa vigueur diminua t'elle rapidement.

Alors qu'Azusa se débattait, un étudiant masculin leva la main pour être reconnu, ce qui lui porta l'attention de tout la salle.

"Le modèle personnel de Kirihara offre des performances supérieures aux modèles de compétition, mais malgré cette différence, l'utilisateur a été incapable de détecter une différence, aussi je pense que cette technique mérites des éloges."

"Eh ? .....Hattori-kun ?"

Celui qui leur vint au secours à l'improviste, fut Hattori.

"Présidente, je soutiens, moi aussi, l'entrée de Shiba dans l'Équipe des Techniciens."

"Hanzou-kun ?"

Mayumi fut complètement incapable de masquer sa surprise.

Même face à une réaction, semble t'il, négative, de sa chère Présidente et excluant ses pensées personnelles, Hattori continua courageusement (de l'extérieur) et continua sur sa lancée.

"La Compétition des Neuf Lycées est un événement qui affecte la réputation de notre établissement, aussi devons nous envoyer les candidats les meilleurs et les plus forts, sans mettre trop l'accent sur qui ils sont. Le boulot de l'ingénieur est de soutenir les participants de telles manières que ces derniers n'aient qu'à se concentrer sur leurs propres épreuves. Comme Nakajou l'a souligné, pour Kirihara de dire 'Il n'y a aucun sentiment d'incompatibilité', je dois admettre que c'est un travail admirablement bien fait. Avec notre manque cruel d'ingénieurs, ce n'est pas le moment de se lamenter 'c'est un élève de 1ère année' ou 'c'est sans précédent'."

Les paroles d'Hattori étaient remplies de mots acérés, mais il défendit, du fond du cœur, et vigoureusement sa position.

Toutefois, le simple fait que Hattori se range du coté de Tatsuya était suffisamment important pour faire basculer les choses.

"Je pense aussi l'opinion d'Hattori a du mérite.

Le talent dont a fait preuve Shiba est plus que suffisant pour qu'il soit qualifié pour être un de nos représentant.

Je supporte également le fait que Shiba rejoigne l’Équipe des Techniciens."

Avec le silence de l'opposition et la déclaration publique de soutien de Katsuto, la nomination de Tatsuya était certaine.

Chapitre 2

Après que le frère et la sœur eurent partagé ensemble leur diner habituel, le téléphone choisit ce moment précis pour se mettre à sonner.

À ce propos, comme tout le monde le sait, les téléphones modernes étaient presque tous équipés de [Webcams], un détail que les journalistes de troisième zone ne manquent jamais de déprécier, les appelant [Télé-écrans] plutôt que [Téléphones], entre autre sujet ayant tout aussi peu de valeur. Même avec cette fonction de projection menée à bien, ils sont toujours appelés [Téléphones].

--- Retournons au sujet ---

Miyuki était, à ce moment-là, dans la cuisine en train de nettoyer.

Elle n'était pas inflexible quand au fait de faire la vaisselle elle-même puisqu'elle pouvait juste la confier au HAR, mais leur foyer n'était pas équipé d'un 3H (Humanoid Home Helper ou, plus simplement [Robot Ménager]) qui venait juste d'être mis sur le marché pour la consommation de masse. Tous les deux s'étaient mis d'accord à l'unanimité quant au fait qu'avoir une paire de bras robots descendant du plafond était plus embêtant qu'autre chose, et qu'ils feraient donc mieux de nettoyer eux-mêmes.

--- Miyuki avait dit que leur condition physique allait rapidement diminuer s'ils se montraient trop paresseux pour ne même pas faire cela.

--- Retournons au sujet, une fois de plus ---

Pour faire simple, Tatsuya était allé décrocher le téléphone, bien qu'il ne le fît que rarement – c'était ainsi que cela fonctionnait.

"Cela faisait longtemps… Est-ce que vous aviez l'intention de faire cela ?"

"… Non, je n'ai aucune idée de ce dont tu parles… Cela faisait longtemps, Spécial Lieutenant."

Sur l'écran se trouvait un visage familier arborant une expression surprise.

"Approximativement deux mois se sont écoulés depuis que nous avons parlé pour la dernière fois, mais… Si vous utilisez ce titre, je suppose qu'il s'agit d'une transmission cryptée ? Je trouve cela difficile à croire que vous soyez autorisé, à chaque fois, à mettre sur écoute une ligne privée."

"Ce n'est pas si simple, Spécial Lieutenant. Comparée aux standards d'un ménage ordinaire, la sécurité autour de votre maison semble un peu trop serrée."

"Récemment, il y a eu beaucoup plus de pirates informatiques actifs, et les serveurs de la maison contiennent des informations sensibles."

"Pas étonnant. Nous nous sommes presque fait prendre de notre côté."

"Vous l'avez mérité. Tant que vous ne fouillez pas trop profondément, le système de défense ne s'activera pas."

"Je pense que cela sert d'excellent avertissement pour mon tout nouveau standard."

Sur l'écran, le visage qui avait été baptisé en cuir épais par une exposition prolongée à la lumière du soleil et la poudre à canon révéla un sourire espiègle.

En voyant ce sourire, Tatsuya pensa que cet homme n'avait pas l'air d'avoir vieilli d'un jour sur les trois dernières années.

En se basant sur son rang et son département, il s'occupait d'une myriade de détails quotidiennement, mais il n'avait jamais laissé échapper une trace d'épuisement… Alors que ces pensées se bousculaient les unes après les autres dans son esprit, Tatsuya se souvint soudain que celui se tenant de l'autre bout de la ligne – Escadron 101, Commandant du Bataillon Indépendant Équipé en Magie, le Commandant Kazama Harunobu – n'aimait pas perdre inutilement du temps en papotage.

"Major, de quoi souhaitiez-vous parler aujourd'hui ?"

"C'est vrai. Arrêtons là la bavardage et parlons affaires."

"Je vous en prie, allez y."

"Aujourd'hui, nous avons achevé les modifications sur le [Third Eye]. Nous avons amélioré en prenant des composants des derniers modèles et mis à jour le software. J'aimerais que tu le testes."

101 était prononcé [Un-Zéro-Un] plutôt que [Cent un].

C’était essentiellement un détachement expérimental, basé sur la magie, qui se trouvait séparé de la chaîne de commandement habituelle. Le Bataillon Indépendant Équipé en Magie était aussi responsable du développement de l’équipement de pointe.

Comparée à la classification militaire standard, l’autorisation de sécurité de ce détachement était de cinq à six niveaux plus élevée. Par conséquence, un lycéen normal n’avait rien à faire à interagir avec une telle division au point qu’il ou elle en ignorait complètement l’existence.

À cause de certains événements classifiés, Tatsuya était en fait un membre officiel de la division de Kazama.

"Compris. Je me présenterai demain à la première heure."

[… Attends, ce n’est pas important au point que tu doives manquer un jour d’école.]

"Non, j’ai l’intention de rendre visite au labo le weekend prochain pour tester un nouveau dispositif de calcul."

[Bien que je ne sois pas en position de dire cela… Mais depuis que tu es entré au lycée, tu as mené une vie absolument tout sauf lycéenne.]

"Je n’aime pas votre impression, mais il n’y a rien que je puisse faire à ce propos."

[C’est vrai… Peu importe à quel point tu deviens débordé, nous ne pouvons rien y faire. Dans ce cas, rendez-vous à l’ancien lieu demain matin. Je suis désolé de ne pas pouvoir être là, mais je contacterai Sanada en avance.]

"Je comprends."

Tatsuya fit un signe d’acceptation alors que Kazama répétait cette action sur l’écran.

Cette salutation allait complètement à l’encontre des règles, mais puisque Tatsuya était un irrégulier, les normes étaient plus détendues.

[Le sujet suivant, Officier Spécial. Des rumeurs disent que tu rejoins la Compétition des Neufs Lycées cet été ?]

"… Correct."

Tatsuya hésita pendant une fraction de secondes, mais, étant données les circonstances, le fait qu'il n'ait hésité que pendant si peu de temps était plutôt un exploit.

Moins de trois heures s'étaient écoulées depuis qu'il avait été confirmé comme membre de l'Équipe d'Ingénieurs.

Sachant que demander était inutile, Tatsuya réfréna sa curiosité et se retint de demander comment l'information avait été obtenue.

[L'arène est dans le secteur sud-est des Terrains d'Exercices de Fuji, alors ce n'est qu'une simple formalité… Tatsuya, reste sur tes gardes.]

La façon de parler ordinaire de Kazama était déjà brusque, mais celle d'aujourd'hui semblait l'être plus encore.

Il ne se référait pas à Tatsuya par son rang, son surnom, ou son pseudonyme, mais par son nom, ce qui signifiait qu'il avertissait Tatsuya en tant que vieil ami plutôt que comme un officier supérieur. D'après les informations interceptées par le réseau d'espionnage de l'armée, il n'avertissait pas les flics ou le grand public, mais un lycéen sans niveau social. C'était extrêmement étrange.

Tatsuya concentra toute son attention alors qu'il continuait à écouter.

[Il y a des situations suspectes entourant la zone avec des signes d'étrangers en situation irrégulière dans le secteur.]

"Est-ce que quelqu'un a infiltré les terrains militaires ?"

[Lamentablement, c'est le cas. Nous avons aussi plusieurs témoins qui déclarent qu'ils ont vu des membres est-asiatiques d'un syndicat du crime international dans la zone, ce qui ne s'est pas produit à cette époque l'année dernière. D'après le timing, ils ont probablement planifiés quelque chose pour la Compétition des Neufs Lycées.]

C'est seulement une compétition lycéenne… Tatsuya était sur le point de dire cela à voix haute avant de changer de manière de penser.

Même s'ils étaient des lycéens, l'élite des jeunes Magiciens du pays était sur le point de concourir les uns contre les autres.

S'il y avait une attaque terroriste majeure avec utilisation d'explosifs pendant la cérémonie des récompenses, cela aurait un sérieux impact sur le personnel talentueux du pays.

"Vous avez mentionné un syndicat du crime international ?"

Ce n'était pas une organisation comme Blanche (qui prétendait être une organisation politique anti-magie) que Tatsuya avait rencontré en avril. Si c'était un syndicat criminel, ils ne devraient avoir aucun intérêt à causer des dommages. Pourtant, le terrorisme était une toute autre histoire. Kazama était un soldat, alors il devrait n'avoir aucune expérience pour s'occuper de syndicats du crime internationaux.

Comment a-t-il découvert leur identité ?

[J'ai demandé à Mibu de me prêter main fort. Je crois que tu l'as rencontré.]

"Le père de l'élève de Seconde Année au Premier Lycée, Sayaka Mibu?"

[Exactement. Après avoir quitté l'armée, Mibu s'est transféré aux Affaires Internes (l'Agence de Supervision des Données). Il est actuellement chef des affaires étrangères, et plus particulièrement, des syndicats du crime internationaux.]

"… Je suis surpris."

Tatsuya ne se contentait pas de dire cela. Il était honnêtement surpris.

Tatsuya était abasourdi par le fait que le Commandant ait révélé l'identité de sa source au téléphone aussi facilement ; l'Agence de Supervision des Données restait généralement neutre avec l'armée, alors les deux branches n'étaient pas particulièrement amies, pourtant, le Commandant avait simplement demandé de l'aide d'une manière claire, ce qui avait aussi impressionné Tatsuya. Cependant, ce qui le surprenait le plus était que la fille d'un expert en espionnage international était devenue la complice d'une organisation terroriste affiliée avec des pays étrangers, et que le père, qui était le chef des affaires étrangères, ait fermé les yeux sur la situation.

[Des départements différents s'occupent des syndicats criminels et des cellules terroristes clandestines. Une vision étroite des choses parmi leurs propres affaires est un défaut courant pour toutes les agences gouvernementales.]

La raison pour laquelle Kazama pouvait lire les pensées de Tatsuya avec précision n'était pas due à leur longue amitié, mais parce que

Kazama pouvait aussi lire entre les lignes, et donc résonnait avec Tatsuya.

[Cependant, les informations venant de zones comprises dans son domaine de compétence sont dignes de confiance. Selon les calculs de Mibu, ils pourraient être des membres d'un syndicat criminel basé à Hong Kong appelé [Dragon Sans Tête]. Actuellement, leur objectif reste inconnu. Nous te tiendrons au courant dès que cela changera.]

"Merci, Commandant."

[Je ne te verrai pas demain, mais nous pourrions nous rencontrer à Fuji.]

"J'attends cela avec impatience."

[Moi de même… Il semble que nous ayons parlé trop longtemps. Le bleu commence à paniquer, alors il va être temps que je raccroche.]

La police du net avait probablement détecté des traces d'une invasion réseau. En se basant sur son hypothèse, il était trop ambigu pour Tatsuya de dire s'il devrait louer les compétences de la police du net ou se lamenter à propos de celles du nouveau subordonné de Kazama.

[Sois sûr de saluer Sensei pour moi.]

"Compris."

[Au revoir.]

Tatsuya n'eut pas l'occasion de répondre avant que l'écran ne redevienne vierge.

Il me disait probablement de contacter Sensei…

Jusqu'où était-il supposé en révéler ? Le visage de son professeur possédant le titre de chef moine, bien qu'il eût été plus approprié de le décrire comme un [Imposteur], flotta dans l'esprit de Tatsuya alors qu'il soupirait.

◊ ◊ ◊

"Onii-sama, si ça ne te dérange pas, voudrais-tu un peu de thé… ?"

Peu de temps après qu'il eût fermé la porte de la salle de séjour, la

voix de Miyuki vint flotter à l'intérieur.

Elle avait essayé d'éviter de surprendre la conversation, alors elle avait attendu dans la cuisine que Tatsuya eût terminé.

À l'origine, Miyuki occupait une position bien plus privilégiée que Tatsuya et possédait le droit d'écouter n'importe quel secret militaire ou étranger, mais elle ne s'était jamais servie de ce droit devant son grand frère.

Tatsuya s'approcha silencieusement de la cuisine et ouvrit la porte avant que Miyuki n'ait pu reposer sa question.

Comme il s'y attendait, Miyuki se tenait là avec raideur, ses yeux grands ouverts, un plateau avec une bouilloire à thé, l'argenterie, et un casse-croûte posés dessus, entre les mains.

"Onii-sama, s'il te plaît, ne m'effraie pas ainsi. Tu aurais pu dire quelque chose… Je n'arrive pas à croire que tu te sois déplacé silencieusement juste pour te moquer de l'expression terrifiée de Miyuki. Onii-sama me martyrise."

"Désolé, désolé."

Miyuki détourna la tête d'un air vexé. Tatsuya sourit tout en lui prenant le plateau des mains, s'excusant tout au long du chemin.

"Je n'essayais pas de te martyriser. Je pensais simplement que tu portais quelque chose de lourd, alors je me suis précipité à ton secours. Je ne veux bien sûr pas que ma petite sœur transporte des objets lourds."

"… Je sais très bien que c'est une invention… Mais je laisserai Onii-sama m'induire en erreur pour cette fois."

Même si elle gardait une expression mécontente, les coins de sa bouche s'étaient légèrement détendus.

Il n'avait fallu qu'un mot de son frère pour la calmer.

Miyuki était encore débordante de bonne volonté.

"Du thé rouge, aujourd'hui ?"

"Oui. J'ai amené un extrait d'été excellent, et j'ai pensé qu'avoir du thé à l'occasion serait agréable."

Tatsuya acquiesça en guise de réponse et retourna à la table avant

d’échantillonner le thé.

"Du muscat, que c’est rare… Il a dû falloir pas mal de temps et d’efforts pour se procurer cela, pas vrai ?"

"Non, c’était vraiment une coïncidence… Savoir qu’Onii-sama est heureux est le plus bel éloge que l’on puisse faire à Miyuki."

Tatsuya prit doucement une gorgée et afficha un sourire de satisfaction. En voyant cela, Miyuki sourit d’une joie provenant du fond de son cœur.

"Hum, le thé est excellent, et les biscuits au beurre semblent délicieux. As-tu cuisiné ça, Miyuki ?"

"Oui, même si… Ils n’ont pas une très belle tête."

"Ne dis pas de bêtises. Ça ne me dérange pas du tout ; ils sont délicieux."

Miyuki baissa la tête d’embarras, mais voir son frère appprécier les biscuits au beurre et les savourer était suffisant pour l’inciter à relever la tête et sourire de bonheur.

Tatsuya n’aborda pas le sujet de la conversation de Kazama ; Miyuki ne demanda pas.

Tatsuya était occupé à manger par petits bouts les casse-croûtes préparés par sa petite sœur, avec un grand raffinement et le thé acheté méticuleusement. Pour Miyuki, son expression satisfaite était une compensation plus que suffisante pour n’importe quelle tâche ardue.

◊ ◊ ◊

Il était inutile de le dire à nouveau, mais Miyuki était une élève d’honneur reconnue publiquement.

Non seulement avait-elle un talent dépassant l’entendement, elle était également extrêmement appliquée.

En plus de prendre soin de la vie au jour le jour de son frère, elle étudiait aussi jusque tard dans la nuit.

Aujourd’hui, elle avait également travaillé presque jusqu’à minuit avant d’éteindre le moniteur et de le ranger dans la table.

Elle n’était pas encore épuisée.

D’après son expérience, il était difficile de s’endormir quand on était encore dans cet état stimulé. Bien qu’elle pût rapidement y remédier avec un dispositif de sommeil, son frère désapprouvait l’utilisation de cette technologie que près de 70% de ce pays utilisait. Comme Tatsuya avait protesté à ce propos, Miyuki n’avait aucune raison de l’utiliser.

Je vais faire une autre tasse de thé pour changer l’ambiance, pensa Miyuki.

Cela valait le coup pour elle d’avoir traqué le thé au muscat de meilleure qualité comme l’avait montrée la grande joie de son frère. Repenser à son sourire était plus que suffisant pour qu’elle ait un rêve merveilleux, mais, si possible, elle voulait voir son frère une fois de plus et peut-être faire en sorte qu’il caresse sa tête. Ce serait encore mieux.

Miyuki était en train de se diriger vers la cuisine quand une pensée soudaine traversa son esprit alors qu’elle s’arrêtait devant le miroir.

Miyuki secoua légèrement la tête et eut un petit sourire coquin.

◊ ◊ ◊

"Onii-sama, c’est Miyuki. J’entre avec du thé."

"Parfait, entre."

Miyuki lui amenait du thé ou du café à peu près à cette heure toutes les nuits, et son frère la remerciait d’habitude d’une manière contrite, mais cette nuit, il semblait avoir attendu qu’elle apparaisse, ce qui dérouta légèrement Miyuki.

Malgré tout, que son frère l’attende était quelque chose qui lui faisait plaisir.

"J’étais justement sur le point d’aller te chercher---"

--- Il alla jusque là avant que le silence ne ravale de force ses mots suivants.

Quand elle vit son frère se tourner sur la chaise et la dévisager avec obsession, Miyuki sentit un petit frisson de satisfaction la parcourir.

Elle porta le plateau d’une main tandis que l’autre serra légèrement l’ourlet de sa jupe alors qu’elle faisait malicieusement une révérence.

"… Ah, est-ce l’uniforme pour [Danse des Fées] ?"

"En effet. Onii-sama l’a compris immédiatement."

La mini-jupe était formée de couches superposées de couleurs éblouissantes qui flottaient ensembles, parfaitement assorties avec les collants couvrant ses belles jambes, s’écoulant jusqu’à des bottines en cuir brillantes.

Les vêtements de dessus étaient ouverts dans le dos, faits d’un matériau translucide dont il était difficile de déterminer l’épaisseur. Les lignes n’étaient pas brodées mais créées naturellement par le tissu, lui permettant de compléter parfaitement la poitrine.

Sous les vêtements de dessus, il y avait une jupe dans la même veine que les leggings ; ou plutôt, ce n’était pas une jupe et des leggings mais un vêtement en fibres synthétiques élastiques à manches longues. S’il n’y avait pas de vêtement extérieur, cela aurait très bien pu être confondu avec un justaucorps de patineur artistique.

Une paire de décorations pour les cheveux avec des ailes sortant des côtés tenait ses longs cheveux soyeux en place, connectées par une longue bande épaisse vue sur la plupart des caches-oreilles.

En prenant la résistance de l’air et la protection de la poitrine en compte, ce splendide uniforme était sans aucun doute l’uniforme utilisé pour [Batte Illusoire] – aussi connu sous le nom de [Danse des Fées] – l’un des événements les plus attendus de la Compétition des Neuf Lycées.

"De quoi ai je l’air ?"

Miyuki plaça le plateau sur une table proche avant de tourner sur elle-même avec un sourire.

Bien que la jupe s’écoulant doucement fût très courte, une fois assortie avec ses cheveux qui flottaient, dansant dans l’air, cela créait une aura de grâce impossible.

"Irrésistiblement mignonne. Ça te va à la perfection, et ton timing est excellent."

Miyuki arrêta de tourner sur elle-même et fit face à Tatsuya, faisant

une profonde révérence avec les deux mains sur l'ourlet de sa jupe alors que Tatsuya la complimentait.

"Merci pour tes éloges… ?"

Miyuki était sûre à 100% que son grand frère allait lui faire des éloges, alors elle n'avait préparé qu'une réponse, puisque c'était tout ce qui était nécessaire.

Cependant, elle fut incapable de comprendre les derniers mots de Tatsuya, alors elle changea sa réponse en question.

Miyuki redressa ses jambes et sa taille avant de relever les yeux vers Tatsuya qui se tenait assis.

Alors qu'elle était sur le point de diriger son regard vers la hauteur habituelle pour s'enquérir de la signification de ses mots, Miyuki réalisa rapidement que quelque chose clochait.

Elle en comprit rapidement la raison.

Bien qu'il fût assis, le regard de Tatsuya était toujours au niveau habituel quand il était debout.

Miyuki jeta rapidement un coup d'œil en dessous et déglutit avec difficulté.

La chaise en dessous de lui n'était pas là.

La jambe droite de Tatsuya était croisée sur la gauche, et son coude droit était perpendiculaire à son genou droit, comme s'il étirait la moitié haute de son corps vers l'avant… Il était assis dans le vide.

"Je souhaite aussi que tu testes ce dispositif, Miyuki."

Tatsuya maintint sa position alors qu'il glissait vers Miyuki jusqu'à ce qu'il soit à peu près à une longueur de bras avant de s'arrêter. Il décroisa ensuite les jambes et tendit les pieds, comme s'il se levait d'une chaise.

Avec la série de mouvements, son corps physique retourna naturellement à terre.

"… La Magie de Vol… La Magie d'Attribut Contrôle de Gravité Prolongé, tu l'as terminée !"

Elle ne fut distraite que pendant une fraction de secondes.

Miyuki bondit presque sur son frère alors qu'elle saisissait sa main de joie.

"Onii-sama, félicitations !"

C'était l'une des formes de magie sur lesquelles Tatsuya avait fait des recherches depuis un certain temps.

Parmi les Quatre-Systèmes/Huit-Formes de magie, la première catégorie était le Système Vitesse/Poids.

C'était une transformation du plus simple des Pouvoirs Surnaturels et communément reconnue comme était la plus basique de la Magie Moderne.

Ceci dit, bien qu'elle fût théoriquement possible sous le Système Vitesse/Poids, la Magie de Vol – la Magie d'Attribut Contrôle de Gravité Prolongé – n'avait jamais été développée avec succès dans les filières officielles malgré le fait qu'elle ait été proposée au tout début de la Magie Moderne, et ce jusqu'à ce jour.

Aujourd'hui, pendant le déjeuner, la Magie de Vol avait été sujette à un débat considérable. Le consensus général de la Magie Moderne était que, bien que la théorie fût solide, l'application pratique était impossible.

Tout de même, une nouvelle pierre angulaire de la Magie Moderne avait été une fois de plus renversée sous les yeux de Miyuki.

"Une fois de plus, Onii-sama a rendu possible l'impossible ! Pouvoir être témoin de ce tournant de l'histoire et savoir que mon frère est celui qui a accompli une réussite aussi imposante me rend extrêmement fière d'être appelée ta sœur !"

Ses mains serrèrent étroitement la main droite de Tatsuya. Miyuki semblait prête à jeter ses bras autour de lui ; Tatsuya couvrit doucement la main de sa sœur avec sa main gauche.

"Merci, Miyuki. Bien qu'ils n'aient pas eu l'intention de l'utiliser seulement pour voler, l'Ancienne Magie avait déjà atteint ce niveau de capacité ; malgré tout, nous avons fait un autre grand pas vers la réalisation de ce but aujourd'hui."

"Les aptitudes de vol de l'Ancienne Magie ne peuvent être utilisées que par une petite minorité des Magiciens et est une capacité Unique à

un individu, n’est-ce pas ? La Magie de Vol d’Onii-sama peut être utilisée par quiconque ayant une Pouvoir Magique suffisant, pas vrai ?"

"En ce moment, c’est l’objectif premier. J’espère que tu m’aideras à tester cela, Miyuki."

"J’en serais ravie !"

Les yeux de Miyuki brillèrent alors qu’elle acquiesçait rapidement.

Après avoir écouté ses instructions, Miyuki regarda le CAD nouvellement entretenu placé dans sa main gauche.

Comme le CAD ordinaire de Miyuki, c’était un modèle en forme de terminal mobile.

Les dimensions, en revanche, étaient beaucoup plus petites que le minuscule modèle original de Miyuki et pouvait être caché sans difficultés dans sa mince paume.

La seule similitude était la forme dans l’ensemble.

Ce CAD était un Dispositif Spécialisé.

Miyuki n’était pas habituée aux modèles Spécialisés, mais l’opération était suffisamment simple.

Il y avait un simple bouton, et, une fois activé, le CAD absorberait automatiquement les Psions de l’utilisateur dans le but d’alimenter en continu la Séquence d’Activation jusqu’à ce que le pouvoir soit épuisé. D’un certain côté, c’était un objet assez barbare.

Cependant, la Consommation en Psion du dispositif avait été baissé au minimum absolu.

Le but du motif était de minimiser la contrainte placée sur l’utilisateur.

"Début du test."

Sa gorge trembla légèrement à cause de la nervosité écrasante qu’elle ressentait.

Le fait que sa main ne tremble pas était suffisant pour que Miyuki veuille se féliciter elle-même.

Même si le test échouait, son frère ne la blâmerait pas.

À la place, il repenserait le [Dispositif de Vol] à partir de zéro.

Elle refusait de laisser sa propre inaptitude alourdir le fardeau de son frère.

Miyuki appuya avec son pouce sur le bouton du CAD.

Elle savait sans regarder que le dispositif était actuellement en train d'absorber les Psions de son corps.

Pourtant, la quantité était tellement faible qu'elle avait besoin d'y porter une attention particulière pour le détecter.

C'était seulement légèrement au-dessus de la perte normale des Psions en excès.

Le temps qu'elle réalise cela, la Séquence d'Activation avait déjà été stockée dans le Domaine de Traitement de la Magie.

Bien que Tatsuya l'eût avertie pendant ses instructions, l'ampleur minuscule de la Séquence d'Activation la prit par surprise.

Avec l'aptitude technique de Miyuki, elle serait capable d'exécuter aisément des dizaines de copies de la même Séquence d'Activation.

Même si l'ampleur était faible, chaque détail critique était enregistré à l'intérieur.

Miyuki sentit qu'il s'agissait d'une Séquence d'Activation débarrassée complètement de tout ce qui n'était pas nécessaire pour maximiser son efficacité.

Les variables était entrées dans la Séquence d'Activation, le Rituel Magique était construit.

Généralement, les Magiciens ne prêtaient pas attention à ces phases.

Les Magiciens utilisaient normalement le langage, des formules, ou des images pour formuler le changement de phénomène désiré avant de plonger dans leur subconscient.

Le Domaine de Traitement de la magie était chargé de transformer la réalité imaginée en données pour le Rituel Magique. Les [Variables] dans la Séquence d'Activation se référaient aux portions créées depuis l'imagination du Magicien.

Les Magiciens peuvent sentir les Séquences d'Activation absorbées dans leur corps physique de la même manière qu'ils peuvent sentir le

Rituel Magique qui y est construit ; cependant, le processus pour construire des Rituels Magiques est partiellement involontaire et n'est pas sujet à des interférences conscientes.

Si ce n'était pas le cas, d'après les limitations humaines de l'entendement et de la compréhension des données, il serait impossible de créer des Corps d'Information capables d'influencer la réalité.

Miyuki s'imagina elle-même flottant au plafond.

Tout d'un coup, les entraves de la gravité disparurent.

Ses cinq sens perdirent le contact avec son environnement, comme si son corps s'éliminait progressivement de la réalité, faisant légèrement paniquer Miyuki.

Ceci dit, l'âme de Miyuki était remplie de joie excédant de loin son sentiment de panique dérisoire.

Elle n'avait jamais su que voler pouvait être une expérience si libératrice.

Elle était presqu'envieuse des astronautes qui marchaient à travers les étoiles avec 80% de ce sentiment.

Elle avait aussi pitié d'eux qui devaient porter des combinaisons spatiales encombrantes pour apprécier un tel plaisir.

Miyuki souhaitait sincèrement quitter le sous-sol étroit et s'élancer librement à travers les cieux.

"Comment est-ce ? Est-ce que le Système de Boucle est trop stressant ?"

La voix de son frère ramena rapidement l'esprit de Miyuki sur terre.

Miyuki était terriblement embarrassée d'avoir été absorbée par le plaisir du vol pendant une expérience aussi critique.

Pourtant, ce n'était pas le moment d'être dégoûtée d'elle-même.

Miyuki, il faut que tu te réveilles – Miyuki se gronda mentalement elle-même avant de répondre à la question de son frère.

"Il n'y a aucun problème. Il n'y a pas de maux de tête ou de sentiment d'épuisement."

"Excellent. Ensuite, teste le mouvement parallèle. Habitue-toi à t'accélérer doucement et vole comme tu le souhaites."

"Je comprends."

Miyuki suivit les instructions de son frère et s'imagina en train de flotter doucement parallèlement au sol.

La minuscule Séquence d'Activation se diffusa automatiquement et se copia elle-même, construisant un Rituel Magique pour changer la direction de la gravité.

Le motif derrière la Magie de Vol tournait autour de l'utilisation du Système de Loop Cast pour invoquer la magie en continu.

D'après le processus, tant qu'une nouvelle idée conceptuelle n'était pas introduite dans le Domaine de Traitement, les variables reflèteraient de façon continue les valeurs originales.

Avec la Séquence d'Activation ajoutée à la Magie Non-Systématique se répliquant automatiquement, à proximité des étapes finales de la construction du Rituel Magique, permettant à la Séquence d'Activation d'être appliquée au Domaine de Traitement de la Magie même lorsque le CAD n'était pas manié, le même Rituel pouvait être invoqué – en utilisant le Système de Loop Cast, cela dit. Ainsi, la même Séquence d'Activation, la même construction du Rituel Magique, et les mêmes variables de données pouvaient être alimentées sans fin. C'était la vérité derrière la Magie de Vol.

L'œuvre maîtresse de Taurus Silver – le [Loop Cast] était le complément parfait au Dispositif de Vol que Tatsuya avait inventé.

"Est-ce que la magie est disjointe ?"

"Pas du tout. Comme je m'y attendais d'Onii-sama, le timing est tout simplement parfait."

La clé du système repose dans l'enregistrement au moment exact où la magie s'active.

Les humains ne sont pas faits pour une gestion numérique aussi précise, alors des machines étaient nécessaires pour combler le fossé.

Si le motif refusait obstinément de prendre quoique ce soit d'autre en compte que la magie, le système serait tout simplement impossible.

Miyuki continua à suivre les instructions de Tatsuya et augmenta progressivement sa vitesse de montée en flèche.

Elle utilisait l'espace limité du sous-sol au maximum. Elle tournait, manœuvrait, et se retournait alors qu'elle dansait dans l'air.

La jupe flottant doucement et les longs cheveux soyeux suivaient son corps étendu de tout son long, affichant ses courbes absolument superbes.

À un moment, Tatsuya oublia d'analyser objectivement la situation et se tint simplement là, hypnotisé par la danse totalement inattendue d'une fée.

◊ ◊ ◊

La Technologie des Quatre Feuilles (traduit littéralement en [Four Leaves Technology], bien que les enregistrements officiaux de la compagnie et le nom de la marque utilisaient intentionnellement [Four Leaves]) – souvent abrégé en FLT, avait un centre de développement de CAD situé au milieu de nulle part, presqu'à deux heures de la maison de Tatsuya avec les transports publics (c'était seulement à une heure et demi en moto, mais ils choisirent d'utiliser les transports publics à cause de la pluie). Tatsuya s'était familiarisé depuis longtemps avec la route, et, précisément parce qu'il y était bien trop habitué, le voyage long et ardu ne servit qu'à l'irriter.

"Miyuki… ?"

"Oui. Qu'y a-t-il, Onii-sama ?"

"… Non, je m'excuse. Ce n'est rien."

"Oui… ?"

Contrairement aux labos près du siège social principal, à chaque fois que Tatsuya allait au labo, Miyuki le suivait, alors elle était probablement tout aussi familiarisée avec la route ; malgré la météo maussade, cependant, sa manière de penser resta le même que s'ils allaient à un pique-nique, faisant demander à Tatsuya la raison derrière cela.

La raison pour laquelle il s'était interrompu peu après avoir

commencé à demander était parce que, quand il y pensait, il sentait que c'était une question assez étrange.

Bien sûr, Miyuki était assez désorientée, mais son tempérament ensoleillé revint rapidement, au point qu'elle fredonnait presque de plaisir.

Cependant, tous les deux avaient déjà pénétré dans le labo de recherche, alors elle ne fit aucun son.

C'était le foyer de toutes les recherches techniques liées à l'entreprise, le cœur battant de la FLT elle-même, avec toute la sécurité l'accompagnant. Il y avait non seulement des caméras surveillant chaque angle, mais la quantité de personnel de sécurité déployé était aussi stupéfiante.

Pourtant, personne n'arrêta Tatsuya et Miyuki.

Ils ne s'embêtèrent pas même à les contrôler au comptoir avant qu'ils ne descendent le long d'un couloir sans fenêtres qui menait aux parties les plus profondes de l'installation.

Finalement, tous les deux arrivèrent dans une salle avec un mur couvert de fenêtres du sol au plafond.

De l'autre côté des fenêtres, un abysse profond se prolongeait à presqu'un étage en-dessous du sol, assez large pour abriter un hangar.

De l'autre côté de l'espace ouvert se trouvait une autre salle avec le même type de zone d'observation.

C'était un centre de test de CAD.

Plus d'une dizaine d'ingénieurs et de chercheurs s'affairaient autour du bureau en débattant à propos de différents dispositifs de mesure ou en les manipulant.

"Ah, le jeune maître !"

Bien que tout le monde fût plongé dans le travail, quelqu'un salua Tatsuya au moment où il pénétrait dans la salle d'observation.

Il était assez rare que tout le monde saluât Tatsuya plutôt que Miyuki – c'était probablement le seul endroit où c'était le cas.

Le nom [Jeune Maître] était à l'origine donné à Tatsuya parce qu'il était le fils de l'un des supérieurs de l'entreprise ayant la capacité

d’entrer comme il le souhaitait, mais c’était maintenant un titre respecté adressé à leur futur chef.

Tatsuya était légèrement embarrassé par ce nom et souhaitait qu’ils cessent de l’utiliser, mais il savait que tout le monde l’appelait ainsi par authentique affection, alors il ne leur avait pas forcé la main.

"Je m’excuse pour le dérangement. Où est le Directeur Ushiyama ?"

Les regards respectueux adressés à son frère faisaient rayonner Miyuki de plaisir, distrayant un grand nombre de personnes – il y avait très peu d’hommes capables de résister au sourire de Miyuki – de leur travail. Tatsuya autorisa Miyuki à l’accompagner alors qu’il interrogeait le premier chercheur vêtu d’une blouse blanche à l’avoir salué.

La voix répondant à sa question vint de loin derrière la foule.

"Vous me cherchez, Mister ?"

Un Ingénieur grand, mais ayant à peine une apparence fragile, portant des vêtements de travail gris se faufila à travers la foule.

"Directeur, toutes mes excuses pour venir vous voir quand vous êtes aussi occupé."

"Attendez, ne dites pas cela, s’il vous plaît, Mister."

Le salut respectueux de Tatsuya fit l’Ingénieur nommé Ushiyama rosir et secouer sa tête.

"C’est votre de droit d’agir avec désinvolture. Ces hommes sont vos subordonnés, alors il est inutile d’être aussi humble."

"Pas du tout. Tout le monde ici a été recruté par notre père, alors ils ont à peine besoin de me répondre…"

"Que dites-vous ? Vous êtes le célèbre [Mister Silver] lui-même. Nous sommes honorés d’être sous vos ordres."

Tous les Ingénieurs et les chercheurs qui entendirent la voix d’Ushiyama acquiescèrent.

C’était la Troisième Division de Four Leaves Technology, l’équipe de Développement de CAD.

L’équipe de développement qui avait créé ce que le monde appelait la

[Série Silver].

Il est actuellement reconnu publiquement que la [Série Silver] représente le travail définissant les capacités technique de la FLT. Jadis considérés comme des rebelles et des marginaux, le surplus d'employés du département technique composant la Troisième Division possédait une emprise considérable dans la FLT depuis l'avènement de la Série Silver.

Ainsi, les Ingénieurs et les chercheurs avaient juré loyauté éternelle à l'un des développeurs principaux – Tatsuya – qui était la moitié de Taurus Silver.

"Quoique, sérieusement, je pense que vous, [Mister Taurus], êtes le véritable chef du groupe. C'est parce que vous étiez réticent à accepter le poste de directeur que la Troisième Division n'a pas encore de responsable ou de chef de groupe."

"Ne dites pas cela, s'il vous plaît. Je suis à peine capable d'être [Mister] ou [Taurus]. Je suis juste un Ingénieur qui travaille en grognant pour que vos ingénieuses théories puissent être facilitées. Je suis celui qui ne peut supporter le fait que mon nom soit placé aux côtés de celui du développeur original. Je ne suis pas vraiment si effronté, mais le Jeune Maître est encore un élève mineur, alors vos brevets seraient sujets à des problèmes compliqués. C'est pourquoi j'ai dû y offrir mon nom."

"… Sans vos compétences, Ushiyama-san, le [Loop Cast System] aurait été impossible à mettre en œuvre. Je ne suis pas vraiment aussi doué pour le matériel, les performances, ou la créativité. Quelque soit l'aptitude ou la théorie, ce qui compte est que nous ayons été capables d'achever un modèle pouvant toucher la consommation de masse, n'est-ce pas ?"

"Ah~ Arrêtez, arrêtez juste. Il est impossible que je puisse vous battre dans un débat. Revenons à nos affaires. Vous n'êtes pas passé pour nous voir, n'est-ce pas ?"

Alors qu'Ushiyama se grattait la tête pour indiquer qu'il se rendait, Tatsuya détendit son expression solennelle et arbora un sourire réfléchi.

"Ok. Ushiyama-san, le sujet de test d'aujourd'hui sera ceci."

Tatsuya garda intentionnellement un ton et des mouvements désinvoltes alors qu'il sortait un CAD en forme de smart phone. Ushiyama le regarda pendant plus de dix secondes sans cligner des yeux.

C'était le modèle de CAD T-7 qu'Ushiyama avait préparé pour Tatsuya pour une raison précise.

Qu'il ait téléchargé un software dans le modèle de test signifiait…

"Est-ce… le Modèle de Type Vol ?"

La main d'Ushiyama trembla en prenant le CAD des mains de Tatsuya.

"Oui. Le matériel que je vous avais fait préparer est déjà chargé de la Séquence d'Activation pour la Magie d'Attribut Contrôle de Gravité Prolongé. Le modèle de test était facile d'accès et simple à manipuler ; il était facile à utiliser."

"Alors le test…"

"Comme d'habitude, Miyuki et moi l'avons testé, mais nous ne pouvons pas vraiment être considérés comme des Magiciens normaux."

Tous ceux qui étaient présents, et ils n'étaient pas non plus qu'un ou deux, et qui les entendirent inspirèrent et regardèrent intensivement les mains d'Ushiyama.

"… Akira, combien de modèles T-7 avons-nous au labo ?"

Enfin, Ushiyama utilisa un ton assez calme pour questionner son subordonné.

En entendant la réponse dix, ses yeux à moitié clos s'ouvrirent brusquement.

"Idiot ! Seulement dix !? Pourquoi n'ont-ils pas été remplacés ! Huh ? Commande-les plus tard, attrape tout les modèles branchés dans les machines de maintenance et copie le système que le Jeune Maître a écrit ! Hiroshi, convoque tous les testeurs ! Quoi ? En pause ? Je m'en contrefiche ! Traîne-les ici par la nuque si tu le dois ! Tous les autres, arrêtez ce que vous êtes en train de faire et préparez-vous pour des mesures précises ! Est-ce que vous comprenez ? La Magie de Vol ! Ça va changer l'histoire de la magie elle-même !"

Il utilisait probablement la transmission interne.

Ce n'était pas seulement cette pièce, même la salle de test en face qui rentra immédiatement en action puisque même les chercheurs en pause commencèrent à travailler.

L'installation en intérieur de test de CAD pouvait concurrencer un grand gymnase en termes de superficie et de hauteur. La ligne de communication pendait du plafond et était attachée au dos du personnel de test.

La ligne servait également de filin de sécurité si besoin.

La Magie de Flottement était déjà répandue, et l'installation l'avait déjà testée avant, mais la Magie de Vol était d'un niveau complètement autre, au point que les motifs mêmes étaient fondamentalement différents. C'était également autre chose que le saut ou la descente décélérée ; c'était une magie jusqu'alors inconnue.

Le visage du testeur était pâle à cause de l'anxiété.

Les nouvelles magies étaient habituellement construites à partir de magies familières, mais personne ne savait où les dangers pouvaient se cacher.

Il était déjà arrivé que des Magiciens perdent la vie à cause de petits pépins dans la Séquence d'Activation.

S'ils utilisaient une magie toute nouvelle et (jusqu'à présent) sans précédent, quel que soit le nombre des précautions, ce n'était jamais suffisant.

La surface se changea en un matériau absorbeur de chocs, et, une fois que le test de suspension avait été effectué, les préparations étaient enfin terminées.

"Commencez le test."

Après avoir évacué la salle d'observation – pour la sécurité de l'observateur et celle du testeur – Ushiyama donna l'ordre de commencer.

D'en-dessous, il était impossible de voir quel genre d'expression le testeur arborait puisqu'il mettait son casque de sécurité.

Cependant, le testeur, qui avait amassé une expérience considérable en tant que testeur principal avant l'âge de 30 ans, serrait visiblement les dents.

Pourtant, il appuya sur le bouton d'allumage du CAD sans hésitation.

"Décollage confirmé."

"D'après les mesures, il n'y a aucune pression contraire au sol."

Avant que l'œil nu ne puisse le confirmer, le personnel placé aux différents dispositifs de mesure faisait le rapport.

"Erreurs dans l'accélération ascendantes dans les limites acceptables."

"Les performances du CAD sont stables."

Le corps du testeur s'élevait progressivement.

Ils pouvaient maintenant voir clairement que ses pieds avaient quitté le sol.

Le filin était lâche, prouvant que le testeur ne pendait plus au dispositif de suspension.

Dans la salle d'observation, à l'exception du son des machines traitant et reportant les données, il n'y avait pas un seul bruit, même celui du froissement des vêtements.

Tout le monde oublia de bouger en regardant la scène sous leurs yeux ou les valeurs affichées par les dispositifs de mesure.

"Accélération ascendante toujours en baisse… zéro maintenant. Maintien de la vitesse croissante."

Le testeur s'éleva peu à peu jusqu'à ce qu'il soit au niveau de la salle d'observation à trois mètres de hauteur.

"L'accélération ascendante entre dans les valeurs négatives… Vitesse ascendante nulle à présent. Immobilité confirmée."

Tout jusqu'à ce moment se situait dans les limites de ce que la Magie de Flottement pouvait accomplir.

"Test de l'accélération horizontale."

Quelqu'un… Ou plutôt tout le monde, retint son souffle.

"Arrêt de l'accélération. Début du mouvement horizontal à un mètre par seconde."

Sans attendre les rapports de mesure, il était évident à l'œil nu que le testeur se déplaçait dans l'air.

"Il bouge…"

"Il peut voler…"

Les mots incrédules ne servirent qu'à confirmer la vue devant leurs yeux.

[Testeur Un à la Terrasse d'Observation. Je suis actuellement en train de marcher dans l'air… Peu importe… Je vole, je suis libre…]

La transmission surprise des haut-parleurs relâcha les émotions retenues par la stupéfaction de tout le monde.

"Oui !"

"On l'a fait !"

"Félicitations, Jeune Maître !"

Les observateurs crièrent de joie.

Le testeur traçait librement des trajectoires de vol dans le ciel.

Seul Tatsuya resta immunisé aux émotions ardentes des personnes autour de lui alors qu'il observait calmement leurs expressions et acceptaient leurs souhaits délirants.

"Êtes-vous tous des idiots… ?"

Ushiyama faisait des gestes impuissants aux testeurs vautrés sur le sol à cause de l'abus de magie.

Ce test s'était déroulé bien plus longtemps que prévu et avait continué jusqu'à ce que les neuf testeurs soient à terre et KO.

Ce n'était pas un problème venant du processus ; c'était simplement parce que les testeurs ne souhaitaient pas arrêter.

Suite à leur demande, les lignes de communication qui servaient de filins de sécurité avaient été échangées avec une communication sans fil pour qu'ils puissent ignorer le scénario prévu et jouer à cache-cache.

"Comment pouvez-vous utiliser de la magie prolongée pendant si longtemps !"

La Magie Moderne est presque toujours activée en un instant ou durant une courte période.

En général, la magie avec des effets prolongés était seulement valable pendant une durée allouée, alors il y avait peu de Magiciens qui pouvaient utiliser de la magie requérant une activation constante. Par exemple, [Lame à Haute Fréquence] était une magie prolongée, mais, en réalité, la plupart des utilisateurs renouvelaient son activation après chaque frappe.

Jusqu'à récemment, la magie requérant une activation répétitive était vue comme une capacité unique réservée à un nombre restreint de Magiciens. Ce n'était pas avant la présentation du [Loop Cast System] que la réplication automatique des Séquences d'Activation dans le Domaine de Traitement de la Magie n'était devenue disponible au grand public.

"Vous êtes responsables de vos propres actions ; je ne distribue pas les indemnités."

Heureusement, aucun testeur ne montrait de symptômes de manque de magie.

Puisque cela restait dans les limites de l'hilarité, Ushiyama grogna face aux protestations et marcha vers Tatsuya, qui regardait intensément les résultats du test.

"Y a-t-il quelque chose qui vous inquiète ?"

Quand Tatsuya se retourna, son expression était bien différente de satisfaite.

"Honnêtement, il y a bien trop de zones qui peuvent être améliorées… Mais d'après le statut actuel, la tension due à l'exécution continue est encore trop importante."

Pour une quelconque raison, une expression entendue passa sur le visage d'Ushiyama lorsqu'il entendit ceci en jetant un coup d'œil à Tatsuya et Miyuki, qui se tenait derrière son frère.

"Bien sûr, comparés à la Princesse et au Jeune Maître, ces Magiciens ont une capacité en Psion assez limitée."

Selon les normes de Pouvoirs Magiques, Tatsuya se situait au plus bas niveau parmi les Magiciens.

Cependant, les normes variaient avec l'avancée de la magie et le passage du temps.

Trente ans auparavant, les Séquences d'Activation n'étaient pas aussi bien comprises, alors la transition entre Séquence d'Activation et Rituel Magique était si lente qu'elle pouvait à peine être comparée à la technologie actuelle. L'efficacité des Rituels Magiques était également basse et, comparée à celle de l'époque actuelle, requérait plusieurs fois la consommation de Psion pour construire un Rituel Magique d'efficacité égale.

À cette époque, les normes pour les pouvoirs des Magiciens mettaient l'accent sur la capacité en Psion (à la fois le corps physique et le [Corps] mental inclus) plutôt que sur la vitesse de la construction du Rituel Magique. Selon les vieux standards, la capacité en Psion de Tatsuya ainsi que celle de Miyuki serait notée comme étant du niveau le plus élevé.

Grâce à l'amélioration des Séquences d'Activation, des Rituels Magiques, et des CADs, une capacité en Psion limitée ne causerait pas les mêmes problèmes avec l'invocation de la magie. Sauf pour l'usage de Magie Non Systématique qui relâchait directement des Psions, une grande capacité en Psion était simplement une belle décoration.

Ceci dit, l'utilisation de Séquences d'Activation pour construire des Rituels Magiques consommait quand même des Psions, et, même si chaque consommation était minuscule, des centaines de milliers de quantités s'additionnant ajoutaient une tension considérable sur le Magicien.

"Nous devons profiler le motif pour l'absorption automatique de Psion du CAD pour le rendre plus efficace…"

"… Laissez-moi m'en charger. Si nous nous reposons plus sur le matériel que sur le software, cela devrait atténuer la charge. Nous pourrions probablement fixer le mécanisme de réglage en tant que boucle de rétroaction également."

Ushiyama dit ceci après avoir réfléchi un moment, ce à quoi Tatsuya répondit par un sourire entendu.

"J'étais justement sur le point d'en discuter avec vous."

"J'en suis honoré."

Tous les deux avaient exactement le même sourire.

◊ ◊ ◊

Bien qu'il restât quelques modifications de matériel, la portion technique produisait des résultats satisfaisants. Le bénéfice le plus important était la vérification qu'un Magicien ordinaire pouvait exécuter la Magie de Vol avec un CAD disponible sur le marché public.

Il n'y avait pas de temps à perdre. Après avoir organisé les résultats, les détails concernant la Magie de Vol seraient publiés la semaine suivante sous le nom de Taurus Silver. La rapidité était plus importante que la qualité ; l'impact entre [les Premiers au monde] et [les Deuxièmes au monde] était complètement différent. [Premier] était également un outil incroyablement puissant pour la diffusion.

D'un autre côté, le CAD spécialement conçu pour la Magie de Vol avait besoin d'être repensé objectivement à partir de zéro, alors ils toucheraient probablement le marché aux alentours de septembre (la fin de la première moitié de l'année fiscale).

Avec ces deux objectifs établis, la rencontre fut ajournée.

Tatsuya se dirigea vers la zone de pause pour retrouver Miyuki qui l'attendait et ils reprirent leur longue marche vers la maison.

Malgré tout le travail devant être fait… ou plutôt, à cause de cette insistance inflexible à les faire partir, Ushiyama gratta gauchement sa tête.

"Je suis terriblement désolé. J'ai bien contacté le Vice-président, mais…"

Que ce soit pendant l'expérience ou après en avoir confirmé le succès, le Vice-président en charge de toutes les Divisions de Recherche et Développement de la FLT – le père de Tatsuya et Miyuki – ne s'était jamais montré, un détail dont lequel Ushiyama ne pouvait se remettre.

"Ne vous en faites pas pour cela. C'est notre jour de congé, de toutes manières, et même s'il était au travail, il serait au siège social."

Honnêtement, du point de vue de Tatsuya, ne pas le voir serait

probablement pour le mieux.

En fait, Miyuki ne voulait pas le voir du tout.

Cependant, cela faisait probablement trop d'informations pour Ushiyama. Il savait que leur père possédait une position importante dans FLT et était aussi l'actionnaire majoritaire. Même si Ushiyama était un ingénieur clé du développement, les cadavres dans le placard du directeur devraient être tenus à distance des employés.

Avec ceci à l'esprit, Tatsuya utilisa ces mots comme excuse, mais cela ne servit qu'à approfondir l'expression coupable d'Ushiyama.

"… Non, il est vraiment ici aujourd'hui…"

Bien que le dos de Tatsuya fît face à Miyuki, il pouvait sentir l'agitation émotionnelle de sa sœur alors qu'elle fronçait les sourcils.

Tatsuya lui-même laissa échapper un soupir.

Dieu merci, ils n'étaient pas tombés sur lui.

"En tant que Vice-président, il n'a pas le temps de vérifier chaque site personnellement. Je ne pense pas qu'il méprise la R&D."

"Non, je comprends cela. Aussi, il nous a attribué plus de budget."

Tatsuya ramena intentionnellement la conversation sur le directeur et se retourna pour réconforter Ushiyama. Il était dommage qu'il ait à traiter ainsi un Ushiyama encore plus nerveux, mais Tatsuya ne souhaitait pas s'éterniser sur le sujet.

Comme d'habitude, le destin avait d'autres idées en tête.

Après que le frère et la sœur eurent dit au revoir à Ushiyama et eurent quitté les labos de recherche, ils rencontrèrent la personne qu'ils avaient le moins envie de voir dans le couloir menant au seuil de la zone principale.

"Cela faisait longtemps, Miyuki Ojou-sama."

Alors que les trois membres de la famille se regardaient silencieusement l'un l'autre, le premier à parler fut la quatrième personne présente. L'homme était une connaissance de Tatsuya et Miyuki, mais l'accent portait plus sur [Connaissance] que sur [Proche].

"Cela faisait longtemps, Aoki-san. J'aimerais dire la même chose,

mais je ne suis pas la seule personne présente. Père, tu as l'air d'aller bien. Merci pour ton appel il y a peu, mais je pense que saluer occasionnellement ton fils n'est pas vraiment puni de châtiment divin, n'est-ce pas ?"

La voix onctueuse et adorable était teintée de piques, mais la peau de son adversaire et ses défenses résistaient aux épines de roses.

"Ojou-sama, pardonnez-moi pour mon impertinence, mais je suis un majordome et le responsable financier des Yostuba. Votre requête me demandant de saluer un simple attendant est contre les règles de la famille."

"Il est mon frère."

Miyuki luttait pour maintenir un ton calme, mais Tatsuya comprit clairement qu'elle approchait de son point de rupture.

"Une fois encore, pardonnez mon impertinence. Tout le monde dans la famille souhaite sincèrement que vous héritiez du nom de Yostuba. Il est simplement votre gardien et epossède une position entièrement différente de la vôtre."

"Arrêtez, Aoki-san. Je comprends que se lancer des piques ici est grossier, mais vous devriez choisir attentivement vos mots."

Alors que Miyuki était sur le point de s'effondrer et de hurler, Tatsuya supplanta froidement les mots de sa sœur.

Sa voix était extrêmement glaciale.

Même face à un tel mépris, cela ne trouva aucune prise sur la volonté de Tatsuya.

Le cœur de Tatsuya était [Forgé] de cette manière.

Comparé à l'affront, Tatsuya était plus inquiet à l'idée que Miyuki puisse se blesser plutôt que d'être furieux pour lui-même.

"Ça ne fait rien. Bien que tu ne sois qu'un simple intendant, tu restes le fils de Miya-sama. Je suis obligé de fermer les yeux sur cette inconvenance."

Tatsuya n'avait pas le temps de s'occuper de l'attitude hautaine de son adversaire.

"Vous avez affirmé plus tôt que tous ceux qui servaient la famille

Yotsuba souhaitaient que Miyuki soit le prochain chef. Je pense que ceci est une accusation injuste pour les autres candidats, n'est-ce pas ?"

Afin d'éviter de laisser Miyuki exposée à la négativité projetée contre lui plus longtemps, Tatsuya appuya l'attaque en continu, forçant son adversaire à céder sans permettre à Miyuki de s'interposer en aucune façon.

"Je crois que notre tante n'a pas encore sélectionné un successeur, à moins que vous ne disiez que vous êtes au courant de sa décision ?"

Le gentleman capable et perspicace dans la fleur de l'âge qui ressemblait plus à un avocat qu'à un majordome fut sidéré, au point d'en rester silencieux, par la demande du jeune de 16 ans.

"Si sa volonté est décidée, alors je dois commencer les préparations pour Miyuki immédiatement. C'est une excellente opportunité, alors je vous serais très redevable si vous pouviez le vérifier."

La voix de Tatsuya était parfaitement régulière, sans une seule augmentation de hauteur ou de volume.

"… Maya-sama n'a pas encore prit de décision."

Aoki répondit avec une expression de souffrance.

Tatsuya élargit intentionnellement les yeux pour exprimer l'ébahissement.

"Que c'est étonnant ! Le quatrième majordome de la famille Yostuba transmettrait ses souhaits personnels à la place de la directive de la famille aux candidats pour la succession ? Qui ici est celui qui viole les règles de la maison ?"

Tatsuya prétendit soupirer alors qu'Aoki le fixait d'un regard furieux, son visage complètement rouge. Tatsuya jugea que la position d'Aoki était intenable, alors il se prépara à partir avec un message victorieux.

Malheureusement, son jugement était naïf.

"… Ce n'était pas une simple supposition. Comme nous servons tous la famille Yotsuba, c'est un sentiment que chacun de nous partage. Bien que nous ne puissions pas nous consulter cœur à cœur, tant que nous visons le même but, nous existons sur la même longueur d'onde."

C’était une excuse fabriquée qui abandonnait toute théorie et toute logique. Tout de même, son adversaire préparait encore le poison interdit pour le dernier moment.

"Tu n’es rien de plus qu’un faux Magicien sans cœur. Tu ne serais pas capable de comprendre."

Au moment où Aoki cracha son sentiment malveillant, les murs se couvrirent de givre.

Le système de chauffage se mit en marche, se surmenant, essayant de restaurer la température tombant rapidement.

Des tourbillons d’air froid convergèrent vers les pieds de Miyuki.

Tatsuya tendit la main avec un doigt sur sa main gauche, et, accompagné du son d’un lecteur cassette rembobinant à grande vitesse – une illusion auditive que seuls ceux qui pouvaient sentir la magie pouvaient entendre – l’air froid disparu.

La couleur du visage de Miyuki alternait entre le rouge furieux et le bleu avant de pâlir. Tatsuya attira sa sœur contre sa poitrine d’une main avant de diriger un regard glacial qui coupait comme une lame sur Aoki.

"Ma mère elle-même est celle qui a créé ce [Faux Magicien sans Cœur] et est la grande sœur du chef actuel de la Famille Yotsuba, Yotsuba Maya, celle qui fut jadis appelée une Yotsuba, Shiba Miya. Elle a utilisé sa Magie Non Systématique interdite, [Interférence de Motif Mental], pour altérer par la force une zone du Système Limbique responsable des émotions fortes pour créer un Domaine de Traitement de la Magie, créant un Magicien artificiel. La conceptrice de cette expérience était Yotsuba Maya, alors récemment désignée comme chef de la Famille Yotsuba, tandis que celle qui a mené l’expérience sur son fils de 6 ans sans compétences en magie était Shiba Miya. M’appeler un [Imposteur], en tant que sujet de l’expérience, c’est marquer l’expérience menée par le chef actuel et sa sœur aînée comme fausse. Êtes-vous conscient des conséquences ?"

Tatsuya tenait avec douceur sa sœur bien-aimée qui sanglotait contre sa poitrine. D’un autre côté, il continuait à presser sans pitié des attaques contre Aoki, qui était celui l’ayant mise dans cet état.

"…"

"Tatsuya, arrête."

Le père de Tatsuya, qui était resté silencieux jusqu'à maintenant – Shiba Tatsurou – couvrit un Aoki immobile, qui avait été intimidé jusqu'à en rester silencieux, et s'avança pour arrêter Tatsuya.

"Ne parle pas pauvrement de ta mère."

Ses mots étaient complètement hors sujet.

Il les avait prononcés pour éviter d'irriter la maison principale ainsi que pour se protéger lui-même.

Cette société était secrètement financée par la famille Yotsuba, alors même s'il était l'actionnaire majoritaire grâce aux actions de sa femme décédée, le véritable pouvoir mandataire reposait quand même entre les mains des Yotsuba ; ce qui était pourquoi il n'était pas surprenant qu'il parle précautionneusement autour d'eux. Malgré tout…

Tatsuya éclata presque de rire.

"Tatsuya, ce n'est pas que je ne comprenne pas pourquoi tu portes de la haine à l'égard de ta mère…"

Il ne pouvait pas même lire l'expression de Tatsuya.

Tatsuya pensait vraiment que, pour le bien de la santé mentale mutuelle de tous, il était mieux de partir aussi vite que possible.

Malgré tout, Tatsuya sentit le besoin d'ajouter un commentaire de plus avant de s'en aller.

"Père, tu as mal compris. Je ne hais pas ma mère."

"Je, Je vois."

C'était tout ce qui était nécessaire.

Il était inutile de lui dire les mots que Tatsuya n'avait pas dits.

Le cœur de Tatsuya ne possédait pas la capacité de [Haïr].

Il ne pouvait pas ressentir d'émotions fortes telles que la furie, le désespoir, l'envie, la haine, le dégout, la gourmandise, la luxure, la paresse, et… l'amour.

Il ne se perdrait jamais dans la colère.

Il ne se vautrerait pas non plus de désespoir.

Ni se battrait-il avec envie.

La haine et le dégout étaient tous les deux perdus pour lui.

L'amour pour une femme lui était inconnu.

Bien qu'il eût faim, il n'était pas gourmand.

Ignorant l'excitation, il n'était pas lascif.

La fatigue pouvait le toucher, mais il n'était jamais paresseux.

La magie unique de sa mère avait effacé de son cœur toute envie furieuse et irrépressible de ce type.

Il ne haïssait pas sa mère.

Il n'était pas non plus furieux.

Il était [Impossible] à mettre en colère et [Incapable] de haïr.

La seule [Émotion] qui lui restait, avait été intentionnellement laissée pour l'attacher à la famille Yotsuba d'une chaîne forgée de devoirs.

Bien sûr, ce n'était pas de la piété filiale.

Tatsuya, berçant Miyuki qui sanglotait, quitta les locaux sans un mot d'au revoir.

Chapitre 3

L'un des avantages d'avoir une salle de classe dédiée, était que cela favorisait l'établissement de relations entre élèves.

La proximité et les liens du sang sont tous deux un levier puissant pour établir des liens et, indépendamment qu'ils soient ou non des organisations officielles ou non, servent à classer et différencier les groupes les uns par rapport aux autres.

Pour une application pratique de ce sentiment.....

"Bonjour, Shiba. J'en ai entendu parler, bravo."

"Salut, Shiba-kun, bien joué."

"Bonjour, Shiba-kun, je suis de ton coté."

"Hé, allez, fonce, Shiba."

.....Et ainsi, même les étudiants qui ne lui étaient pas familiers, vinrent eux même le saluer et lui donner des encouragements.

Le lundi, aussitôt que Tatsuya entra dans la classe, il reçut une série d'encouragement et de soutien de ses camarades de classe.

La raison pour laquelle ils faisaient cela, était naturel: Tatsuya était sélectionné comme l'un des représentants pour la Compétition des Neuf Lycées.

"L'information s'est rapidement propagée."

"Oui. Ce fut décidé la semaine dernière et aucune annonce officielle n'a encore été faite."

"Ouais, alors, où ont ils eu cette information?"

Léo, Mizuki, et Erika ne semblaient pas feindre l'ignorance, aussi n'étaient ils sûrement pas les coupables.

Néanmoins, ce n'est pas comme on avait demandé de garder le silence.

A ce moment là, seuls les élèves de classes supérieures étaient conviés à la réunion, aussi ils avaient dû en entendre parler par les présidents des clubs.

"En parlant de ça, ne doivent ils pas en faire l'annonce, aujourd'hui?"

Erika pencha la tête sur le coté et demandé, auquel Tatsuya acquiesça

solennellement.

Incluant l’Équipe des Techniciens, la liste officielle pour la Compétition des Neuf Lycées avait été finalisée le vendredi précédent.

L'emploi du temps originel aurait été de finaliser cette liste depuis deux semaines, aussi étaient ils en retard à plusieurs niveaux.

Le fait que les participants aient été décidés bien avant, devait avoir été une bénédiction , vu qu'ainsi, tous les CADs de compétition et les uniformes, qui prennent le plus de temps à être préparés, avaient déjà été assemblés. Le seul obstacle était que la question des ingénieurs n'avait pas été réglée, toute la maintenance et le travail de test était encore à faire.

Miyuki était elle même une participante, mais dû au flot ininterrompu de travail de préparation, elle était complètement indisponible. Pour elle, Tatsuya était prêt à sacrifier quoi que ce soit, mais il ne pouvait tout de même pas le fait qu'il était surbooké.

"Je pense que la 5ème période sera changé en assemblée, n'est ce pas?"

Dit Mizuki alors qu'elle regardait l'écran de son terminal de la table devant elle, qui listait l'emploi du temps journalier de la classe.

Toutes les classes, des 1ère années aux 3ème années, partageaient le même format d'emploi du temps avec trois période le matin et deux l'après midi.

Même si, en dehors des laboratoires, des compétences techniques et des cours d'éducation physique, des cours standardisés (classes fixé comme objectifs de progression) avançaient selon le propre rythme des élèves. Les écoles modernes ont permis de l'éducation personnalisée à afficher sur les écrans des terminaux en classe et ne limitent pas vraiment les heures de début et de fin.

Dans les établissements modernes, plus haut est le niveau, moins est on amené à déterminer le temps de classe et celui de pause. Le fait que l'école change la 5ème période en assemblée pour présenter à tous ses représentants était un signe clair à quel point l'école apportait d'importance à cet événement.

"Tatsuya-kun sera aussi sur scène durant la cérémonie, n'est ce pas?"

"Hum, oui....."

Tatsuya balbutia une réponse à la question de Mizuki parce que c'était justement le point de discorde qui le tourmentait.

"Et Tatsuya est le seul élève de 1ère année, exact?"

Tout comme Léo le souligna, le seul 1ère année accepté dans l'Équipe des Techniciens était Tatsuya.

De l'expérience en maintenance de CADs était absolument requise, aussi naturellement les élèves de classe supérieure devraient ceux sélectionnés dans l'Équipe des Techniciens, excepté que les capacités de Tatsuya était très différentes de la masse.

Bien sur, quand on prend en compte qu'il est un expert dans le développement dans le software des CADs, il serait définitivement sur-qualifié pour servir d'ingénieur dans une compétition lycéenne.

Mais, indépendamment du fait qu'ils soient dans la même année ou en année supérieure, nul ne connaissait ce détail.

Seule Miyuki était au courant.

"Ces élèves du Cours 1 ont l'air ~ vraiment~ mécontents."

Les élèves du Cours 1 étaient encore échaudés des résultats et sa sélection ne ferait que rajouter de l'huile sur le feu. C'était tout à fait évident même sans qu'Erika le dise.

"Mais tous les participants sont des élèves du Cours 1...."

C'était la façon de voir de Tatsuya.

Vu que tous les participants pour la Division des Nouveaux Arrivants était des élèves du Cours 1 et Tatsuya était seulement un auxiliaire, personne, de l'extérieur commenterait cela.

—Mais pour les gens en question, c'était insuffisant pour réconforter les autres élèves du Cours 1 qui comptaient devenir Artificiers Magiques.

Tatsuya était rarement dans une position qui suscitait de la jalousie.

Il lui manquait aussi la capacité d'envier les autres.

Son expérience de la vie était trop pauvre pour observer tous les moindres détails.

"Il n'y a rien qu'ils puissent faire. La jalousie, seule, n'est pas une raison suffisante."

Alors, quand il entendit le commentaire perçant de Mizuki, Tatsuya fut incapable de formuler une réponse.

"Relaxes toi, cette fois, personne ne va te jeter des pierres ou t'attaquer avec la magie."

A la méthode extrême d'Erika pour le réconforter, Tatsuya ne put que sourire ironiquement.

◊ ◊ ◊

Après la quatrième période, Tatsuya se signala à temps dans les coulisses, où il reçut une fine veste des mains de Miyuki, qui était arrivé avant lui.

"S'agit il?"

A toutes fins utiles, il s'agissait d'une veste normale, mais Tatsuya voulut quand même vérifier.

"Il s'agit de l'uniforme de l'équipe des techniciens. S'il te plaît, mets ça à la place de ton uniforme avant que la cérémonie ne débute."

Celle qui répondit, fut Mayumi.

—Avec la réponse attendue.

Mayumi, elle même, portait une veste de sport de style occidental.

C'était là, probablement, l'uniforme des participants.

Miyuki, qui était encore dans son uniforme scolaire, laissa échapper un sourire plein d'espoir, tout en tendant , des deux mains, la veste à Tatsuya.

Une brève et espiègle envie traversa son esprit comme un flash, mais Tatsuya savait que toute résistance était futile.

Tatsuya retira franchement la veste de son uniforme scolaire et l'accrocha sur un cintre préparé à l'avance.

Ensuite, il plia légèrement les genoux, et permit à Miyuki de l'aider à mettre la veste.

Se tenant derrière lui, Miyuki tira la veste sur les épaules de son frère avant de boucler l'avant et d'ajuster le col et les manches. Après quoi, elle fit un pas en arrière et regarda son frère, laissant échapper un large sourire satisfait.

Tatsuya était parfaitement au courant pourquoi sa petite sœur était dans un si bon état d'esprit.

Sa joie était sûrement causée par l'emblème de l'établissement présent à hauteur de la poitrine sur la veste.

L'emblème avait été dessiné d'après une fleur à huit pétales.

L'uniforme de Miyuki avait le même emblème à la même place.

L'emblème du Premier Lycée.

Et pas celui d'un remplaçant, mais le symbole d'un étudiant du Cours 1.

"Onii-sama, cela te va à la perfection....."

Les uniformes de la compétition était largement les mêmes que ceux de d'habitude, ce qui était naturel vu que l'on devait identifier à quel établissement appartenait les participants.

Toutefois, aux les yeux de Miyuki, l'apparence de Tatsuya était finalement revenu à son état légitime.

Honnêtement, Tatsuya n'en avait que faire mais c'était précisément à cause de ça qu'il ne voulait pas détruire l'ambiance. Il y avait encore du temps avant le commencement de la cérémonie, aussi Tatsuya patienta revêtu de l'uniforme de l'équipe des techniciens.

Miyuki était complètement fasciné par l'air fringant de Tatsuya de par son uniforme. Elle restait debout, sans fatigue, dans son uniforme. Tatsuya regarda autour de lui mais échoua à trouver la trace de la veste de sport de style occidental de Miyuki. Même dans le conséquent temps restant, Tatsuya sentit qu'elle devrait tout de même se préparer aussi tôt que possible.

"N'as tu pas besoin de te changer?"

"Je sers en tant qu'assistante de cérémonie."

Entendant la question de Tatsuya, Miyuki sortit de son état d'hypnose et répondit avec son sourire habituel.

En d'autres termes, c'était la seule fois que Miyuki était exclue des participants debout et servait en lieu et place en tant que représentant du coup d'envoi .... Tout du moins, c'est ainsi que Tatsuya interpréta les paroles de Miyuki.

"Vraiment, c'est vraiment une importante responsabilité."

"Je t'en prie, ne me le rappelles pas....."

Il était impossible qu'elle se dérobe face à ce genre de devoir, mais elle employa tout de même un ton faible et son regard se fit hésitant, incitant promptement Tatsuya à sourire gentiment et à mettre la main sur la tête de sa sœur.

—Ceux qui passaient jetaient des regards froids vers ces deux là.

◊ ◊ ◊

Les membres de l'équipe responsables pour organiser la cérémonie dite du coup d'envoi firent commencer l'événement dans les temps, et tout se déroula comme prévu.

Même si Tatsuya se tenait sur la scène, il n'y aurait aucune pierre ou magie dirigée à son encontre — ce qui allait de soi.

Toutefois, pour lui, c'était un emplacement étranger.

Les participants et les ingénieurs étaient rassemblés sur deux lignes. Au sein de l'équipe des technicien, seul Tatsuya était un première année. Tous les autres étaient des élèves de classe supérieure, ce qui conduisait naturellement à penser que c'était lui qui était étrange.

Grâce à la performance de Tatsuya durant la réunion de sélection, il fut épargné par les regards hostiles ou méprisant venant de ceux présent sur scène.

Cela dit, ce n'est pas comme si ces regards étaient amicaux. Une évaluation favorable n'équivaut pas à une impression favorable.

Indépendamment la façon dont on regarde les choses, sa sélection dans l'équipe était une élévation sans précédent et un traitement spécial.

Pour couronner le tout, Tatsuya portait à ce moment là, une veste avec

l'emblème de la fleur à huit pétales cousues dessus.

Sûrement, quelqu'un devait considérer cela comme une offense, ce qui allait conduire inévitablement à de retours de bâtons face auxquels il ne pourraient rien faire. Sous l'éclairage lumineux, Tatsuya y pensa calmement comme s'il s'agissait de quelqu'un d'autre.

Durant ce temps, on introduisait chaque participant tour à tour sur scène.

Mayumi était la maîtresse de cérémonie.

Après avoir été appelé, chaque participant recevrait une médaille spéciale qui contenait le cristal d'identification nécessaire pour entrer dans l'arène de la compétition.

Pour améliorer la présentation, Miyuki était responsable de présenter chaque médaille à chaque personne sur scène.

Les participants, seuls, représentaient quarante personnes (excluant Miyuki et Mayumi, il y en avait trente huit), aussi était ce un processus chronophage, mais sûrement en raison de son excellente éducation, Miyuki maintint un doux sourire alors qu'elle épinglait les médailles sur chaque personne.

Dans une aussi proche proximité, qu'ils pouvaient sentir sa respiration, aucun étudiant masculin n'était immunisé contre le sourire de Miyuki alors qu'ils essayaient désespérément de combattre leur rougissement et leurs expressions hagardes.

Si c'était ainsi, cette scène aurait eu pour conséquence de causer la colère de toutes les étudiantes, mais même celles qui recevaient leurs médailles avait succombé au rougissement ou des regards hésitants, ainsi personne dans l'audience (et plus particulièrement les élèves de classe supérieure) ne fut agacé et à la place, prirent le parti de sourire en agrément.

Les médailles n'étaient pas juste présentées aux participants, mais aussi aux membres des équipes auxiliaires.

Après que l'équipe tactique fut introduite, ce fut finalement le tour de l'équipe des techniciens.

"D'une certaine manière, je me sens un peu nerveux."

Quelqu'un, à coté de lui, lui adressa soudainement la parole, poussant

Tatsuya à pencher légèrement la tête.

L'étudiant masculin, à coté de lui, pencha aussi légèrement la tête, regardant Tatsuya droit dans les yeux.

Les yeux de Tatsuya se situaient plus haut que les siens.

S'il se rappelait bien, c'était un élève de seconde année du nom de Kei Isori. Bien sur, il était un élève du Cours 1 (et de toute manière, Tatsuya était le seul sur scène qui soit issu du Cours 2).

"Oui."

Il était l'un des rare à être ouvertement amical avec Tatsuya.

Ce beau jeune homme possédait un tempérament, qui couplé avec sa silhouette élancée, faisait que s'il échangeait ses pantalons contre des robes, il correspondrait parfaitement à la description d'une *élève de grande taille*. Toutefois, il était aussi classé premier en Théorie Magique pour les secondes années ainsi que l'un des meilleurs magiciens en termes de capacités techniques.

Alors que Tatsuya ré-examinait de près sa beauté, il eut l'impression distincte que l'on ne devait pas juger un livre d'après sa couverture.

Ils étaient encore sur scène, aussi la conversation en resta là.

Toutefois, même pour un individu plus lent comme Tatsuya, être capable de trouver une lueur brillant d'amitié au sein d'un océan trouble de négativité, fut suffisant pour atténuer les sombres émotions jaillissant de son cœur.

Alors qu'il sentit sa dépression s'alléger, il eut l'excès d'énergie nécessaire pour surveiller l'auditoire.

Vu qu'il n'y avait pas de places pré-attribuées dans l'audience, le corps des élèves s'était séparé en deux, avec les élèves du Cours 1 devant, et ceux du Cours 2, derrière.

Cela dit, quelques outsiders avaient réussis à infiltrer les premiers rangs.

Ils détectèrent sûrement le regard de Tatsuya.

Erika lui fit vigoureusement signe, de sa place, dans la troisième rangée à partir de devant, ce qui était assez proche pour appeler cela des places de devant.

Tatsuya en fut complètement abasourdi.

En y regardant de plus près, Mizuki était assise à coté d'Erika, avec Léo de l'autre coté puis Mikihiko occupant le siège à coté de Léo. Même les visages, derrière eux, étaient tous familiers.

En mépris total des regards désapprobateurs des élèves du Cours 1 les entourant, la classe 1-E s'était emparée de places de devant, clamant une section pour eux-mêmes.

Alors que Tatsuya fut attiré par leurs actions courageuses, Miyuki arriva devant lui avec un chariot devant elle.

Sur les 40 participants, 4 conseillers tactiques et 8 techniciens et excluant le maître de cérémonie et son assistante, il y avait au total 50 personnes sur scène. Quarante neuf avait déjà reçu leurs médailles.

Le dernier, mais pas le moindre, c'était finalement le tour de la 50ème personne.

En d'autres mots, on était rendu à Tatsuya.

Mayumi clama haut et fort son nom.

Tatsuya, y pensait il trop, ou plaçait elle plus l'accent sur son nom?

Tatsuya s'avança à cette annonce.

Miyuki révéla un brillant et fondant sourire — suffisant pour que Tatsuya s'inquiète pour la santé mentale de sa sœur — et se tint devant Tatsuya.

Miyuki accrocha la médaille sur la veste de Tatsuya.

Au même moment, éclata un tonnerre d’applaudissement.

Il n'y avait nul besoin de confirmer visuellement.

C'était Erika et Léo dirigeant l'applaudissement de ses camarades de classe.

Pour Mayumi et Miyuki, qui étaient responsables de diriger la cérémonie, ce fut un vacarme imprévu.

Néanmoins, juste au moment où les élèves du Cours 1 de première année étaient sur le point d'étouffer ses applaudissements.....

Mayumi et Miyuki prirent l'initiative de commencer à applaudir sur les cotés de la scène.

Après avoir présenté le dernier représentant, ce fut l'assemblée dans son entier qui commença à applaudir.

Cela coïncida parfaitement avec les applaudissements pour l'équipe dans sa globalité, qui se répandit dans tout l'auditorium.

◊ ◊ ◊

Après la fin de la cérémonie des couleurs, le campus entier se concentra complètement dans les préparations pour la Compétition des Neufs Lycées.

Avec les choix désormais des compétitions pour les participants, Miyuki passait chaque jour à s’entraîner avec Shizuku et Honoka jusqu'à ce qu'il soit tard au point que ce soit le moment où le campus ferme.

Tatsuya avait besoin de réaliser de la maintenance de CAD au même moment où il assistait Miyuki dans ses taches, aussi était il occupé jusque tard le soir.

Aussi bien Erika que Léo étaient affiliés avec des clubs athlétiques, aussi furent ils mis à contribution pour aider à réaliser la myriade de taches nécessaires.

Mizuki était la seule au club de littérature, ainsi la semaine, attendait elle seule que tous les autres aient fini.

La cérémonie des couleurs de la semaine précédente la remplit d'anxiété.

Même s'il n'y avait pas de places prédéfinies, cela nécessitait beaucoup de courage pour ne pas tenir compte de cette règle tacite.

Il était impossible qu'elle fasse ça seule, bien que la situation ait été différente si Erika n'avait pas été là, sinon, aucun de ses camarades de classe aurait franchi le pas.

Mizuki reconnaissait sa propre personnalité introvertie et discrète, aussi était elle doublement impressionnée et envieuse de son amie.

(Mais pourquoi Erika s’efforçait elle ainsi.....?)

Mizuki fut entraîné par Erika pour participer.

Bien sur, elle aussi, voulait soutenir Tatsuya, mais en réfléchissant à la question, elle aurait été plus que satisfaite d'applaudir du fond.

Erika était plus encline à comportement téméraire, ainsi son arrière pensée avait peut être été de narguer les élèves du Cours 1.

Au même moment, Erika était une personne frivole qui, habituellement, ne pensait pas à toutes les conséquences de ses actes.

Aux yeux de Mizuki, elle était quelqu'un qui adorait être dans l'action, mais qui était rarement la source d'ennuis. Cela pouvait être expliqué facilement si cela impliquait seulement ses meilleurs amis comme Mizuki, mais être suffisamment motivée pour entraîner tous ses camarades de classe, cela ne semblait pas correspondre à l'état d'esprit d'un plaisantin.

(Ainsi, Erika serait vraiment comme ça envers Tatsuya..... Vraiment.....?)

Du point de vue de Mizuki, le garçon qui sympathisait le plus avec Erika était Léo.

Erika avait un passé important avec Mikihiko, qui s'était classé en Troisième position à la partie des examens sur la théorie.

Mais Mizuki sentait qu'Erika ressentait quelque chose de spécial pour Tatsuya qui était différent des autres.

Pour certaines raisons, Mizuki refusait d'assigner ce sentiment à Erika qui avait à l'esprit une définition spécifique.

Elle était arrivé à l'entrée de l'école depuis moins de cinq minutes.

Cela était trop court pour clamer qu'elle était fatiguée d'attendre.

Néanmoins, ce fut plus que suffisant pour secouer ses pensées.

Sans effort conscient, un assortiment de choses traversa l'esprit de Mizuki.

Cette situation conviendrait parfaitement au critère d'être distraite.

Et ainsi, avec ses sens tourné vers aucun point précis, elle étendit ses sens vers l’extérieur et détecta une onde étrange.

Mizuki n'y réfléchit qu'un instant.

Puis se décida à retirer ses lunettes.

Instantanément, une vague débordante de couleurs lui parvint rapidement.

Sa vision fut emplie de lumières colorées provenant d'une myriade de nuances.

Mizuki soutint temporairement la douleur dans ces yeux, provenant d'une stimulation excessive.

Pour elle, retirer ses lunettes était comme passer soudainement de l'ombre aux rayons aveuglants du soleil.

Les choses qu'elle évitait habituellement de regarder, devinrent visibles.

Le surplus de données lui donnait l'impression de dériver alors que ses nerfs oculaires et son cerveau étaient surchargés par le traitement de ces informations.

Si cela était arrivé à une personne normale, ils auraient pu être assommés par ce déluge d'information, mais pour elle, c'était "un autre monde" qui se trouvait devant elle depuis toute petite.

Même les gens soudainement exposés aux rayons puissants du soleil s'adaptent après une courte période de temps.

Pour les gens au pupilles sombres, adaptés face à la lumière intense, ce temps serait encore raccourci.

Tout ce que Mizuki avait à faire, était de cligner des yeux deux, trois fois, et ils s'ajusteraient pour être capable de voir la lumière des Psions plusieurs dizaines de fois plus forts que ce que vois que ce qu'un Magiciens normal pourrait identifier.

Mizuki replaça avec précaution ses lunettes dans le sac qu'elle portait, et dirigea son regard vers l'étrange vibration.

Elle trouva promptement la fréquence qui lui permit de pénétrer la lentille de feu anti-esprit.

Le signal du Pushion qui semblait flotter mais battait régulièrement comme une respiration.

Maintenant, même la source de la lumière était facilement visible.

Mizuki s'avança vers le Bâtiment des Capacités Techniques comme attirée vers l'endroit où la vibration prenait son origine.

Plus elle se rapprochait du Bâtiment des Capacités Techniques, plus elle sentait l'air froid infiltrant le milieu environnant.

On était au milieu de l'été, et même si le soleil couchant était partiellement caché par les collines environnantes et l'horizon n'était pas complètement *courbé*, les températures restaient suffisamment hautes pour faire transpirer.

Il s'agissait d'une illusion.

"Quelque chose" se prétendait être de l'air froid, niché dans les plis de l'air chaud de l'été.

Ce "quelque chose" semblait ordonner à Mizuki de rebrousser chemin.

Comme la menacer pour faire cesser son avancée.

Néanmoins, ses pieds ne s'arrêtèrent pas.

La logique lui demander de faire demi-tour, mais Mizuki était un membre de la communauté magique et destinée par là même à marcher cote à cote avec la magie, ainsi l'instinct de Mizuki lui avait ordonné d'utiliser ses "yeux" pour s'assurer de quoi il s'agissait.

Il y avait très peu de gens dans le Bâtiment des Capacités Techniques, aussi n'y avait il aucun son de friction ou de rire sonore.

Les plafonniers maintenait un degré de luminosité qui rendait confortable la lecture de petits caractères.

Comme d'habitude.

Non, c'était un établissement pour l'enseignement de la magie et c'était le Bâtiment des Capacités Techniques fréquenté par de multiples personnes.

Si un incident se produisait, cela n'aurait pas pu passer inaperçu aux instructeurs et aux élèves de classe supérieure.

Par rapport aux lycées normaux, les lycées de magie ne laissait aucune place aux histoires de fantômes ou de légendes urbaines.

Vu qu'aucune alarme ne s'était déclenchée, cela signifiait donc que la situation inhabituelle que Mizuki avait détecté, était le produit de la magie.

Dans le cas contraire – une véritable manifestation spirituelle qui ne pourrait pas être détecté par magie moderne.

Un sentiment inquiétant s'enroulait autour de son cœur et la poussa à sentir son dos trembler, mais Mizuki pressa le pas comme si on la guidait ou comme entraîné hors de son contrôle.

Alors que Mizuki se rendait à l'étage, elle remarqua un faible et agréable odeur dans l'air.

Elle avait déjà senti ce parfum lors du cours de la Médecine Magique.

Ce parfum était une combinaison de plusieurs bois d'encens qui produisait un effet sédatif.

Sous l'impulsion, elle poursuivit son chemin vers les laboratoires de médecine.

La lumière irrégulière des Pushion pouvait être causé par l’expérience magique d'un élève.

Après avoir vérifié que ce n'était pas une véritable manifestation spirituelle, Mizuki laissa échapper un soupir de soulagement.

Et ainsi, se curiosité qui se cachait derrière le mur de malaise s'empara d'elle.

L'une des leçons fondamentales parmi les premières à être enseignées en cours Capacités Techniques Magiques, est que l'on ne doit jamais empiéter sur la zone de l'expérience d'une autre personne sans avoir obtenu la permission de cette même personne. Des invités inattendus courraient le risque de déclencher accidentellement la magie et qu'elle devienne spontanément hors de contrôle. L'école leur a répété maintes fois qu'il était extrêmement dangereux et stupide pour des Magiciens en formation — comme les nouveaux élèves comme eux — de faire irruption de manière inopinée dans une expérience magique.

Néanmoins, Mizuki, à ce moment là, avait complètement oublié cet avertissement.

Le sens de prudence mal orienté de Mizuki, l'incita à se faufiler subrepticement et la poussa vers l'encolure de la porte.

Elle évita soigneusement de faire aucun bruit et regarda discrètement ce qui se passait à l'intérieur de la salle.

A cet instant—

Mizuki fut à peine capable de retenir son cri de terreur.

Non, plutôt que de terreur, ce fut plus simplement un cri de surprise.

Au sein du laboratoire de médecine, il y avait des orbes, de plusieurs couleurs bleues, bleu sombre, bleu ciel, qui dansaient dans les airs.

Chaque orbe avait une *force* et une *conscience* indépendante.

Mizuki savait à travers la "confirmation visuelle" que toute chose en bon ordre, possédait des atouts différents qui ne n'inclinait pas une direction particulière, mais maintenait un état de flux constant. Mizuki était plutôt familière avec des scènes de *forces* -phénomènes basé sur la nature qui se rassemblaient pour faire des orbes flottantes. Dans ses "yeux", la myriade de détails du monde était similaire au flux de Pushion qui était relâché par la conscience humaine.

Néanmoins, c'était la première fois que Mizuki sentait que ces agrégats flottants possédait une "conscience".

(Esprits.....?)

S'agit il de ce qu'ils appellent des Esprits — pensa t'elle.

Mizuki fut fortement émue par cela, assez pour oublier toutes ses autres pensées.

Et la personne qui avait invoqué ces esprits était—

"Yoshida-kun.....?"

Abandonnant alors toute prudence, Mizuki murmura doucement.

Ce fut une action tout à fait inconsciente.

Même si, celui dont le nom fut appelé, n'était pas mauvais.

Surtout parce qu'il se trouvait dans un lieu privé où personne ne passerait et le fait que quelqu'un ait découvert sa *magie* secrète.

"Qui est là!"

Une phrase sortie par pur réflexe.

Ses paroles furent couplées avec la fureur d'être découvert, entraînant une réaction de la "conscience" des "orbes".

"Ah!"

Alors que les orbes affluaient devant elle, Mizuki cria et maintint ses yeux fermés.

Simultanément, une "forte rafale" approcha par le coté, la forçant à rapidement se baisser.

Mais il s'agissait d'un flux de Psions qui n'affecterait ni ses cheveux, ni soulever sa robe.

La rafale balaya les orbes et protégea Mizuki, mais elle n'avait aucun moyen de le savoir vu qu'elle gardait les yeux fermés.

Tremblante d'inquiétude, Mizuki ouvrit doucement les yeux pour trouver Mikihiko regarder haineusement Tatsuya, qui accepta calmement ce regard sans montrer aucune émotion.

".....Mikihiko, du calme, je n'ai aucune envie de me battre avec toi, ici."

A la soudaine apparition de Tatsuya, Mizuki, à genoux, ne pouvait que garder les yeux écarquillés. Devant elle, Tatsuya avait levé ses deux mains vides devant lui.

C'était un geste universel aussi bien pour les Magiciens et le commun des mortels, un signe que la personne en question ne souhaitait pas combattre.

Mikihiko révéla une expression complètement abasourdie et son hostilité disparut au même instant, comme si elle n'était jamais apparu.

Cela dissipa rapidement l'atmosphère tendue. Finalement, Mizuki se mit à bouger et se leva avec en face d'elle, un Mikihiko à la mine déconfite.

".....Tatsuya, toutes mes excuses, je ne comptait pas faire ça."

Mikihiko ressemblait à un garçon perdu sans maison.

Tout d'un coup, Mizuki ressentit l'envie de "le réconforter", mais fut anxieuse car elle ne trouva pas les bons mots.

Heureusement, ils parvinrent à éviter de créer un silence délicat.

"Peu importe, alors rassures toi. En fin de compte, c'est la faute de Mizuki pour avoir déranger la concentration du mage durant la phase d'invocation de la magie."

"Hein? Moi?"

Mizuki tourna la tête précipitamment pour voir que Tatsuya arborait un sourire malicieux et réalisa rapidement qu'il ne la grondait pas

vraiment.

"Non, ce n'est pas sa faute."

Néanmoins, Mikihiko ne le voyait pas de cette manière.

Quand il rejeta le commentaire de Tatsuya, il parla d'une manière assez rapide.

Ce fut sûrement parce que le commentaire de Tatsuya toucha un point sensible, suffisant pour le faire un peu paniquer.

"C'est seulement à cause de ma propre incapacité que je deviens au simple fait d'être appelé par mon prénom..... Et aussi, désolé d'avoir oublié quelque chose de très important. Merci, Tatsuya. Grâce à ton intervention, je n'ai pas blessé Shibata-san par accident."

"Elle aurait été sauve même si je n'avais rien fait. Alors, à l'instant, c'était de la Magie des Esprits, n'est ce pas?"

Mikihiko acquiesça à la question de Tatsuya, mais, pour certaines raisons, hésita.

"Basé sur les esprits bouddhiste du ciel et de la terre, notre famille appelle cela la 'Magie Divine de la Terre'."

Malgré tout, Mikihiko resta campé sus ses positions, sûrement parce qu'il s'agissait d'un point non-négociable pour les Magiciens.

La Magie des Esprits est un type d'Ancienne Magie qui utilise des Corps d'Informations indépendants communément appelés "Esprits" pour interagir avec d'autres Corps d'Informations. Les études de Magie s'y réfère sous le terme "Magie des Esprits", mais raccourcit ce nom en disant ES (Être Spirituelle), mais les utilisateurs s'y réfèrent sous le nom d' "Esprits".

"Je n'ai pas la capacité d'identifier des esprits, mais je sais que tu es celui qui contrôlait le rituel. De plus, Mizuki a réellement réussi à contourner la barrière de rejet, aussi était il difficile pour elle de ne pas te surprendre."

"Comment sais tu à propos de la barrière ..... Ah, c'est vrai, Tatsuya aussi, tu étudies l'Ancienne Magie, ainsi tu saurais si un rite est effectif ou non..... On dirait vraiment que tu as atteint..... Non, tu as surpassé les limites de mes connaissances."

"Tu peux continuer en disant 'outrageux'."

Tatsuya parla de manière taquine, auquel Mikihiko répondit avec un sourire ironique — les coins tendus de ses lèvres se relâchèrent.

"Dans tous les cas..... Peu importe à quel point tu ne veux pas que les autres te voient, je pense que créer une barrière au sein même des laboratoires du lycée qualifie comme action outrageuse."

"C'est vrai."

Leur rire combiné effacèrent complètement les restes de tensions qui étaient palpables l'instant d'avant.

"A l'instant, utilisant tu la magie d'invocation sur des esprits naturels? C'est la première fois que je voyais ça."

"....Cacher quoique ce soit est inutile. Tatsuya a raison, j'utilisais des esprits de l'eau pour m'entraîner à la magie d'invocation."

Mikihiko réunit le bois brûlé de l'encens du poêle sur la table et répondit à Tatsuya.

Derrière lui, Mizuki utilisait un chiffon pour essuyer les cendres collés à la table.

Bien sur, Mikihiko voulait décliner poliment l'aide, mais le zèle de Mizuki se trouva être borné sur ce point.

"Des esprits de l'eau..... Malheureusement, je sais seulement que ce sont des des congrégations de pushions..... Mizuki, qu'as tu vu?"

"Hein? Ah, moi aussi, la seule chose que j'ai vu, ce sont des orbes de couleur bleue."

A la question Tatsuya, Mizuki eut un sourire hésitant et secoua ses mains comme une ondulation.

Dû au fait que Mizuki tenait encore le chiffon humide dans la main, en faisant ça, une petite partie de l'eau éclaboussa le visage Mikihiko, mais elle ne s'en rendit pas compte, car la question l'avait prise complètement au dépourvu.

Comme Mikihiko lui-même..... lui aussi semblait l'ignorer.

Ses yeux s'écarquillèrent alors qu'il arborait une expression tendue.

"Coloré.....? Tu es capable de voir les différences de couleurs.....?"

"ça , ah..... Oui."

Mizuki ne comprit pas pourquoi Mikihiko avait (selon le point de vue de Mizuki) une expression terrifiée sur le visage, aussi répondit elle d'une voix tremblante.

"Par exemple..... bleu, bleu ciel, ou bleu nuit..... Ah!"

Mizuki n'osait pas regarder Mikihiko dans les yeux, , en répondant, elle le regarda de coté. Néanmoins, elle laissa échapper un petit cri en remarquant des gouttelettes d'eau sur le visage de Mikihiko.

"Dé-désolée! Ça..... Ah, oui, un mouchoir, mouchoir."

Mizuki se précipita pour trouver son mouchoir de son sac, pour essuyer le visage de Mikihiko.

Néanmoins, Mikihiko lui saisit durement la main.

Et ramena une Mizuki terrifiée vers lui.

Mikihiko rattrapa Mizuki qui avait perdu l'équilibre et la fixa des yeux malgré leurs proximités, à tel point, qu'il semblait sur le point de l'embrasser.

"Euh.....C'est....."

Mizuki était si confuse et dans tous ses états qu'elle en devint incohérente, mais Mikihiko ne sembla pas le remarquer.

Mikihiko se contenta de la fixer sans sourciller, alors que Mizuki, paniquée, n'osa pas se retourner.

Sans avertissement, tous deux continuèrent juste à se fixer du regard.

"..... Si c'était une scène consensuelle alors je devrais m'excuser, mais sinon, il y a comme un léger problème."

"Ouah!"

"Ah!"

Tous deux se figèrent comme s'ils avaient oublié comment respirer, mais, grâce à la voix neutre de Tatsuya, récupérèrent rapidement, et s'écartèrent l'un de l'autre.

".....Excuses moi."

"Attends..... Je t'en prie, ne le dis pas comme ça.... Je suis celui qui devrai s'excuser."

Quel dilemme.

Il était plutôt évident pourquoi Mikihiko demandait pardon — cela avait été proche du harcèlement sexuel, et il n'aurait pas eu le droit de se plaindre si on lui avait mis une gifle — mais pourquoi Mizuki, elle aussi, demandait elle pardon?

Sûrement à cause de la panique. Tatsuya sentait aussi que l'atmosphère le mettait hors à l'écart.

".....Miyuki, Erika et Léo sont déjà au rendez vous, si vous comptez vous attarder, je crois que je vais y aller."

"Eh? Ah, Tatsuya-kun, c'est pourquoi tu me cherchais..... Attends, ah!"

Mizuki semblait avoir une demi seconde de retard sur ce que lui avait dit Tatsuya (ou plutôt, de son point de vue, dut elle prendre une demi-seconde pour le faire), laissa échapper un cri de choc, et resta alors silencieuse. Ou plutôt, elle avait quelque chose à dire, mais ses lèvres restèrent glacées, incapable de sortir un son. Il apparaissait que sa détresse ait causé un blocage dans la zone de langage de son cerveau.

Dans tous les cas, ce devait être un contretemps temporaire — pensa rétrospectivement Tatsuya — Oups, son expression était bien éloigné de son habituel visage impassible — alors qu'il dirigeait son regard vers Mikihiko.

"Alors, Mikihiko, c'était quoi cette réaction?"

Tatsuya commença à analyser les étonnantes actions de Mikihiko, avec un franc intérêt.

"Désole, c'est juste que j'étais sous le choc....."

Mikihiko laissa échapper un faible soupir de soulagement au changement de sujet et saisit cette opportunité pour répondre rapidement à la question de Tatsuya.

"Attends, il n'y a nul besoin de t'excuser. Pourquoi étais tu si surpris?"

"Eh bien....."

Aux paroles de Tatsuya, Mikihiko s'inclina de nouveau vers Mizuki.

"Je suis terriblement désolé.

C'est parce que je pensais que personne ne pourrait jamais voir la

différence de couleur entre les esprits.....

A la pensée que tu puisses posséder les yeux de cristal, je n'ai pas pu rester inactif et j'ai perdu le contrôle de moi même.....

Je sais que cela sonne comme une excuse, mais je n'avais absolument rien prévu de néfaste.

Juste, que je voulais juste vérifier ce fait."

Les honnêtes excuses de Mikihiko eurent l'effet désiré; Mizuki revint de sa panique à son état normal.

Comme il le soulignait, ce n'était qu'une excuse.

Cela était entièrement dû à Mikihiko et à son excessive curiosité et n'avait rien à faire avec Mizuki.

Malgré ça, aux explications désespérées de Mikihiko, Mizuki répondit avec un regard doux et chaleureux, signifiant qu'elle lui avait déjà pardonné.

"Yoshida-kun, ça suffira, j'étais juste surprise, c'est tout."

Après avoir dit cela, Mizuki révéla un doux et calme sourire et rajouta rapidement "Mais c'était très embarrassant, alors, je te prie de ne pas réitérer cette action."

Le visage bien rouge, Mikihiko acquiesça avec vigueur.

Il semblait que la précédente tentative de harcèlement sexuel s'était finalement conclu calmement et la satire de Tatsuya n'eut jamais lieu, mais Tatsuya ne voulait pas continuer sur le sujet.

"En parlant de ça, Mikihiko, pourquoi étais tu surpris?"

En les voyant tous les deux revenir à leur état normal, Tatsuya repris sa question.

"Basé sur ce que tu as dit, la capacité d'identifier les couleurs des esprits, est extrêmement rare?"

Tatsuya possédait la capacité de déchiffrer les psions des corps d'information, mais, durant son analyse, il ne voyait pas le corps d'information comme une image, aussi ne savait elle pas que l'identification des couleurs était spécial ou pas. Non, la capacité d'identifier les pushions des corps d'information était sans nul doute rare, mais Tatsuya ne pouvait comprendre pourquoi "identification des

couleurs" avait une signification spéciale.

A la question de Tatsuya, Mizuki regarda aussi Mikihiko avec la même lueur dans le regard. Elle se posait sûrement la même question.

"Aussi, que signifient 'yeux de cristal'? Pourrais tu simplement nous l'expliquer?"

Les yeux de Mizuki montraient clairement qu'elle aussi, voulait le savoir.

".....Oui, il s'agit plus d'informations qu'un véritable secret."

Le bref silence de Mikihiko avant de répondre, sous-entendait que ce qu'il était sur le point de dire, serait plutôt compliqué. Tatsuya détecta que Mikihiko se montrait occasionnellement irresponsable..... et ça confinait à des pulsions auto-destructives.

"Les esprits sont colorés, et nous, les Magiciens qui invoquons, nous nous basons sur les couleurs pour identifier les différents types d'esprits."

Cela dit, Mikihiko semblait vraiment sincère alors qu'il commençait à expliquer les nuances d'invocations et donnait l'impression de quelqu'un responsable.

"Malgré tout, ce n'est pas comme si nous pouvions voir le couleur des esprits."

Mizuki en fut déconcertée.

Tatsuya aussi, échoua à comprendre, mais il ne posa pas immédiatement de question, mais du regard, signala à Mikihiko de continuer.

"En réalité, les esprits ne possèdent pas du tout de couleurs définies. Les couleurs que les Magiciens "voient" changent en fonction du système ou du style auquel on appartient.

Prenons en exemple mon style: les esprits de l'eau sont bleus.

Mais en Europe, le style de là-bas affirme que les esprits de l'eau sont de couleur pourpre.

Sur le continent, l'opinion partagée est que leurs couleurs est bleu noir s'approchant d'un noir profond.

Ce n'est pas dû aux vibrations des esprits qui différeraient selon

l'endroit et la magie.

C'est parce que les Magiciens utilisent différentes méthodes d'identification, voilà pourquoi ils 'voient' des couleurs différentes."

"....Autrement dit, ils ne sont pas identifiés par la vue, mais à travers de la magie qui reconnaît les vibrations?"

"Exact.

Afin de mieux cerne les esprits, nous utilisons des couleurs pour catégoriser les oscillations.

Vous pourriez dire que nous avons un peu embelli les esprits.

Ainsi, chacun a sa propre méthode pour identifier les couleurs des esprits.

Dans mon style, les esprits de l'eau sont bleus, les esprits de feu sont rouges, les esprits de la terre jaunes, et les esprits des vents, verts.

Aucune différence en ombre ou luminosité.

Nous appliquons tous la même couleur dans nos esprits, ainsi, n'y a t'il pas de différence de teintes.

Ainsi les esprits de l'eau, sont strictement bleus.

D'après le système d'identification, il est impossible de voir des esprits de l'eau bleu ciel ou bleu nuit."

"......Mais Mizuki les a vu."

"Elle a sûrement senti la différence de teinte, due à la force et à la nature des esprits de l'eau, et a 'véritablement' vu la couleurs des esprits.

Mon style se réfèrent ainsi à ce type d'yeux comme les 'yeux de cristal'.

Ce terme peut être aussi utilisé par d'autre style sous d'autres circonstances, mais pour notre style, ils se réfèrent aux yeux qui peuvent voir 'Dieu'.

Les rumeurs disent que ceux capables de voir les couleurs des esprits sont aussi capables de voir où les esprits jaillissent et se rassemblent, ainsi que 'les esprits divins' de l'ordre naturel et la clé pour accéder à ces systèmes.

Pour nous, les gens dotés des yeux de cristal sont des Mikos qui peuvent se connecter aux systèmes d'esprits divins."

"Autrement dit, Mizuki est exactement la personne que vous autres, recherchez?"

"Oui..... Mais il n'y a pas lieu de s'inquiéter. Actuellement, je n'ai pas le pouvoir de faire face à 'dieu'. Si c'était le moi, d'il y a un an, j'aurais pu avoir la prétention de la clamer pour moi, l'actuel moi n'en possèdent ni le désir ni l'envie d'essayer. Cela dit, je garderais cela aussi pour moi qu'une personne aussi essentielle existe pour les magies divines. Même s'il s'agit de mon propre frère, je ne pourrais jamais supporter de voir d'autres atteindre les sommets de la Magie Divine de la Terre. Personne ne saura jamais que Shibata-san ait des yeux de cristal."

Le regard de Mikihiko était inflexible.

Des traces de folie dansaient sous la surface.

Tatsuya vit cela comme une métamorphose de sa possessivité originale.

Il ne s'agissait pas de "clamer pour lui même", mais le "refus que quiconque d'autre le fasse".

Mikihiko regardait Mizuki avec ce genre d'yeux.

".....C'est vrai, je garderai aussi cela secret."

Basé seulement sur le fait que tous deux "souhaitait que personne n'use de leur amie", Tatsuya et Mikihiko durent d'accord.

Aussi, il signala son agrément en hochant la tête.

Fit signe à Mikihiko.

Et aussi à Mizuki.

Mizuki eut une expression de surprise à la requête de Tatsuya et répondit rapidement avec un sourire apaisé sans en comprendre la raison.

Chapitre 4

1er Août.

Le jour de départ pour la Compétition des Neuf Lycées finit par arriver.

Le Huitième Lycée d'Otaru et le Neuvième Lycée de Kumamoto avaient déjà dû partir dû à leurs localisations respectives, alors que le Premier Lycée, bien situé dans la périphérie Est de Tokyo, partait habituellement pour les dortoirs de la compétition le jour précédent le début du tournoi.

Plutôt que d'y attacher une quelconque importance stratégique, c'était principalement dû au fait que les établissements les plus éloignés avait une priorité d'accès aux installations d'entraînement.

Les arènes de la compétition officielle était interdite avant le jour de la compétition, ainsi n'y avait il aucune raison pour arriver plus tôt—

"C'est ainsi."

"Vraiment.... Dans tous les cas, merci pour ces simples explications."

Tatsuya voulait demander à Mari, dans un ton chargé de sarcasme, s'il y avait des raisons pour qu'elle lui dise tout ça, mais il attendit patiemment qu'elle finisse ses explications et secoua rapidement la tête pour faire disparaître cette impulsion stupide qui ne servirait à personne.

Tous deux conversaient sous un soleil de plomb, qui régnait dans le ciel bleu d'été. Pourquoi exactement rendaient ils les choses en restant sous cette humide chaleur? Même si on lui posait la question, Tatsuya ne saurait quoi répondre.

Il n'y avait aucun intérêt.

"Désolée~!"

Cette exclamation fut accompagnée par le bruit de sandales tapotant légèrement le trottoir. Regardant l'origine du bruit, Mari laissa échapper un soupir et souris sous son parasol alors que Tatsuya, se fichant complètement du soleil de plomb et des rayons qui lui tombaient dessus, cocha, sur son terminal, le dernier membre de la liste des participants.

—Une heure et demi en retard, tout le monde fut finalement là.

"Mayumi, tu es vraiment en retard."

"Désolée, vraiment désolée."

Aussi la réprimande que l'excuse furent concises.

Toutes deux procédèrent à l'embarquement dans le bus comme si rien n'était arrivé.

Enfin, jusqu'à ce que Mayumi sorte du bus les mains vides.

"....Avez vous oublié quelque chose?"

demanda Tatsuya, un peu inquiet que son impassibilité disparaisse.

Des vêtements de rechange, cosmétiques, et d'autres fournitures de vies — Miyuki était sans nul doute celle qui lui avait appris que les produits de beauté était un must lorsqu'on passait la nuit en dehors de chez soi — avaient déjà été regroupés dans le compartiment de stockage, et les check-lists envoyer aux familles de chaque participant, afin que tout soit apparié, et que rien ne manque.

Même si on oubliait quelque chose, les dortoirs en avaient plein de rechanges. Ce n'était qu'un voyage de deux heures en bus, aussi n'y avait il pas besoin de tant de bagages.

"Non, il ne s'agit pas de ça.... Tatsuya-kun, je tiens à m'excuser pour t'avoir fait attendre aussi longtemps."

"Je vous en prie, ne vous inquiétez pas pour ça. Je suis bien au courant de votre situation."

Mayumi n'était pas en retard à cause d'une quelconque raison absurde comme avoir trop dormi ou s'être trompée d'horaire.

Trois heures plus tôt, elle avait soudainement envoyé un message disant qu'elle serait en retard à cause d'affaires de famille.

Dans son message, Mayumi demandait à tout le monde de partir sans elle et qu'elle les rejoindrait à destination plus tard. Pourtant, les élèves de 3ème année, se mirent d'accord à l'unanimité de l'attendre, aussi demandèrent ils à Mayumi d'arriver aussi tôt que possible.

Ce n'était pas dû au fait qu'elle soit la prochaine Chef de la Famille Saegusa.

Elle avait deux frères aînés.

Même si elle était une descendante directe des Clans des Dix Maîtres, Mayumi était la petite sœur qui était encore au lycée, aussi y avait il de très rares cas où elle était responsable des affaires de la famille. Cela dit, le simple fait que sa famille fasse appel à elle, le jour même du début officiel pour l'établissement, montrait clairement que c'était extrêmement important.

Du point de vue de Mayumi, si les autres étudiants étaient partis à l'heure, elle aurait pu s'y rendre à un rythme plus calme que se hâter à les rejoindre. Toutefois, vu que tous — en réalité, Tatsuya était en désaccord — furent d'accord pour l'attendre, Mayumi fut forcée de les rattraper.

Aussi, Tatsuya n'allait pas lui cirer dessus pour une heure ou deux de retard.

"Ne fait il pas trop chaud?"

"On est encore le matin, ça va, et la température n'est pas si élevée."

Tatsuya était le seul première année au sein des auxiliaires, aussi était il responsable de l'appel.

Il y avaient 40 participants, 4 conseillers stratégiques et 8 techniciens.

Seules 12 d'entre eux n'étaient pas des participants, et parmi eux, seul Tatsuya était un élève de première année.

Bien sur, il y avait d'autres membres auxiliaires, en dehors de ces douze personnes. Sans compter l'équipe des techniciens et celle de stratégie, il y avait aussi vingt volontaires qui s'étaient occupés de petites tâches, mais ils étaient déjà parti vers la destination, aussi les membres de la facultés restèrent invisibles. Seul le conducteur et les participants officiels prenaient le bus et les quatre véhicules de fret.

"Mais tu sues comme un cheval..... hé, attends? Tu ne sues pas tant que ça."

"Non, j'ai au moins assez de magie pour repousser la sueur..... mais je ne suis pas assez dégouttant pour ne pas suer de l'été."

Il usait de la magie pour purifier la sueur et la relâcher via la peau et les vêtements.

La magie intrinsèque de Tatsuya "Dissolution", en terme de catégorisation, appartient à un dérivé de la Magie de Séparation. C'était une combinaison de "Rassembler", "Disperser", "Absorber", et "Libérer", mais pour être honnête, "Libérer" en représentait sûrement le plus gros pourcentage.

Aussi, était il plus habile avec les Magies Systématique de Libération.

"Tu as vraiment usé du mot dégouttant....."

Le mot n'était pas particulièrement bizarre, mais Mayumi souriait brillamment, comme si elle faisait face à quelque chose de vraiment amusant.

Ce devait être la saison.

A ce moment, Tatsuya pensa que le sourire, arboré par Mayumi, était aussi radieux que le soleil.

Il devait s'agir d'une hallucination dû au soleil, la température, et l'humidité.

....La meilleure preuve venait du fait que le sourire de Mayumi redevint instantanément son habituel sourire taquin.

"En passant, Tatsuya-kun, que penses tu de ça?"

Ce "ça" dont elle parlait.... devait être la même chose que Tatsuya avait en tête.

Mayumi faisait référence à la robe d'été qu'elle portait.

Elle utilisait ses deux mains pour tenir le chapeau à larges bords et posa , rendant les choses difficiles à se méprendre.

Aujourd'hui, ils ne faisaient que se rendre aux dortoirs et aucune activité officielle n'avait lieu.

Sûrement à cause de cela, même si c'était une activité scolaire, l'uniforme n'était pas de mise.

Les élèves de 1ère année, incluant Tatsuya, étaient tous revêtus de leurs uniformes, mais moins de la moitié des 2nde année avaient fait de même, et presque tous ceux de 3ème année étaient revêtus de tenues de leur choix.

Avec cela en tête, en prenant en compte de la bienséance moderne, qui voulait que la peau reste couverte, la majorité des étudiants étaient

revêtus comme Mari, de tuniques à manches longues et pantalons, facilitant les déplacements.

Une exception notable était l'élève de 2nde année, nommée Chiyoda. Elle portait un short et des longs bas qui remontaient jusqu'à ses cuisses; il était difficile à dire si c'était une tenue adaptée pour l'été. Et pour Isori, Chiyoda semblait l'avoir forcé à porter un pantalon s'arrêtant à mi-tibia avec aussi des chaussettes longues, comme s'ils étaient un couple. (Ce qui était en fait, le cas).

Dans ce groupe, l'apparence de Mayumi était très remarquée.

En réalité, elle était "extrêmement remarquable".

Aussi bien ses bras que ses épaules étaient révélés, dans sa robe d'été.

Ses vêtements s'arrêtaient au dessus du genou.

Ses jambes nues allaient de pair avec des sandales à hauts talons.

Sa peau était légèrement doré, sûrement à cause du fait qu'elle avait mit une couche de protection anti-UV et anti-infrarouge. En prenant cela en compte, techniquement, elle ne révélait rien, mais sa peau colorée ne faisait que pousser les gens à penser qu'elle avait pris un bain de soleil.

"Cela vous va à merveille, senpai."

Une audacieuse tenue estivale, brodée de fleurs, allait vraiment parfaitement à Mayumi.

"Vraiment....? Merci."

Le ton de la surprise associé à une expression timide créait une combinaison de tueur.

"....Si seulement tu était, ne fut ce qu'un peu embarrassée alors que tu me fais un compliment, alors, ça serait parfait."

La jeune demoiselle qui était deux ans plus âgée que Tatsuya, croisa ses deux bras sur sa poitrine et se pencha en le regardant par en dessous.

Bien que petite, elle possédait malgré tout une poitrine normale, si coincée entre ses bras, on pouvait apercevoir un beau décolleté.

A ce point là, cela semblait presque volontaire.

"....On dirait bien que c'est beaucoup de travail."

"......Ah?"

A ce moment là, Tatsuya n'avait aucun moyen quelle affaire pressante avait déteint sur Mayumi, mais elle avait sûrement accumulé énormément de stress.

"Présidente, il est temps d'y aller. Je vous en prie, reposez vous durant le trajet."

—Tatsuya choisit d'expliquer les choses de cette manière.

"Attends, eh..... Tatsuya-kun? Aurais tu mal compris quelque chose?"

L'attitude de Tatsuya devint, soudainement, réconfortante et, combinée avec un regard compatissant, que Mayumi n'en revint pas.

◊ ◊ ◊

"......Vraiment ! Tatsuya-kun pense sérieusement que je suis bipolaire. Quel impoli."

Dans le bus en mouvement, Mayumi gonfla ses joues de colère, alors que Suzune, qui se tenait à coté d'elle, coté couloir, la regarda chaleureusement.

"Bien sur que je voulais qu'il s'assoit à coté de moi, mais il a fui dans un autre véhicule."

En parlant de ça, en tant que technicien, Tatsuya était supposé s'asseoir dans un véhicule de stockage, aussi, d'un point de vue objectif — ou peut être d'une manière superficielle, il n'évitait pas Mayumi.

"Qui croit il que je sois....."

"C'était la bonne décision."

"Eh, Rin-chan, que viens tu de dire?"

Mayumi continua à se plaindre, auquel Suzune rétorqua calmement.

Mayumi avait un doux sourire, mais ses yeux ne souriaient pas. Même si elle avait un sourire aussi terrible et superficiel — et seulement superficiel — demanda d'un ton joyeux, mais cela n'eut aucun impact sur l'expression calme de Suzune.

"J'ai dit qu'il avait pris la bonne décision, sinon, il aurait souffert des attaques de la présidente."

"Un instant, c'en est trop! N'irais tu pas un peu trop loin?"

L'affirmation extrêmement sérieuse de Suzune créa des fissures dans la façade de Mayumi.

"Il y a peu d'élève masculin qui pourrait résister à la beauté de la Présidente, et cette beauté a sa propre magie.."

"......ça ....."

"....."

Probablement en raison de la sérieuse expression de Suzune alors qu'elle disait cela, Mayumi était incertaine si elle était honnête ou simplement en train de se moquer d'elle — toutefois, pour quelqu'un qui comptait devenir un Magicien, de dire que la "beauté a sa propre magie", c'était sûrement une plaisanterie faite à son encontre.

"Malgré tout, j'ai entendu dire que Shiba-kun excellais à annuler la magie des autres, aussi l'apparence magie de la Présidente ne saurait l'affecter."

Même si elle n'en entendait que le son, pour certaines raisons, Mayumi savait que Suzune disait "apparence magique" et non "yeux magiques". (TradR note: yeux magiques et apparence magique ont le même son en japonais.)

"......Rin-chan!"

Finalement, Mayumi se rendit compte qu'on la taquinait.

"OK, OK, Présidente, je vous prie, calmez vous."

"Tu n'as pas le droit de me dire ça!"

Son excellente amie maintint son attitude sérieuse bien que Mayumi se rapproche, une expression d'outrage, au visage, aussi, la seule chose qu'elle put faire fut de tourner le dos à Suzune et d'avoir un accès de colère dans son coin.

Voyant son corps tourné d'un coté, avec un certain angle, conduirait à —

"Euh.... Présidente, vous sentiriez vous mal à l'aise.....?"

—ça.

La voix, provenant de l'autre coté du couloir du bus, était à la fois nerveuse et inquiète.

"Ah? Non, ce n'est pas ça....."

Pour Mayumi, il s'agissait d'un inattendu malentendu.

Alors qu'elle hésitait, Hattori, qui était venu spécifiquement pour la voir, interpréta encore plus mal la situation, ou plutôt, sa réaction renforça simplement son idée préconçue.

"Shiba l'a mentionné tout à l'heure, que la Présidente semblait fatiguée. On dirait bien qu'il était proche de la vérité. Si ce gars savais où se situait la vérité..... Non, là n'est pas le moment pour ce sujet."

"Euh, Hanzou-kun. J'ai juste dit, que je ne me sentais pas malade....."

"Je sais que la Présidente ne veut pas nous inquiéter et je comprends que je dois respecter cela, mais vous forcer au delà des limites, ne nous fait pas honneur."

Hattori était absolument sérieux — il était honnêtement préoccupée des conditions physiques de Mayumi alors qu'il la regardait.

La raison pour laquelle il se mit à rougir, était sûrement dû à la posture assise outrageuse de Mayumi, où ses cuisses étaient légèrement visibles sur les bords de sa robe d'été. Toutefois, ses deux jambes étaient proprement parallèles.

"Vice Président Hattori, où croyez vous regarder?"

Pour la petite histoire, Hattori était uniquement concentré sur le visage de Mayumi.

Il ne regardait pas ailleurs, mais en même temps, cela signifiait aussi qu'il essayait désespérément de ne pas regarder ailleurs.

À l'origine, il était venu soucieux voir Mayumi, mais il détourna le regard avec hâte — sûrement dû à sa culpabilité d'avoir regardé dans cette direction, poussant Hattori à ne pas être dans son assiette.

....Étant que cela, seul, suffisait à se sentir coupable et aussi hésitant, ne servait qu'à prouver qu'il était un honnête et innocent adolescent.

"Ichihara-senpai! Je ne regardais pas là..... Non, euh, je voulais juste donner une couverture à la Présidente....."

Malheureusement, son image d'adolescent innocent ne servait qu'à en faire une proie parfaite pour ses senpais.

"Vice Président Hattori voulait donner à la Présidente, une couverture? Alors, vas y, n'hésites pas."

Suzune révéla une expression de compréhension alors qu'elle se levait et signalait du regard à Hattori de se hâter.

Quant à Mayumi, elle prétendit détourner le regard d'embarras et usa de ses deux mains pour faiblement cacher la partie exposée de sa poitrine.

Avec une couverture dans chaque main, Hattori se figea complètement.

Sans nul doute, une trace de malice pouvait être vu dans les yeux de Mayumi.

On dirait bien que Mayumi soit devenue encore plus difficile à contrôler que d'habitude.

.....Shiba-kun a pris la bonne décision — pensa, de son coté, Suzune.

Cette affaire, il s'en lavait les mains.

◊ ◊ ◊

"Mais que font ils donc.....?"

Hattori était figé sur place, Mayumi regardait avec une lueur d'intérêt dansant dans ses yeux, et Suzune, en retrait, regardait les choses calmement. Ce maladroit jeu à trois poussa Mari à soupirer et à commenter d'un ton lassé.

Comme d'habitude, Hattori se prenait les filets tendus par Mayumi. Après avoir vérifié cela, Mari se rassit après s'être levé de son siège (En fait, sa place se trouvait face à Suzune & Co de l'autre coté du couloir).

Mari le dis tout bas, mais elle était trop préoccupé pour le bien de Mayumi, mais son inhabilité à faire quoique ce soit, était plus prononcée.

"Hein..... Comme d'habitude....."

Mari suspectait secrètement que Hattori sois très stressé du fait des taquineries constantes de Mayumi, ce qui en retour provoquait un attitude dure envers les élèves du Cours 2, et qui donnait des maux de tête à Mayumi concernant les actions de son Vice Président et participait ainsi à un cercle vicieux. C'était quelque chose qui ne lui allait pas.

Cela dit, Mari savait aussi que le niveau de stress de Mayumi était bien plus lourd que le sien.

La famille de Mari avait un passé considérable — les rumeurs disaient qu'ils étaient des descendants du Général Watanabe Tsuna de la période pacifique, bien que personne ne puisse affirmer que ce soit vrai — mais, basé sur les classements actuels, ils étaient à la marge des "Cents Familles".

Mari ignorait si c'était dû à une mutation, si ses gênes avaient sauté une génération ou s'il n'avait pas hérité de la lignée, mais, en tout cas, elle était la seule dans sa famille à avoir un grand talent pour la magie. Ainsi, même si sa famille avait placée beaucoup d'espoir en elle, Mari n'avait pas à s'inquiéter des rivalités familiales qui étaient monnaies courantes dans la société magique.

D'un autre coté, les familles Saegusa et Yotsuba dominaient actuellement les échelons supérieurs, des Clans des Dix Maîtres et bien que Mayumi ne soit pas l'héritière, elle était tout de même une descendante directe et la fille aînée, ainsi, même si elle était encore lycéenne, il y avait eu plusieurs propositions de mariage avant même qu'elle entre au lycée (ce qui n'étaient pas des rumeurs, mais des faits avérés).

Alors que pour Mayumi elle même, même comparée à d'autres magiciens des Clans des Dix Maîtres, elle possédait encore un "incroyable" talent pour la magie. Elle était le sujet d'une forte surveillance, la véritable star de demain parmi les sang-purs.

Et la cerise sur le gâteau, elle était la Présidente du Conseil des Étudiants, ce qui ne faisait qu'augmenter sa valeur.

Peu importe la souplesse de sa personnalité, ses journées étaient loin de ressembler à une promenade de santé.

Elle ne fait que jouer un peu, pensa Mari, aussi la clémence est sans doute la meilleure approche.

Alors qu'elle considérait les choses, Mari évita d'ajouter "du point de vue d'une amie", sûrement parce qu'elle possédait aussi un léger coté taquin. Mais si quelqu'un lui en faisait la remarque, elle l'enverrait au tapis.

—Retournons au sujet,

A moins que le grabuge devienne conséquent, elle ne comptait pas interférer — de toute manière, Hattori semblait participer de son plein gré — ainsi après avoir pris cette décision un peu unilatérale, Mari regarda à travers la vitre.

Elle était assise coté couloir, d'une rangée de deux sièges.

Aussi devait elle regarder ainsi la personne assise à coté de la vitre.

"....Qu'y a t'il, Mari-senpai?"

Une élève toute aussi languie, adressa la parole à Mari après avoir remarqué son regard.

"Hum? Non, Kanon, je ne faisait que regarder dehors."

Mari se mit à regarder l'étudiante de 2nde année, assis à coté d'elle, Chiyoda Kanon, qui avait un magnifique sourire qui était particulièrement populaire parmi les filles du lycée.

Elle était une élève de classe inférieure que Mari favorisait spécialement, et Mari comptait bien faire d'elle la prochaine Chef du Comité de Morale Publique.

Grâce à Tatsuya (s'il entendait ça, il protesterais énergiquement qu'il avait été contraint et mis devant le fait accompli), Mari avait déjà préparé les documents de transferts, juste pour elle. Si c'était quelqu'un d'autre, Mari s'en ficherait, sans doute, complètement.

Elles étaient toutes deux, issues des Cent Familles, mais Kanon appartenait) la famille Chiyoda, proche du sommet. De Talentueux Magiciens de prestigieuses familles était la véritable représentation des "Cent Familles".

D'ailleurs, les "Cent Familles" ne signifiait pas que ce nombre ne soit pas dépassé.

Tous comme les centaines, suivaient les dizaines, la même chose signifiait que c'était des "familles qui ne se trouvent que derrière des Clans des Dix Maîtres".

De plus, les Clans des Dix Maîtres ne consistaient pas seulement de dix familles. Il y avait un total de 28 familles, dignes de porter le nom des Clans des Dix Maîtres, et qui que ce soit, possédant la plus forte magie (notez que ce n'est pas le talent mais la puissance), le top dix était collectivement connu comme les Clans des Dix Maîtres.

La famille de Mayumi, les Saegusa, s'est toujours vantée comme ayant le plus grand nombre de Magiciens talentueux, alors que le clan Yotsuba possédait l'un des plus puissant Magiciens des temps modernes. Le "Seigneur Démon du lointain Orient", la "Reine de Minuit", Yotsuba Maya était l'actuelle chef du clan, ce qui faisait que ces deux familles étaient considérées comme les deux champions jumeaux des Clans des Dix Maîtres.

Actuellement, les Clans des Dix Maîtres se composaient des "Ichijou", "Futatsugi", "Mitsuya", "Yotsuba", "Itsuwa", "Mutsudzuka", "Saegusa", "Yatsushiro", "Kudou", et "Juumonji", qui allait justement de un dix chronologiquement. Toutefois, c'était la première fois que cela arrivait depuis la formation des Clans des Dix Maîtres, et il y avait eu des moment où des numéros soient à la fois, dupliqués ou soit manquants.

Les plus forts parmi les forts devenait un des Clans des Dix Maîtres, avec 18 autres familles comme remplaçant, suivies de près par les authentiques "Cent Familles".

Kanon appartenait à la Famille Chiyoda, qui était l'une des Cent Familles. Le pouvoir d'attaque directe de Kanon rivalisait avec Mari elle même et si elle avait une arme à la main, sa puissance de feu pouvait rivaliser avec des Magiciens des Clans des Dix Maîtres, eux mêmes. Pas étonnant qu'elle ait une magie digne du nom de la Famille Chiyoda.

Néanmoins, la différence cruciale avec Mayumi était que Kanon n'était pas apathique dû aux accablantes affaires de famille.

Entendant la réponse de Mari, Kanon dit doucement "Vraiment !" et dirigea son regard au dehors, suivi d'un paresseux soupir "Hé.....".

Cette réponse absurde ne fit qu'irriter davantage Mari.

"Kanon....."

"Oui?"

Kanon se retourna de nouveau, mais cette fois, elle souriait d'une façon complètement différente d'auparavant.

Malheureusement, l'imitation palissait devant l'original, alors que Mari lui rendit son sourire, de manière tout aussi radieuse - d'une perspective féminine

"On est tout au plus à deux heures des dortoirs, ne peux tu pas attendre jusque là?"

"Hé, c'est un coup bas! Je ne suis pas une enfant, je peux bien attendre deux ou trois petites heures!"

A la question décontractée de Mari, Kanon fut soudainement enflammée, comme si elle était quelqu'un d'autre.

Ses cheveux mi-longs de balançaient alors qu'elle faisait la moue et se plaignait.

"Mais, mais, je pensais qu'il serait dans le bus avec nous, aujourd'hui, alors c'est normal que je sois un peu contrariée."

"N'êtes vous pas tous les deux ensemble..... Même si vous êtes fiancée, compter le temps que vous passez ensemble, est sûrement plus important que 'cette paire' des deux Shiba, me semble t'il?"

"C'est impossible de partager un trajet en bus, de nos jours, aussi, je l'attendais avec impatience. Je veux dire, l'année dernière, j'étais toute seule. Et quand comparé, à un frère et une sœur, bien sur qu'un couple fiancée passe plus de temps ensemble!"

".....Vraiment?"

"Bien sur!"

Kanon, gonflant sa poitrine — ce qui était plutôt impoli et peu flatteur – déclara cela à Mari qui se mit à soupirer de nouveau, en secret.

Cette élève de classe inférieure était habituellement déterminée et fiable avec une forte et active personnalité, qui étaient les qualités que Mari admirait chez la jeune fille, mais.....

(Chaque fois, au moment où elle est près d'Isori, on dirait vraiment une autre personne.....)

"En parlant de ça, pourquoi les techniciens doivent ils être dans un autre véhicule! Ce, alors pourquoi ne se trouvent ils pas ici! Ce bus a suffisamment de sièges pour nous tous, et même si ce n'était pas le cas, nous pourrions toujours avoir un bus à double étage!"

Kanon semblait avoir saisi le sujet approprié et commença bruyamment à évacuer sa frustration. A cela, Mari ne put que soupirer de nouveau.

◊ ◊ ◊

Dans le bus, il y avait une autre jeune fille qui partageait le mécontentement de Kanon.

—Cette jeune demoiselle n'en faisait pas toute une histoire, comme Kanon, ce qui ne faisait qu'à augmenter la nervosité de ses amies.

"....."

".....Euh, Miyuki, aimerais tu prendre un thé.....?"

"Honoka, merci. Toutefois, je suis désolée, je n'ai pas encore soif, je ne suis pas comme Onii-sama, qui a reçu l'ordre de monter la garde sous ce soleil brûlant."

sa voix était aussi bien calme et douce.

Juste comme le frisson qu'aurais quelqu'un qui contemplerait la fine couche de givre qui recouvrirait le paysage.

"Ah, euh, tu as raison."

Honoka en convint rapidement alors que quelqu'un à coté d'elle la poussa du coude.

(Pourquoi lui rappelles tu son frère!)

(Là n'était pas mon intention!)

Honoka et Shizuku n'étaient pas télépathes mais étaient tout de même capable de communiquer du regard car elles voulaient sûrement, toutes deux, "faire quelque chose" pour Miyuki, silencieusement

furieuse.

"....Sérieusement, vu qu'on savait que quelqu'un serait en retard, il n'y avait aucune raison pour lui d'attendre en dehors du bus.... Pourquoi Onii-sama fait il toujours ça....."

Finalement, Miyuki commença à marmonner tout haut, ce qui fit croître davantage la tension autour d'elle.

Honoka voulait fuir.

Tout du moins, elle voulait échanger de place avec Shizuku.

Mais si elle le faisait à ce moment là, elle encourrait sûrement la colère de Miyuki.

—En dehors de ça, Miyuki ne ferait absolument rien à ses amies, mais le sentiment de danger qui l'entourait, était suffisant pour que les gens s'imaginent des choses (En passant, la fille de première année assise à coté de Shizuku était blottie comme un ballon et gardait les yeux rivés sur l'extérieur).

".....Et il se trouve dans un petit véhicule de stockage, encombré d'équipement..... Au moins durant le trajet, j'avais espéré qu'Onii-sama puisse prendre du repos....."

Shizuku regarda une Honoka terrifiée et soupira.

Shizuku croyait bien que Miyuki ait occultée les trois mots "à mes cotés" (autrement dit, Shizuku avait ajusté mentalement "Onii-sama puisse prendre du repos à mes cotés"), mais elle répondit d'une manière complètement différente.

"tout de même, Miyuki, c'est là que je trouve que ton frère est impressionnant."

Shizuku saisit l'opportunité de commencer la conversation pour échanger de place avec Honoka.

Honoka joignit les deux mains de remerciement, mais Shizuku, lui tournant le dos, ne put le voir et Miyuki ne le remarqua pas non plus.

Miyuki ignorait complètement que quelqu'un d'autre l'avait surpris se murmurant à elle même, aussi fut elle, sur le coup, incapable de réagir.

Shizuku prit l'initiative de continuer à parler, détruisant complètement son image habituelle de personne stoïque.

"Même s'il avait attendu dans le bus, je ne pense pas que qui que ce soit s'en serait plaint, mais ton frère a consciencieusement rempli sa mission de 'vérifier que tous les participants aient embarqué'. C'est vrai que ça semble une tâche sans importance, mais il ne l'a pas pris à la légère et fut capable de garder son calme alors même que quelque chose d'inattendu se soit produit, ce qui est difficile. Le frère de Miyuki est vraiment impressionnant."

c'était grâce à la personnalité de Shizuku qu'elle était capable de dire un tel commentaire pâteux, à haute voix. Honoka était plus du genre à penser à ces choses dans son esprit.

"......Tu as raison, Onii-sama est la personne la plus attentionnée dans des domaines des plus étranges."

Finalement, Miyuki fut capable de retenir son embarras et la pression glaciale autour d'elle disparut également.

Caché derrière Shizuku, Honoka fit une signe de victoire de la main.

◊ ◊ ◊

A quelques exceptions près, les êtres humains choisissent seulement les choses qu'ils désirent voir.

Ou plutôt, "ils choisissent d'ignorer des objets qu'ils ne veulent pas percevoir".

Pour les organismes biologiques, les mauvaises nouvelles issues des cinq sens était habituellement plus vitales que les bonnes nouvelles. Les objets et les situations qui leur déplaisaient, étaient souvent la cause de blessure, aussi identifier ces menaces était partie intégrante de la survie.

Toutefois, les humains détournent souvent le regard des choses qu'ils ne souhaitent pas voir.

Par exemple, même en sachant qu'ils se trouvaient dans le viseur d'armes de destruction massive, ils choisiraient tout de même d'ignorer cet aspect de la réalité.

C'était spécialement vrai pour les citoyens des contrées les plus

avancées qui sont si éloignées des luttes quotidiennes pour la survie.

Même sans cet exemple caricatural, il y avait, chaque jour, un nombre incalculable d'exemples où les gens prétendaient ne pas voir les choses qui les repoussaient et prétendaient qu'elle n'existent pas.

—Comme, l'aura meurtrière pure émanant d'une magnifique jeune demoiselle.

Miyuki, qui était revenue à sa grâce habituelle, fut cernée d'étudiants masculins.

Qui, jusqu'à ce moment, n'avaient pas osé s'approcher.

Miyuki était une telle beauté que quiconque se serait arrêté pour la regarder, ainsi, personne n'osait trop s'attrouper autour d'elle, mais dès qu'une opportunité se présenterait, quelqu'un essaierait, sur le moment, d'engager la conversation. La majorité de ces personnes étaient des élèves de première année, avec à l'occasion, des élèves de seconde et troisième année.

Finalement, Mari ne put en supporter davantage et de force, fit asseoir Miyuki et les deux autres derrière elle.

Ainsi, avec Miyuki et la désormais calmée, Kanon, bien plus joyeuse après s'être défoulée, occupaient les deux places proches des vitres, Mari se tenant à coté de Kanon, et Katsuto tenant la place derrière Miyuki, la paix revint enfin dans le bus (On entendait Mayumi dormir, sûrement satisfaite après avoir vivement taquiné Hattori).

Bien que ce soit agréable de parler avec des gens du même sexe, il manquait quelque chose.

Deux jeunes filles, qui partageaient cette pensée, regardaient le paysage.

Aussi, Miyuki et Kanon, furent elles les premières à découvrir la situation.

"Attention!"

Kanon fut celle qui cria.

Suivant sa voix, juste au moment où tout le monde regarda par la fenêtre d'un coté du bus.

De la direction opposée, un véhicule imposant — c'était un bus plus

petit utilisé pour les activités de loisirs — se dirigeaient vers eux, avec des étincelles partout.

Quelqu'un cria que les pneus avaient éclaté.

Un autre passager agité clama que les pneus s'étaient détachés.

Il n'y avait pas de sens du danger dans leurs voix.

Il y avait un séparateur entre les deux cotés de l'autoroute, encore renforcée par une barrière de protection.

Fondamentalement, il était impossible que l'accident de les impliquer.

A les regards jeunes et inexpérimentés, le désastre de l'autre coté n'était quelque chose qui ne faisait que les stimuler.

Une stimulation — qui ne dura qu'une seconde.

Quelqu'un cria.

Peut être plus qu'une personne.

C'était difficilement de leur faute.

L'imposant véhicule vira subitement après être entré en collision avec la barrière, et, pour certaines raisons, bascula dans les airs, dans leur direction.

Le bus freina, envoyant tout le monde vers l'avant.

Les cris de douleur étaient sûrement dû aux élèves qui ignoraient les règles de sécurité et ceux qui échouèrent à boucler leur ceinture de sécurité.

Le bus s'arrêta.

Heureusement, ils s'arrêtèrent avant l'impact.

Toutefois, le véhicule enflammé glissait encore vers le bus.

"Laissez moi le repousser!"

"Disparais!"

"Halte!"

"Oh!"

Il n'y avait pas de panique au sein du bus, ce qui était digne d'éloges.

Mais cela ne servit qu'à empirer la situation.

Sans avertissement, plusieurs magies furent lancées et toutes essayèrent d'appliquer la capacité d'altérer les phénomènes au même moment sur le même objet.

La seule chose qu'on aura atteinte, ce sera que les magies se brouilleraient les unes les autres, et échouer à faire quoi que ce soit sur l'imminent désastre.

"Les idiots, arrêtez tout de suite!"

Mari le réalisa rapidement.

Heureusement, tout le monde était encore rendu au processus d'activation et n'avait pas terminé.

Aussi, tout le monde fut forcé de rappeler leur magie à moitié formée, perdant de précieuses secondes pour une défense assurée.

Ils avaient besoin d'une puissante magie qui réécrive instantanément le phénomène actuel.

Tout le monde, à bord, étaient des graines de futurs Magiciens, mais ils étaient tous capable de le faire.

Néanmoins — s'ils furent tous logiquement capable de suivre les ordres de Mari, ils n'auraient pas essayé, imprudemment, d'utiliser la magie.

Aussi, afin de réécrire les effets originaux de la magie et obtenir le résultat désiré, ils avaient besoin d'utiliser une magie plus puissante pour réécrire de force les magies activées à ce moment là.

"Juumonji!"

Mari fit appel à un Magicien capable de réaliser cet exploit.

Katsuto était en train de préparer sa magie.

Mais Mari désespérait presque en voyant son visage pale et agité.

Mari le comprit aussi.

Ce faible espace où les Séquences Magiques étaient prises de folie, était juste ce qui arrivait durant "Interférence du Calcul".

Même Katsuto n'avait aucun moyen de s'occuper à la fois de l'impact imminent et des flammes.....

"Laissez moi me charger des flammes!"

Une fine et belle silhouette d'une élève de première année, près de la fenêtre,se leva.

Sa magie était déjà préparée et prête.

Voyant cela, Katsuto commença immédiatement à concevoir la Séquence Magique pour une barrière fortifiée.

Pourtant, peu importe le talent qu'elle avait, cette première année serait elle capable d'utiliser sa magie dans cette véritable tempête de psions—?

Pendant un instant, Mari pensa halluciner.

Elle était une Magicienne parfaitement capable de comprendre la magie, mais elle se posait encore des questions.

Alors que Miyuki était sur le point d'invoquer sa magie sur sa la carcasse métallique en flammes, qui leur fonçait dessus.....

Les séquences magiques déchaînées disparurent en un instant.

Comme si elle attendait que cela arrive, Miyuki activa, sur le champ, sa magie.

Elle ne gela pas le véhicule en flammes, ni couper l'arrivée d'air qui aurait fait suffoquer le conducteur (et dans ce cas, les chances de survie du conducteur était peu probable), elle utilisa efficacement la magie pour réduire dramatiquement la température pour éteindre les flammes.

Mari ne put rien faire d'autre que d'applaudir son choix.

En même temps, cela prouvait que les capacités de perception magique de Mari marchait normalement.

Katsuto étala la magie de la barrière de protection — c'était une Magie Systématique de Mouvement qui créait un champ de force qui rendait tout objet entrant dans son champ d'action, immobile — causant le véhicule, déjà en sale état de se déformer lors de l'impact. Mari regarda ailleurs quand elle entendit le son de l'impact (Mari faisait confiance à la magie de Katsuto pour qu'elle retienne le véhicule arrivant).

Que s'était il donc passé?

Les restes des Séquences Magiques, interférant, avait disparu

soudainement, juste avant qu'aucune magie ne soit appliquée pour éviter l'accident, mais, bon sang, quel en était la cause?

S'agissait il de magie de Mayumi?

Mari rejeta cela sur le champ.

Il était vrai que Mayumi était capable de s'occuper de Séquences Magiques éffrénées.

Toutefois, la Contre Magie de Mayumi (magie déployée spécifiquement contre la magie) avait la forme d'une balle de psios qui utilisait des copies de Séquences Magiques pour les détruire.

Ce type de magie ne pouvait pas annihiler complètement chaque Séquence Magique jusqu'à la dernière.

Si la magie de Mayumi était synonyme de canons anti aérien de précision, alors la magie précédente (s'il s'agissait de magie) était quelque chose qui détruirait un district entier avec des bombes. Pas un seul pilier resterait debout, l'acier fonderait, les fondations et ciment s'éparpilleraient partout dû aux explosions, transformant toute la zone en décombres — c'était là la violence de l'attaque.

Alors que Mari et Katsuto avaient été surpris par le chaos originel des Séquences Magiques, Miyuki semblait savoir depuis le début, que cette situation s'estomperait et activa sa magie sans hésitation.

Savait elle qui avait usé de cette "magie"?

Attends, cette magie, s'agissait il.....?

"Est ce que tout le monde va bien?"

Mari regarda lé véhicule de stockage — actuellement garé derrière eux — qui les suivait, et ne se ressaisit et se retourna qu'en entendant la voix ferme Mayumi.

"C'est pas passé loin, mais il n'y a pas lieu de s'inquiéter. Les excellentes performances de Juumonji et Miyuki-chan nous ont sauvé du désastre. Quiconque est blessé doit comprendre maintenant l'importance des ceintures de sécurité, aussi soyez sur de les mettre la prochaine fois."

Mayumi rajouta, avec un sourire, "aussi longtemps qu'il n'y ait pas de prochaine fois" qui provoqua des rires au sein du bus.

Tout le monde se libéra de l'intense anxiété et terreur, et reprit une des expressions plus détendues.

"Juumonji, merci, on peut toujours compter sur toi."

"Non.....Grâce au fait que les flammes ont été rapidement éteintes, j'ai pu me concentrer pleinement pour arrêter le véhicule. Aussi, Saegusa, t'es tu chargé des Séquences Magiques effrénées?"

A la question de Katsuto, les yeux de Mayumi dérivèrent bizarrement.

"Ah! Je ne l'ai remarqué qu'après l'arrêt du bus....."

En parlant de ça, Mayumi dormait jusqu'au moment de l'accident.

Katsuto le réalisa également, aussi haussa t'il légèrement les sourcils mais ne fit aucun autre commentaire — Katsuto était, sans aucun doute, la plus honorable personne parmi les leaders du corps étudiant.

"Ah, Miyuki-chan, à toi aussi. Ta réalisation a été impeccable. Tu as été capable d'utiliser une fenêtre aussi étroite pour construire une Séquence Magique parfaite. C'est un accomplissement, que même nous, élèves de 3ème année, aurions du mal à imiter."

Katsuto et Mari acquiescèrent en accord avec les paroles de Mayumi.

Tous trois savaient très bien que choisir correctement la magie appropriée et la moduler dans des circonstances aussi critiques, n'était pas un mince exploit.

Les compliments de Mayumi fit profondément rougir Miyuki.

"Présidente, je suis honorée de ces compliments. Toutefois, c'est grâce à l'aide puissante d'Ichihara-sempai pour arrêter le bus, que j'ai eu suffisamment de temps pour construire la Séquence Magique, sans quoi, j'ai bien peur que je me serais précipitée. Je vous en remercie, Ichihara-sempai."

Miyuki s'inclina gravement en remerciements, auquel Suzune hocha la tête silencieusement en réponse.

Kanon, qui était assise en face de Miyuki, se retourna sur son siège, complètement bouche bée.

Mari fut aussi incapable de cacher son étonnement.

Tout comme venait de le dire Miyuki, il aurait été impossible pour le bus de s'arrêter avec uniquement les freins.

Le moment où le conducteur avait appuyé sur les freins, il était difficile d'imaginer quelqu'un, user de Magie de Vitesse pour compléter.

Mais Mari n'avait remarqué que ceux, nombreux, qui essayaient d'arrêter le véhicule se dirigeant vers eux, et ignorait complètement la magie utilisée par Suzune pour arrêter le bus.

Alors que tout le monde était préoccupé à confirmer visuellement le danger, elle prit la bonne décision.

La maîtrise de la magie que montrait Suzune, semblait rivaliser avec Mari & Co, et aujourd'hui, elle ne fit que confirmer cette réputation. Aussi, Miyuki avait été la seule à détecter la magie de Suzune alors que tous les autres ne s'en étaient pas aperçu; son talent était vraiment impressionnant.

"En comparaison, toi....."

"Ow! Mari-sempai, pourquoi m'avez vous frappée?"

Soudainement frappée sur la tête, Kanon se plaignit en pleurant.

"Va te faire voir, Kanon, as tu le droit de te plaindre? Morisaki et Kitayama ont tous deux paniqué et ont utilisé la magie pour compliquer la situation, mais, on devait s'y attendre vu que ce sont des élèves de 1ère année. Mais, il se passe quoi avec toi, pour qu'un élève de 2nde année panique en premier!"

"Uh, mais j'ai été la plus rapide, je ne m'attendais tout simplement pas à ce que les magies de tout le monde se chevauchent....."

Les explications de Kanon fit baisser de honte la tête de Morisaki et Shizuku.

Quelques autres eurent l'air mal à l'aise.

"La vitesse n'est pas toujours le meilleur! Au moins, évalue d'abord la situation, puis communique simplement pour éviter toute ambiguïté, d'accord? De plus, basé sur le fait que tu n'avais pas encore désactiver ta magie même après avoir remarqué que ça compliquait la situation, prouve que tu avais déjà perdu ton objectivité."

".....J'ai tort, je suis désolée."

En voyant l'air déprimé de Kanon, Mari décida d'en rester là.

Même avec cette leçon de morale, sans entraînement et expérience préalables, il était très difficile de rester calme dans ces circonstances.

Quand on prend ça en compte, il était encore plus étonnant que Miyuki ait été capable de communiquer pour éteindre les flammes.

Ce n'était pas quelque chose uniquement lié au talent. D'habitude, les génies ont tendance à essayer de trop se faire remarquer, ce qui fait plus de mal, car cela compromet la communication.

Par cette définition, Kanon possédait un exemple de mentalité de génie.

Miyuki devait avoir suivi un long et difficile entraînement.

Sa patience sereine, attendant que le bus s'arrête, était parfaitement adaptée à ses expériences, et en même temps, complètement inadaptée

"A propos, Shiba."

"Oui."

Mari appelait Tatsuya par son prénom, mais se référait à Miyuki par son nom.

Généralement, elle préférait s'adresser aux autres via leurs noms de famille, et s'adressait aux prénoms uniquement des personnes qui étaient de proches compagnons, comme Mayumi, Kanon, et les membres du Comité de Morale Publique. Pour elle, Tatsuya faisait partie des personnes dont elle était proche.

"Saurais tu comme ces Séquences Magiques..... Non, rien d'important, ne t'inquiètes pas pour ça, tu t'es magnifiquement débrouillé."

"Ah? Merci pour le compliment."

A l'origine, Mari voulait poser la question "Sais tu qui a utiliser de la Contre Magie pour effacer ces Séquences Magiques?"

Au milieu, elle se demanda si elle voulait ou non, connaître la réponse.

Pour certaines raisons, Mari sentait que la réponse causerait des dommages dévastateurs à "certains" objets autour d'elle.

Par la fenêtre, les étudiants masculins de l'équipe des techniciens descendirent des véhicules de stockage et commencèrent les opérations de secours.

Cela dit, le véhicule tout terrain, n'avait pas seulement heurté la barrière de protection et retourné dans les airs, il fut aussi en flammes.

Les chances que le conducteur survive, étaient nulles.

Il n'y avait aucune fille présente, sûrement à cause des garçons, qui voulaient leur éviter de voir un cadavre calciné.

Même si l'incendie avait été éteint, la possibilité que le carburant à base d'éthanol se renflamme, existait encore.

Derrière les élèves de 3ème année, essayant de couper la porte, un garçon de 1ère année utilisait une caméra pour enregistrer les preuves.

Réalisant que ses yeux le suivaient continuellement, Mari détourna rapidement le regard.

◊ ◊ ◊

Après l'incident, incluant le temps passé pour les interrogatoires de la police et d'aide à nettoyer le bus, à peu près 30 minutes s'étaient passées depuis la fin de l'incident. Cela créa un retard supplémentaire sur le voyage, le groupe arriva aux dortoirs durant l'après midi.

D'un point de vue strictement compétitif, la plupart des participants qui se distinguaient lors de la Compétition des Neuf Lycées rejoignait, finalement, l'armée.

Pour sauvegarder leur source de talentueux Magiciens, l'armée investissait lourdement la Compétition des Neuf Lycées, aussi bien dans l'arène de la compétition que dans les dortoirs. Les hôtels, auparavant réservé aux membres du gouvernement et aux autres dignitaires étrangers et leurs suites, étaient désormais alloués aux étudiants et au personnel lié à la Compétition des Neuf Lycées.

Cela dit, ce n'est pas comme si la situation était globale.

En fin de compte, l’hôtel était un bâtiment militaire, aussi n'y avait il ni voituriers ou autres. Habituellement, les soldats, en service à cet endroit, seraient en charge de ces missions, mais la Compétition des Neuf Lycées était un événement lycéen de grande envergure, aussi les étudiants, devaient ils porter leurs propres bagages. Les plus grands

appareils furent laisser dans les véhicules de stockage pour un accès facile, ainsi ils n'avaient pas à les déplacer, mais ceux de taille plus petite et les CADs devaient être déplacés dans les chambres individuelles pour la maintenance.

Un certain élève de 1ère année de l'équipe des Techniciens accomplis rapidement ses objectifs, poussa un chariot plein de bagage et était accompagné par une souriante élève, marchant à ses cotés, une vue qui causa à Hattori de secouer la tête avec une expression de malaise sur le visage.

"Hattori, qu'y a t'il? Regardes ta mine de chien battu."

Derrière lui, une voix chaleureuse engagea la conversation.

"Kirihara..... Non, ce n'est rien."

Hattori se retourna et vérifia qu'il s'agissait bien d'un de ses bons amis, et lança, par réflexe, une réponse vague.

"Vraiment? Tout du moins, on dirait que quelque chose va mal."

Il l'avait sûrement remarqué lui même.

Hattori arrêter de nier les paroles de Kirihara et laissa échapper un maladroit sourire en coin.

"J'ai..... perdu confiance."

"Oh, je t'en prie, la compétition commence après demain, C'est quoi ce pessimisme?"

Kirihara ne participait qu'à la "Nuée de Balles" lors du deuxième jour, mais Hattori était prévu pour "Bataille de Surf *lors du premier et troisième jour, ainsi que pour le "Code du Monolithe" lors des neuvième et dixième journées.*

Hattori était sur un niveau différent de compétition que Kirihara et il était l'un des as au sein des 2ndes année.

Si ses statuts n'était rien de moins qu'excellent, cela impacterais sévèrement la stratégie de l'équipe dans sa globalité.

Ainsi, cela s'avérait surprenant pour Kirihara qu'il panique à ce niveau.

"Alors, pourquoi es tu si déprimée?"

Aux yeux de Kirihara, Hattori Gyoubu était un jeune homme studieux

et confiant, ou peut être quelqu'un qui travaillait dur pour gagner cette confiance.

Au cours de sa seconde année seulement, Hattori possédait la force qui n'était derrière que le Trio. Cette distinction ne fut pas obtenue seulement par son talent, bien que cela l'avait rendu un peu arrogant — un point que ses amis n'essayaient pas de défendre — et était un sujet de beaucoup d'interprétations erronées, mais son assiduité égalait au plus haut niveau, son important talent. Tout du moins, c'est ainsi que Kirihara avait toujours vu Hattori.

Travailleur, talentueux et accomplis. Avec ces trois là, il n'y avait aucune raison pour qu'il perde aussi soudainement sa confiance.....

"On dirait bien que tu n'as pas remarqué à quel point je t'envie....."

"Quoi? Insinuerais tu que je suis stupide?"

"Non, mais je pense que tu es un peu lent d'esprit."

"Hé!

L'habituel sourire moqueur d'Hattori qui pouvait être facilement mal compris, fit son grand retour.

Il semblait avoir repris son calme.

Que Hattori soit capable d'améliorer son humeur en rabaissant Kirihara laissa un goût amer dans la bouche de ce dernier, mais son inquiétude avait cessé.

"....Cela ne te ressembles pas, non? Qu'est qui a pu, récemment, te déprimer?"

Kirihara demanda de nouveau, avec l'intention de lui retourner la question.

Hattori n'était pas assez lent d'esprit pour se méprendre sur les maladroites préoccupations de son ami.

"Plus tôt, cet incident....."

"Ah~, c'est pas passé loin."

"Oui, et si rien n'avait été fait, je pense que beaucoup de gens aurait été blessés ou auraient même perdu la vie."

"Mais la Présidente et les autres, ne s'en sont ils pas occupés?

S'inquiéter pour des blessures qu'on n'a pas, un signe d'anxiété généralisée? Ce genre de pensée sur le passé est mauvais pour la santé mentale."

Le commentaire direct de Kirihara fit légèrement rire Hattori.

"Kirihara, j'envie vraiment ton habilité de laisser passer les choses, mais ce n'est pas ce à quoi je faisait allusion."

Hattori s'arrêta un instant et secoua de nouveau la tête.

".....A ce moment là, je n'ai rien pu faire."

"C'est parce si tu avais agis sans réfléchir, cela n'aurait fait qu'empirer la situation. Je pense que se retenir montre que tu sais garder la tête froide en temps de crise."

Les paroles de Kirihara étaient destinées à le réconforter mais comportaient aussi une certaine vérité. En analysant objectivement la situation, Hattori reconnaissait la valeur de ces paroles.

Malgré ça, l'expression de Hattori resta sombre.

"Néanmoins..... Shiba-san a agi de la bonne manière. Elle a choisi une tâche appropriée à son expertise et n'a pas oublié d'avertir tout le monde. Même si les Séquences Magiques rampantes n'avaient pas soudainement disparu avant qu'elle invoque sa magie, elle aurait été capable de faire équipe avec Chef du Groupe Juumonji pour faire face à cette situation."

"A ce moment là, la Chef du Comité, Watanabe n'a pas non plus agi. Étant donné que Shiba-san se spécialise en Magie de Type Glace, n'est ce pas juste une question d'aptitude magique?"

"L'expertise de Watanabe senpai se trouve dans les combats antipersonnel, aussi s'est elle retenu pour le bénéfice de tous. Dans cette situation, je suis capable d'accomplir de plus hauts objectifs.

.....Non, la question qui se pose, ne concerne pas le Pouvoir Magique. Watanabe senpai a correctement et instantanément évalué qu'elle n'était pas la bonne personne pour faire le travail et a fait appel au Chef de Groupe Juumonji pour le faire. Avant même qu'elle ne le dise, il avait déjà réalisé qu'on ferait appel à lui et construisait déjà sa Séquence Magique. Ils sont tous deux arrivés à la conclusion que Juumonji senpai, seul, ne pourrait combattre cette menace, mais n'a

pas paniqué et utilisé sa magie correctement. Shiba-san a déterminé calmement ce qu'elle pouvait faire et l'a bien communiqué.

Le problème n'est pas juste à propos de la puissance du Pouvoir Magique ou la capacité d'utiliser de multiples et diverses magies ou simplement une question technique, mais comme Magicien, d'être capable d'utiliser la magie appropriée dans les bonnes circonstances — oui, le problème n'est pas le talent 'magique', mais le talent de 'Magicien'. Il n'y a aucun doute que son Pouvoir Magique est stupéfiant et qu'en puissance pure, il y a 80% de chance que je perde contre elle. Néanmoins, jusqu'à aujourd'hui, je ne m'étais pas inquiété sur ce point, car la qualité d'un Magicien n'est pas seulement mesuré par le niveau de Pouvoir Magique. Mais — quand comparé à une élève de classe inférieure, je ne manque pas seulement de talent magique mais aussi de talent en tant que Magicien.... C'est vraiment désespérant."

Hattori, de nouveau l'air morose, fit que Kirihara eut une expression signifiant "que vais je bien pouvoir faire de toi".

"Ah~ C'est une question d’expériences de vie, et c'est là que je pense que cette paire de frère et sœur est particulièrement spéciale."

"Frère et sœur?"

Son évaluation n'était pas sur "elle" mais sur "le frère et sa sœur", prenant Hattori au dépourvu ce qui l'obligea à regarder, de manière perplexe, Kirihara.

"Son frère..... j'ai l'impression qu'il a déjà tué."

"Tué?"

La voix incrédule de Hattori semblait choquée.

"Oui, il a déjà tué, et pas seulement une ou deux personnes."

".....Tu ne fais pas références à des homicides, n'est ce pas? Tu fais référence à des expériences de combat?"

"Il donne cette impression..... Tu te souviens que mon père était dans la marine, non?"

"Oui, je me souviens qu'il a été déployé à l'île de Tsushima à plusieurs reprises?"

Cela semblait être un changement abrupte de sujet, mais Hattori ne s'attarda pas là dessus et continua de discuter avec Kirihara.

"Papa n'était que caporal, mais d'un autre coté, vu qu'il était de rang inférieur, il a été déployé sur les lignes de front où il a connu beaucoup de soldats qui passaient leur temps dans les tranchées. De temps à autre, quelques uns compagnons de guerre de Papa viennent à la maison et ils dégagent une toute autre impression que les gens normaux. Peu importe que ce soit en kenjutsu ou en tir, peu importe à quel point on s'entraîne au tactiques de combat et arts martiaux, la pure intention de tuer qui se dégage des soldats qui ont tué dans le feu de l'action, diffèrent des athlètes qui ne l'ont pas fait. Connais tu les détails derrière l'incident du mois d'avril?"

Un autre changement de sujet.

"Pourquoi ramènes tu ça.... J'ai entendu comme quoi c'était dû à des terroristes anti-magie. Je sais seulement que ce cas a été pris en charge par Juumonji."

Hattori était mécontent du brusque changement de direction mais ne montra pas son agacement. Instinctivement, il sentait que tout était lié.

"Vraiment..... Bien que je ne puisse entrer dans les détails..... Mais vu que c'est toi, je pense que ça ira. J'étais présent lors de l'attaque du siège des terroristes, ainsi que les Shiba."

"......Vraiment?"

"Je peux comprendre pourquoi tu demandes ça, mais c'est la vérité. Et, c'est là que j'ai vu — les instincts naturels de l'aîné des Shiba."

"Instincts naturels?"

Comparé aux paroles actuelles de Kirihara, sa voix semblait trépider, ce qui le poussa à renvoyer, sur le champ, une question.

"Oui, instincts naturels ou tout du moins une partie. C'était terrifiant. Il avait les mêmes qualités que les soldats des lignes de front mais son aura meurtrière était bien plus intense, comme une épaisse d'aura meurtrière le couvrant comme un manteau. Il semblait si dangereux que cela suffisait pour que j'en frissonne, tellement que je me demandais ce que fais quelqu'un comme lui au lycée."

La bouche de Kirihara semblait dire cela, mais il semblait très agité.

".....Il devait être impossible de cacher son age."

Hattori feignait la naïveté. Cette façon de prendre la tangente était une meilleure manière de mesurer son étonnement que l'expression de son visage.

"Cela montre seulement que l'age n'est pas égal à expérience."

Kirihara pouvait comprendre pourquoi son ami était aussi abasourdi, mais vu qu'il était dans la même position, il ne prit pas les choses à la légère et se prit à sourire ironiquement en répondant.

Hattori semblait vouloir poser d'autres questions, mais cette fois, sa voix était teintée d'hésitation.

".....Shiba-san aussi?"

Son hésitation était principalement dû à la mentalité "incapable de croire". D'autre part, Kirihara y semblait immunisé — sûrement fortement influencé, depuis printemps, par sa petite amie — et répondit franchement à la question de son ami.

"Je n'ai pas exactement vu ce qu'elle a fait, mais, compte tenu que son frère comptait l'amener sur les lieux du combat, elle n'est définitivement pas, une fille ordinaire. A partir d'aujourd'hui, tu sauras que les plus belles roses ont leurs épines, pas seulement ça, elle est plus sûrement comme un paon qui possèdent à la fois des serres acérées et un bec malveillant capable de chasser les serpents venimeux, non? La poursuivre est comme avoir une volonté de mourir. L'ignorance est bonheur, n'est ce pas?"

Les deux dernières phrases de Kirihara n'étaient pas destinées à Hattori, mais aux élèves qui cernaient Miyuki dans le bus.

"Mais je n'aurais jamais pensé que Hattori avec 'ce genre de personnalité' dirait quelque chose comme ça."

Hattori était encore en train de digérer toutes ces informations quand Kirihara lui envoya un sourire amusé.

".....Que veux tu dire?"

Le sens caché derrière ce sourire semblait aller, pour Hattori, dans le mauvais sens, ce qui l'incita un renvoyé une réplique énervée.

Toutefois, le sourire ravie de Kirihara ne sembla absolument pas

diminuer.

"La qualité d'un Magicien n'est pas seulement mesuré par le niveau de Pouvoir Magique, hein? La Présidente, ne serait elle pas ravie que tu ait dis, toi même, ces paroles?"

"Hum.....!"

L'air sombre, Hattori regarda Kirihara.

Pourtant, Kirihara maintint son éclatant sourire, pas face à la réaction excessive de Hattori, son sourire ne fit que s'élargir davantage, ce qui fit que Hattori fut le premier à se retourner.

"Mettons la qualité de coté pour le moment, mais le Pouvoir Magique n'est définitivement pas le seul indicateur de force."

Sans prévenir, Hattori recula d'un pas, signifiant clairement son intention de laisser Kirihara. Malgré ça, Kirihara ignora cela et continua de suivre Hattori tout en continuant de parler.

"La différence entre Blooms et Weeds se tient aux différences dans les scores techniques de l'examen d'entrée. Il y a certainement des élèves du Cours 1 qui progressent rapidement, mais il y en a aussi qui stagnent. Prends Chiyoda par exemple, elle est complètement différente de l'arrogante qu'elle était l'été dernier qui se reposait sur les lauriers de son talent. Les élèves du Cours 2 sont pareils, et, aussi longtemps qu'ils ne s’autodétruisent pas, il y en a sûrement qui deviendront fort? ...Non, ce n'est pas pure spéculation, il y a quelque gens 'capables' au sein du Cours 2, et doublement dans les nouveaux de cette année. Et, bien sur, je ne dis pas ça parce que j'ai perdu face à l'aîné des Shiba."

Les épaules de Hattori tremblèrent violemment.

Voyant cela, Kirihara pensa, "Ah, c'est vrai, lui aussi s'est fait battre par lui."

"Dans tous les cas, je reconnais qu'il est actuellement plus fort que moi. Même si ce type approche des niveaux de force comme trichant, je ne compte admettre être vaincu pour toujours. Je vais continuer de m'entraîner pour triompher la prochaine fois que je lui lancerais un challenge. Si j'abandonne parce que je ne suis pas aussi capable que lui, pour le moment, alors, je serais pour toujours un perdant.

Actuellement, de nombreux élèves du Cours 2 abandonnent car ils ne sont pas aussi capables que les autres, raisons pour lesquelles, ils ne progressent pas. Nous n'avons aucune obligation de les accepter comme égaux. D'un autre coté, pour ceux qui continue de chercher une plus grande force, nous n'avons pas plus de raisons de les mépriser."

Hattori n'avait toujours aucune réponse alors qu'il s'avançait rapidement et sans rien dire vers sa chambre.

Kirihara haussa les épaules et se retourna devant le frère et la sœur qui avaient été leur sujet de conversation.

Pas très loin derrière Kirihara, la jeune Shiba regardait solennellement son frère aîné.

Apercevant cela, Kirihara pensa, "Espérons que rien d'ennuyeux n'arrive".

Et se moqua rapidement de lui même pour cette pensée fortuite.

◊ ◊ ◊

L'intuition de Kirihara était dirigée dans la direction qu'il désirait le moins, et toucha son fragile mais aussi sincère espoir.

"Alors, d'après Onii-sama, l'incident plus tôt n'était pas un accident.....?"

Sa sœur fronça les sourcils alors qu'elle posait cette question, auquel Tatsuya acquiesça subtilement alors qu'il poussait le chariot.

"La trajectoire du véhicule était trop étrange et l'enquête a donné les résultats attendus. Il y avait des restes de magie dans le véhicule."

Tatsuya modula la hauteur de sa voix pour éviter les oreilles indiscrètes et Miyuki prit le même ton bas que son grand frère.

"Mais je n'ai rien vu....."

Bien que le sens littéral de ces mots était un déni, Miyuki ne douta à aucun moment de son frère.

Elle était au premier rang lors de "l'accident" et ce du début à la fin.

Mais jusqu'au dernier moment, elle n'avait ressenti à aucun moment l'usage de magie venant de l'autre coté.

Son frère était différent. Miyuki ne pouvait voir que le "présent", mais tout le "passé" faisait partie des compétences de son frère.

Miyuki savait que s'il avait déterminé qu' "il y avait des restes de magie", alors c'était la vérité.

"A ce moment là, ils ont utilisé de la magie de petite envergure durant des espaces très courts, ce qui est une technique de haut niveau pour éviter qu'il y ait des restes de Psions de Séquence Magique sur la scène. Notre adversaire était sûrement un agent qui a suivi un entraînement spécial, ce qui est d'autant plus pitoyable vu qu'il n'a été qu'un sacrifice."

"Un..... sacrifice?"

Cette phrase avait une signification inquiétante, causant Miyuki de parler plus bas que ce qu'elle pensait.

"La magie a été utilisé, durant l'incident, trois fois. Tout d'abord, la magie qui a fait éclaté le pneu, ensuite, la magie qui a fait se balancer le véhicule, et pour finir, cette qui a servi à appliquer une force en diagonale pour utiliser la rambarde de protection comme rampe de lancement.

Toutes trois furent lancées au sein même du véhicule, afin de cacher le fait qu'ils ont utilisé la magie. En réalité, la plupart des Magiciens présents n'ont rien détecté, toi incluse. 'A ce moment là', je ne m'en suis pas rendu compte, cela montre à quel point ça a été bien réalisé. Spécialement la dernière technique, pour le Magicien à bord d'un véhicule qui se balance d'être encore capable de déterminer le moment exact de l'impact avec le rail a dû recevoir un entraînement intense."

"Alors, celui qui a utilisé la magie était....."

"Le coupable est le Magicien dans le siège du conducteur. Autrement dit, une attaque suicide."

Miyuki s'arrêta et baissa la tête.

Ses épaules tremblaient légèrement.

"Quel infâme.....!"

Ce n'était pas l'expression de tristesse mais de fureur.

Sa sœur n'était pas mal guidée par de la compassion envers le criminel, mais d'un profond sentiment de colère à celui qui en avait donné l'ordre. Satisfait, Tatsuya hocha la tête.

"Les criminels et les terroristes sont, à l'origine, la racaille de la Terre, et leurs chefs sont rarement du genre à jouer avec leur propre vie, ce qu'on peut bien voir par cet exemple. Ce serait dans fin si on devait se mettre en colère chaque fois que cela arrive. Mais, je suis plus préoccupé par l'intention cachée de ces actions."

Tatsuya caressa doucement les cheveux de sa sœur pour la réconforter, puis continua de pousser le chariot.

Miyuki le suivit de près.

—Et s'arrêta après moins de dix pas.

Près du mur, une jeune fille assise sur un canapé leur fit signe. Elle portait un short et une paire de sandales tressées, laissant visible ses jambes musclés, ainsi qu'une veste révélant ses épaules.

Tatsuya s'arrêta également, à coté de Miyuki et regarda cette amie qui arrêta de faire signe et se leva de sa place. Elle semblait prendre cet endroit pour station balnéaire tropicale.

"Cela fait une semaine qu'on ne s'est vu, comment ça va?"

"Hum, plutôt pas mal..... En parlant de ça, Erika, que fais tu ici?"

"Pour vous encourager, c'est évident."

Après un bref échange de salutations, Miyuki, l'air perplexe, posa cette question à laquelle Erika répondit franchement.

Bien sur, Miyuki l'avait anticipée mais fut incapable de l'accepter.

"Mais la compétition ne commence que dans deux jours."

"Oui, je sais."

La personnalité d'Erika semblait être celle d'un enfant espiègle, aimant taquiner les autres, rendant les choses difficiles à comprendre.

"Miyuki, j'y vais en premier. A plus tard, Erika."

Tatsuya fit le choix immédiat de laisser tomber ses questions et laissa Miyuki et Erika dans le hall, poussant le chariot débordant vers la

chambre réservée à l'équipe des techniciens.

"Ah, euh, à plus tard.... Et, laisses moi au moins te saluer?"

"Désolé, les senpais de l'équipe des techniciens attendent Onii-sama. Alors pourquoi es tu là deux jours en avance?"

Miyuki s'excusa à la place de son frère avant de recommencer à poser des questions.

"Ce soir, c'est la réception de bienvenue, non?"

"....."

"....."

".....Et?"

Miyuki attendit qu'Erika réponde, mais elle sentait que peu importe le temps qu'elle attendrait, elle n'aurait pas de réponse claire. Aussi, Miyuki fut contrainte de changer de sujet.

"Je devrais sûrement de prévenir. Le personnel non lié n'a pas accès à la réception, et ça inclut les élèves."

"Ah, ne t'inquiètes pas, nous sommes couvert."

"Ah? Tu a dit....."

"Erika, la clé de la chambre..... Eh, Miyuki-chan?"

Miyuki voulait demander "Tu as dit quelque chose comme étant couvert?", mais fut interrompue par la voix d'une jeune fille qui s'approchait.

"Mizuki, tu es là aussi?"

"Miyuki-chan, Bonjour..... Qu'y a t'il?"

Mizuki entendit les questions de Miyuki et la salua chaleureusement, mais remarqua que Miyuki se contentait de la fixer au lieu de la saluer, la poussant à sourire maladroitement.

".....Plutôt voyant."

"Euh..... vraiment?"

Mizuki se regarda elle même, mal à l'aise. Aujourd'hui, elle portait un fin vêtement avec des bretelles et une jupe s'arrêtant bien au dessus du genou. Pour certaines personnes, elle était plus attirante qu'Erika.

La première impulsion fit que Miyuki pensa quelque chose du genre "Est ce que tout le monde prend cet endroit pour une station balnéaire tropicale?".

"Erika a dit de ne pas s'habiller de manière trop conservatrice, alors....."

"Vraiment....."

Miyuki voulait parler de certaines choses avec Erika, mais voyant cette dernière feindre l'ignorance et détourner le regard, Miyuki abandonna cette cause perdue.

Miyuki pouvait maintenant compatir sur les raisons de son frère à soupirer quand il faisait face à Erika.

"Mizuki, je le dis pour ton bien, mais tu devrais te changer. Cette tenue est adorable et te va à la perfection, mais je pense que l'endroit est mal choisi."

Toutefois, Miyuki ne fit pas que sourire et hocher la tête. Sa personnalité était légèrement plus innocente que celle de son frère, et plus obstinée également.

"Est ce Vrai.....ment? .....le cas?"

"Oui, tu devrais."

Mizuki dévisagea Erika comme on le lui avait dit, alors que Miyuki regardait aussi Erika tout en hochant la tête, en accord.

"Eh~ Vraiment~?"

Erika arrêta finalement de jouer la comédie et en colère, montra son désaccord.

"En parlant de clés de chambres, où se trouvent les vôtres?"

.....Cette fois, ce fut au tour de Miyuki cette boutade.

"Oui."

Mizuki répondit alors qu'Erika fulminait de son coté, mais elle n'insista pas sur Miyuki.

Durant les quatre derniers mois, Erika avait appris lors des interactions mutuelles que cette magnifique jeune fille qui semblait faire preuve de clémence, même envers les insectes, avait une forte et impitoyable

personnalité.

"Je n'arrive pas à croire que ce soit des chambres à barreaux.... Non, plus important encore, c'est étonnant que l'hôtel vous permettent de rester. Je pensais que les gens ordinaires n'avaient pas accès....."

"C'est là où tu fais appel à tes connections."

Son humeur améliorée, Erika révéla la réponse sans aucune culpabilité, causant Miyuki d'éclater de rire.

"Ainsi, voici donc ce qu'est la Famille Chiba."

Bien que son ton soit encore celui de la plaisanterie, Miyuki ne faisait pas un éloge superficiel, mais s'approchait de la vérité.

Comme les Clans des Dix Maîtres portaient les numéros 1 à 10 dans leurs noms, les meilleurs familles au sein des Cent Familles comme Chiyoda, Isori, toutes portaient un numéro de 11 à 100. La taille du numéro n'a aucune corrélation avec la puissance de la famille, mais le simple fait qu'une famille possède un nom avec un numéro équivalait à une bonne lignée et était un excellent indicateur du potentiel individuel en tant que Magicien. Les familles de la communauté magique qui avaient un numéro dans leur nom était collectivement connu comme "Famille adhérent au Système de Numéro" (Ce n'est qu'un moyen d'estimer les capacités. Même au sein du Conseil des Étudiants, seule Mayumi venait d'une "Famille adhérent au Système de Numéro").

Erika venait de la Famille Chiba, qui était l'une des premières famille au sein des "Familles adhérent au Système de Numéro".

La Famille Chiba était renommée pour utiliser des Magies de combat rapproché comme Vitesse personnelle et d'Aggravation. La puissance de la Famille Chiba ne résidait pas dans le fait qu'ils pouvaient habilement utiliser des sorts, mais dans le nouveau système, ils furent pionniers dans l'entraînement et le développement de Magicien de combat rapproché.

A l'heure actuelle, il était dit que, parmi les Magiciens servant dans la police ou dans l'infanterie militaire, que près de la moitié d'entre eux avait été directement entraîné par le système de la Famille Chiba. C'était aussi le cas pour la marine ainsi que l'armée de l'air. Toute unité qui pouvait faire face à des situations de combat rapproché demandait

souvent une formation à la Famille Chiba.

En fonction uniquement des connexions avec les troupes en service actif, l'influence de la Famille Chiba pouvait éclipser celle des Clans des Dix Maîtres.

"Mais, est ce que ça ira? Je pensais qu'Erika détestait utiliser l'influence de sa famille....."

"Je n'aime pas qu'on me vois que comme une 'fille de la Famille Chiba'. Les connections sont faites pour être utilisées, si vous l'ignorez, ce sera à votre perte."

S'il s'agissait de quelqu'un d'autre, cette réponse aurait pu causer une atmosphère de combat, mais vu que les deux autres furent Miyuki et Mizuki, elles ne le prirent pas à cœur.

"Héhé, tu as raison. Maintenant, je dois m'occuper de mes bagages. J'ignore comment vous allez y prendre part, mais on se verra au dîner."

Miyuki se dirigea vers l’ascenseur alors qu'Erika lui faisait signe de la main et sous le regard de Mizuki.

"Hé, Erika, ne pourrais tu pas porter tes propres bagages?"

"Shibata-san, tes bagages sont par là. Je suis désolé pour les amener sans permission, mais il y avait trop de monde au comptoir."

A mi-chemin, Miyuki entendit deux jeunes garçons héler Erika et Mizuki.

L'une des voix était familière, mais elle ne connaissait pas l'autre.

Ainsi, ce n'était pas deux filles mais deux paires de garçons et filles.

Miyuki sourit secrètement sans s'arrêter ni tourner la tête.

◊ ◊ ◊

A propos, pourquoi le bus de Miyuki était il arrivé deux jours avant le début de la compétition?

C'était dû au banquet qui avait lieu dans la soirée.

Étant donné qu'il s'agissait d'un événement lycéen, aucune boisson

alcoolisée n'était servie. Le banquet, genre buffet, sans place prédisposée pour les participants, semblait faire comme une mini cérémonie d'ouverture. Comparé à l'aura festive des années précédentes, l'anxiété régnait en maître cette année.

"En réalité, je n'avais vraiment pas envie d'y assister....."

En tant que Présidente du Conseil des Étudiants, c'était quelque chose que ne Mayumi ne pouvait et ne devait dire, aussi Tatsuya garda ça poliment pour lui.

L'équipe des Techniciens faisaient partie des membres auxiliaires, mais considérés comme membre officiel des activités, ils furent dans l'obligation d'assister. Tatsuya, qui était malade à souhait lors d'événements tels que les réceptions, ou banquets, était, en privé, d'accord avec Mayumi.

La tenue de rigueur était l'uniforme scolaire, aussi n'avaient ils pas à s'inquiéter pour ça. Cela dit, l'uniforme emprunté ne lui allait pas vraiment, ce qui ne pouvait qu'augmenter son désir de ne pas y assister.

"Devrions nous en acheter un autre.....?"

Sa bougeotte se fit finalement remarquer.

Miyuki fronça les sourcils d'inquiétude alors qu'elle regardait Tatsuya.

"Ce n'est rien, nul besoin de s'inquiéter pour ça. Désolé de t'inquiéter."

Cette séquence fit honte à Tatsuya, rendant difficile de discerner qui était l'aîné. De plus, In addition, il s'agissait d'un événement officiel, avec présence obligatoire, ainsi, personne n'avait le droit de sentir mal à l'aise ou de se plaindre.

"Non, Onii-sama, je t'en prie, ne dis pas ça."

Elle remarqua sûrement l'ajustement rapide dans l'expression de Tatsuya et réalisa qu'il avait effacé sa mauvaise humeur.

Miyuki sourit joyeusement.

"OK, ces deux là, ils pourraient arrêter de flirter."

Les paroles légèrement moqueuse poussa Tatsuya à regarder sur le coté — strictement parlant, il dut regarder vers le bas — pour voir Mayumi cacher son sourire alors qu'elle les regardait.

"Je n'en reviens pas que vous ayez dit 'flirter'..... C'est quoi, ça?"

Sur Internet, Tatsuya avait lu que des jeune femmes étaient affligées par une maladie qui les poussait à voir toutes les interactions entre les personnes de sexe différents comme des romances. En vérité, Tatsuya avait plusieurs personnes autour de lui souffrant de cette même maladie, aussi ne voulait il s'étendre sur le sujet.

Toutefois, Mayumi semblait être revenue à ses vieilles habitudes et voulait juste l'asticoter un peu.

Tatsuya était depuis longtemps habitué à ne pas recevoir de réponse claire, mais usa quand même de ses yeux pour pousser Mayumi à répondre.

Mais le regard de Mayumi n'était pas posé sur Tatsuya, mais plutôt quelqu'un près de lui.

En voyant qu'elle essayait de ne pas éclater de rire, Tatsuya suivit son regard.....

"Miyuki..... Pourquoi es tu soudainement gênée?"

Sa sœur baissa la tête, de honte.

"Tout le monde, allons y."

Mayumi fit disparaître son attitude taquine et exhorta tout le monde à avancer, de très bonne humeur, pour des raisons inconnues.

A un certain niveau, Tatsuya était irrité qu'il ait été transformé en objet d'amélioration de l'humeur, mais en voyant le visage de Mayumi disparaître avec une démarche légère, il pensa soudainement "Aller, oublions ça".

◊ ◊ ◊

Parmi les gens participants à la Compétition des Neuf Lycées, il y avait 360 participants et plus de 400 membres si on y ajoutait les auxiliaires.

En surface, la participation de tous les membres étaient obligatoires, mais il y en eut qui trouvèrent des raisons pour ne pas y aller.

Malgré ça, c'était un événement convivial réunissant plus de 300 personnes.

La zone de rencontre était suffisamment grande pour s’accommoder de la présence du grand nombre d'invités et des serviteurs.

Comme prévu,les employés de l'hôtel et le support de la base locale, seuls, ne furent pas suffisants pour tout couvrir. Il y avait une multiple d'employés temporaires qui étaient évidemment des adolescents, recrutés spécifiquement pour cet événement qui marchaient en uniformes de serviteurs, ce qui n'était pas le moins du monde surprenant.

Toutefois — trouver un visage familier parmi ces employés temporaires constituait clairement une surprise.

Après un court discours — heureusement, il fut assez court pour ne pas créer l'ennui — Tatsuya se rendit immédiatement vers la salle à manger quand une voix familière résonna dans son dos.

Quand cette voix demanda "Voudriez vous un verre?", Tatsuya se retourna pour trouver Erika, tenant d'une seule main un plateau de boissons.

"Ainsi, voilà ce que tu voulais dire par être couvert....."

"Ah, Miyuki t'en a parlé? Alors, surpris?"

"......Très."

Erika eut un très court sourire amusé alors que Tatsuya ne prit pas la peine de sortir une réplique pleine d'esprit, il se contenta d’acquiescer.

"Je n'arrive pas à croire que tu te sois infiltrée ici....Bien que ça te ressemble de faire ça."

Après, c'était juste ce genre d'endroit.

Même s'ils embauchaient des employés à temps partiel, ils ne feraient pas facilement appel à des lycéens.

Par ailleurs, il y avait une restriction d'age. Même dans un banquet sans alcool, ils feraient quand même attention à cette restriction. En fait, la plupart des serveurs et des serveuses semblaient avoir entre vingt et trente ans.

Il devrait sûrement dire "comme prévu de la part de la Famille Chiba".

Mais il semblait qu'elle ait utilisé ses connections de la mauvaise manière.

"En passant....."

"Hum? Qu'y a t'il?"

"Aucune importance....."

Le ton de Tatsuya était confus, ce qui ne lui ressemblait pas.

Après tout, il était sûrement malvenu de dire "A propos, tu as beaucoup changé" en face de la personne en question.

Erika devait aussi savoir que l'age était différent.

Son maquillage faisait considérablement plus mature.

Même de près, elle semblait avoir le même age que les autres serveuses.

Habituellement, Erika donnait l'impression qu'elle était une magnifique jeune fille plein de vue qui collait parfaitement à son age, mais son mince visage était aussi parfaitement adapté à un look mature.

(Et seulement elle.....?)

Tatsuya remarqua, à sa grande consternation, que ses pensées étaient un peu désordonnées.

Erika n'était pas venu seule.

Mizuki devait aussi être là.

Mizuki n'aimait pas les endroits avec tant de monde, aussi, il était difficile de dire qu'elle convenait à la relation à la clientèle, alors serait elle capable de servir dans ce genre de situation?

"Hé, Erika, ta robe est superbe. Je vois maintenant ce que tu voulais dire."

Miyuki s'était joint à la conversation et au bon moment suite au silence de Tatsuya.

"C'est ainsi. Alors, n'est ce pas mignon? Mais Tatsuya-kun ne semble pas disposé à commenter."

Erika fit tourner à droite et à gauche son uniforme de servante de style Victorien, doté d'une mini jupe, en dansant en avant et en arrière et en ayant un ton malheureux dans la voix.

Tatsuya, soudainement assiégé, son esprit très souple commença à préparer une riposte mais Miyuki le devança.

"Erika, il est inutile, pour ces choses, de faire appel à Onii-sama."

Miyuki sourit et secoua la tête et, par rapport à Tatsuya, ce fut Erika qui fut surprise en regardant Miyuki.

Le commentaire de Miyuki ne couvrait pas Tatsuya ni niait ses paroles, ce qui étonna complètement Erika.

—Néanmoins, ce ne fut ainsi que parce qu'Erika faisait des conclusions hâtives.

"Onii-sama ne serait pas affecté par les apparences extérieurs comme la tenue d'une femme, mais il admire nos qualités innées, ainsi, dans ce genre de situation, une tenue spéciale n'a aucun intérêt à ses yeux."

Tatsuya pensait que l'évaluation faite par Miyuki était à la fois trop élevé et trop bas.

Dans ce cas, Tatsuya était préoccupé par ses autres amis — et plus spécialement Mizuki, ainsi, il ne prêté pas d'attention à la tenue d'Erika. Bien sur, il est aussi capable de faire des compliments sur la mode féminine et, si les vêtements étaient trop osés, il n'aurait certainement pas su où regarder.

—Non, dans cette situation, le problème n'était pas les vêtements eux mêmes, mais la personnalité qui se cachait en dessous.

"Oh, alors c'est ainsi, Tatsuya-kun n'est pas intéressé par le cosplay."

"C'est du cosplay?"

"Je ne pense pas, mais je crois que les garçons me voient sous cet angle."

Les deux jeunes filles laissèrent le réticent Tatsuya sur le coté et continuèrent.

"Par garçons, tu veux dire Saijou-kun?"

"Ce mec n'est même pas capable d'exprimer son opinion. Miki est celui qui a dit que c'était du cosplay, mais je l'ai déjà sévèrement

châtié pour ça."

La dernière phrase, faisant allusion au danger, parvint clairement aux oreilles de Tatsuya.

Pourtant, Miyuki ne sembla pas comprendre.

"Miki?"

Quand la personne qui parle, fait soudainement allusion au surnom d'un inconnu, il était naturel que Miyuki se focalise dessus.

".....Qui est ce?"

A la question de Miyuki, Erika eut une expression d'étonnement.

"Ah, c'est vrai, Miyuki, ne le connais pas."

Erika répondit doucement et s'en alla avant que quiconque ait pu l'arrêter.

"Beaux mouvements, on dirait qu'elle a un excellent sens de l'équilibre....."

Voyant Erika passer à travers la foule avec un plateau et sans rien renverser, Tatsuya fut honnêtement impressionné.

Miyuki pensa que ce commentaire était un peu hors sujet, mais continua malgré tout.

"Que se passe t'il?"

En fait, Miyuki ne s'attendait pas à une réponse directe.

Ce fut seulement parce qu'elle était perdue qu'elle demanda.

Néanmoins, son frère décida de lui fournir une réponse claire.

"Elle est allée chercher Mikihiko.

Tu as déjà sûrement entendu le nom de Mikihiko Yoshida?"

"Il me semble que c'est un camarade de classe d'Onii-sama, n'est ce pas?"

Miyuki se souvenait que ce nom avait créé une grande controverse durant l'annonce des scores finaux.

"Il a grandi avec Erika. Miyuki, tu ne l'as pas encore rencontré, alors elle veut sûrement faire les présentations?"

Pas étonnant, cela ressemblait bien à Erika de faire ça.

Y compris le départ sans aucune explication.

"Miyuki, te voilà."

"Tatsuya-kun est aussi là."

Alors que tous deux regardaient dans la direction où avait disparu Erika, deux étudiantes engagèrent la conversation.

"Shizuku, me cherchais tu?"

"Honoka, Shizuku..... Seriez vous toujours ensemble?"

A propos, Tatsuya les avait toujours vu agir de concert, aussi cette question n'était le résultat que de sa curiosité et d'aucune intention de sonder plus profondément.

"C'est parce que nous sommes amies, que nous n'avons aucune raison de nous séparer."

"C'est vrai."

Shizuku répondit sans honte, ce qui poussa Tatsuya de glousser ironiquement à sa ridicule question.

Depuis le début du mois dernier, Tatsuya avait commencé à les appeler par leurs prénoms.

Celle qui "demanda" qu'il fasse ça, fut Honoka, mais du point de vue de Tatsuya, il fut pressé d'accepter par le lourd silence de Shizuku.

"Et les autres?"

Miyuki fut celle qui demanda.

Mais son ton était légèrement étrange.

"Par ici."

Dans la direction que pointait Honoka, une foule de garçons regardèrent rapidement ailleurs.

Les filles de première année de l'équipe des participants étaient aussi se tenaient immobiles à la même place.

"Ils veulent sûrement approcher Miyuki, mais n'oseront pas avec Tatsuya-kun à proximité."

"Qu'est ceci? Serait je un chien de garde.....?"

La possibilité soulevée par Shizuku suscita un soupir impuissant de

Tatsuya.

Il y avaient de grandes chances qu'elle ait raison, ainsi ne pouvait il pas juste en rire.

"Tout le monde doit ignorer comment approcher Tatsuya-kun."

Les paroles d'Honoka étaient censées être réconfortantes, mais Tatsuya savait que c'était hautement possible.

Il était lui même conscient du fait qu'il était "à part".

Habituellement, il était celui qui initiait le contact, mais.....

"Foutaises, tout ce monde là est élèves du Premier Lycée et aussi dans la même équipe....."

Cette bombe fut lancée par une autre voix.

"Chiyoda-senpai."

Kanon s'était joint au groupe de Tatsuya, un verre à la main (bien sur, sans alcool).

Tenant aussi un verre, Isori la suivait de près.

"Kanon, même s'ils le savent, le corps refuse quand même d'obéir, c'est la nature humaine."

"Kei, ce genre d'entêtement n'est autorisé que dans certaines situations."

Kanon et Isori s'appelaient par leurs prénoms.

Après tout, vu qu'ils étaient fiancés, c'était parfaitement naturel.

"Tous deux avez raison, mais il y a en fait une solution bien plus simple."

Tatsuya les soupçonnait d'être des fouineurs, mais s'il entrait dans un débat sur un sujet aussi insignifiant, il en serait plutôt malheureux.

Voulant éviter d’interférer avec la conversation du couple, Tatsuya chercha à en finir rapidement.

"Miyuki, tu devrais aller avec les autres, l'esprit d'équipe est très important."

"Mais Onii-sama....."

"Voyons nous plus tard, mon seul camarade de chambrée est une

machine."

Fondamentalement, les participants et les auxiliaires se voient attribuer des chambres doubles, mais Tatsuya étant le seul 1er année et cours 2 parmi eux, Mayumi avait ainsi pris cette décision pour qu' "ainsi il n'y aurait pas de problème" et où il serait "responsable de la machinerie", et assigné une chambre double, à deux lits (une personne dans une chambre double) à Tatsuya.

"Honoka et Shizuku aussi, passez si vous avez le temps."

Miyuki fut quelque peu irritée, mais elle savait clairement pourquoi Tatsuya disait cela.

".....Je comprends, alors Onii-sama, à ce soir."

"Nous t'appellerons plus tard."

"A plus tard."

Miyuki, Honoka, et Shizuku répondirent l'une après l'autre. Tatsuya sentit un regard mécontent peser sur lui alors qu'il souriait et les saluait toutes les trois, le forçant à se retourner.

"Quelle action mature, mais je pense que ça ne fait que repousser l'échéance."

La relation de Tatsuya et Kanon n'excédait pas celle de simples connaissances.

Kanon n'avait aucune raison de commenter les relations personnelles de Tatsuya, mais Tatsuya savait que Kanon intervenait de galanterie, aussi il choisit d'y faire face directement.

"Repousser l'échéance suffit. C'est parce que cette question n'a pas besoin d'être débattue maintenant, et le temps est la meilleure solution pour régler les problèmes."

"C'est....."

Kanon fut incapable de répliquer, mais vu son expression de réticence, cette jeune demoiselle n'était pas du genre à abandonner facilement.

"Kanon, Shiba-kun a raison, la vitesse n'est pas la solution à tout."

"Malgré tout, tu manque vraiment l'air de la jeunesse."

Le commentaire d'Isori était censé briser la glace plutôt que d'aider

directement Tatsuya, mais cela fut ruiné par l'intervention de quelqu'un d'autre.

"Mari-senpai."

Envers Mari, qui venait de s'incruster dans la conversation, Tatsuya ne réfuta pas ses paroles et hocha simplement la tête.

"Isori, Nakajou te cherche."

Pourtant, Mari semblait avoir pris en compte à l'avance de la réaction de Tatsuya et alla directement à l'essentiel. On dirait bien qu'elle n'était pas juste là pour l'ennuyer.

"Excusez moi, où se trouve Nakajou-san?"

"Véhicule de fret n°1. Les VIP sont sur le point de prendre la parole, alors finissez en rapidement et ramènes Nakajou ici. Les VIP sans importance sont une chose, mais ce serait terrible pour la réputation de l'établissement si on venait à manquer les paroles du Patriarche."

"C'est vrai, je comprends."

"Mari-senpai, nous y allons."

Isori suivit ses ordres et quitta rapidement les lieux, avec Kanon, naturellement sur ses talons. Les voyant partir, Mari se tourna pour faire face à Tatsuya.

"On dirait que la taille te convient."

"Juste un peu serré sous les bras."

Mari fit un commentaire alors qu'elle touchait l'uniforme que portait Tatsuya et Tatsuya répondit en se regardant lui même.

"Rien qu'on puisse y faire, vu qu'il s'agit d'un uniforme de secours. Même si les mesures sont les mêmes, il est impossible de prendre en compte les différences individuelles. Si tu portais une taille plus grande, la taille serait beaucoup trop large."

"C'est vrai, on ne peut rien y faire."

Les paroles de Mari sonnaient comme si elle y avait ajouté de l'ironie alors que son ton semblait comme si elle gesticulait — bien qu'elle n'ait pas vraiment bougé — Tatsuya décida de l'imiter.

"Ne serait il pas mieux d'en acheter un nouveau?"

Il n'y avait aucune mauvaise intention derrière les paroles de Mari.

"Ce serait du gâchis que d'en acheter un nouveau que je ne porterais que deux fois. S'il s'agissait d'un emblème qui pouvait s'enlever, alors ça irait, mais ça....."

Tout en disant ça, Tatsuya regarda au niveau de la poitrine gauche.

L'emblème à huit pétales.

C'était un événement inter-lycée, aussi était il important d'identifier les autres via l'emblème des établissements — raison pour laquelle Tatsuya devait porter cet uniforme.

"peut être pas seulement deux fois. Il y a la compétition de thèse de recherche. Il y a aussi aucune garantie que tu ne sois pas promis au Cours 1."

Mari souriait tout en disant cela, mais son regard était très sérieux.

Tatsuya répondit en fronçant les sourcils:

"Même si je suis sélectionné pour la compétition de thèse de recherche, porter mon propre uniforme ne sera pas un problème. Par ailleurs, il est impossible que je sois promu au Cours 1, car il n'y a pas de précédent ni même de règle pour ça."

Les paroles de Tatsuya firent rire Mari.

"Précèdent? Je pense que ton statut actuel est déjà sans précédent, non? L'histoire n'a jamais vu un élève du Cours 2b comme toi, alors tu ne peux nier la possibilité qu'il n'y a pas de précédent. Plutôt que dire que c'est sans précédent, tu devrais viser à devenir ce 'précédent' et ouvrir la voie pour des élèves de classe inférieure comme toi."

"....."

Voyant l'expression peinée de Tatsuya, Mari éclata de nouveau d'un rire léger.

"Bien, je dois aller les gros bonnets des autres écoles, envie de te joindre à moi?"

".....Non merci, Erika doit être en train de me chercher."

Au moment Tatsuya fit mention d'Erika, une lueur de doute traversa les yeux de Mari.

Cela devrait servir comme attaque à l'avenir, hein? Une telle pensée traversa l'esprit de Tatsuya, mais tous deux partageaient un certain passé, aussi était il inapproprié de plaisanter.

Tatsuya regarda silencieusement Mari s'éloigner.

"Eh? Où est Miyuki?"

Comme le prévoyait Tatsuya, Erika revint suivi de Mikihiko.

"Je l'ai envoyé vers les autres étudiants. Elle passera par ma chambre ce soir, on pourra alors y faire les présentations."

"Ah, d'accord."

La première moitié était à l'intention d'Erika, la seconde de Mikihiko.

Plutôt que regretter, la réaction de Mikihiko fut celle d'une soupir de soulagement.

"......Nul besoin de te forcer."

"......Ah?"

Il ne s'aperçut pas tout de suite que Tatsuya s'adressait à lui.

Raison pour laquelle la réaction de Mikihiko fut un peu lente.

"Attends, ce n'est pas ça! C'est vrai que je suis un peu nerveux, mais....."

"Ew~ Les garçons aiment impressionner les jolies filles."

"Erika est tout aussi belle, surtout aujourd'hui."

"Hein? Attends un instant, arrête ça....."

"Vraiment?"

Envers la taquine Erika, Tatsuya frappa le premier en usant de ses propres tactiques contre elle, puis exhorta Mikihiko à avancer.

"Tatsuya, toi..... Non, je suis juste embarrassé de porter ça à notre première rencontre."

Mikihiko bégaya puis s'arrêta, et alors qu'il secouait la tête, eut une expression fatiguée.

Entendant cela, Tatsuya scruta de nouveau et attentivement les uniformes de Mikihiko et d'Erika.

Mikihiko portait une chemise blanche à col avec un nœud papillon

noir et un gilet.

Erika portait une robe noire qui allait et venait en avant, avec un tablier blanche et une coiffe.

Simplement, ils n'étaient pas majordomes et servantes, mais serveurs et serveuses.

"Je ne pense pas que ce soit étrange, les autres, ne portent ils pas la même chose?"

Tous les serveurs dans la pièce portaient une tenue similaire à celle de Mikihiko.

"Tu vois, Miki est trop complexé."

"Mon prénom, c'est Mikihiko."

Il était parfaitement évident de par leurs tons et expressions qu'ils avaient l'habitude d'agir comme ça, l'un envers l'autre.

Mikihiko semblait vraiment mal à l'aise dans sa tenue. Cela venait sûrement du fait que sa famille était traditionnelle et détestait à s'habiller comme des serviteurs.

"A propos, où se trouvent les deux autres?"

Tatsuya voulait savoir pourquoi ils travaillaient là, et finit par se décider.

"Penses tu vraiment que Léo serait un bon serveur?"

"Au moins, il devrait savoir se contrôler....."

Tatsuya essaya subtilement de défendre son ami, l'expression rieuse d'Erika resta inchangée.

"Mizuki a dit qu'elle n'aimait pas cette tenue, peut être est elle pour ça comme Miki?"

"Mon prénom, c'est Mikihiko!"

"Ouais, ouais~"

Plutôt irrité, Mikihiko protesta, auquel Erika montra son accord avec désinvolture avant de se retourner vers Tatsuya.

"A cause de ces raisons, tous deux travaillent en coulisse. Dans la cuisine, Léo fait le travail manuel et Mizuki est en charge des plats."

Tatsuya ne savait pas "quelles raisons" ils avaient, mais fut capable de comprendre la signification des paroles d'Erika. Sûrement.

"Car ils se débrouillent bien avec les machines."

"Oui, leurs apparences sont vraiment trompeuses."

Dans l'époque moderne, que ce soit pour le travail portuaire et laver les aliments, la main d’œuvre était rarement appliquée directement.

Incluant tous les détails, les machines pouvaient remplacer tout travail manuel.

Autrement dit, tous deux étaient responsables d'opérer les systèmes automatiques de la cuisine.

"Au départ, je servais aussi en support, alors pourquoi m'as tu appelé ici?"

Sûrement parce que Mikihiko était l'opposé de Tatsuya dans ce domaine, comme la personne en question, il était incapable de comprendre pourquoi et aussi peu disposé à s'adapter ainsi.

"Ne t'ai je pas déjà maintes fois expliqué que cela devait être une erreur de gestion?"

"Ce n'est pas une explication!"

"D'accord, d'accord. Arrête de t'agiter. Nous ne sommes que des intérimaires, mais no doit suivre les horaires. Regarde, la plat là, est vide."

"......Erika, la prochaine fois, je t'aurai."

Mikihiko se dirigea vers les tables, mais aux oreilles de Tatsuya, ses paroles n'étaient pas du tout "sérieuses".

"Manifestement, en premier lieu, c'est Mikihiko qui a oublié....."

A contrecœur, Erika dit cela en le regardant s'éloigner, mais il était difficile de déchiffrer son humeur en se basant sur sa voix et son visage.

Pourtant, Tatsuya pensait qu'ils ne s'agissaient pas des véritables sentiments d'Erika.

"......J'ignore si il y a d'autres raisons, mais ne devrais tu pas y aller plus gentiment avec lui?"

Erika ne sembla pas en comprendre la signification, aussi prit elle son temps pour répondre.

".....Il n'y a pas d'autres raisons. Mais tu as raison, j'y suis allé fort. Je savais que Miki serait mal à l'aise dans ce genre de situation, mais j'ai quand même eu....."

"envie de l'embêter?"

"Hum~ J'imagine? Il tourne trop autour du pot, ce qui m'énerve à chaque fois que je le vois comme ça. Maintenant, je comprends pourquoi il ne peut pas sourire ouvertement, mais je peux pas reconnaître pourquoi il refuse de s'énerver..... C'est de l'entêtement à un tel point."

"Comme c'est gentil de ta part."

"Je t'en prie, arrête."

Tatsuya ne faisait que sympathiser avec ses paroles sans aucune autre intention, mais fut surpris par l'inattendue férocité de la réponse d'Erika.

"N'ai je pas dit, que j'y avais été fort? Miki et moi ne sommes pas là de notre propre volonté, nous avons été forcé par nos aînés. Même si j'ai l'air d'être gentille, en réalité, je suis dans le même bateau."

Son attitude d'entêtement était sans nul doute, né d'un cœur obstiné.

".....Je passe les détails. Pas comme si je pouvais faire quelques choses avec les réponses, alors prétendons que je n'ai rien entendu."

Tatsuya n'était pas encore sur le point d'entrer dans un champ de mine.

"Désolé, suffit d'éviter de demander..... A propos, Tatsuya-kun."

Erika ne tint pas rigueur à Tatsuya de ne pas la réconforter.

"Qu'y a t'il?"

"Tatsuya-kun..... est vraiment détaché."

Son ton et ses paroles étaient parfaitement opposés et ne semblaient pas critiques.

".....Voilà un changement abrupt de sujet."

"Mais, je te suis reconnaissante d'être aussi détaché..... Je pense. Tu n'es pas trop gentil, ainsi, je peux évacuer mes pensées sainement et

tant que je le veux. Je ne te fais pas pitié non plus, je me sens alors, pas embarrassée.... Merci."

Le dernier mot était si bas qu'il fut presque inaudible.

Voyant Erika aller vers les tables environnantes, Tatsuya pensa: tout le monde a ses propres ennuis.

Pour un buffet sans places désignées pour environ 400 personnes, les plats ne pouvaient pas être placés de manière centrale. Le buffet occupait presque entièrement la salle de bal du dernier étage de l'hôtel, avec trois tables près de deux murs, une en avant, une au centre, et une autre sur le coté pour un total de neuf tables. Des plats appropriés pour des adolescents étaient constamment réapprovisionnés sur ces tables.

Historiquement, les élèves de chaque établissement se réunissaient autour d'une table.

Cela dit, seuls les simples élèves étaient capables de manger tranquillement, mais les personnes importantes de chaque lycée n'étaient pas aussi détendus.

Au signal de Mayumi, Miyuki salua ses camarades et se déplaça avec les membres du Conseil des Étudiants.

Alors que Mayumi et Suzune saluaient les leaders des autres écoles — et s'engageaient à en savoir davantage. Miyuki examinait attentivement son frère, qui regardait Erika, de derrière eux.

Elle ne fit aucun bruit, ne révéla aucune expression, mais soupira intérieurement.

Miyuki avait de l'estime pour Tatsuya, plus que n'importe qui d'autre (non seulement Miyuki respectait Tatsuya plus que n'importe qui, elle l'estimait aussi plus haut que n'importe qui d'autre).

Elle savait que son frère était imparfait — mais croyait quand même que son frère était, à un certain niveau, surhumain.

Miyuki savait également que son frère possédait de flagrants défauts.

L'un des ces défauts était qu'il était incapable de croire en la bonne volonté des gens envers lui.

Cela pouvait être partiellement imputé à sa monotonie, en ce sens qu'il

était bien incapable de croire en la bonne volonté dirigée vers lui.

Plus important encore, Tatsuya se demandait honnêtement pourquoi des gens avaient une opinion positive de lui.

D'un certain point de vue, c'était inévitable.

Parce que ses propres parents avaient négligé de lui inculquer l'émotion appelée "amour", et avaient même personnellement dépouillé "l'amour" de son esprit.

Miyuki savait qu'il faudrait un miracle pour que les sentiments de son frère lui reviennent.

Malgré tout, voir une magnifique camarade de classe (même aux yeux de Miyuki, Erika était d'une beauté indéniable) se montre un peu affectueuse — Miyuki pensait qu'il pourrait bien s'agir "d'amour" — envers lui, Tatsuya la regarda quand même y aller, derrière ce masque inflexible de logique, causant à Miyuki d'avoir mal au cœur plutôt que d'être tranquille.

Miyuki pensait que son frère ne remarquerait même pas le regard qu'elle dirigeait vers lui.

Ou peut être avait il remarqué qu'elle le regardait.

Mais, en définitive, Tatsuya n'était pas en mesure de comprendre Miyuki ressentait en elle — une fois qu'elle pensa à cela, Miyuki désespéra.

Et devint plus furieuse.

—De cette manière, elle devrait le réprimander sévèrement pour se calmer.

—La personnalité trop sombre de son frère serait sans doute un obstacle sur la voie pour développer des relations sociales significatives.

—Oui, c'était pour son frère, une réprimande née d'amour.

Sous le sourire béat, vu normalement sur des statues, Miyuki prit cette

décision.

.....Il était impossible qu'elle ait pu ignorer les regards qu'elle attirait de son environnement, mais peut être que personne ne pouvait comprendre la réelle Miyuki.

Mayumi et Cie était (de prime abord) en train de parler joyeusement avec les membres du Conseil des Étudiants du Troisième Lycée, qui serait sûrement l'adversaire de plus coriace du Premier Lycée.

En arrière, des élèves de 1ère année du Troisième Lycée chuchotaient entre eux.

S'ils écoutaient l'analyse de stratégie et de force de combats de leurs senpais, alors ils auraient été dignes de la nature militante du Troisième Lycée et même cela aurait touché leurs senpais au cœur, mais.....

"Ichijou, regarde, cette fille, elle déchire, non?"

"Qui donc, dit déchire de nos jours... Quand as tu été au lycée?"

"Tais toi, je ne te demandais pas à toi. Alors, Ichijou, t'en penses quoi?"

"Pourquoi es tu si excité.... C'est inutile, ce niveau de beauté est hors d'atteinte pour toi, alors n'essaie même pas."

"Bon sang, même si je laisse tomber, Ichijou ne devrait pas avoir de problèmes, non? Car Ichijou a l'allure et le cerveau et est de plus un membre des Clans des Dix Maîtres, nous pourrions suivre son sillage, non?"

"Je suis impressionné que tu parles aussi effrontément avec un visage impassible....."

En réalité, ils conversaient ainsi — ce qui ressemblaient beaucoup à des lycéens normaux.

"Masaki, qu'y a t'il?"

toutefois, l'étudiant masculin au centre du groupe, ne répondit pas à l'appui enthousiaste et concentra toute son attention sur la fille en question.

Plutôt que se concentrer sur le charmant visage, sa magnifique aura se distinguait et allait à la perfection de la description "un jeune et beau

guerrier" de manière archaïque. Mesurant près d'un mètre quatre vingt, avec de larges épaules, la taille et les jambes fines ..... l'élève de première année Ichijou Masaki du Troisième Lycée était comme le décrivait ses coéquipiers, un garçon dont l'apparence physique était vraiment populaire avec les dames.

".....Masaki?"

Déconcerté, Masaki regarda la personne qui l'avait appelé. L'autre personne était aussi un garçon de première année au Troisième Lycée dont le corps était bien entraîné mais pas très grand.

".....George, sais tu qui elle est?"

"George" était un surnom, vu que son apparence était parfaitement asiatique et son vrai nom était Shinkurou Kichijouji, était bien japonais. A la question de Masaki, cet élève répondit sur le champ sans autre considération.

"Hum? Oh, je pense que tu peux le voir à son uniforme, elle est en première année au Premier Lycée. Elle s'appelle Miyuki Shiba, et elle participe à 'Destruction des Piliers de Glaces' ainsi qu'à la 'Danse des Fées', alors elle doit être un des atouts du Premier Lycée."

"Phew, alors aussi talentueuse que magnifique, hein?"

Ichijou Masaki ignora son coéquipier qui se penchait en arrière, de manière comique, et se murmura à lui même.

"Miyuki Shiba, eh....."

Ce son poussa l'étudiant connu comme George de regarder curieusement Masaki.

"Il est plutôt rare que Masaki montre de l'intérêt pour les filles, n'est ce pas?"

Les autres élèves exprimèrent leurs agréments.

"Maintenant que tu le dis, c'est tout à fait le cas."

"Avec les mérites d'Ichijou, d'habitude ce sont les filles qui l'approchent directement, alors il n'est pas celui qui poursuit, n'est ce pas?"

"Tu n'as pas idée du nombre de personne qui sont jaloux de lui."

Cet environnement direct, devint un environnement où "les garçons célibataires commencèrent à s'énerver", mais Masaki resta silencieux.

Il continuait d'observer Miyuki à intervalles discrets.

Son regard était empli d'une grande chaleur.

Alors que les VIP étaient sur le point de prendre la parole, les lycéens qui avaient été au centre de la journée, arrêtèrent ce qu'ils étaient en train de faire et payèrent une sérieuse attention aux adultes qui parlaient — ou tout du moins le prétendirent.

Après qu'Erika soit retourné à son poste, Tatsuya n'avait plus qui que ce soit à qui parler et obtint finalement un moment de paix.

Ne regarder que les personnalités connues de la communauté magique était un moyen suffisant pour passer le temps.

Certains qu'il voyait pour la première fois, d'autres qu'il n'avait vu qu'à la télévision.

Bien sur, il y avait aussi d'autres personnes qu'il avait déjà rencontré ou il s'était assis dans la même pièce qu'eux, mais avec lesquels il n'avait pas discuté.

Parmi ces gens, celui qui attirait le plus l'intérêt de Tatsuya était de doyen des Clans des Dix Maîtres connu comme le "Patriarche".

Kudou Retsu.

Il était l'une des figures importantes des Clans des Dix Maîtres au 21ème siècle et, à peu près vingt ans plus tôt, fut reconnu comme l'un des plus puissants magiciens au monde.

Après que cet doyen, auparavant reconnu comme l'un des plus puissants, se soit retiré de l'armée, il apparaissait rarement en public mais pour certaines raisons, avait choisi d’apparaître chaque année à la Compétition des Neuf Lycées. Ce détail était connu.

De même, Tatsuya n'avait jamais rencontré cet homme, mais l'avait vu en vidéo.

Dans son cœur, Tatsuya découvrit une excitation semblable à assister à l'apparition d'une figure historique.

Après que les différents VIP aient fini d'encourager ou de faire la

leçon à la foule, ce fut finalement au tour du Doyen Kudou Retsu.

Il devait désormais avoir plus de 90 ans.

Combien restait il de cet incroyable Pouvoir Magique?

Possédait il encore un corps capable d'utiliser la magie?

Alors que Tatsuya pensait à cela, le maître de cérémonie donna formellement le nom du doyen.

Pas seulement Tatsuya, chaque lycéen retint sa respiration alors qu'ils attendaient que le Doyen Kudou Retsu apparaisse sur la scène.

L'apparition de cette personnalité connue fit oublier à Tatsuya d'expirer.

La personne qui apparu sous le faisceau de lumière fut une jeune femme blonde portant une robe de cérémonie.

Cela provoqua immédiatement un tumulte dans l'audience.

Tatsuya ne fut pas le seul choqué.

Cet incroyable et inattendu événement fut la cause de discussions au sein de l'audience.

N'était ce pas au tour du Doyen d’apparaître?

Que faisait une jeune femme apparaissant à sa place?

Quelque chose s'était il produit, la forçant à parler à sa place?

(—Non, il ne s'agit pas de ça.)

Tatsuya le comprit soudainement.

La jeune femme n'était pas seule sur scène.

Un vieil homme se tenait derrière elle.

L'attention de tous était dirigée vers la captivante jeune femme.

(—Magie d'Interférence Sensorielle.)

Le doyen avait sûrement invoqué une magie de grande envergure qui couvrait la globalité du lieu de la salle.

En utilisant une évidente distraction pour capturer l'attention de tous, ce genre de "changement" ne qualifiait même pas de réécriture de phénomène, vu qu'il s'agissait d'un phénomène se produisant naturellement.

L'envergure de la magie était suffisamment importante pour toucher tout le monde au même moment, mais suffisamment subtile pour échapper à la détection.

(Ainsi voici l'homme connu comme l'un des plus puissants..... Non, le "Sorcier Sournois" salué comme le "pinacle" et le "rusé" — la magie de Kudou Retsu.....)

Il devait avoir remarqué le regard de Tatsuya.

Le doyen, derrière la jeune femme, eut un sourire.

Un sourire qui serait plutôt bien à sa place sur un jeune homme espiègle.

La femme en robe se mit en arrière après avoir reçu les instructions silencieuses du doyen.

Alors que le projecteur montrait le doyen, un fort remue-ménage se répandit dans la foule.

Presque tout le monde croyait que le Doyen Kudou s'était matérialisé là.

Les yeux du doyen se fixèrent de nouveau sur Tatsuya.

Tatsuya retourna subtilement le salut avec ses yeux.

Les yeux du doyen affichèrent un sourire très satisfait.

"Tout d'abord, permettez moi d'exprimer mes sincères excuses pour avoir créé ce subterfuge."

Même en faisant abstraction du micro, sa voix était restée forte et claire — en contraste nettement avec son âge avancé.

"C'était juste un petit numéro qui est plus comme un tour de magie que de la vraie magie, mais d'après mes observations, seulement cinq personnes ont détecté la vérité derrière la façade. En d'autres termes....."

De nombreux lycéens furent profondément entraînés dans les paroles du doyen et les intentions cachées derrière les paroles.

"Si j'étais un terroriste, comptant vous détruire avec des armes chimiques ou des explosifs sous l'apparence d'un visiteur, seules cinq personnes auraient été en mesure de m'atteindre et de m'empêcher d'agir. C'est ainsi."

Les paroles du doyen ne mettait pas l'accent sur quelque chose, pas plus qu'il ne faisait de réprimandes.

Toutefois, un silence d'un genre diffèrent enveloppa la salle.

"Aux jeunes qui étudient la magie.

La Magie est un moyen, mais elle n'est pas un but en soi.

J'ai créé ce petit jeu espérant que tout le monde se souvienne de ça.

La magie que j'ai utilisé était de grande envergure mais faible en puissance.

Par les standards du Pouvoir Magique, cela appartient au plus bas niveau.

Malgré ça, tout le monde a succombé à cette faible magie et n'a pas pu découvrir ma présence, tout en sachant que je devais apparaître.

Il est vital que vous continuiez à vous entraîner à la magie.

Vous devez, sans fléchir, augmenter assidûment votre Pouvoir Magique.

Pourtant, cela seul, est insuffisant. Je prie pour que tout le monde grave cela dans leur esprit.

Un usage inapproprié de puissante magie ne peut pas faire face à une faible magie méticuleusement préparée et exécutée.

Vous tous, souvenez vous bien, La Compétition des Neuf Lycées qui commencent dans deux jours, est un champ de bataille où on combat avec la magie, et un champ de bataille où la manière d'utiliser la magie est d'importance équivalente.

A nos jeunes qui étudient la magie.

J'attends avec hâte les brillants stratagèmes que vous allez montrer dans cette compétition."

De l'audience, des applaudissements explosèrent.

Malheureusement, ces applaudissements ne se propagèrent pas à toute l'audience.

Parmi les adolescents perplexes mais applaudissant, Tatsuya aussi applaudissait, excepté qu'il se démarquait des autres en souriant calmement.

Proposer que l'usage de la magie est plus important que le niveau de magie allait à l'encontre de tout ce qu'imposait les meilleurs membres de la société magique. La valeur de la magie venait de sa propre utilisation, ce qui laissait entendre que la magie devait être vu comme un outil indépendant.

Ce vieux Magicien se tenait , au sein du pays, près du plus haut cercle de la société magique, mais conseillait quand même à tous d'aller à l'encontre des normes établies par la magie moderne. D'un autre point de vue, cette attitude était très irresponsable, vu qu'il avait suffisamment d'influence pour faire trembler les fondations de la société magique moderne.

Si le discours de Kudou Retsu n'avait été que des paroles vides de sens, Tatsuya aurait hésité, mais cet aîné avait utilisé un moyen simple et facile à comprendre pour démontrer son point de vue. Il a utilisé une technique superlative allant bien au delà des moyens de Tatsuya à utiliser la magie comme un outil flexible et agile.

—Ainsi, voici donc le "Patriarche".....

Yakumo Kokonoe, Harunobu Kazama, ainsi que Retsu Kudou, ce pays contenait encore de nombreux Magiciens auprès desquels Tatsuya aurait besoin d'apprendre. Il existait sûrement de multiples autres sujets dignes d'études, excepté que Tatsuya ne les connaissait pas encore. C'était quelque chose qu'il ne pouvait apprendre au sein des laboratoires de recherche de FLT.

Et dire qu'il pensait que le lycée serait ennuyeux.

Tatsuya se prit à penser à ça au même moment.

◊ ◊ ◊

Le banquet avait lieu deux jours avant l’événement principal, pour permettre aux compétiteurs de se reposer et de relaxer.

L'équipe des techniciens et les conseillers tactiques étaient occupés avec la dernière étape de préparation, alors que les compétiteurs

usaient de leurs propres méthodes pour se préparer physiquement et mentalement pour le début de la compétition, le lendemain.

Cela dit, les élèves de 1ère année commenceraient leurs propres compétitions le quatrième jour, ainsi, à ce moment là, l'excitation dépassait de loin l'anxiété. D'un point de vue de l'age, ils étaient ceux qui, habituellement, faisaient des excursions avec leurs paires.

Après le dîner, Miyuki ainsi que Honoka et Shizuku se rendirent à la chambre de Tatsuya, mais vu que Tatsuya était occupé à ajuster une Séquence d'Activation, elles saluèrent rapidement et retournèrent dans leurs chambres. L'itinéraire entre la division Officielle et celle des Nouveaux Arrivants différaient, si bien que les élèves de 1ère année se partageaient une chambre pour deux. Honoka et Shizuku étaient camarades de chambres, alors que Miyuki partageait la sienne avec Kazumi Takigawa de la classe C. Toutefois, la personnalité de Kazumi étant orientée vers les activités sportives, elle avait pris l'habitude de passer ses journées avec les senpais de son club, Miyuki passa ainsi la majorité de son temps dans la chambre d'Honoka et Shizuku.

L'aiguille des heures de l'horloge (pour certaines raisons, toutes les horloges de l'hôtel étaient de ce type) pointait vers le chiffre romain "X", et la majorité des lycéens qui attendaient que le lendemain arrive, étaient déjà couchés. Précisément parce qu'ils comprenaient cela, pas seulement Miyuki & Cie, mais tous leurs coéquipiers et élèves de 1ère année restèrent silencieuse et ne mirent pas le bazar. Malgré tout, leurs énergies, remontées à bloc, les empêchèrent de dormir comme leurs paires.

La seule chose que les trois filles firent d'arrache-pied, furent de parler.

Il y a bien sur des exceptions à cette règle. Par leurs apparences extérieures, Miyuki et Shizuku devraient faire partie de ces "exceptions", mais furent de manière inattendue "normale".

Les sujets récents étaient tous liés à la Compétition des Neuf Lycées, et aucun n'était lié à la mode ou à l'amour, mais vu que ces sujets apparaissait régulièrement dans la conversation, c'était tout à fait inévitable.

C mentionné plus tôt, on approchait de 22H, mais les lumières étaient

encore allumées dans l'hôtel. Raison pour laquelle, quand quelqu'un frappait à la porte, il n'y avait aucune raison de s'alarmer.

"Ah, je comprends ça."

On frappa à la porte, et elles se levèrent toutes les trois et Honoka, qui se trouvait le plus près de la porte, stoppa les deux autres.

"Bonsoir!"

"Hé, Eimi, vous autres, que se passe t'il?"

La personne derrière la porte était une captivante fille menue avec des cheveux rouges qui brillaient comme un rubis. C'était Eimi Akechi, l'une des coéquipières de Miyuki, accompagnée de quatre autres élèves derrière elle. En d'autres mains, l'équipe des filles de la Division des Nouveaux Arrivants était presque au complet.

"Euh, vous savez, il y a des bains thermales."

"......Désolé, tu devrais parler clairement."

Honoka ne comprenait pas pourquoi Eimi était si contente de dire ça.

"Maintenant que tu le dis, cet hôtel a, en bas, un bain thermal artificiel."

Mais Miyuki comprit rapidement ce que voulait dire Eimi.

"Oui, comme on pouvait s'y attendre de Miyuki, tu es brillante!"

"......Je suis désolée, mais entendre ça me rend difficilement joyeuse."

Eimi ne voulait pas faire du mal, mais après avoir été complimenté ainsi, Miyuki sentit un mal de tête se pointer.

Alors que Miyuki pressait sur sa tempe, Eimi eut une expression de "Eh?" alors qu'elle penchait la tête sur le coté.

"Ce n'est rien, ne t'inquiètes pas pour ça. Alors qu'en est il de ce bain thermal?"

Avec l'insistance de Miyuki, Eimi eut un sourire innocent.

"Alors, allons y!"

Les paroles soudaines d'Eimi — du moins pour Miyuki — fit que Miyuki et Honoka se regardèrent.

Honoka semblait partager les doutes de Miyuki.

"Est ce que ça ira? On est au sein d'une installation militaire."

Pourtant, celle qui les représenta toutes les trois et qui posa la question à Eimi fut Shizuku qui était en arrière.

Ce n'était pas un hôtel ordinaire — c'était l'une des installations rattachée comme terrains d'entraînement du SDF (Force d'Auto Défense). En dehors les installations préparées en avance, la plupart des zones avaient un accès restreint.

"J'ai demandé la permission et je l'ai obtenu. On peut le prendre jusqu'à 23H."

Eimi soulagea facilement les inquiétudes de Shizuku.

"Comme on pouvait s'y attendre d'Eimi."

Honoka ne put s'empêcher de dire ça doucement.

"Tu devrais plutôt dire, merci pour l'occasion, non?"

Mince, ces paroles n'eurent aucun effet sur l'extatique Eimi.

"Attends, je me souviens que les maillots de bain sont nécessaires pour les onsen, je n'en ai pas apporté."

"Aucun problème, l'hôtel nous prêtera des robes de bains ainsi que des serviettes."

Eimi répondit rapidement face aux préoccupations pratiques de Miyuki.

Compte tenu du niveau de préparation, Miyuki et les autres n'eurent pas d'autres raisons de refuser. Honnêtement, toutes trois étaient intéressées par la source thermale — même artificielle.

"Alors, permettez nous de vous accompagner. Laissez nous prendre des vêtements, et prenez les devants."

A la réponse de Miyuki, Eimi acquiesça joyeusement.

"D'accord, prenez votre temps, nul besoin de se hâter."

Miyuki leva un peu la main et salua temporairement ses coéquipières.

Le bain public souterrain (bain thermal artificiel) fut complètement monopolisé par les filles de 1ère année du Premier Lycée.

Il ne s'agissait pas de réservations, mais plutôt qu'elles furent les

seules invités, elles gardèrent ainsi le complet contrôle.

Le large bain était similaire était semblable aux bains similaires publics par leur usage similaire.

Cependant, bien que cet onsen souterrain soit artificiel et était appelé un grand bain, en réalité, il ne pouvait contenir qu'à peine plus de dix personnes. A l'origine, il avait été conçu pour le traitement des douleurs musculaires et de la douleur d'intenses exercices physiques qui faisait partie des installations médicales sous l'hôtel. Les premiers utilisateurs étaient les officiers de haut rang (et d'âge moyen), et il ne fut jamais prévu qu'il soit ouvert au public. Dû au fait que seuls ceux qui se trouvaient sous les ordres des médecins pouvaient y passer à certaines heures, toute autre personne entrant devait se rincer à la douche et enfiler un maillot de bain ou une robe de bain avant d'entrer.

—En dehors de leur groupe, aucun autre groupe ne semblait avoir demandé la permission.

Les robes de bain des filles étaient littéralement des "mini-manteaux qui descendait à mi-cuisse sans rien d'autre". Peut être que les décrire comme "des robes de bain de la taille de mini-jupe sans la ceinture" sonnerait plus sexy? L'absence de ceinture rendait les choses plus faciles pour se relaxer dans le bain, mais le sens de sécurité pourvoyait moins de sécurité qu'un maillot de bain.

"Ouah....."

"Que.....Qu'est ce?"

Toute personne portant cela serait trop embarrassée pour apparaître devant des personnes du sexe opposé, mais, ici, toutes les personnes présentes étaient des filles et, pour couronner le tout, des coéquipières dignes de confiance. Néanmoins, à la forte exclamation d'Eimi, Honoka fut fortement embarrassée et sembla agir comme si un garçon l'avait vu.

Elle ne put s'empêcher d'envelopper sa poitrine de ses bras.

Les yeux d'Eimi étaient figés dans cette direction — la poitrine d'Honoka.

"Quelle surprise, Honoka a de belles formes!"

Eimi s'avançait progressivement.

Honoka continua de reculer.

Son dos rencontra rapidement le mur de la zone de bain.

"Honoka."

"Qu'y a t'il?"

L'aura de prédateur qui entourait Eimi était presque suffisante pour faire crier Honoka.

"Puis je y jeter un coup d’œil?"

"Bien sur que non!"

Les yeux d'Eimi étaient rieurs, montrant clairement qu'elle faisait l'idiot. La question était de savoir jusqu'où elle irait.

Honoka regarda tout autour pour demander de l'aide. Ses coéquipières étaient, soit en train de se relaxer, soit en train de tremper leurs pieds sur le bord. Tout le monde autour d'elle souriait comme Eimi, à une exception.

"Qu'est ce qui se passe, après tout, le buste d'Honoka est imposant."

"Y a t'il un problème pour ça!"

Les yeux d'Eimi restèrent rieurs, mais Honoka pouvait voir quelque chose tapi dans ce regard qui lui disait que ça ne finirait pas de manière plaisante.

"Shizuku, sauve moi!"

Honoka ne put rien d'autre que demander de l'aide à Shizuku, "l'exception".

Shizuku se leva lentement.

"Et alors?"

Après avoir dit ça, elle quitta la zone de bain.

"Quoi!"

A la trahison de sa meilleure amie, Honoka cria de douleur.

Instantanément, Shizuku lança un regard triste vers sa propre poitrine.

"Après tout, le buste d'Honoka est imposant ."

Après ces paroles incriminant, elle se retourna et se dirigea vers le auna.

La zone de bain fut emplie des plaintes d'Honoka.

(Pourquoi se disputent elles maintenant?)

Tout en prenant sa douche, Miyuki ne pouvait comprendre ce qui causait le bruit d'éclaboussement partout dans la zone de bain. Elle avait déjà retiré la sueur et la poussière de la journée, mais activa tout de même le "Laveur Personnel" de la douche pour se rincer entièrement (de la tête au pied) avant d'enfiler la robe de bain. Elle enroula une serviette autour de sa chevelure soyeuse pour la garder en place avant d'entrer dans la zone de bain qui était à peu près devenue silencieuse. A ce moment, chacune de ses coéquipières fixèrent Miyuki du regard.

"Que.....Quel est le problème?"

Miyuki se recroquevilla après s'être arrêtée, mais personne ne lui répondit.

Le nombre de regard resta inchangé.

"Arrêtez tout le monde, Miyuki est droite!"

Pour certaines raisons, Honoka prononça cela d'une voix solennelle et agitée, qui brisa le silence inhabituelle.

"Honoka?"

Les paroles d'Honoka étaient trop vagues pour que Miyuki en comprenne le sens.

"Ah~ désolée, désolée, j'ai perdu accidentellement le contrôle de moi même."

Assise dans l'angle interne du bain, se trouvait une jeune fille, élève de la classe D, du nom de Subaru Satomi qui parlait d'un ton courtois qui aurait convenu à un jeune homme. Cela permit enfin à Miyuki de faire la connexion concernant de quoi parlait Honoka et aussi comprendre pourquoi les regards dirigés vers elle, signifiaient.

"Attends..... On est entre filles, là, de quoi tu parles?"

Miyuki dit cela, avec frénésie, et tira sa robe vers l'intérieur de ses cuisses. Ce mouvement enflamma une fois de plus l'atmosphère au sein du bain.

L'humidité qui restait, au sortir de la douche réagit avec la vapeur du onsen, poussant le tissu à s'accrocher fermement au corps, révélant les courbes féminines de Miyuki, ainsi que sa vibrante poitrine.

La partie frontale du col révéla la peau qui était d'un rose pâle.

S'étendant sous le court ourlet de la robe de bain, se trouvait une paire de jambes éblouissantes et magnifiques.

En particulier dans la condition de Miyuki, même comparée à être nue, même une robe de bain qui révélait moins de chose qu'un maillot de bain gardait un charisme adorable et irrésistible.

".....Toutes les filles sont elles, oui, je comprends, mais....."

"Je ne sais pas comment le dire..... Mais, si c'est Miyuki, ça va."

Tout le monde déclara cela, en parfait accord entre elles.

"C'en est assez! Là, vous allez trop loin."

Même désavantagée, Miyuki pénétra bravement dans le bain.

Elle se laissa glisser gracieusement et étendit ses jambes sous les regards fixes des autres.

Alors qu'elle se baissait pour s'asseoir, l'eau fut à hauteur de son cou. La partie frontale du col se balançait au rythme de l'eau, et pendant un instant, la nuque de Miyuki fut révélée.

Quelque part, on entendit un sursaut collectif.

Cette étrange atmosphère n'était ni taquine, ni provocante.

Si cela continuait, la chasteté de Miyuki serait en danger.

"Miyuki, je suis de tout cœur avec toi!"

Heureusement, Honoka fit des éclaboussures à coté de Miyuki, perturbant la toile d'araignée qui se refermait sur le papillon.

"Si vous ne vous arrêtez pas maintenant, tout le monde cours le risque de se baigner dans une eau glaciale!"

Après avoir entendu cette menace, toutes leurs coéquipières adoptèrent finalement des expressions sérieuses et détournèrent le regard de Miyuki.

Malgré le détournement de leurs regards, ces derniers restèrent constamment concentrés sur Miyuki.

Il y avait manifestement plusieurs jeunes filles présentes mais personne ne se hasarda à prendre la parole.

D'un autre coté, Miyuki voulait protester face aux paroles d'Honoka, mais sentit que proclamer imprudemment qu' "elle ne ferait jamais quelque chose comme ça" pouvait être une action dangereuse qui romprait le délicat équilibre, aussi Miyuki préféra s'en abstenir.

".....Qu'est il arrivé?"

Shizuku, qui était resté, jusque là, seule, dans le sauna, posa cette question, avoir avoir été surprise de l'atmosphère étrange dans le bain.

Sûrement elles se mirent à réfléchir par elle même, les jeunes filles revinrent à leur état normal.

Une fois que les jeunes filles reprirent leurs comportements habituels, le bain fut une nouvelle fois emplie de bruits de discussions et de rires.

Les sujets abordés allaient au delà de la mode et de l'amour.

Même si, la mode et l'amour étaient véritablement deux des sujets les plus populaires.

Tout en profitant du bain, la conversation se tourna naturellement vers les garçons qu'elles avaient rencontré durant le banquet. Le sujet principal étaient les "garçons", mais inclurent quelques "hommes" et un petit groupe de "vieux hommes". Cela semblait vouloir montrer que leur admiration couvrait un large spectre, mais honnêtement, cela ressemblait plus à ceci:

"—Ainsi, le barman derrière le comptoir était vraiment un vieux de la vieille, intéressant."

"Whoa..... Ce type a plus de quarante ans. Penser que tu étais intéressé dans ce genre d'homme. Je pense que ta vie est futile....."

"Correction, dis plutôt un intéressant gentleman. A mes yeux, les lycéens sont tous des gamins immatures sur qui on peut pas compter."

"Vraiment~? Je pense pas que les garçons de notre age sont tous comme ça, peut être n'as tu vu que les mauvaises personnes?"

"Ouais, Isori-senpai a l'air plutôt tolérant, non? Plus important encore, il a l'air d'un mec bien."

"je ne sens aucun intérêt à aller vers quelqu'un qui a déjà une petite

amie, tu sais? Et dans son cas, sa petite amie est déjà devenue sa fiancée."

"En parlant de gens sur qui on peut compter, alors pourquoi pas Juumonji-senpai?"

"Non, Juumonji-senpai est trop fiable. Pas seulement ça, il est l'un des futur successeur d'un des Clans des Dix Maîtres."

"En parlant de successeur d'un des Clans des Dix Maîtres, il y a celui de la Famille Ichijou, du Troisième Lycée, non?"

"Ah, je l'ai vu, il est vraiment beau garçon."

"Oui, je sais qu'on ne devrait pas les juger par leurs apparences, mais ça ne fait pas de mal qu'il soit beau à voir."

.....Juste comme ça.

Tout d'un coup, Eimi renvoya soudainement la conversation vers Miyuki, qui se tenait dans un coin du bain en train de se débarrasser de l'épuisement mental.

"En parlant d'Ichijou du Troisième Lycée, il regardait Miyuki, d'un regard brûlant."

Eimi parlait à Miyuki, mais Miyuki fut incapable de répondre à ces paroles.

"Hein, vraiment?"

"Peut être était ce le coup de foudre?"

"C'est de Miyuki dont on parle, alors c'est hautement probable."

"Tu devrait dire que ce serait étrange que les garçons ne tombent pas sous le charme de Miyuki au premier regard, non?"

"Peut être se connaissent ils depuis longtemps."

Tout le monde qui écoutait, poussa des cris ravis.

"Miyuki, est ce vrai?"

Shizuku ne rejoignit pas les cris et adopta un ton sérieux — le ton de Shizuku était dépourvu d'une inflexion de voix normale, ainsi même si elle ne le voulait pas personnellement, elle eut l'impression d'être solennelle — en demandant ça à Miyuki.

La réponse de Miyuki fut:

"......Permettez moi d'être très claire, je n'ai vu Ichijou-kun qu'en photos et je ne savais même pas où il se trouvait durant le banquet."

Cela pouvait être considéré comme insensibilité ou pure exagération, et si le Troisième Lycée avait entendu la réponse de Miyuki, leur moral aurait sûrement diminué. Les jeunes filles débordantes d'attente, furent prises de court par cette réponse.

Malgré tout, il y en eut qui refusèrent de s'avouer vaincues.

"Si c'est le cas, quel genre de garçons aime Miyuki? Est ce vraiment comme ton frère?"

Celle qui réagit aux paroles de Subaru ne fut pas Miyuki, mais Honoka. Son corps se raidit un instant, et seule Shizuku, qui se tenait à coté d'elle, s'en aperçut.

Miyuki était d'un calme olympien et fut impassible en répondant à Subaru.

"J'ignore d'où vient ce que tu penses..... Mais Onii-sama et moi sommes liés par le sang, et je n'ai jamais considéré Onii-sama comme un amoureux. De plus, je ne crois pas qu'il y ait quelqu'un dans le monde qui soit identique à Onii-sama."

A la réponse de Miyuki, Subaru et Eimi furent distinctement déçues (même si l'expression de Subaru sembla un peu forcée).

Après quoi, personne ne questionna plus avant la relation entre Miyuki et Tatsuya.

Pourtant, dans le bain, deux filles ne purent se résoudre à accepter la réponse complète de Miyuki.

Au ton de Miyuki, Honoka et Shizuku lurent les choses d'une manière bien différente les mots "Je n'ai jamais considéré Onii-sama comme un amoureux".

◊ ◊ ◊

Après que Tatsuya eut envoyé Miyuki et compagnie vers leurs chambres — bien qu'il devienne le sujet de conversation des coéquipières au sein de l'onsen souterrain — il continua d'ajuster les

Séquences d'Activation dans les véhicules de stockage.

"Shiba-kun, il est temps d'aller dormir."

A ces paroles, Tatsuya regarda autour de lui pour voir la seule autre personne, avec lui, au sein du véhicule.

"Il est déjà si tard?"

On approchait de minuit.

Isori révéla un sourire aussi bien masculin que féminin et acquiesça aux paroles de Tatsuya (A propos, la tenue et la coiffure d'Isori étaient tout aussi neutres, poussant Tatsuya à penser que ce senpai s'habillait volontairement d'une manière féminine).

"les participants dont Shiba-kun est responsable, entrent en lice le quatrième jour, aussi je pense que c'est une mauvaise idée d'être dés le début aussi tendu."

"Vous avez raison."

Tatsuya était en charge, pour l'équipe des filles de 1ère année, de 'Tirs Rapides', 'Destruction des Piliers de Glaces', et 'Batte Illusoire'. C'était partiellement dû aux souhaits de Miyuki et Cie, mais aussi parce que les garçons de 1ère année (Et tout particulièrement Morisaki) éprouvaient du mépris à son encontre (Miyuki participait à 'Destruction des Piliers de Glaces' et 'Batte Illusoire', Honoka à 'Bataille de Surf' et 'Batte Illusoire', et Shizuku à in 'Destruction des Piliers de Glaces' et 'Destruction des Piliers de Glaces').

La Division des 1ère année — La Division des nouveaux arrivants auraient lieu entre le 4ème et le 8ème jour de la compétition.

Comparé aux auxiliaires en charges des participants du lendemain, Tatsuya avait considérablement plus de temps devant lui.

Kanon devait participer à 'Destruction des Piliers de Glaces' le 2nd et 3ème, mais Isori était en charge de participants qui apparaîtraient le lendemain.

"Bien, alors, senpai, j'y vais."

Tatsuya évita, de manière intentionnelle, d'inviter Isori à faire de même et quitta seul le véhicule.

Malgré le fait d'être proche de minuit, les soirées en été gardaient une

bonne chaleur.

Parfait pour faire une promenade en T-shirts.

Tatsuya opta pour faire un détour avant de retourner à sa chambre et se promena autour de l'hôtel quand il détecta une présence étrangement nerveuse.

Cette présence l'informa que quelqu'un retenait son souffle en arpentant les lieux.

Tatsuya pensa, tout d'abord, que c'était un voleur, mais rejeta rapidement cette idée.

Une présence qui désirait se cacher mais en était incapable et qui était emplie d'impulsions meurtrières.

Tatsuya étendit ses cinq sens et les lia directement à la dimension d'information — le corps d'information colossal qui contenait une myriade d'objets autour de lui.

(Trois personnes au total, proches..... Camouflés près des grilles pour ressembler à du feuillage)

Chacun d'eux portait un pistolet et de petits explosifs.

Même s'ils se trouvaient dans le périmètre extérieur de l'hôtel, ils étaient bien dans une zone sous juridiction militaire, et la sécurité autour de la base était définitivement durcie. Les contrôles et les caméras géraient les entrées et empêchaient toute infiltration et étaient particulièrement sans merci vers des individus dangereux et armés.

Ces types étaient des malfaiteurs qui avaient pénétré au sein du périmètre de sécurité et qui avaient même préparé des explosifs.

Même s'ils n'avaient pas de CAD, ils étaient trop dangereux pour qu'on les ignore.

Tatsuya commença à courir sans bruit.

Ses sens eurent vent d'un allié qui s'approchait lui aussi rapidement des individus louches.

Ses capacités pour se déplacer furtivement étaient proches de celles de Tatsuya.

D'après leurs positions de départ, même si tous deux approchaient à la même vitesse — Mikihiko entrerait en contact en premier.

Alors que Tatsuya continuait de courir de l'avant, il commença aussi à construire des magies de support.

Son Pouvoir Magique était si spécialisé qu'il pouvait utiliser certaines magies et, ce même sans CAD, aussi longtemps qu'il usait de ces magies, il était l'égal d'un Magicien utilisant un CAD en termes de vitesse, détail et force.

Mikihiko commença à invoquer sa magie.

Il n'utilisait pas un CAD.

Les données, fournies par la dimension d'information informa à Tatsuya qu'il ne s'agissait pas d'une illusion, mais d'un concept.

Mikihiko prit trois outils de divination — sûrement des charmes.

Mikihiko ne compatit pas utiliser de la magie moderne, mais de l'Ancienne Magie.

Avant que Tatsuya le "sache", des psions volèrent vers la main de Tatsuya pour cette technique.

La Magie Moderne et l'Ancienne Magie se fondaient sur la même théorie, qui utilise les interférences avec les "données" rattachées à une "existence" et prendre un pas en avant pour réécrire le"phénomène".

La différence réside dans la manière dont l’interférence marche et s'exprime.

Le système magique que Mikihiko utilisait, ne construisait pas un corps d'information d'interférence (Une Séquence Magie) dans la Zone de Calcul Magique, mais divisait cela en trois étapes : attacher des données au charme se trouvant dans sa main pour en faire un support, faire flotter ne désormais "matériel" déconnecté dans la dimension d'information pour se transformer en "corps d'information indépendant et immatériel" et le contrôler, puis enfin réécrire le phénomène.

Comparé à la capacité de corps d'information qui peut interagir directement avec un phénomène, comme les corps d'information de la magie moderne, ce système possédait une vitesse et une flexibilité moindres, mais était moins susceptible à avoir une résistance à la réécriture de phénomène. Si c'était la réécriture de phénomène avec certains paramètres , l'Ancienne Magie pourrait accomplir des effets

de grande envergure en utilisant moins de puissance que la magie moderne.

Pour Tatsuya, qui pouvait disséquer les Séquences Magiques en un instant, tous ces détails traversèrent son esprit en un instant.

Il remarqua aussi une trace de détresse au sein de la technique de Mikihiko.

(Il ne va pas y arriver à temps.)

La magie qu'utilisait Mikihiko, était composée de trop de parties inutiles, allongeant la durée d'invocation à un niveau inacceptable.

Tatsuya fixa comme cibles pour "dissolution", les pistolets des malfaiteurs.

La raison pour laquelle Mikihiko avait détecté la présence dangereuse, était qu'ils se trouvait en plein milieu de son entraînement de magie.

C'était l'un des coins les plus tranquille des jardins de l'hôtel.

Éloigné de tout bâtiment, il trouva un endroit dans la zone entourant l'hôtel où personne ne viendrait gêner son "entraînement" quotidien.

"Esprits" sont un assemblage formé de "concepts" comme le "vent, eau, feu, terre" et sont loin de simples phénomènes. L'entraînement de base de la Divine Magie de la Terre (Magie Spirituelle) est de synchroniser ses sens à ceux de l'esprit.

Du point de vue de la magie moderne, les esprits sont des entités qui ont sorti de leurs propres corps et sont des corps d'information flottant dans un océan de données.

Ils bougent comme un concept dans le monde de l'information, s'assemblent avec l'expression des concepts, et se matérialisent dans le monde réel.

Les rumeurs disaient qu'il y avait un moyens de détecter les "corps immatériels".

Pourtant, au contact avec ce genre "d'esprits", Mikihiko sentait vraiment qu'ils "existaient" dans le monde réel.

Ce n'était pas fondé sur de la théorie, mais sur sa perception et ses sentiments.

Pour Mikihiko, les esprits existaient vraiment en cet endroit et étaient des existences qui possédaient une conscience. Avec ce genre de contact, les esprits étaient capable d'informer Mikihiko de toutes sortes de "détails" et d' "objets".

Juste au moment où Mikihiko commençait son entraînement de synchronisation, il "apprit" que des gens se trouvaient aux abords de l'hôtel.

Tout d'abord, il pensa qu'il s'agissait de gens là pour affaire ou de soldats en patrouille, aussi il n'y prêta que peu d'attention.

Ce fut seulement après que les esprits lui notifièrent à plusieurs reprises que Mikihiko réalisa que c'était là un avertissement.

Synchronisé avec les esprits, il fit percevoir aux esprits ce qui se trouvait dans la direction qu'ils lui donnaient.

Ce qu'il ressentit fut de la "malveillance".

L'expression de Mikihiko se tendit.

Pendant un instant, il se demanda s'il devait demander du renfort ou s'en charger lui même.

Mikihiko ne pensait pas pouvoir faire face à ces adversaires dans son état actuel. Il était réticent à l'admettre mais c'était vrai qu'il n'était pas confiant. Aussi, il se mordit les lèvres et choisit de retourner à l'hôtel et d'appeler.

Néanmoins, ses émotions protestèrent face à ce choix logique.

Quelque chose d'autre que la logique lui disait qu'il n'aurait pas assez de temps.

L'agitation bondissant à travers son corps était comme si les esprits lui disaient d'agir rapidement.

Plutôt que d'aller vers l'hôtel, Mikihiko chargea vers cette "malveillance".

Il était inquiet.

Il se demandait s'il serait capable venir à bout des armes à feu que ses adversaires portaient sur eux.

Très peu de Magiciens parvenaient à triompher des armes à feu en combat au corps à corps.

Si on était à couvert, la magie qui n'était pas affecté par la vision ou les obstacles, avait l'avantage.

Dans les situations où on était à découvert, les Magiciens éprouvaient des difficultés à contrer la vitesse à laquelle on pouvait tirer.

Pourtant, Mikihiko expulsa cela hors de ses pensées comme de la lâcheté et continua d'avancer.

Les événements de la veille repassèrent dans son esprit.

Mikihiko fut forcé de travailler comme serveur par ordre de son père.

Erika avait dit qu'il s'agissait d'une erreur administrative, mais Mikihiko connaissait la vérité cachée derrière.

—Va et vois là où tu devrais te tenir.

Deux nuits plus tôt, son père lui avait dit cela.

Travailler comme serveur n'était qu'une méthode pour atteindre ses objectifs.

Peut être le père de Mikihiko voulait il qu'il voit ses pairs dans leur heure de gloire pour le sortir de son état actuel.

Peut être voulait il susciter une violente détermination.

Pourtant, ces paroles ainsi que ces méthodes ne firent que ressentir au plus profond de l’âme de Mikihiko qu'une écrasante humiliation.

A ce moment là, Mikihiko voulait montrer qu'il "n'était pas faible".

On était sous un ciel nocturne avec le scintillement de quelques étoiles, mais les méthodes d'entraînement de la Famille Yoshida se faisait aussi la nuit, dans le noir.

Même avec pour seule lumière, celle des étoiles, il n'y avait aucun obstacle.

Alors qu'il se rapprochait de cette présence malveillante, qui pouvait déjà être identifiée comme humaine, Mikihiko prépara ses talismans.

Trois cibles nécessitaient donc trois talismans.

Ses cibles devait déjà avoir remarqué son approche.

L'hostilité et la malveillance envers Mikihiko montrait que ces trois là

étaient les malfaiteurs.

Pas d'hésitation à avoir.

L'hostilité s'était déjà transformée en aura meurtrière.

Une hésitation conduirait à l'échec.

L'identification des cibles n'était pas la priorité principale.

Mikihiko canalisa son pouvoir magique dans les talismans et commença à invoquer sa magie.

Un flash de lumière apparut dans la main droite de Mikihiko, qui après un instant se transforma en électricité au dessus de la tête des malfaiteurs.

La foudre les frapperait dans moins d'une seconde.

Malgré tout, ça prend moins d'une seconde de presser la détente.

Voyant cela, Tatsuya initia sur le champ et invoqua la magie déjà prête "dissolution".

Les trois pistolets dans les mains des malfaiteurs s'écroulèrent après le changement dans leurs corps d'information.

Immédiatement après—

La foudre miniature frappa les trois cibles.

"Qui est là!"

Mikihiko demanda d'une voix sévère, pas envers les ennemis à terre de l'autre coté de la rampe, mais au Magicien qui était venu, par derrière, à son aide.

Mikihiko le comprit parfaitement.

Sa magie ne serait pas intervenu à temps.

La raison pour laquelle il n'était pas blessé était qu'un autre Magicien lui avait offert son aide.

Cette échauffourée le força à admettre que sa magie avait perdu de sa vitesse.

"C'est moi."

"Tatsuya?"

A la seule respiration de Mikihiko, on pouvait dire qu'il avait subi un

terrible coup.

Toutefois, Tatsuya ne fit qu'une réponse brève et ne s'arrêta pas d'être sur la balustrade.

Usant de la Magie de Pesanteur pour diminuer la gravitation, il passa facilement deux mètres au dessus de la balustrade.

Mikihiko le fixa un moment avant de revenir à lui même et de prendre un autre talisman et d'exécuter la même Magie de Pesanteur.

Quand Mikihiko atterrit de l'autre coté de la balustrade, Tatsuya était en train d'examiner les intrus.

"Tatsuya?"

Ce mot contenait plusieurs interrogations.

Même Mikihiko lui même n'était pas sur de ce qu'il voulait demander.

"Ils sont vivants et KO. Bien joué."

Tatsuya sembla répondre à sa question en donnant les statuts des intrus, ou peut être avait il remarqué l'état de panique de Mikihiko et qu'il avait choisi de répondre de la manière la moins confuse.

"Pardon?"

Mikihiko ne comprenait pas pourquoi Tatsuya le félicitait.

Il pensa d'une manière masochiste qu'il aurait dû être celui mis à terre.

"Visibilité limitée sur les cibles, grande précision d'attaque à distance sur plusieurs cibles, avec la capture comme priorité et aucune blessure fatale n'a été infligée et un coup a été suffisant pour restreindre leur mobilité. Je dis que cela compte comme un excellent résultat de combat."

Les paroles de Tatsuya étaient suffisamment calmes pour être insensibles, mais l'entendre montrait qu'il n'était pas seulement poli ou réconfortant.

Celui en qui Mikihiko ne pouvait croire, était lui même, et non Tatsuya.

".....Mais, à l'origine, ma magie n'y serait pas parvenue à temps, et, sans l'aide de Tatsuya, j'aurais été tué."

Les paroles de qui sortaient de la bouche de Mikihiko, se moquaient

de lui même, hors de son propre contrôle.

"Quelle bêtise."

"......Hein?"

Néanmoins, la réprimande directe venant de Tatsuya fut suffisante pour empêcher Mikihiko de continuer à se rétrograder lui même.

"'S'il n'y avait pas eu d'aide' n'est qu'une supposition. Ta magie a été capable de capturer des intrus — c'est la seule vérité."

"....."

Les reproches impitoyables de Tatsuya et les affirmations suivantes étonnèrent Mikihiko.

"En réalité, je t'ai aidé, et ta magie a réussi, alors que veux tu dire par 'à l'origine'? Mikihiko, que croyais tu vraiment qu'il arriverait?"

"Ça....."

"Peu importe le nombre d'adversaires et à quel point ils sont bien entraînés, un Magicien devrait triompher sans aide, j'espère sincèrement que tu ne suis pas ces hypothèses?"

Mikihiko sentit soudainement que le bas de son estomac lachait.

Il comprit très clairement à quel point ces "hypothèses", auxquelles se référaient Tatsuya, étaient ridicules.

Et pourtant, au plus profond de son cœur, n'avait il jamais considéré ces hypothèses que mentionnait Tatsuya?

"Sérieusement.... Je vais le dire clairement de nouveau, Mikihiko, tu t'es montré stupide."

"Tatsuya....."

"Pourquoi te rabaisses tu à ce niveau? Pourquoi te dénigres tu à ce point? Qu'est ce qui te mécontente?"

"......Même si j'essayais d'expliquer, Tatsuya, tu ne comprendrais pas. Il n'y aucune raison d'en parler."

"Il pourrait bien y en avoir."

Mikihiko réagit en érigeant un mur et à se cacher derrière, mais les paroles suivantes de Tatsuya détruisit le mur en poussière.

"Ah.....?"

Cette fois, ce fut au tour de Mikihiko de rester sans voix, alors que Tatsuya le fixait d'un regard perçant.

"Mikihiko, tu t'inquiètes sur ta vitesse d'invocation de la magie, n'est ce pas?"

".....Tu as entendu ça d'Erika?"

"Non."

".....Alors comment le sais tu?"

"Ta technique est trop éloquente."

".....Qu'as tu dit?"

"Mon argument, est, que le problème ne vient pas de tes capacités, mais de la technique elle même. C'est la raison sous-jacente pour laquelle tu ne paux pas utiliser la magie de la manière que tu veux."

"Comment saurais tu ça!"

Mikihiko rugit.

Parce qu'il était paniqué.

Parce qu'il était exaspéré.

La technique qu'il utilisait était le produit que la Famille Yoshida avait affiné durant de longues années en incorporant des aspects traditionnels de l'Ancienne Magie et les résultats de la magie moderne.

Après l'avoir vu une ou deux fois, Tatsuya l'avait immédiatement envoyé comme un produit imparfait, ce qui jeta Mikihiko dans une colère noire.

Il avait toujours rejeté cette façon de penser comme une tentative vaine d'échapper de la réalité, mais après avoir entendu Tatsuya amener la conversation sur ce sujet, Mikihiko paniqua.

"Je le sais, mais tu n'es pas forcé de me croire."

Pourtant, Tatsuya répondit calmement au déchaînement furieux de Mikihiko, forçant Mikihiko à répondre avec encore plus d'hésitation.

".....Qu'as tu dit?"

Mikihiko utilisa les mêmes mots qu'il avait déjà utilisé, mais cette

fois, le ton fut nettement différent.

"Je peux comprendre toute conception magique que je peux 'voir', ce qui me permet de lire les détails derrière chaque Séquence d'Activation et d'analyser profondément la Séquence Magique."

Tatsuya répondit avec cette extravagante réponse.

La panique de Mikihiko atteignit le sommet.

Il n'avait jamais entendu parler d'un Magicien capable d'une telle chose, et, si quelqu'un avec cette capacité unique existait vraiment, alors la moitié des mystères de la magie moderne serait résolu en un instant.

".....De nouveau, tu n'es pas forcé de me croire."

Tatsuya répéta ses paroles.

Mikihiko sentit qu'il lui disait "ensuite le reste, c'est ton problème".

"Nous allons passer à autre chose. Ignorons ça pour le moment, on doit s'occuper de ces types. Je vais rester surveiller un moment, pourrais tu aller appeler la sécurité? Ou veux tu que je m'en charge?"

Honnêtement, dans l'état mental actuel de Mikihiko, il était incapable de considérer la "confession" de Tatsuya comme étant vraie ou fausse, aussi il s'accrocha désespérément à la perche qu'on lui tendait.

"Bien,j'y vais."

"Compris, j'attends ici."

Mikihiko activa de nouveau sa technique de "Saut" et disparut au delà de la balustrade.

De l'autre coté, Tatsuya pensa brièvement comment restreindre la liberté de mouvement des intrus, et finalement décida de les enterrer. Il pouvait utiliser sa "Dissolution" pour détruire l'excès de saleté, aussi cela nécessitait d'utiliser des magies de "Séparation" et de "Mouvement". Faire ça sans CAD était une tache fatigante, mais le "Saut" qu'il avait fait plus tôt, Tatsuya avait déjà mémorisé une Séquence Magique aussi simple, et, aussi longtemps qu'il les utilisait de manière séquentielle et non simultanée, ce ne posait pas de réels problèmes.

Ironiquement, c'était l'un des avantages provenant de l'artificielle Zone

de Calcul Magique résidant dans sa conscience, ce qui était la capacité de se rappeler de toute Séquence Magique enregistrée dans sa mémoire.

(Je suis un homme sournois.)

Il prit le point de vue des victimes, mais vit le sous-produit comme un outil efficace à utiliser.

Tatsuya sourit à son manque de scrupules et se prépara à invoquer sa magie.

—Mais il apparut qu'il n'y en avait nul besoin.

Une présence familière approcha, poussant Tatsuya à annuler sa mage.

Peu après, l'autre personne commença à parler.

"Spécial Lieutenant, votre suggestion précédente est vraiment impitoyable."

"Commandant, vous avez tout entendu?"

Tatsuya n'avait pas ressenti l'écoute de Kazama.

Ce qui était honnêtement pas si surprenant.

Kazama avait étudié sous la houlette de Yakumo Kokonoe bien plus longtemps que Tatsuya et était considéré comme le second meilleur élève de Yakumo. Sans la liaison à la dimension d'information, Tatsuya trouvait très difficile de trouver des traces de la présence de Kazama.

Tatsuya salua, auquel répondit Kazama avec un sourire.

"N'est ce pas rare pour l'habituel complètement indifférent Spécial Lieutenant de faire une telle chose?"

"Marquer quelqu'un comme 'complètement indifférent est déplacé."

"Ou peut être sympathises tu avec son sort? Ce jeune homme a certains problèmes en commun avec toi."

"Celui-ci a depuis longtemps dépassé ce niveau de préoccupation."

"En d'autres mots, tu es quelqu'un qui en as déjà fait le tour?"

".....Pourriez vous vous occuper de ces gens?"

Kazama révéla un rusé sourire alors qu'il attaquait impitoyablement et

Tatsuya, qui avait perdu toutes voies de retraites, parvint enfin à changer de sujet.

"Laisse moi m'en occuper, j'expliquerais tout au commandant de la base."

Pourtant, Kazama réalisa que continuer ces questions, ne servait à rien.

Il fit disparaître son sourire et hocha solennellement la tête vers Tatsuya.

"Désolé de vous déranger."

"Aucune inquiétude, on dirait que beaucoup de choses, de votre coté, sont aussi venues se rajouter."

"C'est vrai. Mais je me demandes ce qu'essayaient de faire ces types?"

"Dieu seul le sait, s'occuper des criminels ne fait pas partie de notre job..... Malgré tout, ils sont incroyablement capable et actif. Tatsuya, taches de faire attention."

"Oui, merci pour le conseil."

"Nous parlerons des détails, demain midi."

"Bien, permettez moi d'y aller."

"Oui, au revoir."

Tous deux passèrent de supérieur et subordonné à deux codisciples amicaux, se saluant.

Chapitre 5

Un jour plus tard, après l'excursion de minuit imprévue de Tatsuya.

La Compétition des Neuf Lycées commença sans autre incident.

Durant les dix jours qui suivirent, le nombre de spectateurs seul excédait les cent milles. Même si l'emplacement était peu pratique, au moins dix milles personnes venaient chaque jour pour voir les épreuves, et le nombre de téléspectateurs en ligne dépassait facilement ce nombre de cent fois.

Bien qu'ils ne puissent pas atteindre les mêmes chiffres que ceux des jeux sportifs avec des professionnels populaires, il y avait quand même un grand nombre de personnes qui prêtait attention à cet événement. Ceci dit, très peu connaissaient les détails concernant l'incident de la nuit précédente.

Les Joueurs possédaient tous un Pouvoir Magique de première classe mais étaient encore des lycéens.

L'attaque des malfaiteurs s'était achevée sans aucun exploit significatif, alors l'armée avait jugé que cela n'aurait pas d'impact négatif sur les Joueurs. Puisque c'était ainsi, ils avaient choisi de garder le secret.

Plutôt que d'appeler la cérémonie d'ouverture palpitante, elle donnait plutôt une impression d'ordre évidente. Les jeux étaient suffisamment voyants en eux-mêmes, alors une quelconque cérémonie additionnelle pour embellir le résultat était inutile, et il n'y avait pas non plus de discours ennuyeux pour les dignitaires. Après que les hymnes des neuf écoles eurent été joués successivement, les épreuves commencèrent officiellement.

Les rideaux étaient levés pour les dix prochains jours, durant lesquels des hommes et des femmes concourraient dans cinq épreuves pour la Division Officielle ainsi que la Division des Nouveaux Arrivants pour un total de vingt épreuves.

Les épreuves du premier jour étaient les préliminaires et les éliminatoires de [Tirs Rapides] et les préliminaires de [Bataille de Surf].

La différence de programmation reflétait le temps nécessaire pour chaque épreuve.

"Onii-sama, la Présidente est sur le point de se mettre en position."

"Alors notre force principale entre en scène pour la première épreuve, pourtant, je me rappelle que le préliminaire de Watanabe-senpai est le troisième ?"

"Oui."

Tatsuya et les autres se dirigèrent vers les tribunes de Tirs Rapides pour regarder l'épreuve de Mayumi. En partant de la gauche, l'ordre était Shizuku, Honoka, Tatsuya, et Miyuki. Ils n'étaient pas assis dans la zone des Joueurs dans l'arène même, mais dans des les tribunes du public ordinaire.

L'épreuve de [Tirs Rapides] impliquait d'utiliser la magie pour détruire des cibles volantes distantes de trente mètres au cours d'une durée limitée. La clé résidait dans la précision et la vitesse à laquelle quelqu'un pouvait tirer la magie vers l'extérieur, d'où le nom [Tirs Rapides].

Le match était divisé en deux parties.

Durant les préliminaires, les concurrents avançaient selon le mérite individuel basé sur le nombre de cibles détruites en cinq minutes.

Les préliminaires utilisaient simultanément quatre stands de tir pour mener six matchs, à la suite desquels le top huit avançaient.

Un total de vingt-quatre concurrentes était autorisé à participer.

Si les neuf écoles envoyaient trois concurrentes, il y aurait un total de vingt-sept, mais trois des neuf écoles avaient perdu leur droit de participer à cause de leur performance l'année précédente. Ils n'étaient autorisés à envoyer que deux concurrentes.

À part celle de [Code du Monolithe], toutes les épreuves partageaient cette règle.

Les Compétitions entre le top huit se déroulaient sous forme de duels.

Il y avait cent cibles rouges et cent cibles blanches tirées dans l'arène, et le nombre total de cibles correspondantes détruites déterminaient qui était le vainqueur.

"De la magie hautement destructive peut être utilisée pendant les préliminaires pour détruire rapidement un grand nombre de cibles d'un coup, mais parmi le top huit, le ciblage de précision est bien plus important."

Shizuku acquiesça en entendant les mots de Tatsuya, puisque Shizuku était la seule parmi eux à participer à la partie de Tirs Rapides de la Division des Nouveaux Arrivants.

"Généralement parlant, la plupart des gens utilisent des magies différentes pendant les préliminaires et l'éliminatoire…"

"Mais la Présidente Saegusa est réputée pour utiliser la même magie pendant les deux."

Au milieu des explications de Tatsuya, une jeune femme derrière eux l'interrompit.

"Erika."

"Hey, Tatsuya-kun."

"Yo."

"'Jour."

"Tatsuya-kun, Miyuki-san, Honoka-san, Shizuku-san, bonjour, tout le monde."

Assis derrière Tatsuya et compagnie, de droite à gauche, se trouvaient Léo, Erika, Mizuki et Mikihiko (mais l'ordre de parole était Erika, Léo, Mikihiko, et Mizuki).

La raison pour laquelle tous les quatre avaient trouvé ces places était parce qu'ils étaient assis sur la rangée du fond.

"Est-ce qu'il n'y a plus de place à l'avant ?"

"Je vous ai tous vus assis ici, et c'est plus facile de tout voir du fond, pas vrai ?"

"C'est vrai."

Les tribunes étaient construites comme une série de chaises de plus en plus élevées, avec les plus hauts niveaux au fond.

C'était une épreuve impliquant un tir des cibles à haute vitesse, alors les spectateurs des rangées de devant devaient posséder la même vue

que les concurrents.

Tout de même, le public s’avançait toujours plus en avant parce que
---

"Il y a une quantité impressionnante de garçons stupides."

Déclara Erika avec dédain sur un ton qui n’était pas tout à fait moqueur.

"Il semble qu’il y ait plus que de simples garçons parmi eux."

Répondit Tatsuya d’un ton sarcastique.

En d’autres termes, il n’y avait pas de place libre sur les rangées de devant.

"Onee-sama~ c’est ça ? Que c’est déprimant."

"Inutile d’être comme ça. Il pourrait y avoir une utilité considérable à être devant. Même pour quelqu’un comme moi, qui vois la Présidente quotidiennement, elle semble être comme une personne complètement différente, maintenant."

"Whoa ! Miyuki, que devrions-nous faire ? Ton Onii-sama a craqué pour quelqu’un d’autre !"

En entendant les mots ridicules d’Erika, Tatsuya et Miyuki ne purent que sourire amèrement.

Quant au sujet de leur conversation en cours…

"La [Sniper Elfique] est un surnom assez juste."

"La Présidente n’aime pas ce nom, alors sois sûre de ne pas le sortir devant elle."

L’avertissement de Tatsuya fit baisser subitement la tête à Honoka.

Les adolescents et les adolescentes se pressaient dans les rangées de devant pour admirer Mayumi alors qu’elle attendait dans le premier stand de tir que le match commence.

Mayumi portait un cache-oreilles dans ses magnifiques boucles de cheveux, une paire de lunettes transparentes, un pantalon uniforme élastique, et une tunique retournée qui pouvait facilement être prise pour une mini-jupe. Associé à un CAD en forme de fusil qui était obligatoire pour toutes les épreuves de Speed Shooting, cela créait la

combinaison parfaite de la séduction et de l'héroïsme, comme si elle était le premier rôle féminin dans un film à venir.

"Il y a vraiment des personnes qui utilisent la Présidente comme sujet de doujinshi…"

Mizuki dit doucement cela, probablement parce que cet accoutrement remuait quelque chose dans sa mémoire.

"… C'est la première fois que j'en entends parler."

Cependant, cela paraissait si décalé que même Erika put à peine trouver une réponse à temps.

"… Mizuki, grâce à quelle situation exactement as-tu eu connaissance de cela ? Si tes [Intérêts] se trouvent dans cette direction, il se pourrait que j'ai à réexaminer notre amitié."

Il semblait que Miyuki et Erika pensaient la même chose. Cette voix sérieuse en apparence contenait environ 10% de sérieux.

"Eh ? Non, je n'ai pas ce genre d'intérêts !"

Pourtant, Mizuki était sans aucun doute la plus choquée.

"Ça commence."

Mizuki était dans un état de panique complet en réalisant ce à quoi ils faisaient allusion, mais se débrouilla pour se secouer et se calmer avec les mots de Tatsuya.

Un silence de mort régnait sur les tribunes des spectateurs.

Les Joueurs portaient des cache-oreilles, alors quelque soit le bruit fait par le public, cela ne les affecteraient pas, mais c'était une question de principe.

Les Joueurs levèrent leurs minces fusils allongés qui ressemblaient presque à des CADs à usage compétitif en forme de canne, alors que leur calme et leur concentration firent agripper le bord de leur siège au public silencieux.

La lumière étincelante leus avertit de commencer.

Des cibles volèrent à travers le ciel accompagnées de légers bruits de tirs.

"Rapide… !"

Furent les doux mots qui échappèrent à Shizuku concernant la vélocité de vol des cibles.

--- Ou peut-être parlait-elle de la magie de Mayumi qui brisait des cibles à gauche et à droite.

Mayumi ne levait pas la tête et restait immobile avec son CAD braqué sur l'avant.

Cette épreuve ne consistait pas à utiliser le fusil pour tirer des balles, alors il était inutile de s'aligner visuellement avec les cibles, et les CADs ne possédaient pas de gueule ou de viseur.

Plutôt que de présenter les armes, sa position était plus semblable à celle prise pour bander un arc.

Les cibles étaient lancées à intervalles irréguliers.

Un total de cent cibles en cinq minutes.

En moyenne, cela faisait une cible toutes les trois secondes.

Comparée à celle de tirs normaux, c'était une allure ridiculement rapide. Compliquant l'affaire, il y avait les intervalles occasionnellement serrés entre les cibles. Parfois, cinq ou six d'entre elles volaient dans un intervalle de dix secondes.

Mayumi touchait toutes les cibles sans manquer un battement.

Le match de cinq minutes fut terminé en un clin d'œil.

"… Parfait."

Mayumi retira ses lunettes de protection et son cache-oreilles en souriant en réponse aux applaudissements des spectateurs. En la voyant, Tatsuya murmura comme s'il ne pouvait trouver autre chose à dire.

"Elle a utilisé des balles subsoniques faites de neige carbonique, c'est cela ?"

Demanda Miyuki en applaudissant, incitant Tatsuya à sourire et à acquiescer.

"C'est ça. Je suis surpris que tu aies pu le dire."

"… C'était suffisamment insignifiant pour que même moi puisse voir ça…"

Rétorqua Erika d’un air vexé, faisant rire Tatsuya de façon désabusée.

"Exact. Voir la même magie cent fois rend certainement les choses plus faciles."

Quelqu’un détourna le regard de honte (probablement parce qu’il ne l’avait pas vu), mais Tatsuya choisit de feindre l’ignorance.

"Cent ? Elle n’en a pas manqué une ?"

Demanda Honoka à Tatsuya, honnêtement surprise, surprise probablement provoquée par sa personnalité directe.

"Correct, l’aspect impressionnant n’est pas la vitesse d’invocation ou le nombre de fois où la magie a été invoquée, mais la précision impliquée. Même en utilisant de la Magie de Système Perception en même temps, l’individu a quand même besoin d’utiliser son cerveau pour traiter les données. Je ne sais vraiment pas si c’est parce qu’elle a accumulé suffisamment d’expérience en calculs répétés ou qu’elle est simplement très talentueuse… Elle mérite vraiment d’être une descendante directe des Dix Familles."

"Est-ce que la Présidente a utilisé de la Magie de Système Perception ?"

S’exclama Mizuki, surprise, mais la différence était que beaucoup de personnes partageaient son expression cette fois.

"La Magie de Système Perception Visuel Longue Portée [Multi Scope] n’est pas faite pour examiner des corps non matériels ou des Corps d’Information. Elle est faite pour observer un objet physique sous des angles multiples comme un radar visuel. La Présidente utilise souvent ce genre de magie."

Le regard de Tatsuya lui demanda si elle avait remarqué. Mizuki secoua la tête.

"Pendant l’assemblée de l’école, elle a utilisé cette magie pour [Regarder] chaque recoin. C’est vraiment un talent rare… Ce niveau de tir est impossible à l’œil nu, n’est-ce pas ?"

"C’est vrai."

Shizuku répondit immédiatement. Pendant la compétition, elle se mettait elle-même à la place de Mayumi et envisageait ses options au stand de tir.

"Tout de même, la Présidente utilisait de la Magie de Système Vitesse pour changer les molécules d'air en particules de glace et les accélérer au niveau subsonique tout en utilisant de la Magie de Système Perception en même temps, pas vrai ? Avec ces deux là utilisées en tandem en plus de la décélération et de l'accélération cent fois, la Présidente doit avoir un Pouvoir Magique impressionnant."

À cet instant, le [Pouvoir Magique] dont parlait Léo ne concernait pas le [Pouvoir Magique] de l'évaluation des compétences pratiques, mais le contexte plus générique d'avoir la capacité physique de lancer des incantations à répétition.

Une incompréhension répandue était que la magie n'était pas une activité qui consommait de l'énergie.

Un phénomène n'est pas réécrit en brûlant toute l'énergie physique, mais en éditant les données entourant le phénomène.

Afin de modifier les données, une Séquence d'Activation formée de Psions est requise, alors le nombre de fois où la magie peut être invoquée est limité par la différence d'ampleur des Séquences d'Activation. Le [Pouvoir Magique] dont parlait Léo, s'il était assimilé à un véritable concept, serait similaire à la pression mentale exercée sur le corps.

"La Présidente utilise une variante du [Blizzard Sec]. Le [Blizzard Sec] originel est déjà une forme de magie hautement efficace, et, avec l'aptitude de la Présidente, elle pourrait probablement le lancer milles fois plutôt qu'une dérisoire centaine."

Les éloges interminables de Tatsuya envers Mayumi suscitèrent des expressions complexes de la part de Miyuki et des autres.

Ils reconnaissaient également que le Pouvoir Magique de Mayumi était incroyable, mais entendre Tatsuya, qui était d'ordinaire très critique à propos de toutes les choses magiques, prononcer un tel éloge sans retenue ne pouvait qu'éveiller un peu de jalousie.

D'un autre côté, Léo s'inquiétait de quelque chose de complètement autre.

"Eh, mais créer de la glace sous la chaleur de l'été et l'accélérer à un niveau subsonique devrait nécessiter beaucoup de pouvoir. Même si la conservation d'énergie ne s'applique pas totalement à la magie, je

trouve quand même difficile de croire l’estimation de Tatsuya selon laquelle on peut utiliser une quantité de magie si faible pour accomplir une modification de phénomènes d’un tel niveau."

"Bien qu’elle ne s’applique pas totalement, ça ne veut pas dire qu’elles sont sans rapport."

Tatsuya se leva et se dirigea vers les tribunes des spectateurs de [Bataille de Surf] tout en répondant avec cette réplique mystérieuse.

"Qu’est-ce que tu veux dire ?"

Léo poursuivit Tatsuya et reposa sa question.

"La Magie est une technique impliquant des changements de phénomènes et n’est pas limitée par la conservation d’énergie ; cependant, l’objet reste lié à cette dernière. Par exemple, si tu appliques de la Magie de Système Vitesse à un objet sans utiliser la magie pour maintenir son état, l’objet accéléré deviendra froid ; si tu lances de la Magie d’Attribut Chaleur sur un objet en accélération sans maintenir sa vélocité, la cible ralentira. En général, la magie s’efforce d’éviter de changer des aspects sans rapport en ajoutant des informations pour conserver le statu quo, alors il y a rarement une opportunité d’observer cela en action. Les lois de la physique sont difficiles à contourner et, même si elles sont altérées par des forces illogiques comme la magie, elles retournent habituellement à des résultats logiques. La magie ne brise pas la conservation d’énergie qui reste un phénomène [Naturel], moins de Force d’Interférence est donc nécessaire. Tu comprends maintenant, n’est-ce pas ? La Magie utilisée pour accélérer la glace se base sur la [Prise de l’énergie potentielle perdue en créant des particules de glace et sa conversion en mouvement]. Bien que contraire à la loi de l’entropie et quelque chose de contre nature, c’est une explication plus logique que de construire simplement de la glace, d'accélérer les particules avec de la magie, puis d’appliquer la thermodynamique."

"… J’ai le sentiment que je viens d’être dupé."

"Léo, la magie est une capacité utilisée pour [Tromper le Monde]. Souviens-t-en."

"En d’autres termes, nous autres Magiciens sommes des escrocs qui ruinons le monde ?"

"Plus un Magicien est fort, plus il est bon escroc."

Tatsuya était tout à fait sérieux en expliquant tout cela, mais à cause des commentaires ajoutés par Erika et Shizuku, il ne put que sourire en réponse.

◊ ◊ ◊

[Bataille de Surf] était une compétition durant laquelle les concurrents utilisaient des planches de surf en forme de fuseaux ayant pour dimensions 285 sur 51 centimètres pour naviguer sur une voie navigable artificielle. La planche de surf n'avait pas de propulsion en elle-même, alors les Joueurs devaient utiliser la magie pour atteindre la ligne d'arrivée. Pendant la course, les attaques sur les autres Joueurs eux-mêmes ou leur planche étaient interdites, mais de la magie pouvait être lancée sur la surface de l'eau.

Il n'y avait pas d'ensemble de règles unifié pour cette épreuve. Ce concours était à l'origine conçu par la Navy pour entraîner des Magiciens, alors, avec la magie comme condition préalable, il était impossible que cette épreuve puisse être suffisamment vulgarisée pour justifier un ensemble spécifique de règles.

La partie de Battle Board de la Compétition des Neuf Lycées consistait à achever trois tours d'une voie navigable de trois kilomètres. Cellr-ci possédait des lignes droites, des virages serrés, et des portions de montée et de chutes d'eau.

Les hommes et les femmes concourraient chacun sur une piste séparée, mais il n'y avait pas de différence notable de difficulté.

Les préliminaires comportaient six tours de quatre concurrents chacun, alors que les éliminatoires comportaient deux tours de trois concurrents chacun, avec quatre Joueurs éliminés se battant pour la troisième place. Les finales se déroulaient sous forme de duels.

La durée moyenne de chaque tour était de quinze minutes.

La vitesse la plus élevée pouvait excéder les trente nœuds – environ entre cinquante-cinq et soixante kilomètres par heure. Placés sur la planche de surf, les Joueurs n'avaient aucun abri contre le vent

entrant. Contrairement aux autres courses nautiques qui pouvaient bénéficier du fait d'être sous le vent, Bataille de Surf était entièrement contre le vent. Faire seulement face à la résistance de l'air sapait rapidement l'endurance des Joueurs.

"Les concurrents vivent en général des moments difficiles dans cette épreuve. Honoka, comment es-tu, physiquement ?"

"Aucun problème. Sur les conseils de Tatsuya-kun, j'ai suivi un entraînement physique. Après avoir été sélectionnée, j'ai aussi augmenté mes heures de sommeil."

Sans rapport avec la Compétition des Neuf Lycées, Tatsuya était inquiet à propos de l'endurance physique d'Honoka depuis le moment où ils s'étaient rencontrés et il lui avait conseillé de ne pas suivre simplement un entraînement à la magie, mais aussi physique. Tatsuya avait simplement mentionné cela d'emblée, mais Honoka l'avait pris à cœur, étonnamment.

"Honoka s'est vraiment faite quelques muscles."

"Non, Miyuki, ne dis pas ça. Je ne veux pas être une femme culturiste."

En entendant cette conversation à deux côtés, même Tatsuya rit tout haut.

"Tu vois… Même Tatsuya-kun a ri."

"Il rit simplement parce que tu as parlé d'une manière étrange."

"Même toi, tu dis ça, Shizuku… ? Très bien, je sais quand je suis exclue. Je ne suis pas pareille que vous deux. Tatsuya-kun n'est pas enclin à s'occuper de mon épreuve."

La colère soudaine d'Honoka rendit Tatsuya tellement perplexe qu'il ne put plus rire.

Pourquoi exactement essayait-elle de l'avoir maintenant ?

"… Je suis responsable de ton soutien et de ta maintenance pendant [batte Illusoire]."

En tout cas, Tatsuya ne répondit qu'à sa plainte littérale.

Cependant…

"Mais pas [Bataille de Surf], n'est-ce pas ? Clairement, tu peux

t’occuper de chaque épreuve de Miyuki et de Shizuku…"

Cela sembla avoir provoqué l’effet inverse.

"… En échange, je t’ai aidé à t’entraîner et à créer des stratégies, alors ce n’est pas comme si je t’ignorais…"

Alors qu’il tentait de se justifier, Tatsuya se sentit tomber dans une situation difficile et épineuse et commença à bégayer.

"Tatsuya-kun, Honoka-san ne parle pas de ça."

En voyant cela, Mizuki l’interrompit, mais elle ne donna pas l’impression de pouvoir supporter cette scène plus longtemps.

"Onii-sama… Je pense que tu es un petit peu trop bouché."

À la suite de Mizuki, c’était au tour de Miyuki.

"Nous avons découvert une faiblesse inattendue en Tatsuya-kun."

Suivit d’Erika.

"Un imbécile ?"

Shizuku rejoignit elle aussi l’attaque.

Assiégé par les femmes, Tatsuya était frappé au point d’en rester sans voix. Il sentait qu’elles étaient ridiculement illogiques, mais, en même temps, il sentit que toute résistance était vaine.

Ce n’était pas comme s’il avait reçu du soutien de la part des garçons.

Jusqu’à ce que l’épreuve commence, Tatsuya ne put qu’endurer patiemment cette situation.

◊ ◊ ◊

La voie navigable étant prête et les concurrentes prenant leurs positions, Tatsuya put enfin s’échapper.

En chemin, il avait comprit où Miyuki et les autres voulaient en venir.

Ceci dit, comprendre et agir étaient deux problèmes distincts.

Par la suite, il devrait être plus prudent et fermer sa bouche – Tatsuya se le promit intérieurement en regardant les quatre concurrentes flotter vers la ligne de départ.

Puisque l’épreuve était sur l’eau, il n’y avait aucune raison de dessiner des lignes (personne n’aurait pu le faire, même s’il l’avait voulu).

Quatre personnes s’alignèrent le long de la voie, Mari se tenant au milieu.

Les autres concurrents s’agenouillaient sur un genou ou les deux pour se préparer à foncer, seule Mari se tint droite.

Cette scène reflétait principalement la différence d’équilibre entre les Joueuses. D’un autre point de vue, Sa Majesté la Reine (pas simplement la Reine), régnait sur les autres Joueuses.

"Uwa, cette femme est juste aussi arrogante que d’habitude…"

En entendant le murmure d’Erika, Tatsuya sentit qu’elle affichait plus d’hostilité que d’ordinaire.

Pourtant, il venait juste de jurer de [Garder sa bouche fermée], alors il se retint de commenter.

Léo et Mizuki, qui étaient assis à côté d’Erika, semblèrent également l’oublier.

L’écran géant pendant du dirigeable dans le ciel affichait les noms des quatre concurrentes.

Seule Mari révélait un sourire sans peur.

Elle est vraiment la personne parfaite pour jouer l’antagoniste, pensa Tatsuya.

Cependant, beaucoup parmi les lycéennes ne seraient pas d’accord avec lui.

Quand le présentateur chargé d’identifier les Joueuses proclama le nom de Mari, les tribunes – plus particulièrement les rangées de devant – tremblèrent du fait des cris perçants féminins.

Mari agita la main en réponse, ce qui ne fit qu’intensifier les cris.

"… Il semble que notre aînée ait des fans assez jusqu’au-boutistes."

Comparée à celle des jeunes hommes qui supportaient Mayumi, la folie de ce groupe était plusieurs fois plus intense.

"Watanabe-senpai possède un visage fringant, alors je peux quelque peu comprendre."

Miyuki approuva d'un point de vue de tierce personne. Ironiquement, après la Compétition des Neuf Lycées Miyuki posséderait des fans éternellement loyaux de chaque sexe qui surpasseraient en nombre les fans masculins de Mayumi et ceux féminins de Mari. Si elle pouvait prédire son propre futur, Miyuki aurait pu résonner avec le même sentiment se cachant derrière le masque de Mari alors qu'elle souriait à ses fans, mais, pour l'instant, elle ne pouvait s'en moquer davantage.

[Bataille de Surf] était une épreuve se déroulant au cœur de l'été, mais les concurrentes ne portaient pas de maillot de bain.

La combinaison couvrant étroitement leur corps portait l'emblème de chaque école.

Mari se tenait la tête haute au-dessus de l'eau, ses cheveux flottant en-dessous du bandeau qu'elle portait pour les tenir en place. Cela dépeignait un tableau qui n'aurait pas été hors de propos au coin d'un roman parlant de jeunes cavaliers.

Erika devait avoir entendu les mots de Miyuki, mais elle ne répondit pas immédiatement.

"Prêts…"

Le haut-parleur envoya le signal.

Au coup de feu d'un pistolet, la course commença.

"Des tactiques d'autodestruction ?"

Murmura Erika avec incrédulité.

Tatsuya en restait de la même façon sans voix.

Quand la course avait commencé, la concurrente du Quatrième Lycée avait fait exploser l'eau en-dessous.

Elle avait probablement l'intention de créer des vagues pour perturber les autres Joueuses tout en montant sur les ondes pour avoir plus de propulsion, mais…

"Ah, elle s'est stabilisée."

Créer un raz-de-marée géant était inutile si cela perturbait son propre équilibre.

Mari avait chargé avec succès au début, alors elle n'était pas affectée par le chaos causé par la concurrente du Quatrième Lycée et était

maintenant complètement en tête.

La planche de surf de Mari glissait sur la surface de l'eau.

Elle n'utilisait probablement pas de Magie de Système Mouvement pour piloter mais considérait la planche et son corps physique comme étant une seule entité. Il était possible qu'elle soit en train de lancer de la magie sur deux objets simultanément – son corps ainsi que la planche.

Malgré tout, cela requérait un ciblage précis pour la magie.

La planche s'accrochait à la surface de l'eau et passa adroitement un angle serré.

Sa stabilité était si totale que c'était comme si ses pieds étaient collés à la planche.

"Alors elle recalcule la Magie de Fortification ainsi que la Magie de Système Mouvement."

Tatsuya n'eut pas besoin de disséquer la Séquence d'Activation. Il avait compris le mécanisme d'après la position de Mari et ses méthodes pour maintenir son équilibre alors qu'elle parcourait l'eau.

"Magie de Fortification ?"

Les oreilles de Léo se tendirent à ces mots, et il intervint immédiatement.

C'était un domaine dans lequel était spécialisé Léo, alors il était impossible qu'il ne soit pas intéressé.

"Quelle est la cible de la fortification ?"

"Elle a stabilisé la connexion entre elle-même et la planche pour éviter de tomber."

Léo adopta un air interrogatif, probablement parce qu'il ne voyait pas ce que voulait dire Tatsuya.

Naturellement, Tatsuya n'en demanda pas la raison et se rattrapa adroitement.

"La Magie de Fortification n'est pas seulement utilisée pour renforcer la durabilité d'un objet. Elle est aussi utilisée pour stabiliser la location correspondante d'un objet, est-ce que tu comprends, jusque là ?"

"Bien sûr, parce que je l'utilise moi-même."

"Watanabe-senpai lance de la magie pour stabiliser sa position par rapport à la planche, puis applique de la Magie de Système Mouvement à cette seule [Unité] composée d'elle-même et de la planche. Cette magie n'est pas prolongée mais alterne entre les Magies de Fortification et de Système Mouvement à des intervalles appropriés selon les changements de terrain de façon à ce qu'elle puisse éviter un chevauchement des magies."

En raison du fait que c'était une magie dans laquelle il était spécialisé, Léo comprit que c'était une technique extrêmement complexe.

"Wow…"

Léo soupira d'ébahissement.

D'un autre côté…

"Pourtant, il semble manquer quelque chose à cette méthode… Certes, la cible de la Magie de Fortification n'est pas restreinte à des objets formés du même matériau, mais avec cela…"

À cause de ses habitudes d'ingénieur prodige, Tatsuya tomba dans une profonde réflexion faisant penser à celle d'un savant fou.

"Onii-sama ?"

La voix de Miyuki le réveilla de sa contemplation.

Durant le bref moment pendant lequel Tatsuya avait détourné son regard, la silhouette de Mari avait déjà disparu dans l'angle mort et avait été perdue de vue.

Tatsuya répondit vaguement avec "Ce n'est rien" et concentra son attention sur le grand écran.

Mari glissait sur la voie navigable à contre-courant.

"Magie de Système Vitesse."

D'après ses mouvements, elle devait avoir utilisé une technique qui inversait les vecteurs accélérations.

"Ainsi que de la Magie de Système Oscillation, n'est-ce pas ?"

En même temps, elle employait de la magie pour créer des vagues opposées pour atténuer la résistance de l'eau.

"Bien joué. Elle jongle avec entre trois et quatre magies pendant ses calculs."

L’éloge de Tatsuya éclata hors de sa bouche.

Rien de particulièrement puissant n’était appliqué.

Tout de même, l’effet combiné était incroyablement puissant.

Comparée à Mayumi, qui élevait la magie de précision à grande vitesse à une forme d’art pour stupéfier le public, Mari se reposait sur la prise de décision rapide comme l’éclair et une large variété d’outils pour peindre un véritable arc-en-ciel de magies se chevauchant pour enchanter le public.

Toutes les deux avaient déjà surpassé de loin une qualité de lycéen.

Après que Mari eût atteint le sommet, elle sauta dans la cascade.

Au moment où Mari amerrit, un raz-de-marée éclaboussa tout à l’extérieur.

Le raz-de-marée généré par Mari la propulsa non seulement plus loin, mais renversa presque la Joueuse en deuxième position qui était derrière elle.

"Quelle stratège…"

"C’est juste sa personnalité sournoise qui se fait connaître."

Erika répondit avec une réplique furieuse au murmure de Tatsuya. Tatsuya était à moitié d’accord, alors il n’offrit aucune réfutation particulière. Tout de même, une [Personnalité Sournoise] était un grand éloge pour un stratège.

Avant même que le premier tour ne soit achevé, la victoire de Mari était pratiquement certaine.

◊ ◊ ◊

Les préliminaires de Bataille de Surf étaient prévus pour avant et après manger. Il ne restait que les tours du quatrième au sixième. Après qu’ils eurent décidé de regarder les demi-finales et les finales de Tirs Rapides, Tatsuya dit au revoir à ses amis.

Il retourna à l'hôtel et marcha vers les chambres réservées aux officiers haut-gradés. Il accomplissait la promesse qu'il avait faite à Kazama la nuit dernière.

Kazama possédait le grade de Commandant, mais ses expériences et la nature unique des troupes sous son commandement lui assuraient un traitement au-dessus de son rang officiel. Dans cette suite normalement réservée aux Colonels et au-delà, Kazama appréciait une pause rapide avec le cadre officier tout en savourant le thé et les casse-croûtes commandés au service d'étage.

"Alors tu es venu. Assieds-toi."

Tatsuya avait été amené dans une chambre par des soldats en service (pas des soldats de cette base, mais sous le commandement direct de Kazama), et, même si Kazama avait étendu l'invitation cordiale à lui demander de s'asseoir, Tatsuya hésita en voyant qui étaient les officiers.

Le grade de Tatsuya, [Officier Spécial], n'était pas un [Grade Promu] ; il était un [Officier non promu reconnu par les normes internationales] (actuellement, les bataillons de ce pays ne possédaient plus le système [d'Officier Associé]). Des soldats qui n'étaient pas restreints par le classement militaire mais gardaient quand même le droit de participer sur les lignes de front ne pouvaient être trouvés que dans la structure de commandement du Bataillon Indépendant Équipé en Magie pendant les campagnes ; cependant, même sans un système de classement intégré, tous ceux présents étaient quand même des officiers supérieurs et, plus important, des aînés, alors il ne pouvait pas nonchalamment accepter une telle invitation.

"Tatsuya, aujourd'hui, nous ne t'invitons pas en tant que [Magicien de Classe Stratégique, Officier Spécial Ooguro Ryuuya], mais comme notre bon ami [Shiba Tatsuya], alors être trop formel ne serait que gênant.

"C'est aussi difficile de discuter si tu es debout tout le temps, alors pourquoi ne t'assieds-tu pas ?"

À ce moment, les deux officiers à la table firent également signe à Tatsuya de s'asseoir.

"Capitaine Sanada, Capitaine Yanagi… Je comprends. Excusez mon

interruption."

Une amitié qui transcendait l'âge invita Tatsuya à abandonner son attitude excessivement formelle pour éviter d'être impoli. Après un tour de salutations, il s'assit directement en face de Kazama.

Ils étaient assis à une table ronde.

L'heure du thé de l'après-midi pour le Bataillon Indépendant Équipé en Magie était faite pour qu'ils se relâchent et se détendent.

Bien que le siège de Tatsuya fût le plus près de la porte, les adultes l'accueillirent quand même comme un égal.

"Tout d'abord, cela faisait longtemps. Je sais que nous ne devrions pas utiliser des tasses de thé pour cela, mais à la tienne."

"Lieutenant en Second Fujibayashi, merci."

La femme officier qui servait en tant qu'adjudante de Kazama – plutôt comme secrétaire – lui tendit une tasse de thé, laquelle Tatsuya accepta sur une petite assiette en le signalant avec ses yeux.

Aujourd'hui, elle était en vêtements décontractés plutôt qu'en uniforme, ce qui lui donnait l'aura d'une [Jeune secrétaire d'une grande entreprise].

Pas seulement elle, tout le monde portait des costumes ou des tenues décontractées dans lesquelles les chemises n'allaient pas avec la veste.

"En réalité, nous nous sommes vus plus tôt, mais laissons un peu de mou à Fujibayashi."

"Dr. Yamanaka, inutile de vous forcer."

"Non, je ne suis pas insociable au point de ruiner le moment où nous levons les tasses pour célébrer notre réunion."

"… Vous cherchez simplement une excuse pour verser un peu de brandy dans les tasses de thé, n'est-ce pas ?"

"La situation exige de l'alcool."

"Vraiment… Je pensais que [les Docteurs ne se soignant pas eux-mêmes] voulait dire quelque chose d'entièrement différent…"

Celui qui répondit calmement à la confusion du Capitaine Yanagi était un docteur et un soigneur de première classe – le médecin de combat

Yamanaka.

En incluant Kazama, ce furent cinq personnes au total qui secouèrent la tête d'exaspération, ce qui incluait les officiers du Bataillon Indépendant Équipé en Magie qui avaient salué Tatsuya.

"Capitaine Yanagi, Lientenant en Second Fujibayashi, cela faisait longtemps. Capitaine Sanada, merci pour votre récent soutien."

Tatsuya commença par saluer les deux qu'il n'avait pas vus pendant un bout de temps, puis finit par remercier le Capitaine Sanada qui l'avait assisté à la base le mois dernier.

"Non, je suis celui qui devrait te remercier. Toi seul est capable de manier le système de ciblage de précision longue portée de [Third Eye]."

"C'est simplement parce que le CAD a été à l'origine conçu pour que je l'utilise… En parlant de cela, Docteur Yamanaka, je n'ai pas encore reçu les résultats du dernier examen."

"Tatsuya, suis-je le seul que tu traites différemment ?"

"Docteur… Je ne pense pas que quiconque pourrait voir sous un jour positif un docteur qui demande directement la permission de mener des expériences humaines."

Fujibayashi répliqua aux mots de Yamanaka.

Yamanaka tourna délibérément la tête d'un côté.

Des rires se répandirent à la table ronde.

Bien qu'ils eussent clamé que cela faisait longtemps, en réalité, ce n'était pas comme s'ils ne s'étaient pas vus pendant quelques années.

Yanagi était celui qui avait été absent le plus longtemps, soit approximativement six mois, alors que Tatsuya avait vu Sanada et Yamanaka pour la dernière fois environ un mois auparavant.

Le sujet se changea naturellement en rapport de situation durant lequel ils discutèrent de l'organisation criminelle qui pourrait chercher à agir pendant la Compétition des Neuf Lycées.

Comme ils en avaient parlé au téléphone, les malfaiteurs de la nuit dernière faisaient partie de [Dragon Sans Tête]. Malheureusement, ils n'avaient toujours pas d'informations concernant les intentions du

groupe et ses buts. Chacune des cinq personnes ici présentes (en particulier Yamanaka) pouvait facilement obtenir des résultats si les interrogations leurs étaient confiées, mais, actuellement, ils ne voulaient pas rejoindre l'enquête de manière proactive.

"Malgré tout, c'est tout un spectacle que tu as offert la nuit dernière, ou étais-tu préparé à l'avance ?"

"Commandant, vous surestimez mes capacités. J'ai simplement eu vent de leur présence alors que je me promenais."

"Aussi tard ?"

"Ma maintenance de CAD a pris du temps."

À cause de leur âge similaire, celle avec qui Tatsuya parlait le plus dans ce groupe était le Lieutenant en Second Fujibayashi. Grâce à son entraînement militaire, elle possédait une silhouette magnifique que la plupart des gens n'osait regarder trop ouvertement, pourtant, son attitude amicale, sa garde-robe et son maquillage banaux permettaient à Tatsuya de converser confortablement avec elle.

"Pas étonnant que tu participes en tant que membre du Staff. Est-ce que tes coéquipiers savent que tu es [Silver] ?"

"Non, ça reste un secret."

Tatsuya secoua la tête en répondant à la question de Yamanaka.

"Étant donnée la différence de capacités, suis-je le seul qui pense que c'est de la triche de t'avoir pour ingénieur de CADs dans une compétition lycéenne ?"

"Capitaine Sanada, Tatsuya est un authentique lycéen."

Sanada grimaça alors qu'il soumettait une plainte légitime. Fujibayashi sourit aussi tout en détournant le commentaire de Sanada et se retourna vers Tatsuya.

"Pourquoi ne t'es-tu pas inscrit comme Joueur ? Je pense que tu pourrais rencontrer un succès considérable avec ton Flash Cast. Même en excluant [Material Burst], tu peux au moins te rabattre sur [Dispersion de Brouillard]."

"Non, non seulement [Material Burst] et [Dispersion de brouillard] sont toutes les deux classifiées, mais leur pouvoir destructeur surpasse

également la limitation fixée pour la compétition. En plus, [Material Burst] est inaccessible sans l'utilisation de [Third Eye]."

"Mais tu as amené [Trident] avec toi, pas vrai ?"

"C'est aussi contre les règles, en particulier celles concernant les CADs à usage compétitif. De plus, Flash Cast est considéré comme l'un des secrets de la Famille Yotsuba."

Tatsuya sourit ironiquement en réfutant la suggestion de Fujibayashi.

Tout de suite après, Yanagi continua d'un ton impuissant :

"Fujibayashi… Tu es en fait en train de suggérer que nous utilisions de la magie de [Dissolution] de niveau stratégique, [Material Burst], dans une compétition lycéenne J'appelle ça un jeu déloyal."

"Je ne pense pas non plus qu'il y aurait une opportunité pour utiliser [Material Burst] dans la Compétition des Neuf Lycées ; cependant, durant celle de l'année dernière, le rejeton de le Famille Juumonji a utilisé [Phalanx], et la jeune demoiselle de la Famille Saegusa a lancé [Tireur de Magie], alors je ne pense pas que [Dispersion de Brouillard] soit hors limites."

"Fujibayashi-san, [Phalanx] de la Famille Juumonji est une magie défensive, alors il n'y a pas de pouvoir destructeur impliqué. De même, le plus grand avantage de [Tireur de Magie] de la Famille Saegusa est sa flexibilité pure dans la force appliquée, alors son pouvoir destructeur varie également. D'un autre côté, [Dispersion de Brouillard] est incontestablement une magie de rang A en terme de pouvoir destructeur qui est capable de réduire un objet à son niveau moléculaire, alors elles ne peuvent pas être comparées l'une à l'autre."

"Aha, Capitaine Sanada, est-ce que vous ne saviez pas ? Le pouvoir destructeur est aussi mesuré dans les épreuves qui pourraient affecter les Joueurs eux-mêmes, alors Tirs Rapides et Destruction des Pilliers ne relèvent pas de sa juridiction. Fait assez intéressant, le manuel qui insiste sur la sécurité avant tout glisse sur ce point."

La Compétition des Neuf Lycées avait été changée au format actuel dix ans auparavant. De toutes les personnes présentes qui avaient participé à la Compétition des neuf Lycées, la seule qui avait combattu sous les règles actuelles était Fujibayashi, qui avait assisté le Troisième Lycée pour revendiquer la couronne pendant son année.

Alors que tous les deux s’apprêtaient tout juste à s’embarquer dans un débat passionné concernant leurs spécialités, Kazama les arrêta sur place.

"Malgré tout, nous ne pouvons révéler aucune magie constituant un secret militaire devant tant de témoins, alors il n’y a aucune utilité à en discuter, n’est-ce pas ?"

Kazama intervint dans le débat de ses subordonnés comme un homme combattant un mal de tête.

Soudain, son visage adopta un masque dénué d’émotions lorsqu’il se tourna vers Tatsuya et parla d’une voix d’un froid d’acier.

"En parlant de ça, Tatsuya, tu comprends que si tu es appelé à participer en tant que Joueur…"

"Commandant, je comprends. Si je suis acculé dans une situation requérant le déploiement de [Dispersion de Brouillard], je choisirai de déclarer forfait et d’accepter ma défaite."

Même si l’épée était toujours dans son fourreau, Tatsuya pouvait quand même sentir la différence entre une véritable lame et un bokken. En tout cas, en voyant l’attitude sérieuse de Kazama avec une lame sans pitié tapie derrière lui, il était impossible que Tatsuya puisse mal lire les intentions de Kazama.

Kazama et Tatsuya avaient tous les deux appris du même maître, et il y avait un lien avéré d’amitié entre eux deux, pourtant leur apprentissage mutuel et leur amitié n’étaient pas la première des priorités à l’esprit de Kazama. Si nécessaire, Kazama abandonnerait Tatsuya sans hésitation, et Tatsuya en ferait autant.

"… Cependant, je ne peux pas imaginer de situation dans laquelle je serais forcé à participer en tant que Joueur."

"C’est simplement un blocage mental, tant que tu comprends la situation."

Alors que tous les autres riaient, Kazama et Tatsuya se fixaient l’un l’autre d’un regard intense et mirent fin à leur conversation.

Comme le dit le proverbe, [Dieu Seul le Sait], mais même avec cela à l’esprit, la perspective de Tatsuya était la possibilité la plus logique. Tous les deux étaient d’accord sur ce point.

Malgré tout, aucun d’eux n’était parfaitement confiant quant à l’évaluation de Tatsuya concernant sa propre situation fâcheuse.

◊ ◊ ◊

"Tatsuya-kun, par ici, par ici !"

Après avoir dit au revoir au groupe de Kazama et avoir quitté leur pause thé, Tatsuya retourna aux terrains de la compétition où l'épreuve féminine de Tirs Rapides se déroulait pour ne trouver que des tribunes dépourvues de places libres. Alors qu’il cherchait ses amis parmi la foule, la première à le trouver, Erika, l’appela en criant.

"Le top huit est vraiment populaire."

Tatsuya se fraya un chemin à travers la foule et s’assit à côté d’Erika.

"C’est simplement parce que la Présidente passe après. Les autres tours n’auront absolument pas autant de spectateurs."

Les mots de Tatsuya n’étaient que ses pensées privées murmurées à voix haute, mais Miyuki, qui était installée confortablement de l’autre côté de Tatsuya, répondit poliment.

Cette fois, Miyuki était assise derrière Léo, Mizuki était derrière Erika, Honoka derrière Tatsuya, et Shizuku derrière Miyuki.

"Honoka, est-ce que je te bloque la vue ?"

Tatsuya avait eu une poussée de croissance depuis son entrée au lycée et faisait maintenant presque 180 centimètres (178 pour être précis), et même avec la différence de hauteur entre les sièges, il était quand même inquiet quant au fait d’éclipser complètement la visibilité de Honoka.

Cependant, Honoka sourit en secouant la tête à l’intention de Tatsuya, qui s’était retourné pour lui demander.

"Vraiment… En parlant de ça, où est Mikihiko ?"

"Il a dit qu’il ne se sentait pas bien, alors il est retourné dans sa chambre pour se reposer."

Alors qu’Erika répondait à l’interrogation de Tatsuya, son expression

ajouta clairement "qu'il est inutile."

"Il est probablement anxieux. Je m'évanouirais probablement si je ne portais pas mes lunettes."

Mizuki parla pour Mikihiko.

Pas étonnant, pensa Tatsuya. C'était un effet secondaire naturel pour ceux possédant des sens affutés.

Il était grandement intéressé par leurs états émotionnels respectifs, mais choisit de laisser cela de côté pour l'instant.

À l'instant où Mayumi apparut sur la plateforme de tir, une tempête d'acclamations secoua la zone d'observation.

Les écrans placés autour de la terrasse d'observation projetèrent les mots [Silence s'il vous plaît], faisant disparaître immédiatement les acclamations.

Devant l'absence du moindre son, le niveau d'anxiété explosa.

Tatsuya compatit un peu avec son adversaire.

Quelle que soit la compétition, quand on faisait face à une superstar, il y avait toujours du stress et de l'anxiété en plus.

Peut-être s'inquiétait-il pour le compte de l'adversaire.

Comme si elle faisait complètement la sourde oreille aux acclamations des spectateurs, Mayumi enleva la sécurité de son CAD en forme de fusil et se prépara pour le match.

Le tournoi utilisait des lumières pour signaler le début du match.

Pour le top huit, le concours se faisait sous forme de duels. Cent cibles rouges et cent cibles blanches étaient tirées en l'air, et le vainqueur était celui qui avait détruit le plus grand nombre de leurs cibles désignées.

En fait, tant qu'aucune cible n'était lancée par la machine, le tour n'avait pas encore commencé.

Pourtant, pour les concurrents de Tirs Rapides, il y avait toujours les cinq signaux lumineux, et le cor sonna le commencement.

La première lumière brilla.

Les lumières augmentèrent peu à peu. Une fois qu'elles eurent atteint

leur apogée, des disques de porcelaines commencèrent à envahir le ciel.

Les disques blancs dansèrent à travers le ciel.

La couleur de la cible de Mayumi était rouge.

Les cibles teintées de rouge volèrent en éclats dès qu'elles furent à portée de tir.

"Impressionnant…"

Tatsuya était intérieurement d'accord avec les soupirs venant de derrière lui.

C'était vraiment impressionnant.

D'un point de vue stratégique, ce n'était pas la méthode la plus efficace.

En abattant vos propres cibles, votre adversaire n'aurait pas à s'inquiéter de vous faire cadeau de points. L'adversaire pouvait tirer sur n'importe laquelle des cibles qu'il voyait.

Cependant, le pouvoir écrasant de Mayumi rendait cette tactique discutable.

"Eh ?"

Honoka laissa échapper un hoquet.

Shizuku ne fit aucun bruit, mais d'après le rythme de sa respiration, elle n'en était pas moins stupéfaite.

"Le [Tireur de Magie] est… encore plus rapide que l'année dernière."

Les yeux de Tatsuya étaient rivés sur les disques volants et il acquiesça aux mots de Miyuki.

Les disques rouges étaient cachés par les disques blancs dans le ciel, mais de la glace carbonique les touchait par [En-dessous].

Il n'y avait pas de projectiles à tête chercheuse, puisque personne ne testerait leur chance avec une magie aussi inefficace.

Cette magie à longue portée attaquait les disques rouges avec de la glace carbonique depuis des endroits non obstrués par les disques blancs.

Elle ne créait pas des balles magiques, mais des tourelles de tir – d'où

le nom [Tireur de Magie].

Il y avait beaucoup de capacités magiques qui pouvaient affecter des cibles à cette distance.

Dans l'épreuve de Tirs Rapides, l'utilisation par Mayumi de balle pour tirer avec précision sur une cible était en fait une exception. Les tactiques traditionnelles consistaient à lancer de la Magie de Système Oscillation sur les disques eux-mêmes pour les réduire en miettes, ou à appliquer de la Magie de Système Mouvement pour que les disques se percutent les uns les autres. La Magie n'était pas gênée par les obstacles physiques, alors les disques n'étant pas dans le champ de vision ne requéraient en fait pas de compétence spécial pour être détruits.

Dans ce cas, pourquoi est-ce que le soi-disant [Tireur de Magie] qui était spécialisé dans l'utilisation de balles magiques à grande distance était-il utilisé dans cette épreuve ? Quel était son avantage ?

Cette magie permettait à l'utilisateur de frapper depuis des angles morts hors de la portée de lancement de son adversaire.

Par exemple, supposons que les deux Joueurs utilisent de la Magie de Système Oscillation sur les disques dans le même tour de Tirs Rapides.

Quand les disques rouges et blancs sont très proches, les deux magies peuvent interférer l'une avec l'autre et causer des résultats imprévisibles – comme disparaître toutes les deux ou libérer des ondes de choc ultrasoniques.

Lorsque l'on lance de la magie aux alentours d'autres Magiciens sur les mêmes cibles à grande distance, on doit choisir précautionneusement la position de tir et appliquer fortement sa Force d'Interférence.

La forme de duels pour Tirs Rapides était à l'origine conçue pour tester la vitesse d'invocation de la magie et le Pouvoir Magique, mais comme Mayumi tirait avec précision sur les cibles au-delà de la portée de lancement de son adversaire, elle créait efficacement une poche d'espace où elle lançait sa magie sans interférence.

Son adversaire profitait naturellement du même avantage.

Dans ce cas, le duel était décidé uniquement sur la vitesse et la précision du ciblage.

En termes de vitesse et de précision de ciblage, le Pouvoir Magique de Mayumi se classait parmi les plus importants du monde.

Des lycéens ne pouvaient tout simplement pas s'y comparer.

◊ ◊ ◊

Le tour de Tirs Rapides du premier jour se passa comme tout le monde l'avait prédit, avec Mayumi remportant une victoire écrasante dans la Division Féminine et la Division Masculine garantissant également la Première Place.

"Félicitations, Présidente !"

Mayumi sourit largement en acquiesçant pour accepter l'éloge d'Azusa.

"Merci, Mari a aussi avancé jusqu'aux demi-finales."

Elle détourna son regard sur le côté.

"Actuellement, tout se passe selon le plan."

Dans son champ de vision, Mari acquiesça pour lui répondre.

Alors que la nuit s'approfondissait, après avoir mangé un morceau et avoir passé un peu de temps dans le bain, la seule chose qu'il restait à faire était de se reposer correctement pour restaurer ce qui avait été dépensé pendant la journée, alors les membres féminines (incluant le Chef du Comité de Discipline) se réunirent toutes dans la chambre de Mayumi.

Les épreuves du premier jour étaient terminées, et Mayumi devait encore concourir le lendemain, alors elles pouvaient éviter les célébrations officielles jusqu'à ce qu'elles aient obtenu la couronne. Actuellement, elles levaient simplement des coupes de jus de fruit pour faire la fête.

La raison pour laquelle seules des femmes étaient présentes était parce que ---

"Ça a été tendu pendant un moment, mais Hattori s’est débrouillé pour s’en sortir."

Exactement comme les mots sans vie de Mari le suggéraient, la victoire dans la Division Masculine n’était pas assurée. Aux [Tirs Rapides], ils avaient assurés la Première Place comme prévu, mais les préliminaires de [Bataille de Surf] s’étaient avérés être un concours âprement disputé.

"Il semble que le CAD n’était pas correctement ajusté pour lui. Après le tour, Kinoshita-senpai et moi avons tous les deux travaillé dessus, mais…"

"Ce n’était pas fini."

En entendant les mots d’Azusa, Suzune examina les rapports de maintenance de tous les membres sur son terminal.

"Les compétences de Kinoshita ne sont pas mauvaises…"

"Mais elles ne sont pas exceptionnelles, non plus."

Mayumi se dressa pour défendre Kinoshita, mais ne put que sourire amèrement devant l’analyse directe de Mari. Malgré tout, Azusa sentit que cette estimation était excessivement critique.

"Eh bien… Je ne pense pas que Kinoshita-senpai est en faute ici. J’ai l’impression que Hattori-kun n’est pas dans son assiette depuis notre arrivée ici."

"Ce que je vais dire pourrait paraître sévère, mais c’est à l’Ingénieur de prendre le statut mental du Joueur en compte."

Mari rejeta rapidement cette défense.

"Ça pourrait être vrai… mais…"

Mari avait raison quand elle disait que c’était le devoir de l’Ingénieur, mais le Joueur avait aussi une responsabilité quant à sa propre préparation mentale.

Azusa pensa à cela, mais le garda pour elle-même.

"Ok, Mari. Arrête de harceler A-chan."

La logique de Mari concernant les Joueurs et la logique d’Azusa concernant les Ingénieurs n’étaient ni bonnes, ni mauvaises, mais, franchement, toutes deux étaient parallèles. Cela nécessitait

l’intervention d'un chef.

"Heureusement, Hanzo-kun n’a pas à concourir demain, alors c’est à eux deux d’y travailler… Malgré tout, maintenant, la question devient : que faire des Joueurs dont Kinoshita-kun est responsable demain ?"

"Kinoshita-kun est le technicien secondaire pour l’épreuve féminine de Nuées de Balles. Puisqu’il est là en renforts, je pense que nous pourrons quand même nous en sortir sans lui."

"Ouais… Avec Izumi ici, je pense que ça ira…"

"Est-ce que tout laisser à Izumi n’est pas trop risqué ? Il y a six lieux pour Nuées de Balles, et deux personnes apparaissant au même endroit au premier tour. Si trois personnes avancent pendant le premier tour, alors toutes les trois sont au second tour en même temps. Bien que Mayumi puisse se prendre en charge elle-même, ce scénario suppose naturellement que les deux autres requerront une maintenance de CAD. Même s'il y a un plus grand intervalle de temps entre les tours, nous n’aurions quand même pas assez de temps en se basant sur nos estimations initiales. N’était-ce pas ce pourquoi nous avions des assistants en premier lieu ?"

Suzune supporta la décision de Mayumi mais Mari semblait réticente. Ses protestations étaient nées de sa profonde compréhension de l’importance de la maintenance de CAD et pas de se montrer en désaccord dans le but de se disputer, alors elle avait soumis un argument valide pour le débat. Donner du travail à du personnel réduit était juste ce type de tache difficile.

"Pourquoi ne prenons-nous pas l’assistant des Hommes, Ishida, pour suppléer l’assistant des Femmes ?"

La compétition féminine était le matin tandiss que la compétition masculine était l’après-midi, alors la suggestion de Suzune était valide du point de vue du programme, mais Mari y apposa son veto.

"Si jamais il devait accomplir des maintenances le matin et l’après-midi, la surcharge de travail serait trop lourde. Nuées de Balles est l’événement ayant le plus grand nombre de tours en un jour."

"Alors pouvons-nous nous adresser à Shiba-kun, qui n’a pas de Joueurs prévus pour les deux prochains jours ?"

Après un bref moment de considération, Mayumi acquiesça, en accord avec la proposition de Suzune.

"… Cela pourrait être pour le mieux. Miyuki-chan, peux-tu avertir Tatsuya-kun pour nous ?"

"Bien sûr."

Miyuki sourit en acceptant la requête de Mayumi.

Pour Miyuki, toute opportunité pour que son frère brille était plus que bienvenue.

◊ ◊ ◊

"… Alors c'est pour ça que tu me rends visite à cette heure."

Bien qu'ils fussent frère et sœur, ce n'était pas l'heure pour des jeunes filles de visiter des chambres appartenant à quelqu'un du sexe opposé.

Tatsuya fit signe d'une main à Miyuki de s'asseoir sur le lit et murmura d'un air impuissant.

"… T'ai-je dérangé, Onii-sama ?"

Miyuki remuait les doigts en regardant nerveusement Tatsuya.

"Non. Merci de m'avoir averti, mais…"

Jusqu'à présent, tant que Miyuki avait ce regard particulier dans ses yeux, Tatsuya n'avait jamais été dur avec elle.

"Même dans un hôtel, ce n'est pas l'heure pour des jeunes femmes de quitter leurs chambres toutes seules, d'accord ? En plus, il y a eu quelques incidents récemment, alors des individus suspects pourraient bien rôder dans les couloirs."

Au moins, c'était une installation militaire, alors la sécurité était bien plus importante que dans des hôtels civils de première classe.

Miyuki sentit que c'était une exagération, mais était très heureuse que Tatsuya s'inquiète pour elle.

"Oui, Onii-sama, je m'excuse."

"Je suis assez certain qu'il y a quelque chose qui cloche avec ton

excuse quand tu souris comme ça en même temps…"

Tatsuya se plaignit en souriant également. Plutôt que d'appeler ses mots précédents une réprimande, ils ne pouvaient pas même être qualifiés de plainte. Pour couronner le tout, Tatsuya aimait Miyuki de tout son cœur, alors il ne gronderait jamais sévèrement sa petite sœur.

"En tout cas, merci de me l'avoir fait savoir, je vais t'escorter jusqu'à ta chambre."

Tatsuya se leva de sa chaise mais Miyuki se leva frénétiquement et secoua les mains.

"Non, je peux y retourner par moi-même. Onii-sama est occupé en ce moment, n'est-ce pas ? J'ai déjà interrompu ton travail, alors je ne devrais pas prendre plus de ton temps…"

"Bien que je sois au milieu de quelque chose, c'était plus par loisir qu'autre chose, alors il est inutile de s'inquiéter à ce propos."

Tatsuya ferma le couvercle de son terminal bloc-notes comme s'il voulait éviter que sa sœur ne le voie.

"C'était un code de CAD, n'est-ce pas ?"

Miyuki n'était pas à l'aise avec le hardware, mais sous l'influence de Tatsuya, elle avait une compréhension décente des spécifications de software.

Elle était incapable de déchiffrer complètement la signification d'un seul coup d'œil, mais d'après les numéros de série et le langage de codage, elle pouvait identifier le code pour une Séquence d'Activation.

"Cette petite chose n'est pas liée à la compétition elle-même, alors ça ne pose pas de problème que je la laisse de côté pour l'instant. En plus, le code lui-même est plus un jouet que quoique ce soit d'autre."

"Un… jouet ?"

"Quelques idées me sont venues pour un arme de combat rapproché, mais elle n'a pratiquement aucune valeur pratique à part surprendre un peu l'adversaire. Même si je la terminais, il n'y aurait pas de marché pour ça."

"Si c'est le cas, cela peut encore être qualifié de nouvelle magie

pionnière, n’est-ce pas ? Je ne pense pas que les inventions d’Onii-sama soient inutiles."

"C’est plus à des fins de divertissement… Malgré tout, ce n’est pas particulièrement important, alors il n’y a aucune urgence pour le finir. Tu es la première des priorités."

"Eh bien… Onii-sama, tu as vraiment dit que j’étais la première des priorités…"

Hm ?

Voyant sa sœur serrer son visage des deux mains et baisser la tête, Tatsuya sentit clairement que quelque chose d’étrange s’était produit.

Apparemment, ses mots précédents l’avaient conduit dans une direction complètement brumeuse.

Elle a compris la signification littérale, d’accord, mais une erreur de langage fatale a dû se produit quelque part…

Cette confusion ne pouvait pas être dissipée immédiatement, mais Tatsuya se ressaisit plus vite que Miyuki.

"… Nous devrions y aller."

"Oui, Onii-sama. Um… Miyuki ressent la même chose qu’Onii-sama."

"Hm… ?"

"Miyuki voit aussi Onii-sama comme la première des priorités."

"…"

Il semblait que sa sœur était encore à côté de la plaque – probablement.

À ce moment, Tatsuya s’accrocha à cette certitude.

Chapitre 6

Le second jour de la Compétition des Neuf Lycées.

Portant la veste de l'équipe des techniciens, Tatsuya se tenait près du pavillon du Premier Lycée, près de la zone de compétition.

Depuis la cérémonie de remise, c'était la seconde fois qu'il la portait (seuls les participants étaient présents pour la cérémonie d'ouverture).

Incluant la tenue qu'il portait lors du banquet, et cette veste, il était incapable de dissiper cette impression de malaise.

Pourtant, Tatsuya savait qu'il s'agissait d'une obligation, aussi dut il se résoudre à s'y habituer.

"Qu'y a t'il? De mauvaise humeur?"

"Non, ce n'est rien, pourquoi pensez vous cela Présidente?"

Tatsuya répondit solennellement à la question de Mayumi, mais fut intérieurement troublé.

Tatsuya pensait que son visage impassible était sans failles, était il si facile de lire en lui?

"Hum~ Je me le demande?"

"Attendez, en premier lieu, vous devriez déjà ne pas poser une question aussi vague.."

Tatsuya se sentit impuissant, mais seulement mentalement.

On dirait que la raison n'était pas qu'il montrait ses émotions, ni que sa respiration soit perturbée.

Toutefois, le fait que Mayumi soit capable de déterminer les pensées de Tatsuya sans avertissement, était bien plus terrifiant et presque menaçant.

"Ignorons cela pour le moment, avez vous besoin de quoi que ce soit, Présidente?"

Tatsuya mit, sur le moment, ce sujet de coté — ce n'est pas comme s'il pouvait faire quelque chose même s'il s'inquiétait — et demanda à Mayumi pourquoi elle l'avait demandé avant le début de l'épreuve.

"Juste vérifier ton statut..... As tu mémorisé toutes les données?"

La décision de nommer Tatsuya comme technicien assistant pour l'épreuve féminine de "Nuée de Balles" fut prise sur place la nuit dernière, ainsi, pour que Tatsuya ajuste correctement les CADs des participants, il dût mémoriser rapidement les spécifications des Psions de chaque joueur.

"Oui, toutes."

"Celle de tout le monde?"

"Oui, toutes."

Après que Tatsuya ait répété sa brève réponse, Mayumi le regarda, les yeux écarquillés comme choquée.

"Cela semble être comme du recul..... Mais, Tatsuya-kun est impressionnant. N'aurais tu pas une mémoire instantanée ou mémoire visuelle?"

"Comparé à vous, j'ai plutôt un Pouvoir Magique plus typique."

"Du point de vue d'un étudiant, c'est un véritable luxe."

Évidemment, Mayumi avait la garantie d'entrer dans une Université Magique sans passer d'examen d'entrée, mais elle l'avait quand même dit.

—Accompagné par le son de deux mains frottant les joues qui s'enflaient.

"....."

"Hum? Qu'y a t'il?"

Tatsuya commença à masser ses tempes avec son pouce et son index alors que Mayumi pencha légèrement la tête sur le coté.

"Présidente, seriez vous..... Non, aucune importance."

"?"

Au départ, Tatsuya voulait dire "Seriez vous en fait ainsi et non en train de jouer?", mais ravala de force ces paroles — ce qui fut une sage décision.

".....L'épreuve n'est elle pas sur le point de commencer?"

"C'est exact, allons y."

"Ah?"

"J'ai dit, allons y?"

"......Oui, vous avez raison."

La calibration de CAD était interdite durant l'épreuve, mais la calibration pourrait s'avérer nécessaire après que la manche soit terminée.

C'est pourquoi il était parfaitement naturel qu'un technicien suive un participant plutôt que d'attendre au pavillon — même si, il n'y avait nul besoin d'aller jusqu'aux terrains, Tatsuya marcha tout du long, aux cotés de Mayumi.

"Miyuki-chan, est elle dans les gradins à observer?"

Ce fut la première chose qu'elle demanda alors qu'ils marchaient ensemble.

"Elle est allée voir 'Destruction des Piliers de Glace'."

La question de Mayumi ne fit pas penser à Tatsuya "Pourquoi demandez vous cela?", mais plutôt "De nouveau cette question?".

"Ainsi..... Vous deux agissez de manière indépendante de temps à autre."

Tatsuya faisait attention à garder une expression neutre et ne se permit pas de montrer son mécontentement en répondant, auquel Mayumi acquiesça de manière expressive.

Tatsuya se sentit d'une certaine manière, misérable.

"......A vos yeux, serions nous attachés par la taille?"

Son expression était sûrement particulièrement misérable.

Mayumi secoua, en hâte, ses mains en déni.

"Ah, non, je sais que ce n'est pas le cas. Je sais que vous vous trouvez chacun de votre coté lors de vos devoirs pour le Conseil des Étudiants et pendant la classe, mais comment le dire..... Perception, ce n'est qu'une question de perception!"

"Présidente..... Pour les Magiciens, la perception est réalité."

L'humidité de plus en plus forte et le regard lourd poussa Mayumi à suer de manière invisible.

L'atmosphère lourde persista jusqu'à ce qu'ils soient arrivés sur le court.

Une fois arrivés à l'arène, Tatsuya sentait que cela impacterais négativement le moral, aussi refréna t'il de force son expression du visage.

Pourtant, quand Mayumi ôta sa veste rafraîchissante (une veste de sport qui a un système qui refroidit basé sur la thermodynamique), le visage impassible de Tatsuya manqua de rester figé.

".....Portez vous cela durant l'épreuve?"

"Oui."

L'acquiescement de Mayumi donna l'impression à Tatsuya qu'un mal de tête s'approchait.

"Portez vous vraiment cette tenue durant l'épreuve?"

"Hein, est ce étrange? ..... Cela ne m' irait donc pas?"

".....Cela vous va parfaitement."

"Vraiment.....? Tee hé, merci pour le compliment."

Mayumi commença à s'étirer joyeusement alors que Tatsuya la scrutait avec attention une dernière fois pour vérification.

Peu importe où il regardait, ses yeux ne démentaient pas.

Un Polo couplé avec une mini-jupe ne pouvait être décrit que comme une tenue de tennis, ce qui était plus attentif à la dernière mode qu'aux pratiques sportives.

Se pencher légèrement ferait que la jupe glisserait et révélerait les dessous.

"Nuée de Balles" était une épreuve éprouvante physiquement.

Le dispositif de tir comprimait l'air pour tirer des balles de 6cm de diamètre et de faible élasticité, et que les joueurs utilisaient des raquettes ou la mage pour les renvoyer vers le terrain adverse, avec le nombre de buts pour déterminer le vainqueur. Chaque manche durait trois minutes dans un terrain enfermé dans une sorte de boite transparente. Toutes les vingt secondes, une autre balle serait envoyée pour un total de neuf balles à la fin du jeu, laissant aucun temps de répit aux joueurs pour reprendre leurs souffles.

Les joueurs étaient habituellement vêtus de T-shirts et de shorts, bien que certains optent pour des coudières et des genouillères.

Si on utilisait que la magie, alors il n'y aurait nul besoin de courir ou de porter des protections, bien que les joueurs qui prennent la raquette portent souvent plus de protections.

Habituellement, personne ne porterait de vêtement qui révélerait la peau.

(Mais de nouveau, vu la personne en question, son dictionnaire ne devait sûrement pas contenir le mot "impossible".)

Tatsuya arriva à cette conclusion après un instant d'observation et accepta cet aspect de la réalité.

"Tatsuya-kun..... Contemplerais tu quelque chose d'impoli?"

"Je n'oserais pas. Avez vous besoin d'une raquette?"

Cette perçante accusation força Tatsuya à battre en retraite rapidement et adopta un ton formel pour changer de sujet.

"Oui, c'est mon style habituel."

Pendant un instant, Tatsuya pensa qu'elle faisait allusion à sa "tenue de tennis", mais Mayumi voulait évidemment parler qu'elle "n'utiliserait que la magie".

"Quel CAD allez vous utiliser?"

"Celui-ci."

Après que Mayumi ait parlé, elle sortit un CAD spécialisé de la forme d'un revolver.

Le canon était assez court, d'où son nom de "modèle court" alors qu'une petite minorité y fait référence sous le nom de "modèle civil" (par opposition au CAD de Tatsuya qui a "long canon", auquel cette minorité fait référence comme le "modèle carabine").

Pistolets et CAD de type carabine étaient tous deux équipés de modificateurs de visée dans le canon. Le "canon du pistolet" était en fait l'emplacement du réticule de visée pour le calcul magique (les coordonnées relatives pour l'Eidos au sein de la dimension d'information) qui fonctionnait comme un détecteur de mouvement.

Plus long est le canon du CAD, plus l'accent est mit sur le

modificateur de visée.

D'un autre coté, pour les Magiciens qui ne se souciaient que de la vitesse d'invocation des CADs spécialisés et n'avaient nul besoin de modification de visée, le modèle court leur fournissait tout ce qu'ils pouvaient souhaiter.

"Je me souviens, Présidente, que vous utilisez habituellement les CAD généralistes?"

"C'est le cas, d'habitude, mais, cette fois, je vais utiliser celui-là."

Le commentaire de Mayumi fut très abstrait, mais Tatsuya l'interpréta correctement en pensant "Vu que c'est une épreuve qui ne nécessite qu'une magie, j'ai choisis un modèle Spécialisé".

"Magie de type Mouvement? Ou Magie d'Inversion de Vitesse?"

"Exact, il s'agit de 'Rebonds Multiples'."

Mayumi s'étirait soigneusement, aussi ne joua t'elle pas la timide avant de réponde à la question de Tatsuya.

"Tatsuya-kun, pourrais tu me donner un coup de main?"

"Bien sur."

Mayumi s'assit par terre avec les jambes écartés et Tatsuya poussa doucement son dos.

Avec pratiquement aucune résistance, sa poitrine fut pressée contre le col.

"Utiliser 'Rebonds Multiples' pour prendre avantage des vecteurs d'énergie cinétique ..... Mais, ne compter que sur cette magie expose à un risque considérable? Si les balles élastiques perdent leur élan sur le sol ou les murs, vous n'aurez aucun moyen de les renvoyer de l'autre coté."

Tatsuya pouvait sentir une certaine chaleur corporelle, traversant ses paumes alors qu'il donnait cet avertissement.

"Hum! Hum hum hum..... Phew, j'ai aussi préparé d'autres magies de Type Vitesse, mais je n'en ai eu nul besoin, l'année dernière."

Elle parlait nonchalamment, mais cela requérait une force bien différente pour donner vie à cette confiance.

De nouveau, Tatsuya réalisa à quel point Mayumi était incroyablement puissante comparée à tous les autres.

"Ça suffira."

Mayumi s'étira à gauche, à droite quatre fois avant d'informer Tatsuya que ça suffirait.

Tatsuya se redressa et recula de quelques pas tandis que Mayumi fermait ses jambes et lui tendis la main tout en le regardant.

Au début, Tatsuya fut incertain sur ce que voulait Mayumi, mais une fois qu'il remarqua qu'elle le regardait fixement avec une expression de plus en plus mécontente, il comprit rapidement le message.

Tatsuya alla au devant d'elle et prit la main tendue.

Une délicate et fine main.

Avec une douce traction, Mayumi se retrouva sur ses pieds.

"Merci."

"Non, je vous en prie."

Tatsuya sentit que personnellement sa réponse fut très cordiale, mais pour certaines raisons, Mayumi semblait vraiment joyeuse.

"Hum~ Quelle nouvelle sensation."

"Ah?"

Ce commentaire sorti de nulle part.

Tatsuya répondit par réflexe et Mayumi sourit en réponse.

"J'ai des frères aînés et de petites sœurs mais pas de jeune frère."

"Hum....."

Tatsuya était au courant de cela.

Contrairement au Clan Yotsuba qui restait très secrète, la Famille Saegusa était toujours sur le devant de la scène.

Chaque anniversaire d'enfant attirait une foule d'invités pour célébrer cela de manière grandiose.

Cela ne nécessitait aucune enquête préliminaires sur la Famille Saegusa, c'était donc très facile.

S'il se souvenait bien, avec ses deux frères aînés, il y avait aussi des

jumelles en dernière année au collège.

"Tatsuya-kun ne m'a jamais traitée différemment, n'est ce pas?"

"Personnellement, je ne crois pas prétendre être aussi familier avec vous, Présidente....."

Faisant attention de ne pas tomber dans un piège, Tatsuya répondit avec prudence, mais Mayumi rit doucement.

"Ce n'est pas ce que je voulais dire. Tu ne serais pas en garde contre moi, troublé ou mal à l'aise, n'est ce pas?"

Ignorant le premier, les seconds se produiraient sous des conditions que Mayumi créerait elle même, pensa Tatsuya tout en gardant ça pour lui.

"Tu t'adresses à moi avec la politesse appropriée, mais en réalité, tu n'es pas trop poli non plus. Je pensais que tu étais une personne froide, mais tu cèdes face à mes demandes égoïstes, aussi je pense que ce serait ainsi d'avoir un petit frère."

Tatsuya écarquilla les yeux, involontairement, à Mayumi.

En effet, en dehors de sa taille, Mayumi avait une personnalité bien équilibrée, un coté féminin surprenant et, bien que difficile de s'en rendre compte, elle prenait soin des autres, à sa manière, autant que d'elle même, aussi correspondait elle parfaitement à la description de "sœur aînée".

Bien, qu'en tout honnêteté, avoir une grande sœur comme elle signifierait sûrement une vie de stress.

".....Dieu seul le sait, je n'ai, après tout, qu'une petite sœur."

"C'est vrai."

Mayumi sourit sereinement tout en regardant Tatsuya. Ce sourire était suffisant pour faire penser aux gens qu'elle avait complètement oublié l'épreuve.

Profondément mal à l'aise, Tatsuya chercha une occasion pour s'échapper.

"Excusez moi, je pense que je devrais aller vérifier les statuts des autres joueurs."

"Nul besoin."

Malheureusement, avec l'apparition d'une troisième personne, son échappatoire fut bloquée.

"Ara, Izumin."

"Saegusa..... Toujours à donner des surnoms ennuyeux."

La personne qui semblait lutter contre une migraine, était une fille portant le même type de veste que Tatsuya. Elle était une élève de troisième année et membre de l'équipe des techniciens — Rika Izumi.

"¨Préférerais tu Rika-chan?"

"Tu fais ce la exprès! Eh, oublies ça, appelles moi juste Izumin."

"Alors, Izumi-senpai, que vouliez vous dire par nul besoin?"

Tatsuya avait déjà retenu la leçon; jouer sur les mots avec Mayumi était une lutte sans fin.

Il ignora superbement l'échange entre Mayumi et Izumi et se concentra sur la première phrase.

"Hum? Oh..... Tatsuya-kun, vas y et occupes toi de Saegusa, je m'occupe du reste."

L'étudiante du nom d' Izumi n'exprimait pas une attitude favorable envers Tatsuya au sein de l'équipe des techniciens.

Plutôt que d'être élitiste, son problème provenait sûrement de sa fierté.

Elle pensait sûrement être capable de faire face à la situation sans l'assistance de Tatsuya.

"Vraiment, je vois."

En réalité, Tatsuya voulait vraiment battre en retraite, mais vu que le partage du travail était bien défini, il n'avait nul moyen de s'échapper.

Aussi, Tatsuya acquiesça sans faire d'autre commentaire.

"Bien, c'est à vous."

Avec ces paroles comme consignes, Izumi partit rapidement.

"Elle n'est pas méchante....."

Mayumi dégageait une aura d'impuissance alors qu'elle regardait disparaître la silhouette d' Izumi, mais les paroles douces qu'elle tint à Tatsuya entrèrent par une oreille et sortirent par l'autre.

Indépendamment de la façon d'agir d'Izumi et comment Mayumi essaierait de la défendre, Tatsuya ne s'en préoccupa pas.

"Nuée de Balles" était un sport qui partageait plusieurs similarités avec le tennis et les autres sports de raquette, mais il n'y avait pas de règle de service.

Chaque manche durait trois minutes avec une pause de trois minutes entre chaque manche, avec un total de trois manches par matchs (les garçons avaient cinq manches).

Après le signal annonça le début de l'épreuve, les balles envoyées par air comprimé furent relâchées toutes les 20 secondes et des rafales folles de balles suivraient jusqu'au signal de fin.

—Généralement, c'était le cas.

Toutefois, le combat ayant lieu se produisant devant Tatsuya n'y ressemblait pas.

L'adversaire de Mayumi l'imita dans le fait qu'elle avait fait le choix de n'utiliser que la magie.

Comme on pouvait s'y attendre des participants assignés à cette épreuve, ils avaient une compréhension complète des Magies de Type Mouvement.

Son adversaire semblait s'appuyer sur le mouvement physique pour compléter sa perception et visait avec précipitation le CAD à canon court qu'elle tenait dans les mains à chaque balle.

Les balles sous l'emprise de la Magie de Type Mouvement changeait de direction avant qu'elle ne tombe dans sa partie du terrain et renvoyé vers celle de Mayumi avec une courbe dans un arc pas naturel — et prenait le double de leur vitesse une fois qu'elle passait au dessus du filet.

Chaque balle. Sans exception.

Mayumi se tenait au centre de son terrain et tenait des deux mains, devant sa poitrine, son CAD.

Alors qu'elle tenait le CAD comme si elle priait, les yeux de Mayumi brillaient d'une lueur mystérieuse alors qu'elle regardait faiblement vers le bas.

Juste cela fut suffisant pour empêcher son adversaire de marquer un seul point.

Visuellement, la distance était d'à peu près 10 cm.

C'était là, la mesure où les balles adverses purent envahir sa position.

La magie de Mayumi ne faisait pas d'ajustements précis aux balles.

Pas plus qu'elle ne visait les angles morts de son adversaire, mais elle repoussa simplement chaque balle vers son adversaire. Face à toutes les trajectoires que son adversaire modifiait, elle exerçait des représailles de tous les angles possibles avec ce qui devait être une magie incroyablement difficile.

Pourtant, la seule à marquer sans relâche fut Mayumi.

Le score montrait une victoire écrasante de Mayumi, sans céder un seul point.

Quand le coup de sifflet retentit pour la fin de la première manche, l'adversaire de Mayumi tomba à genoux, impuissante, sur le court.

Ce mouvement reflétait parfaitement l'incroyable désespoir de la joueuse adverse.

Mayumi apparaissait parfaitement calme et sereine alors qu'elle utilisait sa magie majestueusement, mais ses émotions étaient loin d'être aussi calmes.

Au coup de sifflet, elle ne put s'empêcher de laisser échapper un long soupir de soulagement.

Durant cette manche, elle ressentait comme tomber dans une âpre lutte.

Elle n'était pas prétentieuse mais elle savait que son Pouvoir Magique était, objectivement, largement supérieur à celui de son adversaire. Tant qu'elle pourrait continuer ainsi, la victoire était assurée dans la manche suivante.

Le problème résidait dans le regard qui venait de l'autre coté du court.

Mayumi était habituée aux regards des autres.

Depuis toute petite, elle s'était toujours trouvée au centre de l'attention.

Peu importe que ces regards soient emplis d'admiration ou cachant de

noires jalousies ou autres émotions négatives, Mayumi y faisait face comme s'il s'agissait de l'air qu'elle respirait.

Néanmoins, le regard qu'elle endurait sur les trois dernières minutes était tout à fait différent de tout ce qu'elle avait ressenti jusque là.

Comme si chaque centimètre de son corps passait au microscope.

Ce n'était pas simplement que quelqu'un la voyait nue ou autre chose du genre (bien que cela aussi soit un problème en lui même).

Le regard qu'elle sentait venir de lui — de Tatsuya n'était pas aussi superficiel.

Pas seulement sa peau, mais tout ce qui se trouvait en dessous — la chair et les os qui lui donnaient ses attributs physiques, sa conscience, ses émotions, son système de valeur, ses habitudes et ses passes-temps, les expériences qui faisaient d'elle qui elle était aujourd'hui, le talent et ses efforts assidus qui l'avaient soutenue jusque là — tout ce qui constituait la personne "Mayumi Saegusa" était décrypté et mis à nu sous le soleil. Ces yeux lui causaient un sentiment inconnu d'angoisse.

C'était la première que Tatsuya observait une épreuve de Mayumi d'aussi près.

Pourtant, il avait dû observer, à cette même distance, les participantes de première année, à ses soins, et ce à de multiples reprises durant les entraînements, et pourtant aucune d'entre elles ne s'était plaint de ses sentir mal à l'aise.

Mayumi pensait qu'aucune jeune fille ne pourrait résister à ça.

Dans ce cas, cette sensation pouvait être soit qu'elle se faisait des idées ou — quelque chose qu'elle seule pourrait ressentir.

A ce moment là, c'était la pause de trois minutes où les joueurs iraient essuyer leurs sueurs et boire un verre d'eau.

Malheureusement, le sac contenant sa serviette et l'eau se trouvait à coté de Tatsuya.

Marcher hors du terrain revenait à aller au devant de là où attendait Tatsuya — où il se tenait en embuscade.

Mayumi était un peu inquiète à quitter le court.

Cela dit, elle ne pouvait pas plus rester sur le terrain. Bien qu'elle n'ait pas bougé d'un pouce durant la manche, elle devait absolument prendre cette opportunité de faire une pause. Pas seulement ça, elle avait besoin de se réhydrater et de se diriger vers le court suivant.

Elle se fichait de choquer les Membres du Comité d'Opérations, mais avec sa position, elle ne pouvait pas se permettre d'inquiéter les autres élèves, venues l'encourager.

Mayumi prit une forte inspiration et expulsa tout son malaise et ses inquiétudes.

(Oublie ça, les femmes doivent être courageuses!)

Mayumi ordonna à ses pieds de bouger.

"Beau travail."

Alors que l'élève de classe inférieur lui tendait une serviette, Mayumi ressenti comme une déception au vu que ce malaise sans nom disparaissait comme issu d'un mauvais rêve.

Comme d'habitude, toutes les pensées cachées sous se sérieux visage étaient complètement obscurcies par son visage impassible que même elle ne pouvait lire. Ce jeune homme lui avait donné un malaise inconnu et sans forme, mais en même temps, procurait un miraculeux sens de soulagement comme quoi il ne la trahirait jamais.

Son commentaire précédent à propos "d'avoir un petit frère" fut quelque chose de spontané ou voulu pour taquiner Tatsuya. Bien que dit sous le ton de la plaisanterie, cela reflétait, à un certain niveau, les véritables pensées de Mayumi.

Mayumi arriva à la conclusion qu'avoir peur de lui était ridicule, et elle adopta attitude obstinée.

"Ne dis pas beau travail tout de suite, l'épreuve n'est pas encore finie, ce n'est pas le moment de se détendre."

Tatsuya faisait partie de l'équipe représentante, mais pas comme participant.

Il n'était en service qu'avant et après une épreuve et n'était qu'un spectateur durant ce temps là, ainsi lui dire que "ce n'est pas le moment de se détendre" était très étrange mais Tatsuya n'y fit pas mention, malgré le fait de l'avoir remarqué.

"Non, c'est terminé."

Il indiqua un coté plus pratique.

"Ah?"

"La participante adverse est incapable de continuer, et même si elle continuait la seconde manche, elle tomberait de fatigue en plein milieu. Les auxiliaires d'en face semblent aussi en être arrivé à cette conclusion, ainsi, il vont préférer déclarer forfait pour ce match."

Mayumi se retourna pour voir les conseillers tactiques de l'équipe adverse en train de discuter avec les juges exactement à ce propos.

La participante était affalée sur une chaise longue couverte d'équipement médicale de détection.

"Épuisement des Psions dû à une invocation magique continue. Plus sûrement une mauvaise affectation. Il lui manquait quelque chose pour vous faire face, Présidente."

".....Tu as compris tout ça juste en voyant ça?"

"Aussi longtemps que je peux 'voir clairement'."

Il était impossible que les juges aient pu entendre les paroles de Tatsuya, mais au moment où il finissait de parler, on annonça que l'adversaire déclarait forfait pour ce match.

Stupéfiée, Mayumi resta immobile sans bouger, un coté d'elle extrêmement rare qui poussait normalement à rire. Pourtant, Tatsuya ne sourit pas, mais exhorta Mayumi à bouger.

"Retournons au pavillon. Il vaut mieux regarder le CAD et se préparer pour le prochain match."

"Oui, tu as raison, je te laisse t'en charger."

A ce moment là, Tatsuya avait le contrôle absolu de la situation, mais Mayumi n'y opposa pas de résistance futile alors qu'elle le suivait après avoir pris son sac.

Après que Tatsuya ait activé le dispositif de maintenance, Mayumi lui passa son CAD et se laissa tomber à coté de lui.

Pas en face de lui.

Mayumi n'avait pas revêtu sa veste rafraîchissante qui était déposé sur ses jambes, ainsi elle portait encore sa "tenue de tennis" qu'elle avait pour le match, mais ce ne fut pas qu'elle était d'humeur taquine, plutôt que Tatsuya ne lui faisait plus ressentir de sueurs froides.

Tous deux étaient assez proches pour que leurs bras se touchent, mais Tatsuya ne jeta à aucun moment un regard vers ses cuisses.

Pas plus que Mayumi fut perturbée par cela.

Sa concentration était entièrement dévolue vers le dispositif de maintenance ainsi que son CAD personnel qui y était relié.

"N'as tu pas besoin de faire des mesures sur mon état actuel?"

"On n'a que 10 à 15 minutes, ainsi même si je pouvais réécrire le code, il serait impossible de le tester, ainsi il n'y a pas grand intérêt à faire des mesures."

Cela se produisait régulièrement durant leurs conversations, mais cette fois Mayumi pencha involontairement la tête.

D'après ce qu'il venait de dire, cela sonnait comme s'il pouvait avoir une estimation sans avoir à compter sur la machine.....

".....Tu peux le comprendre visuellement?"

"Bien sur, la Présidente le sait aussi sûrement?"

"Ça....."

"La Présidente sait aussi qu'aussi longtemps que vous êtes un magicien, on peut dire quand une magie est activée normalement ou si le CAD fonctionne normalement sans l'aide de la machine, n'est ce pas?"

"Oui, je suis au courant."

"A un certain niveau, je suis juste un petit peu plus compétent."

Tatsuya continua de regarder la suite des caractères qui défilaient.

Mayumi était très intéressée par ce que signifiait exactement "à un certain niveau", mais elle n'osa pas déranger un ingénieur en plein travail pour satisfaire sa curiosité.

Tatsuya enleva le CAD du dispositif de maintenance et l'éteignit avant d'inspecter le déclencheur et le circuit de la Séquence d'Activation,

puis le rendit personnellement à Mayumi.

Comme promis, il ne toucha à aucun moment le code à l'intérieur.

Mayumi poussa, en privé, un soupir de soulagement (elle pensa avoir réussi à le cacher mais Tatsuya parvint à s'en apercevoir), mais dû à certaines raisons, après avoir reçu le CAD, elle posa le doigt sur le détenteur et le mis sur ses genoux.

"Présidente... C'est un peu déconcertant, pourriez vous éviter de pointer le canon vers moi?"

Strictement parlant, un CAD n'a pas de "canon".

Les grands CAD en forme de fusil étaient habituellement équipés de détecteurs d'images à l'avant qui donnait l'impression d'avoir un "canon" d'un rayon laser, mais quelque soit la longueur, le "canon" était fait de métal.

Pourtant, la conception globale reflétait celle d'une véritable arme à feu, ainsi ceux conscients du danger des pistolets se sentiraient naturellement mal à l'aise devant un "canon".

"Ah, désolé."

Tatsuya n'était pas certain à quel point Mayumi était familière avec cette situation, mais elle s'excusa franchement et décala le CAD en pointant le canon vers elle.

"je devrais être celui qui s'excuse pour vous troubler pour ces futilités."

"Je t'en prie, ne t'en fais pas pour ça, après tout, c'est de la politesse. Alors, comment est ce?"

La question de Mayumi était de nouveau très simplifiée, mais Tatsuya n'eut aucun problème à en décrypter le sens.

"Je sens que la calibration a été bien exécutée. Aucune négligence, ni de caractéristiques inutiles, c'est un travail fidèle et suivant strictement les règles. Il y avait une insistance trop grande sur la stabilité qui a conduit à une Séquence d'Activation plus compliquée dans certains domaines, mais en prenant en compte le Pouvoir Magique de la Présidente, je dirais que cela vaut un sans faute."

Dans tous les cas, le moment n'était pas à la flatterie inutile ou à

l'attitude tatillonne, aussi Tatsuya évalua les choses franchement.

Tatsuya répondit à la question avec les yeux toujours fixés sur la Séquence d'Activation qui s'affichait sur le dispositif de maintenance, ainsi, quand il se retourna — il découvrit Mayumi dans un état profond d'embarras.

"Vraiment.....? Hé hé hé, cela me rend incroyablement heureuse."

Les coins de ses yeux étaient rosés, et elle détourna les yeux avec un sourire gêné.

Comparé à un rougissement évident, cette réaction était bien plus étrange.

".....Est ce vrai?"

La raison pour laquelle Tatsuya le demanda fut qu'il était complètement incapable de savoir comment répondre, mais la vrai question qu'il se posait, était que Mayumi devait être immunisée contre ses éloges quotidiens.

"En effet, recevoir des compliments de quelqu'un qui qui complimente peu, n'est ce pas normal d'être joyeux à ce propos?"

Tatsuya ne pensait pas être devenu un adulte mature.

D'un point de vue objectif, il sentait qu'il était encore un enfant immature.

Cela dit, l'évaluation faite par Mayumi faisait de lui quelqu'un à l'écart de la société, incapable de feindre la politesse, ce en quoi il était en complet désaccord.

".....Je peux juste être aussi poli que n'importe qui d'autre."

Toutefois, l'objection de Tatsuya ne fit que doucement sourire Mayumi qui montrait clairement qu'elle avait vu à travers son subterfuge.

"Ainsi, à l'instant, étais tu juste poli?"

".....Non, ce n'est pas le cas."

Le sourire ravi de Mayumi toucha Tatsuya dans le mauvais sens, mais continuer cette conversation ne servait à rien.

De plus, il n'y avait aucune raison pour laquelle il aurait dû répondre.

Imperturbable, Tatsuya accepta calmement le sourire de Mayumi.

Au sein de la Compétition des Neuf Lycées, "Nuée de Balles" était l’événement qui avait le plus de match ce jour là.

En termes du nombre de matchs, le "Code du Monolithe" était l'épreuve qui avait le plus de matchs au sein des six compétitions. "Nuée de Balles" et "Destruction des Piliers de Glace" avait chacun cinq matchs, mais le "Code du Monolithe" et "Destruction des Piliers de Glace" avaient lieu sur deux jours, alors que "Nuée de Balles" avait ses cinq matchs sur la même journée.

Le temps imparti était court, mais la nature de l'épreuve et le fait que chaque manche durait trois minutes avec une invocation continue de magie avec aucune chance de reprendre son souffle, tout cela combiné, créait une situation qui n'était pas moins ardue que les autres événements.

Ainsi, la manière d'évaluer le Pouvoir Magique était absolument vital pour prendre la première place de cette épreuve.

Le but était, bien sur, deux victoires consécutives.

Durant le match, les joueurs n'essayaient pas de renvoyer toutes les balles au hasard, mais de prendre en compte quel tir leur permettrait de marquer dans le but de prendre le bon rythme.

Mayumi, qui pouvait canaliser sa magie durant l'épreuve entière, était, dans cette situation, sans nul doute une exception.

Malgré tout, Mayumi ne chargeait pas et se concentrait uniquement sur sa force durant le concours.

Elle adoptait aussi, d'elle même, des stratégies.

Deux victoires consécutives étaient absolument nécessaires — cela empêcherait les gens de penser "Attends, n'a t'elle pas tout gardé pour la finale?"

En choisissant une magie qui ne convenait pas à cet événement juste en renvoyant les balles, c'était pour éviter l'épuisement dû à la réplication en continue de la même magie — cela servait de démenti aux gens clamant "Elle n'a quand même pas rationné son Pouvoir Magique, non?"

En raison de cela, sa philosophie de combat était d'y aller à fond dés le

début sans aucune trace d’hésitation.

Pourtant, quand le second match commença, Mayumi fut touché par un rare sentiment de confusion.

Ses statuts étaient excellents.

Comme plus tôt, la moitié du match était déjà terminé sans que son adversaire ait pu marquer un seul point durant le match.

Sa confusion provenait de quelque chose d'opposé.

(Comment.....?)

Certes, grâce à l'abandon de son adversaire lors du premier match, elle avait eu plus de temps pour se reposer que d'habitude.

Pourtant, c'était un planning chargé avec cinq matchs en une demi-journée.

Habituellement, son état mental et physique devrait progressivement baisser dû à l'épuisement, mais il ne devrait pas marquer une amélioration marquée que même elle pourrait remarquer.

Pourtant, il devait y avoir une raison derrière cette circonstance hautement inhabituelle.

Mayumi ne put penser qu'à une seule explication.

Dès que le coup de sifflet de fin retentit—

Mayumi décida d'interroger ce perfide élève de première année.

"Tatsuya-kun, je pensais que tu n'avais pas altéré la Séquence d'Activation?"

C'était le complet opposé que durant la fin du premier match.

Dès que les juges confirmèrent la fin de la manche, Mayumi prit d'assaut le banc de touche où se trouvait Tatsuya.

L'apparence accusatrice de Mayumi prit Tatsuya par surprise, mais il répondit tout de même calmement.

"Je n'ai jamais touché à la Séquence d'Activation et il ne devrait pas y avoir de problème de performance, à moins que vous ayez remarqué quelque chose d'anormal?"

"Menteur!"

Mayumi pointait un de ses doigts vers le nez de Tatsuya, toute sa posture frémissait comme si c'était sur le point de faire le son "Bishi!".

"l'efficacité de la construction magique était significativement supérieur et, vu qu'il n'y a eut aucun moment pour changer le hardware, la seule possibilité est que tu as altéré le software!"

".....Ainsi le coefficient d'efficacité n'était pas inférieur, mais supérieur?"

La question clairement stupéfiante de Tatsuya prit Mayumi au dépourvu.

"C'est vrai..... Mais....."

Cela serait très différent si l'efficacité avait baissé, mais Mayumi remarqua enfin que son attitude était bien ridicule pour quelqu'un venu se plaindre que ses performances avaient été améliorées.

"Peu importe, pourquoi ne pas commencer par s’asseoir?"

Semblant toujours perplexe, Tatsuya lui tendit la serviette, que Mayumi accepta étrangement avant de s'asseoir avec sur le visage, un expression de consternation.

"Le coefficient d'efficacité a augmenté car on a fait le nettoyage."

Tatsuya était assis à une demi-longueur de Mayumi et fit exprès de ne pas la regarder alors qu'il établissait les faits.

"Ne te moque pas de moi, je t'ai vu tout le temps durant. Tu n'as pas pris le CAD pour le nettoyer, pas plus que tu as utilisé de liquides de nettoyages, n'est ce pas?"

Mayumi dit cela avec vivacité, mais Tatsuya répondit calmement.

"Non, je n'ai pas nettoyé le hardware, j'ai supprimé le software inutile."

Les performances des CAD sont aussi affectées par les conditions mentales de l'utilisateur.

Si l'utilisateur ne fait pas confiance à l'ingénieur, alors cela aurait un impact négatif sur les performances du CAD.

Vu qu'il avait agi sans donner d'explications, ce qui faisait qu'il n'avait pas donné de consentement, Tatsuya sentait tout de même que c'était nécessaire de donner une explication détaillée.

"Le CAD de la Présidente avait des fichiers systèmes présents dû aux anciennes versions du système d'exploitation, que j'ai enlevés. Alors que les anciens systèmes voient rarement s'accumuler ce genre de fichiers pourris, cela ne signifie pas non plus qu'ils sont complètement effacés. En les supprimant complètement, les performances du CAD peuvent augmenter de quelques pour-cents. Toutefois, habituellement, cela n'apporte pas une amélioration identifiable de suite, raison pour laquelle je ne vous ait pas informé au préalable. Cela montre juste que la perception de la Présidente sont excellents et que j'ai été irréfléchi."

"Ah, ça..... Si c'est tout ce qu'il en est, ne t'inquiète pas pour ça."

Aux excessive inclination et excuses de Tatsuya incita Mayumi à agiter les mains.

"Dans ce cas, cela montre aussi que Tatsuya-kun a été consciencieux, alors je devrais être celle qui s'excuse pour t'avoir soupçonné en premier lieu."

Quand Tatsuya releva la tête, Mayumi s'inclinait aussi pour s'excuser.

Tatsuya ne put s'empêcher de remarquer la rapidité à laquelle elle pouvait changer de point de vue.

"Bien, passons à autre chose."

Il sentit aussi qu'elle était une personne qui pouvait facilement reconnaître ses erreurs.

"Tu as raison."

Ce devait être du sang froid dû à la maturité.

"Alors, Tatsuya-kun....."

Malgré tout, ce n'est pas comme si elle le prenait de haut.

"Qu'y a t'il?"

"Cette méthode de calibration..... ou l'appelles tu nettoyage? Pourrais tu me l'enseigner plus tard?"

Absolument aucune mauvaise intention.

"Aucun problème, mais, je vous en prie, concentrez vous sur le prochain match."

"Bien sur, laisses ça à Onee-san!"

A ce stade, choisir d'adopter l'attitude d'une sœur aînée pouvait faire sourire n'importe qui.

Et ainsi, Mayumi empêcha complètement son adversaire de marquer un seul point. Elle gagna 2-0 sans céder un seul point et prit seule possession de la première place de "Nuée de Balles" féminin.

◊ ◊ ◊

"Destruction des Piliers de Glace", aussi connu plus simplement comme "Démolition des Piliers", avait lieu dans une arène extérieur qui faisait 24m mètres de long et douze de large. Le terrain était divisé en deux parties avec 12 piliers chacune, qui faisaient 2 mètres de haut avec un mètre de coté, et le vainqueur était celui qui détruisait le premier les piliers du terrain adverse.

Grâce à cela, "Destruction des Piliers de Glace" nécessitait des préparations massives.

Nécessitant des centaines d'énormes piliers de glace qui devaient restés gelés durant la chaleur de l'été, cela limitait grandement le nombre d'arènes, même avec le soutien complet des militaires.

En raison des limites de production de la glace, la Compétition des Neuf Lycées ne pouvait préparer que deux arènes pour chacune des équipes masculines et féminines, pour un total de quatre arènes. Chaque site a douze matchs au premier round, douze dans le second pour un total de 18 matchs, ce qui était la limite pour une journée.

"Néanmoins, c'est un concours qui épuise sévèrement le Pouvoir Magique. Si tous les matchs avaient lieu la même journée, la plupart des joueurs n'arriveraient pas à tenir. Par élimination simple lors du second jour, il y a un très court intervalle entre chaque match. Ainsi, c'est la vérité que dire que 'Destruction des Piliers de Glace est gagnée par ceux qui ont la plus grande endurance'."

Tatsuya faisait le point sur les détails alors que la seule à écouter et acquiescer était Shizuku.

Miyuki était aussi présente, mais si sa sœur avait été la seule présente,

alors Tatsuya n'aurait pas eut à expliquer cela à ce moment précis.

Tous trois ne se tenaient pas dans les tribunes mais dans l'aire de travail des auxiliaires.

Leur but était de voir le match de Kanon de près pour avoir un impression en direct de comment l'épreuve avait lieu.

Kanon était occupée à discuter des détails avec Isori, ainsi ce n'était pas le moment de les interrompre.

Tous les autres étaient allés voir l'épreuve masculine de "Nuée de Balles".

Sayaka était allée encourager Kirihara, Erika avait choisi de l'accompagner et avait entraîné Mizuki avec elle, puis Mizuki avait invité Mikihiko à venir, et finalement Mikihiko avait attrapé Léo. C'est ainsi que c'était arrivé.

Après avoir entendu cela de Miyuki, Tatsuya garda l'impression en lui "quelle bande de fourbes". Et pour ceux qui étaient fourbes parmi eux, il valait mieux taire certaines choses.

Kanon apparut finalement devant tous.

Il y avait deux plate-formes, de quatre mètres de haut, à chaque bout de l'arène.

Les joueurs devait user de la magie pour protéger ses propres piliers de glace tout en détruisant ceux de l'adversaire.

Après être entré dans l'arène, toutes les restrictions sur la sécurité magique étaient levées, ainsi il était connu que c'était l'épreuve magique la plus intense.

"Shiba-kun."

Après avoir vu Kanon sur la plate-forme, Isori se retourna pour faire signe à Tatsuya.

"Allons y aussi."

Isori invita Miyuki et Shizuku, qui amenèrent Tatsuya avec elles.

Derrière les plates-formes où les joueurs se tenaient, il y avait un poste d'observation spéciale pour le personnel de support.

Là, se trouvaient de multiples dispositifs chargés de surveiller les statuts du joueur ainsi qu'une large vitre pour voir la compétition.

"Comment sont les statuts de Chiyoda-senpai?"

Tatsuya sentit qu'il était malvenu de rester silencieux, il posa la question pour briser la glace.

"Elle est très motivée, au point que je suis un peu inquiet qu'elle soit trop enthousiaste et qu'elle s’essouffle dans les matchs de demain."

Avec un sourire au visage, Isori répondit à la question standard de Tatsuya.

Il n'y avait aucune trace de malaise sur son visage.

"J'ai entendu comme quoi senpai a gagné le premier match dans le temps le plus court jamais enregistré."

"Eh bien, c'est la personnalité de Kanon..... J'espère sincèrement qu'elle soit un peu plus prudente, pour que ceux qui la regardent, puissent se relaxer."

Tatsuya fut plutôt intéressé par le sourire ironique et réponse d'Isori.

Tatsuya avait accompagné Mayumi toute la matinée, et bien sur, il avait manqué les premiers éliminatoires du matin.

Il savait seulement que Kanon avait gagné son premier match dans le plus court temps possible.

Cela dit, bien que le match ait été court, plusieurs de ses piliers de glace étaient tombés.

"Ça commence."

La voix douce de Shizuku incita Tatsuya à diriger son regard vers l'arène.

Au coup de sifflet strident de départ, la terre se mit à gronder.

"Création de Mines."

Ce n'était pas Champ de Mines mais Création de Mines.

Ce qui avait lieu devant les yeux de Tatsuya le força à en sortir le nom.

Versatilité et vitesse étaient les avantages absolus de la Magie Moderne. Néanmoins, les Magiciens étaient aussi des humains, ainsi il

y avait des domaines où ils se spécialisaient et d'autres dont ils n'étaient pas adeptes.

Vu qu'on hérite du talent magique, les relations de sang au sein des familles font partager des aptitudes similaires envers les domaines magiques.

Le Clan Yotsuba, dont chaque membre excellait dans un domaine unique était une exception notable.

Au sein des familles influentes, en dehors des noms de famille, les membres partageaient une capacité commune qui devenait habituellement comme un second nom — presque comme un titre.

L'un des plus fameux était le "Phalanx" de la Famille Juumonji.

La "Rupture" de la Famille Ichijou.

La Famille Saegusa n'avait pas un système où il n'excellait pas, ainsi on se référait ironiquement à eux comme "Omnipotent".

La Famille Chiba était connu comme "Escrimeur Magique" — ce titre se référait plus à leurs techniques et capacités qu'à un talent particulier que possédait la famille, mais était utilisé pour se référer à cette famille dans son ensemble.

La Famille Chiyoda était connu sous le nom de "Mine Genesis".

Les Magiciens de la Famille Chiyoda se spécialisaient dans l'utilisation de Magie Systématique d'Oscillation Longue Portée via Matière Solide, particulièrement quand ils venaient à utiliser la magie de Tremblement de Terre.

La saleté, la roche, le sable, le ciment, peu importait le matériau.

Une puissant oscillation pouvait être appliquée aussi longtemps que la matière solide était reconnue comme la "surface de la Terre". C'était le véritable visage de la spécialité de la Famille Chiyoda "Mine Creation", dont le titre de la Famille Chiyoda dérivait "Mine Creator" = "Mine Genesis".

Le camp adverse souffrait de vibrations verticales qui allaient perpendiculairement par rapport à l'épicentre, avec deux piliers s'écroulant à chaque fois.

La concurrente tenta de contrer en utilisant la Magie de Type

Mouvement "Arrêt Forcé" dans un effort pour étouffer tout mouvement sur une partie de l'objet, mais "Mine Genesis" continuait de changer de cibles à une vitesse que son adversaire ne pouvait faire face, ainsi au moment où son adversaire avait perdu cinq de ses stalagmites, cette dernière laissa tomber la défense pour se concentrer seulement sur l'attaque.

"Hein?"

"Quoi?"

"?"

Tatsuya et les autres exprimèrent leur étonnement de différentes manières, alors qu'Isori, sur le coté, souriait ironiquement.

Alors qu'il voyait tomber les piliers de leurs cotés sans aucune résistance, il secoua la tête d'impuissance.

"Devrais je féliciter Kanon pur y aller à fond ou la critiquer pour être trop téméraire..... Sa méthode consiste à prendre la jugulaire avant d'être mise KO."

"Non, eh bien..... je dirais difficilement que c'est la mauvaise tactique."

Son adversaire était passée de la défensive à l'offensive, et sa résistance en fut dûment affaiblie.

Au moment où le nombre de ses piliers en fut réduit à six, Kanon avait déjà détruit chaque pilier du terrain adverse.

"Victoire!"

Kanon souriait largement alors qu'elle descendait de la plate-forme en faisant le signe de la victoire.

La cible de son sourire fut bien sur, Isori.

Le visage d'Isori semblait bien dire "que vais je bien pouvoir faire de toi", mais il souriait de la même manière.

"Comment devrions nous décrire ça....."

"Une combinaison gagnante?"

Miyuki fut réticente à exprimer son opinion, mais Shizuku n'eut pas cette scrupule.

"Vous deux devriez dire qu'ils se comprennent l'un l'autre parfaitement."

Les entendant toutes deux, Tatsuya sourit ironiquement pour une raison bien différente.

Pourtant, Tatsuya reconnaissait lui aussi qu'ils étaient une "combinaison gagnante".

Ils avaient beaucoup de synergies.

La joueuse et l'auxiliaire, même s'il ne se tenait pas sur la plate-forme ensemble, ils combattaient comme un seul être.

Et pourtant — Tatsuya pensa.

S'ils étaient une paire avec autant de synergies, est ce qu'Isori serait en mesure de bien remplir ses fonctions avec les autres joueurs?

Il y avaient 40 joueurs pour seulement 8 techniciens.

En moyenne, chaque technicien était responsable de cinq joueurs.

Tatsuya était en charge de l'équipe des Filles de Première Année, mais c'était si personnes, sept si on comptait l'ajout impromptu de la matinée.

Une fois qu'ils avaient forgé un intense lien émotionnel avec le joueurs, pourraient ils faire aussi bien avec les autres joueurs?

Tatsuya était aussi confronté à ce dilemme.

Ferait il aussi bien pour Shizuku ou Honoka que pour Miyuki?

"......Shiba-kun, qu'y a t'il?"

"Non, ce n'est rien."

Ce n'est pas comme si il pouvait demander à Isori quelque chose du genre "Travailles tu aussi pour chaque joueur?".

Tatsuya répondit normalement face au questionnement d'Isori.

◊ ◊ ◊

Après avoir assuré son avancement au troisième tour, Kanon & Cie — suivie de Tatsuya, Miyuki et Shizuku — retournèrent au pavillon de

bonne humeur, pour froncer à l'atmosphère austère qui régnait sur le camp.

".....Qu'est il arrivé?"

Isori posa la question à Suzune, qui était sûrement la seule à maintenir son attitude habituelle.

Suzune se retourna, révélant une émotion encore plus pale que d'habitude.

"La 'Nuée de Balles' pour les garçons ne s'est pas aussi bien passé que prévu — nous sommes en train de recalculer nos chances."

Le classement au sein de la Compétition des Neuf Lycées était déterminé par le score total de toutes les épreuves.

Première Place reçoit ainsi 50 points, Seconde Place 30 points, et Troisième Place 20 points.

Quatrième Place au sein de "Tirs Rapides", "Bataille de Surf", et "Batte Illusoire" donne 10 points. "Nuée de Balles" et "Destruction des Piliers de Glace" ne donne des points qu'au top 3, et ainsi les trois équipes éliminées lors du troisième round reçoivent 5 points.

Pour "Le Code du Monolithe", Première Place reçoit 100 points, Seconde Place 60 points, et Troisième Place seulement 40 points, ce qui en fait l'épreuve la plus importante en terme de points.

La moitié des points de la Division des Nouveaux arrivants est ajouté au total.

Voilà ce qu'était la répartition des points au sein de la Compétition des Neuf Lycées.

Quiconque étant hors du top 4 ou du top 6 ne recevrait aucun point, même si Première Place était impossible, prendre les places 2nde à Quatrième était valable en nombre de points pour la victoire finale. D'après ce classement, avancer autant de joueurs dans autant d'épreuves que possible à élimination directe ou phases de duel était l'une des clés de la victoire.

"Pas aussi bien que prévu signifie....."

"Les joueurs ont été éliminés lors du premier, second ou troisième round."

Isori demanda avec trépidation alors que la voix lui répondant semblait en comparaison bien indifférente.

"Alors que nous détenons les droits de participer pour l'année prochaine, ce résultat est complètement inattendu."

La voix était largement indifférente car la personne en question avait été lourdement touché par ces nouvelles.

Comparé aux autres épreuves, les garçons au sein "Nuée de Balles" manquait clairement de puissance.

Indépendamment du fait qu'ils ne possédaient pas un champion comme l'équipe féminine de "Tirs rapides", "Nuée de Balles", et "Bataille de Surf" ou pour l'équipe masculine de "Destruction des Piliers de Glace" qui étaient "assurés de la victoire", ils devaient encore posséder suffisamment de talent pour prendre la première place.

"La Division des Nouveaux Arrivants est un peu difficile à estimes, mais d'après notre avance actuelle, si "Bataille de Surf" pour les filles, et "Destruction des Piliers de Glace" masculin ainsi que "Batte Illusoire" et "Code du Monolithe" prennent tous la Première Place, on sera tiré d'affaire."

Un étudiant de 2nde Année de l'équipe de conseillers tactiques fit le rapport.

Tatsuya, qui n'écoutait que comme auditeur, sentit que cet objectif était plutôt élevé.

Incluant les équipes féminines et masculines, ils voulaient clamer la Première Place pour quatre des six prochaines épreuves de la Division Officielle.

On pouvait compter sur Katsuto et Mari pour gagner dans leurs épreuves respectives, mais d'après ces calculs, si un accident venait à se produire, ils courraient le risque de voir le moral baisser vers un point de rupture.

Malgré ça — ce n'était pas quelque chose dont Tatsuya avait à se préoccuper.

Il outrepassait sûrement ses obligations en s'inquiétant pour ces choses.

Comparé au score, Tatsuya était plus attentif à autre chose.

Kirihara avait participé à l'épreuve masculine de "Nuée de Balles".

Certainement, Kirihara avait un coté téméraire, mais il possédait aussi un certain sens du devoir.

Il né déprimerait pas à cause de cela, si.....?

◊ ◊ ◊

Après que les activités de la journée se soient terminés, Tatsuya trouva Kirihara près de l'aire de repos alors qu'on approchait du crépuscule.

Apparemment, il avait l'air parfaitement normal.

Sayaka était assise à coté de Kirihara.

Kirihara travaillait dur pour maintenir une apparence joyeuse, mais Tatsuya pouvait dire d'un regard qu'il se forçait.

"Kirihara-senpai, merci pour votre dur labeur."

"Ah, ah c'est Shiba."

Bien sur, Tatsuya aurait pu choisir de passer son chemin sans dire un mot, mais il n'en fit rien.

"Je suis sorti lors du second round, et plutôt salement."

Il se faisait sans aucun doute force, mais il avait récupéré plus rapidement que ne l'attendait Tatsuya.

Peut être que les athlètes qui sont plus adeptes de la victoire et de la défaite, sont plus résistant quand ils font face à l'amertume de la défaite.

Tatsuya perdait à chaque fois qu'il se battait avec son maître, mais ce n'était pas des expériences de "compétition", et ne pouvait s'en remettre qu'à la logique pour expliquer ça.

Tatsuya était incapable de juger si c'était le moment approprié pour offrir des paroles de réconfort, aussi il choisit de dire la vérité.

"Senpai a été malchanceux de croiser l'as du Troisième Lycée au second round et n'a perdu que d'un total de huit points après avoir

perdu trois des cinq matchs. Le favori a été fatigué par le long combat contre senpai et fut promptement éliminé lors du troisième round, ainsi ça a été une victoire à la Pyrrhus pour lui aussi."

".....Bon sang, tu es vraiment direct."

Tatsuya n'avait jamais pris la peine d'édulcorer les faits et délivra une froide analyse peu réconfortante, mais Kirihara ne fut pas en colère.

"Tu n'as jamais pensé que je pourrais être déprimé?"

Le ton et l'expression de Kirihara étaient plus taquines qu'autre chose.

"Je l'ai pensé, mais je n'ai trouvé aucune consolation."

L'endroit resta silencieux pour quelques seconds.

Kirihara éclata soudainement de rire.

Et il riait au point qu'il fut plié en deux sur le sofa.

De quoi déconcerter Sayaka à ses cotés.

Tatsuya continua de le regarder, impassible.

"Shiba..... Tu es vraiment quelqu'un d'intéressant. Habituellement, maintenant serait le moment d'avoir une expression bizarre et passer rapidement en m'ignorant, pas le moment de s'asseoir et parler."

Ce choix — intentionnel au delà de ça — était aussi sur la table, mais Tatsuya croyait que passer sans un mot ne serait pas assez cordial. Toutefois, cette fois, Tatsuya apparut comme un "fouineur".

Tatsuya réalisa que prendre en compte la cordialité ne convenait pas à sa personnalité, mais.....

"Malgré tout, je me sens mieux grâce à toi. Vu que tu as dis que c'était une 'victoire à la Pyrrhus', alors ce doit l'être. Cela montre que j'ai encore beaucoup de potentiel."

.....On dirait bien que ce n'était pas le cas.

Que Kirihara y croyait vraiment ou pas, était sans immatériel.

De même, le résultat visé par Tatsuya était aussi immatériel.

◊ ◊ ◊

Malgré le fait de douter sérieusement, les devoirs de base du personnel ne changea que peu.

Ceux responsables des tâches étranges et des courses pourraient clamer l'inverse, mais vu que Tatsuya faisait partie des techniciens, les chefs du Premier Lycée ne furent pas suffisamment stupide pour le faire travailler sur des taches sans importance et mettre en danger ses taches originelles.

Après avoir préparé la Division des Nouveaux Arrivants il y a deux jours, double contrôle des conditions physiques et mentales des joueuses sous ses soins et faire un dernier test de compatibilité des CADs, le travail de la journée prit fin.

Tatsuya reçût un long paquet par poste au comptoir de l'hôtel et retourna à sa chambre.

Il n'était pas encore l'heure de dîner.

Il restait encore beaucoup de temps, ainsi Tatsuya opté pour tester le produit contenu dans l'emballage.

Il jeta un coup d'œil à la pendule pour vérifier quand la salle à manger ouvrirait.

Il y avait encore un certain intervalle de temps avant de rencontrer Miyuki.

Tatsuya déballa le colis et regarda le contenu.

C'était quelque chose pour lequel il avait contacté, le matin même, la 3ème Division de CAD développement de Four Leaves Technology.

Les composants étaient tous universels, la forme était excessivement simple, et le tout assemblé au point qu'un dispositif automatique de construction pouvait faire le reste en suivant le manuel. Malgré tout, le fait que ce soit assemblé et envoyé en une seule journée était plutôt impressionnant.

(J'espère que Ushiyama-san ne se pousse pas trop à bout.....)

Devrait il dire lui même ou pousser ses subordonnés?

Tatsuya avait pris grand soin de soigneusement lui rappeler que c'était "partiellement pas curiosité".

Dans tous les cas, Tatsuya ne pouvait "vraiment" pas revenir en

arrière, ainsi épiloguer sur ces détails était inutiles.

Après qu'il ouvrit le paquet et regarda à l'intérieur, il trouva un sceau de combinaison à coté du long et mince récipient. C'était habituellement utilisé pour transporter un CAD de la taille d'un fusil de chasse.

Tatsuya y entra le code habituel.

Il y avait un "sabre" à l'intérieur de la boite.

L'objet que Tatsuya sortit de la boite avait l'apparence extérieur avec un protège main remis à niveau.

La longueur totale devait être de 70 cm, et 50 cm sans la garde — voilà pour sa forme.

Il n'y avait pas de lame.

Cela ne faisait pas référence au manque d'un bord, mais le fait que cet outil n'avait jamais été forgé pour être un "sabre".

Le sens littéral de ces mots semblait paradoxal, mais la meilleure description serait "une bokken métallique forgé pour ressembler à un sabre".

Ou peut être s'agissait il "d'une barre plate à laquelle on a ajouté un manche".

Cette article n'était pas une barre ordinaire.

Après avoir appuyé sur le bouton d'activation et fait entrer les Psions, une sensation familière passa à travers la main de Tatsuya.

L'objet était de même catégorie que le bâton de police d'Erika en ça que c'était une arme caché au sein d'un CAD.

Son utilité était encore plus restreinte qu'un CAD Spécialisé et ne pouvait contenir qu'une Séquence d'Activation. Le CAD d'Erika était un modèle Spécialisé qui pouvait changer de capacité. En comparaison, c'était un CAD Spécialisé qui ne possédait qu'une fonction, en faisant de ça en "CAD avec Arme Intégrée".

Tatsuya mesura la distance jusqu'au mur s'il devait l'essayer ici quand quelqu'un frappa à la porte. Cette arrivée au bon moment incita Tatsuya à sourire ironiquement alors qu'il plaçait le prototype sur la table.

Il restait encore du temps avant le rendez-vous prévu, mais étant donné que la présence de l'autre coté de la porte ne cherchait pas à se cacher, il savait que ses amis étaient présents.

Et ce prototype convenait très bien à l'un d'entre eux.

Plutôt que de le tester lui même, ce serait bien plus intéressant de voir ce gars s'en occuper — pensa Tatsuya alors qu'il ouvrait la porte.

"Onii-sama, est ce le bon moment?"

Le meneur et celle qui parla en premier fut sa petite sœur.

Tatsuya ouvrit grand la porte et fit signe à tous d'entrer. Erika, qui suivait Miyuki, était assez proche pour la toucher.

Suivi ensuite de Honoka, Shizuku, Mizuki, ainsi que Léo et pour finir de Mikihiko.

Plutôt que dire les dames d'abord, il serait plus approprié de dire que c'était ainsi que l'ordre avait été fait.

Et pourtant, bien que ce soit une chambre double pour le rangement du matériel, on se retrouvait compressé avec autant de monde présent en même temps.

Les chaises et les lits ne furent pas suffisant, ainsi quelqu'un s'assit sur la table— bien rangée et parfaitement propre donc Tatsuya ne fit aucune remarque.

Erika était celle sur la table, et bien sur elle fut celle qui remarqua le "sabre" sur la table, et cela l'intéressa grandement.

"Tatsuya-kun, est une..... réplique d'une épée? Excepté que ça ressemble à un sabre."

"Négatif."

"Ou alors un fouet en métal?"

"De nouveau négatif..... Je ne pense pas qu'un samouraï de cette contrée utiliserait quelque chose comme un fouet en métal."

"Qui utilise le terme samouraï de nos jours....Alors qu'est ce?.....Ah, c'est un Houki?"

Erika le retourné et examina les deux cotés et demanda de nouveau après avoir remarqué le déclencheur sur le coté.

"Exact, pour être précis, c'est un CAD avec Arme Intégrée, connu communément comme un dispositif de calcul pour arme. Ce CAD est spécifiquement en harmonie avec l'utilisation d'un type de magie qui peut doubler comme arme de corps à corps qui utilise cette même magie."

"Wow....."

La raison pour laquelle Erika fit ce son, ne fut pas parce que les CAD avec Arme Intégrée était incroyablement rare, mais parce que c'était la première fois qu'elle en voyait un ayant la forme d'un "sabre". Erika n'était pas la seule à regarder le sabre qu'elle tenait, aussi bien Honoka que Shizuku le regardait avec grand intérêt.

Le visage de Miyuki semblait dire "Ah, voilà donc ce qu'il en retourne", clairement car elle se souvenait de leur discussion de la veille.

Mizuki pas plus que Mikihiko n'exprimèrent de l'intérêt, sûrement parce qu'ils préféraient les objets familiers plutôt que du matériel inconnu.

Tatsuya regarda un instant la personne sur le coté et eut un sourire malicieux alors qu'il retirait le prototype des mains d'Erika.

"Léo."

Et le jeta vers Léo, qui se tenait sur le coté, le visage détourné.

"Ouah! Tatsuya, n'est pas dangereux?"

En réalité, Léo brûlait de l'essayer, mais il feignait le désintérêt dû à son actuelle guerre froide avec sa bête noire, Erika, alors qu'il trépidait, il s'empressa d'attraper la poignée.

Tatsuya ignora complètement sa protestation et lui envoya un sourire de défi.

"Envie de l'essayer?"

"Hein, moi?"

La bouche de Léo s'étira en un grand sourire.

Sur le coté, Erika eut une expression signifiant "On voit si facilement à travers lui.....", auquel Tatsuya jeta un regard avant de le rediriger vers Léo.

"Ce dispositif de calcul pour arme a été créé en fusionnant une arme pour frapper avec la Magie de Renforcement que Watanabe-senpai a utilisé durant 'Bataille de Surf', avec la lame servant aussi comme arme pour frapper avant de se reforgé, alors je pense que ça te convient vraiment."

"Alors Tatsuya a fabriqué ça?"

"Oui."

"Allons bon."

Mikihiko s'incrusta dans la conversation de Léo et Tatsuya.

Initialement, il avait l'air indifférent, mais il suivait bien la conversation.

"L'épreuve de Watanabe-senpai a eu lieu hier, et tu as fait ça en une journée? Cela ne semble pas être un produit bien prêt."

"Les composants eux même sont communs. L'armature externe est aussi un générique, ainsi il n'y a pas de matériaux spéciaux utilisés."

"Mais ce n'est pas quelque chose que tu peux forger à la main, non? Tu ne devrais pas avoir autant de temps libre....."

"Pourquoi, bien sur, je ne me suis occupé que de la conception, et j'ai eu une fabrique familière construire le système d'assemblage automatique."

Miyuki entendit toute la conversation et quand elle entendit les termes "fabrique familière", elle éclata presque de rire. Heureusement, elle préparait régulièrement des masques pour des occasions comme celle là, ainsi on ne lui prêta pas attention.

"Alors Léo..... Envie de l'essayer?"

Les paroles de Tatsuya étaient comme les murmures doux du démon Méphistophélès.

Même en sachant que quelque se tramait, l'attrait était irrésistible.

".....OK, je vais être ton cobaye."

"Il est tombé."

Le faible murmure de Shizuku traduisit succinctement les pensées de tous.

Ensuite, Tatsuya a sorti un visio-casque avec miroirs de réfraction de lumière et d'un haut-parleur.

"Voici le manuel d'instruction."

Voyant le visio-casque en face de lui, Léo ne sembla pas comprendre les paroles de Tatsuya alors qu'un point d'interrogation semblait apparaître sur son visage.

"Regarde, le manuel d'utilisation pour le dispositif de calcul pour arme se trouve à l'intérieur."

"Ah? Oh....."

L'objet que lui passa Tatsuya (ou plutôt lui jeta) apparut pour avoir des images et des fichiers de sons enregistrés à l'intérieur, qui incluait le manuel d'instruction du CAD avec Arme Intégrée. Léo laissa échapper un "Je comprends" et prit le visio-casque.

"Cela tient lieu de terminal virtuel, non?"

Honoka, qui posa la question, n'était pas la seule à s'interroger.

Terminal virtuel d'information causait des préjudices considérables aux Magiciens immatures.

Avec cela en tête, le Premier Lycée l'avait interdit.

Tatsuya insistait lui même pour utiliser un terminal matériel mais demandait à son ami d'utiliser un terminal virtuel. Même si le terminal ne permettait que de voir et d'écouter, tout le monde eut les mêmes appréhensions.

"Ce n'est rien d'aussi scandaleux, mais ils partagent certaines similarités."

".....Est ce que ça va aller?"

"Hein? Oh..... Tu fais référence au mal causé par les terminaux virtuels?"

"Euh..... Oui."

"Nul besoin de s'inquiéter pour ça. Les risques des terminaux virtuels augmentent avec l'inexpérience de l'utilisateur. Si utilisé strictement pour tester des conditions réalistes, alors c'est un outil plutôt intéressant."

"Je ne suit pas....."

Le ton de Honoka envers Tatsuya était très poli, mais il y avait des traces de l'influence de Miyuki mixé avec.

"La Magie est une capacité qui utilise la perception pour altérer temporairement la réalité. Les terminaux virtuels créent des illusions que les gens prennent pour la réalité."

Les explications de Tatsuya étaient toujours attentives et exhaustives, ce qui était probablement un réflexe de sa part.

"Tous deux partagent la distinction qu'ils projettent un phénomène in naturel dans la réalité. D'un autre coté, en expérimentant un phénomène via un terminal virtuel, il n'y a nul besoin d'énergie pour réécrire la réalité, pas plus qu'il y ait de risques d'échec. Voilà où se situe le danger des terminaux virtuels."

Tatsuya s'arrêta temporairement.

Parce qu'il sentait qu'il était trop loquace.

Cependant, ces amis se trouvant autour de lui, semblaient avoir compris à un certain point mais il restait encore des interrogations, alors il sentit que l'explication n'était pas assez détaillée et reprit.

"Les terminaux virtuels causent aux Magiciens des hallucinations et font croire qu'on peut altérer la réalité sans effort et sans conséquence. Les gens incapables d'utiliser la magie ne courent aucun risque d'avoir ce problème. Les Magiciens expérimentés seront capable de différencier ce dont ils sont capables, mais les Magiciens immatures peuvent confondre la différence entre ce qu'ils expérimentent dans le monde virtuel et ce qu'ils peuvent accomplir et surestiment leurs capacités.

Une fois que les Magiciens immatures se sont habitués à altérer la réalité sans les concepts d'effort et de travail, ils deviennent incapables ils deviennent incapables de réfléchir sur pourquoi ils ne peuvent pas utiliser la magie pour réécrire la réalité avec succès et perdent la capacité de penser de façon critique et la volonté de le faire. D'où la croyance populaire que les magiciens immatures ont des dommages causés par l'utilisation de terminaux virtuels."

Tatsuya fit une nouvelle pause pour regarder les visages de sas amis.

Des explications supplémentaire seraient sûrement inutiles, mais il prit par précaution le soin de conclure.

"En d'autres mots, le problème provient de si l'utilisateur croit qu'il ou elle a accompli quelque chose dont il ou elle était incapable jusqu'alors. Utiliser des terminaux virtuels pour réaliser des tests n'est pas un problème en soi. Ce type d'expérience virtuelle bénéficie aux phases de construction de Séquences Magiques. A la fin de la journée, cela reste difficile de ne voir que les bénéfices, alors je sens qu'une interdiction formel prend alors tout son sens."

"Vraiment..... En fait, j'ai appris beaucoup de choses, là."

Tatsuya sentit que l'acquiescement de Honoka était trop fervent et qu'elle croyait trop en ses paroles.

Même si elle comptait beaucoup sur lui, il n'avait aucun moyen de répondre.....

Telles furent les paroles sincères de Tatsuya.

◊ ◊ ◊

Le test du prototype fut programmé après le dîner, en utilisant l'une des installations d'entraînement de combat en périphérie de la zone de la Compétition des Neuf Lycées.

Tatsuya ne s'occupa pas des arrangements, ce fut Erika qui fit appel à ses connexions.

Depuis son arrivée ici, Erika semblait être frivole en utilisant les connexions de sa famille de manière auto-destructrice.

Était il arrivé quelque chose qui avait changé son état mental?

A propos, Tatsuya se souvint que quelque chose de similaire s'était produit durant le banquet.

Néanmoins, Tatsuya était incapable d'agir peu importe son inquiétude.

Ses propres émotions n'étaient après tout, qu'une façade.

Il valait mieux regarder de l'autre coté et satisfaire en premier sa curiosité d'ingénieur. C'était sûrement la plus honnête méthode pour

avancer.

Tatsuya se persuada de cette manière et se prévint de nouveau d'interférer dans les affaires des autres.

"Léo, comprends tu les mécanismes?"

Ensuite, il devrait concentrer entièrement sur le test.

Même si c'était quelque chose fait pendant son temps libre — même si c'était moyen ultra simplifié d'utiliser la magie moderne — c'était tout de même une innovation pour tester la magie et les dispositifs magiques.

Si un accident se produisait dû à sa suffisance, celui qui en supporterait le poids serait Léo et non Tatsuya.

"Euh, je pense..... mais, vais je vraiment faire ça?"

"Ça" se référait sûrement aux mouvements qu'il avait vu dans le visio-casque.

Sûrement était le mauvais mot à utiliser, vu qu'il n'y avait que cette possibilité.

"Nous allons faire ce test pour le savoir."

"Tu as raison."

L'installation d'entraînement se trouvait à 30 minutes à pied de l'hôtel.

Cela poserait des problèmes durant la journée, mais il faisait désormais nuit.

De même, cela irait dans les quartiers des villes mais ils étaient dans une installation militaire dans les montagnes.

Miyuki et Erika avaient refusé obstinément de coopérer, mais furent finalement persuadées de rester à l'hôtel.

Malgré ça, Tatsuya restait encore mal à l'aise, il avait alors appelé Honoka pour suivre Miyuki et Mizuki pour garder un œil sur Erika.

Maintenant, seuls Tatsuya et Léo étaient présents.

"Commençons."

"Compris."

Au départ, ils ne devaient pas utiliser un mannequin comme cible.

Maintenant, ils avaient besoin de vérifier les mouvements du CAD avec Arme Intégrée sans utiliser de force physique.

"Maintenant."

Léo appuya sur le bouton d'activation sur la partie inférieure de la poignée.

Avec un son comme "clang", un contact plumeux passa à travers ses doigts.

Il coinça son index près de la détente près du sommet du garde main et commença à fournir des psions.

Contrairement à l'impression que donnait son physique, l'alimentation en psions ne fut pas explosive, mais possédait une résistance inépuisable. Correction, peut être qu'il s'agirait d'une description convenant mieux à son coté jeune et énergique.

Si un CAD n'était pas calibré pour une utilisation personnelle, il n'y aurait quasiment aucune assistance pour construire la Séquence Magique, ainsi il y avait un court délai pour que la Séquence d'Activation soit traduite en Séquence Magique.

Approximativement 0.6 seconds.

Même si, ce fut bien plus rapide que durant les cours de capacités pratiques.

Cela devait être causé par son expertise personnelle dans ce domaine de la magie, ou les performances impressionnante du CAD et de la Séquence d'Activation.

Peu importe que ce soit l'un ou les deux à la fois, ce détail était sans importance. Ce qui l'était, était d'observer la magie activée en action et non le temps nécessaire pour activer cette même magie.

"Oh?"

Léo sursauta, non pas parce que la magie s'activait, mais parce que les effets de l'inertie excédait ses attentes.

"Ha ha, ça vole vraiment, vraiment incroyable!"

Léo révéla un sourire enfantin et balança le "sabre" qui avait moins de la moitié de la lame encore attachée.

L'autre moitié flottait dans les airs et suivit le même mouvement et se balança dans un arc similaire.

"Trois, deux, un....."

"Ouah....."

Léo stoppa à l'écoute du compte à rebours de Tatsuya.

"Zéro."

A la fin du compte à rebours, la lame se reconnecta promptement avec la lame "brisée" et reforma un "sabre" complet.

"Tatsuya, c'est une réussite complète."

Léo semblait ravi alors qu'il levait le pouce en l'air, et que Tatsuya imitait son geste.

"Malgré tout, je suis impressionné que tu sois arrivé à quelque chose comme ça. Détacher la lame de la poignée, puis utiliser la Magie de Fortification pour solidifier sa position et 'lancer' la lame. J'ai encore du mal à croire que j'ai fait ça. Maintenant je sais que la Magie de Fortification peut aussi opérer sur des objets séparés."

"C'est parce que le concept derrière la Magie de Fortification est de stabiliser les positions relatives, et si tu ignores tous les stéréotypes, tu verras que les objets n'ont pas besoin d'être connectés physiquement l'un à l'autre. De plus, la forme opérationnelle de ce CAD est plus comme une 'extension' que d'un 'lancer'."

"La lame n'ira que d'une manière linéaire, vu que le segment entre les deux est vide."

"je n'avais jamais pensé à ça, je vais juste la traiter comme un très long sabre."

Comme Léo l'avait souligné, ce dispositif de calcul armé n'était pas comme une autre arme d'attaque longue distance qui nécessitait le contrôle de l'énergie, mais était simplement suivre la trajectoire alors que ça volait à distance jusqu'à ce que la magie perde son effet.

"A propos, pourquoi la lame est elle revenue? Je n'ai pas activé d'autres magies."

"Oh, c'est simple. C'est un alliage fait pour rappeler via une réaction de type électrique, ainsi ce n'est brisé qu'au moment où un courant

passe pour briser la connexion."

Léo acquiesça pour montrer qu'il avait compris, vu que c'était une conception populaire dans l'ère moderne.

"Ainsi, si une force importante est appliquée quand on utilise pas la magie, cela peut être facilement cassé."

"Ce n'est pas un problème, nous avons juste à le ranger quand on ne l'utilise pas."

"C'est vrai, devrions faire des tests sur les mannequins? Ou tester les fluctuations durant le séparation?"

"Tatsuya, quand c'est séparé, la longueur est elle ajustable?"

"Ce n'est pas impossible, mais extrêmement difficile. Actuellement, la Séquence d'Activation liée au bouton d'activation est une constante, mais on peut en faire une variable facilement. Le challenge se tient dans la longueur que l'on veut ajuster, une nouvelle magie a besoin de réécrire la précédente."

"Vraiment? Ainsi, si la vitesse de retour pouvait être augmentée, alors il n'y aurait aucune raison de s'en faire avec le changement de longueur entre les deux. Après tout, un vrai sabre ne peut pas s'allonger lui même quand on l'abat."

"Oui, Erika semble en être capable. Que comptes tu faire?"

"Eh bien..... Un test sur les mannequins d'abord."

"Compris."

Tatsuya manipula un mécanisme de contrôle qui était légèrement plus large qu'un bloc notes et fit sortir trois mannequins de taille humaine du sol.

".....Vieille école."

".....Je me demande qui a ce genre de passe-temps?'

Même si les produits recyclés s'étaient généralisés dans la société moderne, le style hors d'age les incita à échanger un regard d'impuissance.

"Peu importe..... En termes d'apparence, ils feront l'affaire comme cibles."

"Les épouvantails n'ont pas "d'apparence"..... Mais on n'a pas le choix."

Léo se frappa légèrement le visage de sa main gauche, libre, pour se concentrer, puis prit une position devant les épouvantails.

Il appuya sur le bouton d'activation.

La lame s'envola dans les cieux.

Léo balança l'arme de toute sa force.

Au delà de son bras droit, la lame détachée eut un mouvement de rotation avec une bonne vitesse avant de frapper les épouvantails.

"Beaucoup de pression sur le bras."

La main de Léo semblait engourdie, mais il bascula légèrement pour restaurer l'arme, alors qu'il exprimait ses pensées.

"C'est parce que la part qui vole est petite et malgré le fait que la vitesse augmente la puissance d'impact, l'inertie reste un problème, alors tu as besoin d'un surplus de force au niveau du bras pour compenser."

"Pas étonnant. Ainsi, en combat, j'aurais besoin d'appliquer plus de force à chacun des coups."

Léo admit les explications de Tatsuya en hochant la tête et en visant la cible suivante.

Alors qu'il regardait Léo reprendre une position de combat, Tatsuya pensa:

(En effet, même après avoir appliqué une véritable lame, une légère augmentation de poids serait parfaite pour le combat. Malgré tout, ce niveau de puissance serait approprié pour les compétitions.)

La pensée circulant dans le cerveau de Tatsuya était la restriction de contact direct durant le "Code du Monolithe". Ce dispositif de calcul avait une lame volante, alors cela passait la réglementation.

(.....pas qu'il y ait là une connexion.)

Bien qu'il ait clamé que ce n'était qu'un jouet, il considérait toujours activement les applications pratique. Tatsuya ne pouvait que secrètement rire de lui même.

Chapitre 7

Troisième jour de la Compétition des Neuf Lycées.

Destruction des Piliers et Bataille de Surf pour chaque sexe se dérouleraient aujourd'hui, faisant de ce jour le plus grand obstacle de la première moitié de la Compétition des Neuf Lycées.

Les Joueurs du Premier Lycée qui avaient avancé jusqu'ici se composaient de deux hommes dans Destruction des Piliers, deux hommes et deux femmes dans Bataille de Surf, et une femme dans Destruction des Piliers.

Ce n'était pas ce qui avait été prévu dans le plan, mais restait tout de même dans les paramètres acceptables de combat.

"Hattori-senpai est en premier pour l'équipe masculine. Watanabe-senpai est dans le second tour pour l'équipe féminine. Chiyoda-senpai est prévue pour le premier tour, et le Chef du Groupe Juumonji est programmé pour le troisième tour…"

Tatsuya sentit un mal de tête se former alors qu'il étudiait le programme.

Même si le début du concours ne coïncidait pas parfaitement avec le programme, il ne pourrait regarder qu'une épreuve parmi celles de Hattori et de Kanon.

Même si Hattori-senpai ne veut probablement pas que je le regarde concourir…

Ceci dit, Miyuki et Hattori faisaient tous les deux partie du Conseil des Étudiants, alors ne pas regarder l'épreuve de Hattori posait quand même problème.

"Ah, trouvé, Tatsuya-kun !"

Malgré tout, Tatsuya n'avait plus à s'inquiéter à ce propos, ou peut-être n'avait-il plus à s'inquiéter pour le moment.

"Quelque chose ne va pas, Présidente ?"

"J'espérai que tu puisses aider."

Mayumi traîna Tatsuya vers le véhicule des Techniciens.

◊ ◊ ◊

"Onii-sama, c’est sur le point de commencer !"

Au final, Tatsuya s’échappa tout juste à temps pour voir le début de l’épreuve de Mari.

Mari était passée quand Tatsuya travaillait et avait dit spécifiquement : "Tu vas venir pour regarder, pas vrai ?" S’il était resté à l’écart après cela, même s’il avait juste un peu en retard, il n’aurait pas fini d’en entendre parler.

Tatsuya remercia sa petite sœur et ses amis de lui avoir gardé une place et se tourna pour regarder la ligne de départ.

Il semblait qu’il était arrivé juste à temps.

Mari portait son habituel bandeau, les cheveux flottant alors qu’elle prenait la position demandée.

Il y avait un total de trois concurrentes dans les Demi-finales, qui se dérouleraient en deux matches.

Les gagnantes des deux matches avanceraient jusqu’à la Finale où elles s’affronteraient en duel.

Les deux autres étaient tendues d’anxiété, mais Mari attendait sans peur le signal de départ.

Le sifflement de préparation sonna.

Le public observait un silence de mort.

Après une fraction de secondes, le deuxième sifflement résonna.

La course commença.

La première à sortir des portes fut Mari.

Contrairement aux Préliminaires, la personne en deuxième position était juste sur ses talons.

La troisième Joueuse n’était que légèrement plus loin derrière.

"Comme je le pensais, elles sont fortes… !"

"Comme on pouvait s’attendre de la part du [Septième Lycée des Vagues]."

"C’était cette même équipe qui était en Finale, l’année dernière."

Les vagues qui se soulevaient à la surface étaient la preuve claire que leurs magies interféraient l’une avec l’autre.

Dans une situation normale, Mari aurait utilisé sa position en tête pour tirer avantage des vagues afin de perturber l’adversaire derrière elle, obtenant ainsi un plus grand effet que la somme des parties , mais la Joueuse du Septième Lycée manœuvra adroitement sa planche pour compenser son désavantage en magie.

Les trois Joueuses se faufilèrent à travers les serpentements de l’aqueduc et franchirent le virage serré au coude à coude.

Après avoir passé cela, elles entrèrent dans un passage qui n’était pas visible depuis la terrasse d’observation, alors l’action devait être suivie par l’intermédiaire les écrans de contrôle.

Tatsuya jeta un coup d’œil vers la télé grand écran diffusant les images du virage.

"Huh ?"

Une petite curiosité à l’écran retint son attention.

"Ah !?"

À cause de cela, Tatsuya manqua accidentellement le moment.

Des hurlements éclatèrent en provenance des tribunes.

Tatsuya regarda frénétiquement à nouveau.

La Joueuse du Septième Lycée avait complètement perdu l’équilibre.

"Speed Burst !?"

Cria quelqu’un.

C’était vraiment ce à quoi cela ressemblait.

La planche de la Joueuse n’avait pas de prise sur la surface de l’eau.

Comme si elle volait complètement, la Joueuse du Septième Lycée glissait sur la surface de l’eau et était sur le point de s’écraser contre la rampe.

--- Si l’on supposait que personne n’était dans le chemin.

Mari, qui venait juste de finir de décélérer et était prête à partir en sprint, était directement sur sa trajectoire.

Mari faisait face à la rampe.

Pourtant, elle garda quand même la tête tournée derrière elle, probablement parce qu’elle avait détecté la présence qui arrivait par l’arrière.

Ses actions suivantes ne pouvaient être décrites que comme supérieures.

Mari arrêta son accélération vers l’avant et changea pour une accélération rotative en parallèle, utilisant les vagues s’écrasant contre les murs de l’aqueduc et sa propre magie pour faire pivoter la planche à mi-chemin.

Ensuite, elle utilisa deux autres types de magie pour recevoir la Joueuse du Septième Lycée hors de contrôle.

Elle utilisa de la Magie de Système Mouvement pour séparer la Joueuse de sa planche et de la Magie de Système Poids et d’Attribut Neutralisation d’Inertie pour s’empêcher de s’écraser dans la rampe en attrapant l’autre Joueuse.

Cela aurait dû être suffisant pour éviter le désastre.

Cependant, la surface de l’eau s’enfonça brusquement.

C’était seulement un changement minuscule.

Pourtant, Mari était au milieu de techniques de haut niveau pour accomplir une rotation complète.

Mari n’était pas une experte de surf ; elle utilisait simplement une magie supérieure et son corps pour changer sa position. Au moment où sa flottation disparut, son équilibre fut détruit également.

Cela provoqua l’arrêt de la magie.

Elle redirigea avec succès la planche de l’autre Joueuse avançant à toute vitesse vers ses jambes.

Mais la Magie de Neutralisation d’Inertie ne s’activa pas, ce qui envoya la Joueuse du Septième Lycée droit sur Mari.

Toutes les deux s’écrasèrent ensemble dans la rampe.

Des cris perçants résonnèrent tout autour des tribunes.

Immédiatement, un drapeau rose signala l’arrêt de la compétition.

Tatsuya ne put s’empêcher de se dresser sur les pieds.

Mari était prise en sandwich entre la rampe et la Joueuse du Septième Lycée.

Il semblait qu’elle n’avait été capable d’ériger avec succès aucune mesure protective.

"Onii-sama !"

Complètement pâle, Miyuki le regarda.

"Je vais aller jeter un œil. Toi, tu restes là."

Tatsuya avait reçu un entraînement militaire et un entraînement de Gardien depuis qu’il était tout jeune, ce qui le qualifiait parfaitement pour des opérations chirurgicales mineures.

"Je comprends."

La voix ferme de Tatsuya permit à Miyuki de réaliser que si tout le monde allait voir, cela ne ferait qu’ajouter à la panique, alors elle agita ses mains pour indiquer à ses amis de s’asseoir et acquiesça pour montrer son approbation envers les mots de Tatsuya.

Tatsuya descendit en vitesse de la terrasse d’observation et se faufila à travers la foule serrée comme s’il exécutait un tour de magie.

◊ ◊ ◊

Elle ne se réveilla pas très vite.

Il semblait qu’il y avait une brume épaisse suspendue à sa conscience, alors il lui était difficile de saisir son entourage.

Qu’est-ce que je fais ici… ?

Ce fut la première question qui traversa l’esprit de Mari lorsqu’elle se réveilla.

"Mari, es-tu réveillée ? Est-ce que tu sais qui je suis ?"

Le visage de sa mauvaise amie – même à ce moment-là, dans l'intimité de son esprit, Mari n'appliquait pas le simple terme [Amie] – apparut devant elle.

Mari connaissait la signification littérale de la question, mais était incapable de comprendre pourquoi cette dernière était posée, alors elle murmura, confuse.

"Mayumi, de quoi est-ce que tu parles ? Pourquoi est-ce que tu demandes…"

--- Au milieu de sa phrase, Mari se souvint de la raison pour laquelle Mayumi avait posé la question ainsi que son actuelle situation.

"Alors je suis à l'hôpital…"

"Oui, l'hôpital à la Base de Susano. Dieu merci… Il semble qu'il n'y ait aucun dégât mental."

"Combien de temps ai-je été inconsciente ?"

Il y avait encore un engourdissement palpitant venant de l'arrière de sa tête, ce qui permit à Mari de réaliser qu'elle ne s'était pas endormie, mais avait été assommée après avoir échoué à ériger sa défense à temps.

"Depuis juste après midi. Ah, ne te lève pas encore."

Mari voulait s'asseoir, mais Mayumi la repoussa rapidement dans l'oreiller.

Elle n'appliqua pas beaucoup de force, mais la mobilité physique de Mari était réduite de plus de moitié comparée à d'habitude.

"Tes côtes sont cassées. Bien qu'ils aient utilisé la magie pour les reconnecter, elles ont encore besoin de temps pour se stabiliser. Tu sais bien que la magie de soin est simplement une mesure d'urgence."

"C'est simplement une guérison superficielle pendant que la blessure se stabilise, pas un rétablissement instantané – ne t'inquiète pas, je sais au moins ça."

Mari ôta directement les mots de la bouche de Mayumi en se murmurant cela et se replongea dans le lit.

"Combien de temps serai-je hors jeu ?"

"Au moins une semaine pour un rétablissement complet, bien que tu sois libre pour les activités quotidiennes après un jour de repos au lit. Malgré tout, pour plus de sécurité, tu as l'interdiction de pratiquer des activités éprouvantes pendant les dix prochains jours."

"Hey, alors… !"

"Tu devras te retirer de Batte Illusoire, aussi. Il n'y a rien que nous puissions faire à ce propos."

"Je vois…"

Mari soupira et ferma les yeux.

Elle les rouvrit après un court instant.

"Comment tout ça s'est-il terminé ?"

"La Joueuse du Septième Lycée a été bannie en punition. Les Troisième et Neuvième Lycées ont avancé jusqu'à la Finale. Kobayakawa-san était assez motivée, alors je pense que nous avons une chance d'emporter la troisième place."

"Kobayakawa est plus que capable, tant qu'elle ne s'handicape pas elle-même."

"Bien sûr. Au fait, la Joueuse du Septième Lycée n'a pas souffert de blessures majeures, alors tes efforts n'ont pas été vains."

"… Ça ne compte pas vraiment comme aider si je suis sérieusement blessée moi-même."

Mari se renfrogna en se plaignant, bien que sa prétendue négativité tirât un léger rire à Mayumi.

Mayumi détourna la tête et fit semblant de ne rien remarquer.

"Quant aux hommes, Hanzo-kun a avancé jusqu'à la Finale, mais Murakami-kun l'a manquée de justesse. Juumonji-kun et Kanon-chan ont tous les deux avancé jusqu'aux éliminatoires de Destruction des Piliers."

"Alors je suis la seule qui n'ait pas pu remplir sa part du contrat…"

"Ce n'est pas de ta faute, Mari. Tu as pris la bonne décision. Si tu n'avais pas décéléré, tu aurais pu éviter de peu la collision et avancer jusqu'à la Finale, mais… la Joueuse du Septième Lycée aurait souffert de sérieuses blessures. Sa vie en tant que Magicienne aurait été

terminée. Tatsuya-kun est lui aussi de cet avis."

"… Hey, pourquoi son nom apparaît-il maintenant ?"

"Parce qu'il est celui qui t'a escortée ici, et il est resté positionné ici pendant que tu recevais des soins."

"Quoi ?"

"Bien sûr, nous n'avons pas laissé Tatsuya-kun tout faire… choquée ?"

Mayumi souriait alors que Mari se retournait, une expression misérable au visage.

C'était précisément parce qu'elle sentait un nœud serré se démêler en elle que le sourire de Mayumi l'agaça encore plus.

"Naturellement, des hommes ne devraient pas être présents pendant qu'une dame est changée, alors il a attendu docilement dans le couloir pendant que les soins étaient prodigués. Mais tu ferais mieux de le remercier plus tard. Il est arrivé en même temps que les équipes d'intervention d'urgence et a aidé à te ramener sur la berge. Il a aussi repéré tes fractures d'un coup d'œil et a donné des ordres pour les soins."

"… Qui est ce type ?"

Les yeux de Mari étaient grands ouverts de stupéfaction alors que Mayumi acquiesçait profondément.

"Comment devrais-je le dire, il semble être très doué pour s'occuper d'accidents et de victimes… En parlant de ça, comment te sens-tu ?"

"Pourquoi est-ce que tu demandes ça maintenant… J'ai un léger mal de tête, mais c'est une blessure strictement physique, et mon esprit est clair."

"Il semble qu'il n'y ait pas de traumatisme… Dans ce cas, finissons-en avec ceci maintenant."

" ? "

Mayumi épingla une Mari aux idées encore brouillées avec un regard sérieux.

"Qu'est-ce que c'est que cette soudaine attitude sérieuse ?"

"Mari… À ce moment-là, as-tu été gênée par la magie d'un tiers ?"

"Qu’est-ce que tu veux dire ?"

"Au moment où tu étais sur le point d’attraper la Joueuse du Septième Lycée, as-tu perdu l’équilibre parce que quelqu’un a utilisé la magie pour perturber la surface de l’eau ? C’est ce que j’essaye de demander."

En comprenant l’intention derrière les mots de Mayumi, les yeux de Mari étincelèrent de vivacité.

"… Juste avant que la planche commence à couler, j’ai bel et bien senti une vibration étrange près de mes pieds, mais je ne sais absolument pas si c’était causé par la magie, sans parler de si elle était malveillante… Pourquoi penserais-tu ça ?"

"Quand tu as perdu l’équilibre, les mouvements de l’eau n’étaient vraiment pas naturels, au point où il y a suspicion que cela ait été créé à l’aide de moyens illogiques comme la magie. Pourtant, aucune Joueuse des autres Lycées n’a utilisé cette magie, alors la seule possibilité qu’il reste est qu’une tierce personne ait lancé cette magie. Tatsuya-kun est aussi d’accord. J’ai entendu dire qu’il demande les enregistrements au Comité afin d’analyser les fluctuations sur la surface de l’eau. Au moins, nous pouvons découvrir si cela a été causé par des forces non naturelles et étrangères."

"J’aimerais m’intéresser à la question de pourquoi un lycéen de première année est capable d’une telle analyse, mais mettons cela de côté pour l’instant… Puisque les autres Joueuses et moi étions toutes en train d’utiliser la magie, pourquoi enquêtons-nous pour savoir s’il y avait des forces non naturelles et étrangères à l’œuvre ? En ce qui me concerne, je pense que c’est inutile…"

"Tatsuya-kun a dit que la magie des Joueuses pourrait aussi être prise en compte pour déterminer si des forces extérieures agissaient dans cette situation. Isori-kun a également dit qu’il irait l’aider quand les épreuves seront terminées aujourd’hui, alors je pense qu’avec ces deux là, nous pouvons trouver quelques réponses significatives. Mari, si tu te souviens de quoi que ce soit d’autre, s’il te plaît, fais-le-moi savoir. Cela ne concerne pas seulement le classement général du Premier Lycéen, cela pourrait avoir un impact sur la Compétition des Neuf Lycées toute entière et tous les lycées de magie."

"…"

Pendant que Mari digérait silencieusement cela depuis son lit, Mayumi dit : "Je devrais y aller", et quitta la chambre.

À présent seule, Mari dirigea un regard solennel vers le plafond.

◊ ◊ ◊

En entendant les frappements, Miyuki alla ouvrir la porte et trouva une paire d'élèves de Deuxième Année en train d'attendre dehors.

"S'il vous plaît, entrez… Onii-sama, Isori-senpai et Chiyoda-senpai sont ici."

Les mots de Miyuki incitèrent Tatsuya à arrêter de taper sur le clavier et à se lever de sa chaise.

"Désolé de vous avoir appelés ici."

"Pas de problème, s'il te plaît, ne t'inquiète pas pour ça. Après tout, je suis celui qui me suis porté volontaire et n'ai pas pu amener le dispositif de terminal encore actif jusqu'ici."

Tatsuya acquiesça légèrement alors qu'Isori secouait nonchalamment une main.

Après l'avoir remercié à nouveau, Tatsuya se tourna vers Kanon.

"Chiyoda-senpai, félicitations pour votre victoire."

"Merci. Comme Mari-senpai a été victime de cet incident, le reste d'entre nous doit travailler plus dur pour elle !"

Passionnée serait le parfait adjectif pouvant décrire Kanon avec ses poings serrés, Tatsuya la réévalua donc comme éclatante.

"Alors, as-tu trouvé quelque chose ?"

"J'ai parcouru les enregistrements et en suis arrivé à la conclusion que c'était définitivement l'œuvre d'une tierce personne. Isori-senpai, est-ce que ça vous dérangerait de vérifier cela une fois de plus ?"

"Compris… Comme je m'y attendais venant de toi, Shiba-kun. C'était rapide."

Isori accepta l'invitation et s'assit en utilisant un mouvement de la main pour exprimer son admiration.

Il y avait un modeste moniteur (c'était la taille standard, vingt pouces) sur la table qui était divisé en deux écrans – l'un affichait l'enregistrement réel tandis que l'autre montrait simplement une modélisation de ce qui s'était produit.

Isori ramassa le pointeur visuel en forme de monocle possédant une détection d'ondes cérébrales complémentaire et déploya facilement la fine et longue monture métallique en forme de C autour de sa tête, ajusta le monocle sur son œil droit et plaça son doigt sur les boutons près du bout du clavier.

Le dispositif d'ondes cérébrales et le pointeur visuel avaient à l'origine pour but que les utilisateurs rentrent des données sans avoir besoin d'enlever leurs mains du clavier, mais tous deux avaient depuis progressés au point où les entrées au clavier étaient devenues inutiles.

Cependant, Isori choisit d'utiliser la fonction originelle, qui était un pur supplément à l'entrée au clavier.

L'enregistrement réel et les images du modèle commencèrent tous les deux à bouger selon les directions d'Isori.

Il passa vite en vitesse rapide jusqu'au moment où l'incident s'était produit, puis entreprit de passer la séquence au ralenti.

Au-dessus des images du modèle, des lignes de données décrivaient les changements à la surface de l'eau.

Au milieu de la scène en question, qui se trouvait être le moment où la surface de l'eau s'était enfoncée, une quantité inconnue surgie , signifiant que le [Pouvoir] libéré ne pouvait pas être expliqué par la magie des autres Joueuses.

Isori mit l'image en pause et se retourna.

"… C'est encore plus ennuyeux que ce que j'imaginais."

"Kei, qu'est-ce qu'il s'est passé ?"

"Kanon, dans le but d'empêcher une tierce personne d'utiliser illégalement la magie pour interférer avec la compétition, la Compétition des Neuf Lycées embauche des Magiciens de haut niveau pouvant contrer la magie et les positionne autour des locaux. Des

caméras sont aussi été placées partout pour observer la situation. Puisque le réseau n’a pas repéré ça, je soupçonne le coupable d’avoir agi d’une haute altitude qui excède la surveillance du réseau de sécurité et d’avoir tirer un bloque d’air comprimé vers le bas pour provoquer la crevasse à la surface de l’eau. Si c’était le cas, il est impossible que Watanabe-senpai ait pu ne pas le remarquer. Je réalise aussi que cette hypothèse est assez grotesque ; cependant, d’après l’analyse de Shiba-kun, le changement de la surface de l’eau venait d’en-dessous de la surface de l’eau. Si quelqu’un avait utilisé une Séquence d’Activation depuis l’extérieur de l’aqueduc, le réseau de sécurité l’aurait immédiatement capté. Le seul moyen naturel pour que la surface de l’eau s’affaisse est une fuite, alors cette impossibilité ne peut pas être exclue. La seule possibilité restante est que quelqu’un se cachait dans l’eau pour ce moment… Mais c’est presqu’impossible…"

"Est-ce que l’analyse de Shiba-kun pourrait être incorrecte ?"

La question brusque de Kanon fit se raidir Miyuki.

"Non."

Cependant, avant que Miyuki ait pu parler, Isori rejeta l’assertion de Kanon.

"L’analyse de Shiba-kun est sans défaut, au moins, il n’est pas dans mes capacités d’y déceler la moindre erreur."

Isori et Kanon s’enfermèrent dans le mutisme.

Le silence dura environ deux minutes avant d’être brisé par d’autres frappements.

Miyuki interrogea visuellement son frère et ne bougea pour ouvrir la porte qu’après que celui-ci eût acquiescé pour lui montrer son accord.

Elle revint vite.

Deux camarades de classe étaient sur ses talons.

"Mizuki a dit qu’Onii-sama voulait qu’ils viennent ici…"

"Désolé de vous avoir fait venir tous les deux jusqu’ici."

Tatsuya vérifia la question de sa sœur et se tourna vers les deux élèves de classe supérieure.

"Permettez-moi de vous présenter, tous deux sont mes camarades de

classe Yoshida et Shibata. Je pense que vous le savez, mais voici des élèves de Deuxième Année, Isori-senpai et Chiyoda-senpai."

Mikihiko et Mizuki étaient tous les deux un peu tendus. Après un rapide tour de présentation d'Isori et Kanon, Tatsuya utilisa une réponse concise pour répondre aux cinq regards interrogateurs qu'on lui envoyait.

"Je leur ai demandé à tous les deux de venir pour aider à identifier notre coupable."

Cette phrase seule était un peu trop vague pour que quiconque comprenne.

Tatsuya le savait dès le départ, alors il continua à expliquer sans s'arrêter.

"Nous sommes actuellement en train d'examiner la possibilité que l'incident de Watanabe-senpai a été causé par une interférence malveillante de la part d'une tierce personne."

C'était utile à Mikihiko et Mizuki.

Mikihiko plissa son front alors que Mizuki révélait une expression stupéfaite.

"Alors que Watanabe-senpai perdait son équilibre, une crevasse non naturelle est apparue à la surface de l'eau, ce qui a perturbé le timing pour sa Magie de Neutralisation d'Inertie et l'a forcée à entrer en collision avec la rampe. Le changement à la surface de l'eau a été presque certainement causé par de la magie lancée sous l'eau."

Mizuki ne s'était pas encore remise de son étonnement.

Pourtant, en entendant les mots de Tatsuya, Mikihiko jeta un regard dur.

"Il est strictement impossible de lancer de la magie sur l'eau depuis l'extérieur du stade sans être détecté. La possibilité que cela ait été causé par une magie retardée est aussi faible. Parce que, si c'était le cas, Kobayakawa-senpai l'aurait détectée pendant la première course."

La Magie Moderne possédait aussi des magies à activation retardée, mais la Séquence d'Activation devait être [Enregistrée] dans l'objet. Une fois que la magie retardée était lancée, l'objet cible était sous l'influence d'une réécriture magique et interférait avec la magie

suivante lancée sur l’objet cible.

"Si c’est le cas, la seule possibilité qu’il reste est que quelque chose caché dans l’eau a lancé la magie – c’est la conclusion à laquelle Isori-senpai et moi sommes arrivés."

Tatsuya chercha visuellement une confirmation de Mikihiko et Mizuki, qui acquiescèrent tous deux, montrant leur compréhension.

"Pourtant, qu’un Magicien bien vivant se submerge dans l’eau semble ridicule. Actuellement, ni la Magie Moderne, ni la Magie Ancienne ne sont capables d’accomplir parfaitement cet exploit."

Cette fois, les mots de Tatsuya incitèrent Isori et Kanon à acquiescer.

"Si c’est le cas, une hypothèse plus appropriée serait que quelque chose [d’Inhumain] a lancé la magie en se cachant dans la voie navigable."

Isori et Kanon se jetèrent des coups d’œil, reflétant leur confusion.

Après un moment, Isori demanda finalement :

"… Shiba-kun, tu penses que ça pourrait être l’œuvre d’une Magie des Esprits ?"

Tatsuya acquiesça en réponse aux mots d’Isori.

Les Magiciens qui utilisaient la Magie Moderne se servaient ordinairement de vagues de Psions pour identifier la magie.

Cependant, les ES – Êtres Spirituels – étaient principalement composés de Pushions. Les Psions étaient des compléments utilisés pour [Déplacer] les objets – comme donner des ordres aux esprits des alentours – ou au moins, c’était la théorie dominante actuelle.

Non pas que les Magiciens ne pouvaient pas identifier les Pushions.

Cependant, dans des circonstances ordinaires, ils ne pouvaient pas les identifier aussi aisément que les Psions.

Par exemple, même si les sens humains pouvaient détecter les rayons infrarouges comme de la [Chaleur], il leur était impossible de la différentier de la même manière que la lumière visible.

Les Magiciens pouvaient utiliser leurs sens pour identifier les Pushions actifs.

Mais il était très difficile d’identifier les inactifs.

En d’autres termes, les Magiciens utilisant la Magie Moderne ne pouvaient pas détecter des Êtres Spirituels endormis.

S’ils utilisaient un Être Spirituel planté à l’avance – un type de magie retardée utilisant des Êtres Spirituels – il y avait une grande probabilité qu’ils puissent échapper à la détection du Comité.

"Yoshida est un expert en Magie des Esprits et Shibata est particulièrement sensible à la lumière Pushion."

"C’est pourquoi tu les as appelés tous les deux."

Tatsuya acquiesça une fois de plus à l’attention d’Isori et se tourna pour faire face à Mikihiko.

"Mikihiko, j’aimerais ton opinion d’expert. Y a-t-il un moyen pour la Magie des Esprits de retarder l’activation de plusieurs heures et de créer sélectivement un renfoncement à la surface de l’eau ?"

"Oui."

Mikihiko répondit immédiatement.

"D’après ces conditions, tout ce que tu as à faire est de fixer le départ de la deuxième course comme condition principale et l’approche de quelqu’un comme seconde condition, puis ordonner à l’Esprit de l’Eau de créer une vague ou un tourbillon. Même si on exclue les esprits, un shikigami peut accomplir ça aussi."

"Peux-tu le faire ?"

"Avec assez de temps pour me préparer. Je ne peux pas le faire tout de suite, mais donne-moi deux semaines pour préparer et entrer à plusieurs reprises dans l’arène pour faire des préparatifs, et je devrais en être capable."

"Aurais-tu besoin d’infiltrer l’arène la veille ?"

"Inutile. Tant que je suis familiarisé avec l’agencement du terrain, je peux utiliser sa disposition pour envoyer les esprits, ce qui est l’utilité d’enquêter au préalable. Cependant…"

" ? "

"Même s’ils s’étaient débrouillés pour accomplir ça, on n’obtient aucun pouvoir, ou presque. Les esprits sont rendus plus puissants par

les émotions et la volonté de l’utilisateur, alors si c’était fixé plusieurs heures avant, je sens que la seule chose qui resterait serait quelque chose comme une farce, au mieux."

"En d’autres termes ?"

"Même s’ils pouvaient perturber la surface de l’eau, ils ne pouvaient pas utiliser cette méthode pour créer des vagues assez grandes ou perturber l’équilibre de Watanabe-senpai. Si la Joueuse du Septième Lycée n’avait pas perdu le contrôle exactement au même moment, ça n’aurait pas été différent d’un jeu d’enfants."

Pour une raison quelconque, Tatsuya acquiesça profondément aux mots de Mikihiko.

"Si l’on fait l’hypothèse que ceci était un accident en premier lieu…"

"Eh ?"

Mikihiko était incapable de suivre les mots énigmatiques de Tatsuya, mais ce dernier ne répondit pas immédiatement et tourna à la place son regard vers Mizuki.

"Mizuki, au cours de l’incident de Watanabe-senpai, as-tu vu les mouvements de l’ES ?"

"… Je portais mes lunettes à ce moment… Désolée."

"S’il te plaît, ne dis pas ça. C’était une erreur de ma part. Mizuki, il est inutile de s’excuser."

Tatsuya inclina la tête vers une Mizuki morose et Miyuki s’approcha également pour la réconforter.

"Concernant ce dont nous venons juste de parler…"

Tatsuya se tourna à nouveau vers Mikihiko.

Pourtant, Isori et Kanon savaient que ces mots leur étaient également destinés à tous les deux.

"Je sens que la perte de contrôle de la Joueuse du Septième Lycée n’était pas une pure coïncidence. Regarde ça."

Tatsuya amena Mikihiko devant le moniteur et rejoua la vidéo.

Il faisait aussi attention à Isori et Kanon, qui jetaient furtivement des coups d’œil pour regarder, et arrêta l’enregistrement juste avant que

l’accident ne se produise.

"La Joueuse du Septième Lycée aurait normalement décéléré à ce moment."

Puis il entreprit d’avancer l’enregistrement image par image.

"Mais comme tout le monde peut le voir, elle est en fait en train de continuer à prendre de la vitesse."

"… Tu as raison. C’est extrêmement bizarre."

"En effet. Un Magicien capable de telles erreurs fondamentales n’a rien à faire dans la Compétition des Neuf Lycées."

Tatsuya acquiesça, partageant les opinions d’Isori et de Kanon, puis remit la lecture à la vitesse normale.

"Je soupçonne le CAD que la Joueuse du Septième Lycée utilisait d’avoir été trafiqué."

Le choc se répandit dans la pièce.

"C’est le premier virage majeur qui nécessite une décélération sur tout le parcours. Si la Séquence d’Activation de décélération a été échangée avec une Séquence d’Activation d’accélération, un accident ici est inévitable. D’après les résultats de l’année dernière, il est parfaitement dans les limites du prévisible que Watanabe-senpai et la Joueuse du Septième Lycée soient au coude à coude à ce moment. Si mon but était de les saboter, ce serait l’opportunité parfaite pour éliminer deux candidates favorites pour la première place d’un seul coup."

"Ça semble raisonnable… Mais pourraient-ils trafiquer le CAD ? Et si oui, quand feraient-ils ça ?"

"Y a-t-il un traître qui a pénétré dans l’Équipe des Techniciens du Septième Lycée ?"

Tatsuya secoua légèrement la tête face aux questions d’Isori et de Kanon.

"Malheureusement, nous n’avons aucune preuve. Même si nous adressions une requête au Septième Lycée pour réviser leurs CADs, ils sont sûrs de nous arrêter. Malgré tout, je pense qu’il y avait une opportunité de le faire."

"Alors il y a vraiment un traître ?"

Tatsuya secoua une fois de plus la tête face aux spéculations de Kanon, mais cette fois, il était sensiblement plus lent.

"Bien qu'il soit impossible d'évaluer correctement cette possibilité… Je pense qu'il y a une chance bien plus importante pour qu'il y ait une taupe dans le Comité."

Ses mots s'arrêtèrent là.

Isori, Kanon et Mikihiko en restèrent sans voix.

Ils portaient tous des expressions sceptiques.

"… Mais, Onii-sama, en supposant que cela soit vrai, comment et quand trafiqueraient-ils les CADs ? Chaque lycée garde les leurs assez strictement…"

Miyuki ne remettrait jamais le jugement de Tatsuya en question. Elle supposait simplement que l'hypothèse de son frère était vraie et demandait la pièce suivante du puzzle.

Tatsuya ne répondit pas directement, mais rappela à tout le monde une information publiquement connue :

"Tous les CADs doivent quitter le contrôle de chaque lycée et être retourné au Comité une fois."

"Ah… !"

Miyuki laissa échapper un sursaut puisqu'à aucun moment elle n'avait pensé à cela. En plus, elle n'avait pas été la seule à sursauter, car Isori, Kanon, Mikihiko et Mizuki étaient tous frappés de mutisme.

"Malgré tout, il est impossible de dire quelles sont leurs méthodes ; c'est ce qui est vraiment déconcertant…"

Juste au cas où, ils ne pouvaient pas baisser leur garde, même pour un instant.

Miyuki et Tatsuya, la première s'apprêtant à commencer sa compétition et le deuxième étant responsable de calibrer des CADs, gravèrent ces mots dans leurs cœurs.

◊ ◊ ◊

Le troisième jour, le Premier Lycée se plaça premier dans les deux jeux de Destruction des Piliers, deuxième dans l'épreuve de Bataille de Surf masculine et troisième dans l'épreuve de Bataille de Surf féminine.

Le Troisième Lycée s'était placé deuxième dans les deux jeux de Destruction des Piliers ainsi que premier dans les deux jeux de Bataille de Surf, alors les deux écoles étaient beaucoup plus proches que le jour d'avant.

Avant que la compétition ne commence, Mari avait dit à Tatsuya que la Division des Nouveaux Arrivants ne devrait pas avoir d'impact significatif sur le résultat final. Dans ce cas, il semblait qu'elle s'était trompée.

Tatsuya examina méticuleusement les CADs des Joueuses dont il était responsable et se prépara pour la compétition de la Division des Nouveaux Arrivants. Tout d'un coup, Mayumi envoya un message via son terminal demandant sa présence.

Dérouté, il mit son travail en pause et pensa *Pourquoi a-t-elle besoin de moi à cette heure ?* Alors qu'il se dirigeait vers la salle de conférence réservée au Premier Lycée, il tomba sur Miyuki à la porte.

"La Présidente t'a-t-elle appelée aussi, Miyuki ?"

"Oui. Onii-sama aussi ?"

Tatsuya avait initialement considéré le fait qu'Isori et les autres lui demanderaient de venir et de discuter de contre-mesures contre des sabotages futures, mais cela n'expliquait pas pourquoi Miyuki avait elle aussi été convoquée.

"Nous devrions entrer."

"Oui."

Il y avait certaines choses qui pouvaient être discernées après une réflexion minutieuse, et d'autres qui ne pouvaient être découvertes qu'importe combien quelqu'un y réfléchissait.

Si réfléchir ne permettait aucun bénéfice, alors passer à l'action était ce qu'il y avait à faire.

Comme disaient les anciens, réfléchir inutilement, c’est perdre son temps.

"Excusez-nous."

Tatsuya ne voulait pas être embourbé dans des pensées si fatigantes – tout comme il ne le fit pas pour un grand principe quelconque. Au moins, il ne s’inquiéta pas inutilement avant d’ouvrir la porte.

Mayumi, Suzune, et Katsuto étaient à l’intérieur – ainsi que Mari, qui aurait dû être au lit.

"Merci pour votre dur travail. Êtes-vous prêts pour demain ?"

"Non, j’ai encore besoin de temps."

"Vraiment… Je suis désolée, je t’ai appelé aussi, Tatsuya-kun."

D’après les mots coupables de Mayumi, la destinataire principale de cette conversation était Miyuki.

"S’il vous plaît, asseyez-vous."

Le frère et la sœur le firent, côte à côte.

"Il y a quelques petites choses dont j’aimerais discuter avec vous deux… Désolée, elles ne sont pas si petites, après tout. Je vous ai demandé à tous les deux de venir pour discuter de quelque chose d’une importance vitale."

Il semblait que cela faisait des lustres que le ton de Mayumi n’avait pas été aussi sérieux, faisant se redresser un peu Tatsuya.

"Rin-chan, peux-tu expliquer ?"

Même quand elle est sérieuse, elle dit quand même [Rin-chan], pensa Tatsuya en regardant en direction de Suzune.

"Je pense que vous êtes tous les deux au courant du classement actuel."

C’était de toute évidence une question rhétorique de la part de Suzune, mais Tatsuya et Miyuki acquiescèrent quand même tous les deux.

"Bien que nous ayons rencontré quelques accidents imprévus, le score actuel de notre école est à peu près le même que d’après nos prédictions. Malheureusement, le score du Troisième Lycée est bien plus élevé que ce que nous anticipions, alors la différence entre nous

est bien plus faible que ce que nous avions espéré."

À ces mots, le frère et la sœur acquiescèrent pour montrer qu'ils comprenaient.

"Ceci dit, nous menons encore suffisamment. Même si nous ne sommes pas les vainqueurs dans l'ensemble de la Division des Nouveaux Arrivants, nous pouvons encore proclamer la victoire au classement général tant que nous nous plaçons premiers pour le Code du Monolithe et que la différence de score est faible. Cependant, si nous tombons trop loin derrière le Troisième Lycée, alors cela pourrait se jouer à l'épreuve de Batte Illusoire de la Division Officielle."

Tout ce que détaillait Suzune était une supposition. Leur disait-elle de bien réussir dans la Division des Nouveaux Arrivants ?

Si c'était la seule raison, il aurait été inutile de les appeler à cette heure… Tatsuya était assez confus derrière son visage impassible.

"Le total de points de la Division Officielle est deux fois celui de la Division des Nouveaux Arrivants, alors les stratèges de notre école en sont arrivés à la conclusion que nous devrions faire quelques sacrifices dans la Division des Nouveaux Arrivants et concentrer notre puissance de feu dans Batte Illusoire de la Division Officielle."

Tatsuya fronça les sourcils. Il avait rapidement lu entre les lignes de "quelques sacrifices dans la Division des Nouveaux Arrivants," alors des changements de dernières minutes pouvaient être vus sur son visage sérieux.

"Oui, Tatsuya-kun. C'est exactement ce à quoi tu penses."

Mayumi lut adroitement les changements minuscules sur le visage de Tatsuya et répondit de manière préventive.

"Miyuki-san, nous te demandons de remplacer Mari dans Batte Illusoire pour la Division Officielle. Tatsuya-kun continuera à te servir de Technicien le neuvième jour."

Les mots de Mayumi contrastaient avec ses mots précédents, ce n'était pas une discussion.

C'était une déclaration de ce qui serait fait.

"Pourtant, il y a d'autres élèves de classe supérieure qui participent à une seule épreuve, alors pourquoi ai-je été choisie comme

remplaçante, sachant que cela mettrait en péril la Division des Nouveaux Arrivants ?"

La voix de Miyuki était stable. Elle n'était pas transportée de joie par la promotion soudaine, mais restait calme et maîtresse d'elle-même alors qu'elle posait sa question.

Sa réaction invita Mari à la regarder avec surprise. Même Katsuto fut légèrement pris au dépourvu.

"Nous pensons que c'est la façon de maximiser au mieux nos gains."

La voix de Suzune fut encore plus calme alors qu'elle répondait.

"La raison principale est que nous n'avons pas prévu de remplaçante pour Batte Illusoire."

Mari, qui était la Joueuse à l'origine, rejoignit également le rang de ceux qui essayaient de la persuader.

"Même pour les représentants de notre école, leur demander soudainement de concourir dans les airs pendant l'épreuve de Batte Illusoire de la Division Officielle, c'est quelque chose. Comparé à ça, nous avons plus de chances en envoyant une élève de Première Année qui s'est déjà entraînée pour ça. En plus de ça ---"

Mari s'arrêta ici pour créer intentionnellement une [Pause].

Elle était une jeune femme qui adorait se livrer à des envolées lyriques.

"Tatsuya-kun, ta sœur triomphera, même dans la Division Officielle, pas vrai ?"

Et frappa le point faible pour des dommages massifs.

Tatsuya sentit que cet argument était un peu retors, mais il n'avait aucune raison de se montrer humble.

"Bien sûr."

"Onii-sama…"

La réponse certaine de Tatsuya avait été donnée comme s'il exposait simplement un fait, faisant percer un sourire sur les lèvres de Mari, acquiescer gentiment Katsuto, ouvrir de grands yeux à Mayumi, froncer légèrement les sourcils de Suzune et faire baisser sa tête d'embarras à Miyuki.

"Puisque tout le monde nous a hautement estimés, je ferai de mon mieux en tant qu'Ingénieur. Miyuki, acceptes-tu ?"

"O,Oui !"

Le dos de Miyuki était plus droit que jamais quand elle répondit à Tatsuya en élevant la voix.

Cela transmettait parfaitement sa volonté de charger dans la bataille.

Postface